

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6)

# 中國 縦貫自動車道 建設に伴う発掘調査

3

1973

岡山県教育委員会

## 序

岡山県教育委員会では昭和44年以来中国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しておりますが、本年度までに32遺跡の調査を手がけ、来年度以降も広島県境までまだ多くの遺跡が調査対象となっております。このうち押入西・下市瀬・宮尾・久米廃寺等12遺跡の報告書は第1、第2分冊としてすでに発行したところであります。

このたびはひきつづき第3分冊として、美作国府・二宮大成・西原の3遺跡の報告書を発行する運びとなりました。

本報告書は発掘調査と併行しながら、限られた時間内で作成したものであるため不充分な点もありますが、美作の原始・古代を解明するための資料としてご活用いただければ幸いです。

なお調査にあたっては、日本道路公団津山工事事務所並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ、地元教育委員会・岡山県遺跡保護調査団・地元作業員の方々、その他関係各位のあたたかいご協力とご指導を受けましたことをここに厚くお礼申しあげます。

昭和49年3月

岡山県教育委員会

教育次長（文化課長事務取扱）

岡田政敏

## 例　　言

- 1 本調査報告書は、日本道路公団の委託により、岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
- 2 岡山県内の発掘調査は第一次整備区間と、第二次整備区間に分れ、第一次整備区間では、25遺跡あった。昭和44年3月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来、昭和48年6月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで、じつに4年3ヶ月を要した。この間、整理期間は皆無であって膨大な資料は整理ができていないため、報告書は5冊分に分けて遂次刊行してゆくことになった。本調査報告書はその第三分冊である。なお第二次整備区間は現在発掘調査が進行中である。
- 3 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については、昭和42年5月、岡山県考古学研究者の会から申し入れに基づいて、対策委員に下記の諸氏を委嘱した。

|            |       |                   |
|------------|-------|-------------------|
| 勝央中学校教諭    | 浅野 克己 | (昭和47年11月～)       |
| 津市教育委員会主事  | 今井 執  | (昭和44年4月～昭和46年5月) |
| 旭第三小学校教諭   | 神原 英朗 | (昭和44年4月～昭和44年9月) |
| 岡山大学 教授    | 近藤 義郎 | (昭和47年11月～)       |
| 津山みのり学園    | 植月 壮介 | (昭和44年4月～)        |
| 院庄小学校教諭    | 土居 徹  | (昭和44年4月～)        |
| 津山高等学校教諭   | 宗森 英之 | (昭和47年11月～)       |
| 美作考古学研究会会长 | 渡辺 健治 | (昭和44年4月～)        |

- 4 調査は、岡山県教育委員会文化課（昭和44年度は社会教育課）が、埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下、年次ごとに構成員と、調査遺跡名をあげる。なお担当調査員は津山教育事務所兼務であるため、諸般にわたり、津山教育事務所の多大のご支援ご協力を得た。

### 昭和44年度

| 社会教育課長  | 富 原 昇           | 調査 遺 跡 名      |
|---------|-----------------|---------------|
| 主 幹     | 神 野 力           |               |
| 課長補佐    | 花 房 芳 忠         |               |
| 〃       | 谷 口 怡           |               |
| 管理係長    | 光 嶋 尚 之         |               |
| 文化係長    | 桐 野 嘉 雄         |               |
| 文化財保護主事 | (故)森 忠 彦 高 橋 護  |               |
| 指導主事    | 神 原 英 朗         | 美 作 国 府 (第一次) |
| 主 事     | 河 本 清           |               |
| 〃       | 葛 原 克 人 枝 川 陽   | 久 米 廃 寺 (第一次) |
| 〃       | 泉 本 知 秀 栗 野 克 己 | 西 原 遺 跡       |

### 津山教育事務所

所長 福島祐一  
庶務課長 西口秀俊  
庶務係長 小西一成  
主事 山本剛

### 昭和45年度

#### 教育次長（文化課長事務取扱い）

|              |             |  |
|--------------|-------------|--|
| 三村克一         |             |  |
| 主幹 萩原一郎      | 天神原遺跡（第一次）  |  |
| 〃 神野力        | 押入飯綱神社古墳    |  |
| 文化係長 光嶋尚之    | 押入西遺跡（第一次）  |  |
| 文化財係長 （故）森忠彦 | 野介代遺跡       |  |
| 文化財保護主事 高橋護  | 美作國府跡（第二次）  |  |
| 主事 河本清 中力昭   | 二宮大東遺跡（第一次） |  |
| 〃 橋本惣司 伊藤晃   | 久米庵寺跡（第二次）  |  |
| 〃 泉本知秀 栗野克己  | 穴塚古墳        |  |
| 〃 柳瀬昭彦       | 西原遺跡        |  |

### 津山教育事務所

所長 福島祐一  
次長 平井克己  
庶務係長 本郷恵津夫  
主事 山本剛

### 昭和46年度

|              |           |  |
|--------------|-----------|--|
| 文化課長 神野力     |           |  |
| 参事 萩原一郎      |           |  |
| 文化主幹 光嶋尚之    |           |  |
| 文化財係長 （故）森忠彦 |           |  |
| 主任 渡辺武彦      |           |  |
| 文化財保護主査 高橋護  | 天神原遺跡     |  |
| 主任 大山行正      | 押入西遺跡     |  |
| 文化財保護主事 河本清  | 沼古墳       |  |
| 主任 橋本惣司 伊藤晃  | 美作國府      |  |
| 〃 栗野克己 泉本知秀  | 二宮大東遺跡    |  |
| 〃 柳瀬昭彦 下沢公明  | 宮尾遺跡（第一次） |  |

主 事 山 磨 康 平 井 上 弘 領 家 遺 跡  
〃 岡 田 博 池 烟 耕 一 赤 野 遺 跡 (第一次)

津山教育事務所

所 長 福 島 祐 一  
次 長 平 井 克 己  
係 長 田 中 篤 周  
主 事 春 各 勝 難 波 友 広

昭和47年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

|                |           |
|----------------|-----------|
| 大 原 利 貞        |           |
| 参 事 萩 原 一 郎    |           |
| 文化財主幹 富 岡 敬 之  | 高 本 遺 跡   |
| 文化主幹 原 田 道 明   | 狼 谷 遺 跡   |
| 主 任 渡 辺 武 彦    | 北 山 古 墳 群 |
| 文化財二係長 岡 本 明 郎 | 上 相 遺 跡   |
| 主 任 大 山 行 正    | 小 中 古 墳 群 |
| 文化財保護主事 河 本 清  | 小 中 遺 跡   |
| 〃 橋 本 惣 司      | 平 遺 跡     |
| 主 事 田 仲 满 雄    | 栗 野 克 己   |
| 〃 泉 本 知 秀      | 井 上 弘     |
| 〃 松 本 和 男      | 山 磨 康 平   |
| 〃 岡 田 博        | 高 烟 知 功   |
| 〃 二 宮 治 夫      | 赤 野 遺 跡   |

岡山県開発公社

技 師 補 太 田 整 戸 川 孝 二  
〃 大 賀 秋 秀 林 徹 也  
〃 小 林 泰 利 小 倉 辰 之  
〃 森 安 広 之 寺 坂 伸 生

津山教育事務所

所 長 福 島 祐 一  
次 長 赤 木 茂  
庶務係長 田 中 篤 周  
主 事 春 名 勝 難 波 友 広

昭和48年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

岡 田 政 敏

|         |                            |                |
|---------|----------------------------|----------------|
| 参 事     | 富 岡 敬 之                    |                |
| 課長補佐    | 水 川 富貴男                    |                |
| 文化財主幹   | 浅 原 健                      | 高 本 遺 跡 (継続)   |
| 文化係長    | 守 屋 明                      | 小 中 遺 跡 (継続)   |
| 主 任     | 渡 辺 武 彦                    | 下 市 瀬 遺 跡 (継続) |
| 文化財二係長  | 岡 本 明 郎                    | 旦 原 遺 跡        |
| 主 任     | 大 山 行 正                    | 須 内 遺 跡        |
| 文化財保護主事 | 河 本 清 (津山市教育委員会へ出向 7月10日～) | 宮 の 前 遺 跡      |
| 〃       | 橋 本 懿 司                    | 備 中 平 遺 跡      |
| 〃       | 栗 野 克 己                    | 谷 尻 遺 跡 (第一次)  |
| 主 事     | 新 東 晃 一 (鹿児島県教委へ転出 6月1日～)  | 桃 山 遺 跡 (第一次)  |
| 〃       | 田 仲 満 雄 松 本 和 男            | 樺 木 遺 跡        |
| 〃       | 井 上 弘 岡 田 博 空 吉 墳          |                |
| 〃       | 山 磨 康 平 高 畑 知 功            |                |
| 〃       | 二 宮 治 夫 浅 倉 秀 昭            |                |

#### 津山教育事務所

|      |         |
|------|---------|
| 所 長  | 宮 島 久 夫 |
| 次 長  | 赤 木 茂   |
| 庶務係長 | 田 中 篤 周 |
| 主 事  | 清 輔 修 身 |
| 〃    | 難 波 友 広 |

#### 協 力 者

各遺跡調査地周辺の地元の方々、また津山市、作東町、美作町、勝央町、久米町、落合町の各教育委員会には有形無形の協力を得た。

久米廃寺、美作国府、宮尾遺跡については文化庁田中琢、奈良国立文化財研究所・沢村仁・町田章・横田拓美・佐藤興治、下市瀬遺跡については、三木文雄、その他の遺跡から出土した鍛冶炉、鉄滓については、広島大学助教授潮見浩・住田正男・芹沢正雄の各氏から有益なご教示とご助言を得た。宮尾遺跡の種子分析は、岡山大学農学部笠原安夫氏、石器の材質鑑定は、岡山県教育センター上野等氏をわざわざわざした。磁器については東京国立博物館東洋課長 長谷部樂爾氏の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

本報告書を作成するにあたっての遺物整理・原稿清書等には日笠月子・日笠栄・今井比登美さんのお世話をいた。

5 本書に用いたレベル数値は、海拔高である。

6 本書に用いた地形図は、国土地理開発院の1/1000の地形図は、日本道路公団のExpress planをトレースしたものである。

7 本報告で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し、それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

## 埋蔵文化財発掘調査契約書

- 1 委託事務の名称
- 2 委託期間 昭和 年 月 日から 昭和 年 月 日まで
- 3 委託金額 金 円
- 4 委託金支払場所 日本道路公団

日本道路公団大阪支社長 山川尚典（以下「甲」という。）は、岡山県知事 加藤武徳（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき頭書の委託金額の範囲内で、頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により、委託期間を延長し、若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき、頭書発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは、頭書の発掘調査の推移状況を勘案して、請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは、頭書の発掘調査の処理状況について調査し、又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり、作業箇所に作業表示旗をかかげ、発掘調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版30部）を作成し、委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了1ヵ月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り乙の本來の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等は、すべて甲に帰属するものとする。ただし、甲は、発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権限を放棄するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に廻する諸手続については、乙が代行するものとする。

2 甲及び乙は、相互に協力して土地使用承諾書の取付けにあたるものとする。

第9条 乙の責めに帰する事由により頭書の期限内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは、甲は、遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数

につき、頭書の委託金額に対して日歩2銭7厘の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責めに帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対し日歩2銭7厘の割合で遅延利息の支払を請求することができる。

第10条 乙の責めに帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は、頭書の委託金額の10分の1を違約金として、甲の定める期限までに納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印のうえ、各自1通を保有する。

昭和44年2月1日

委託者 日本道路公団大阪支社

支社長 ○ ○ ○ ○

受託者 岡 山 縢

知事 ○ ○ ○ ○

報 告 書 (1~5分冊まで)

|             |                         |                |
|-------------|-------------------------|----------------|
| 第 1 分 冊     | 赤野遺跡 (22)               | 下市瀬遺跡 (25)     |
|             | 志戸部調査区 (13)             | 野介代遺跡 (12)     |
|             | 押入西遺跡 (11)              | 堀原遺跡 (8)       |
|             | 上相遺跡 (4)                |                |
| 第 2 分 冊     | 北山古墳群 (3)               | 押入飯綱神社古墳群 (10) |
|             | 宮尾遺跡 (18)               | 日南遺跡 (17)      |
|             | 久米廃寺 (19)               |                |
| 第 3 分 冊     | 美作国府跡 (15)              | 二宮大成遺跡 (16)    |
|             | 西原遺跡 (24)               |                |
| 第 4 分 冊     | 狼谷遺跡 (2)                | 小中古墳群 (5)      |
|             | 天神原遺跡 (9)               | 小中遺跡 (6)       |
| 第 5 分 冊     | 高本遺跡 (1)                | 領家遺跡 (20)      |
|             | 平遺跡 (7)                 | 下河内調査区 (21)    |
|             | 沼古墳群 (14)               | 穴塚古墳 (23)      |
| 第 6 分 冊以後未定 | 旦原遺跡 (26) ~ 塚の峯古墳群 (47) |                |

資料 中国総貿自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施一覧表①

(昭和44年2月～48年6月)

| 遺跡名       | 所在地   | 調査期間                |        | 月別調査員 | 契約面積 <sup>m2</sup> | 主な調査員             |
|-----------|-------|---------------------|--------|-------|--------------------|-------------------|
|           |       | 開始年月日               | 終了年月日  |       |                    |                   |
| 1 高本遺跡    | 作東町川北 | 47.4.1<br>48.6.30   | 8<br>8 | 4,000 | 松本<br>泉本<br>山唇     | ・松本<br>・岡田<br>・山唇 |
| 2 狼谷遺跡    | 美作町惟原 | 47.4.1<br>47.11.30  | 6<br>4 | 2,500 | 松木                 | ・二宮               |
| 3 北山上墳群   | 美作町北山 | 47.4.1<br>47.11.30  | 4      | 800   | 松木                 | ・二宮               |
| 4 かみや上相遺跡 | 美作町上相 | 47.7.1<br>47.8.31   | 2      | 500   | 松木                 | ・二宮               |
| 5 小山古墳群   | 勝央町高  | -                   | 3      | 1,300 | 栗野                 | ・高畠               |
| 6 小中遺跡    | 勝央町高  | 47.4.1<br>48.6.30   | 12     | 4,500 | 栗野                 | ・高畠               |
| 7 たぬき遺跡   | 勝央町平  | 47.4.1<br>48.3.31   | 10     | 3,000 | 田仲                 | ・井上               |
| 8 梶原遺跡    | 勝央町福吉 | 47.7.18<br>47.8.11  | 2      | 1,000 | 田仲                 | ・井上               |
| 9 天神原遺跡   | 津山市河辺 | 45.11.24<br>47.6.10 | 20     | 4,908 | 河本                 | ・橋本<br>・下沢<br>・柳東 |
| 10 押入飯綱墳  | 津山市押入 | 45.4.1<br>45.9.10   | 2      | 693   | 橋木                 | ・柳瀬               |



| 遺跡名     | 所 在 地  | 契約調査<br>期間                              |   | 契約<br>面積<br>数 | 月<br>主な調査員                       |
|---------|--------|---|---|---------------|----------------------------------|
|         |        | 開始年月日                                   | 終了年月日                                   |               |                                  |
| 22 赤野遺跡 | 落合町赤野  | 47.1.20<br>47.2.19<br>47.4.1<br>47.6.21 | 47.1.20<br>47.2.19<br>47.4.1<br>47.6.21 | 960           | 河本・柳原<br>河本・河原<br>河本・河原<br>河本・河原 |
| 23 穴塚古墳 | 落合町西原  | 45.7.27<br>45.9.25                      | 45.7.27<br>45.9.31                      | 157           | 中刀・伊藤                            |
| 24 西原遺跡 | 落合町西原  | 44.10.1<br>45.3.31                      | 44.10.1<br>45.3.31                      | 1,530         | 河本<br>河本<br>河本<br>河本             |
| 25 下市遺跡 | 落合町下市瀬 | 47.8.20<br>48.5.31                      | 47.8.20<br>48.5.31                      | 9<br>4,000    | 岡本・河本<br>岡本・河本<br>田仲             |

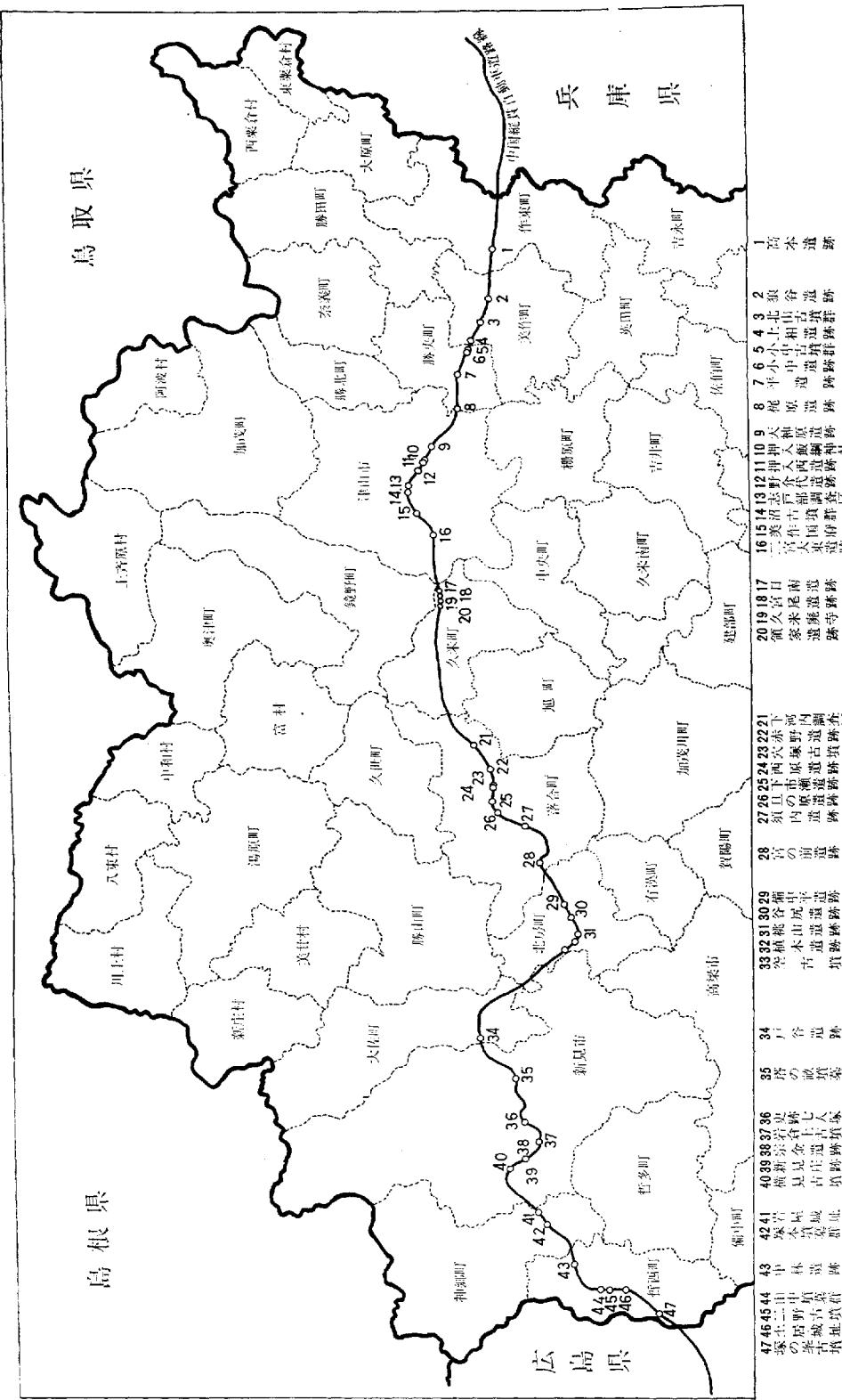
(昭和48年1月～昭和49年3月現在)  
施設建設に伴う車道埋設実施調査報告書

| 遺跡名      | 所在地    | 契約期間                |                            | 契約面積        | 主な調査員   |
|----------|--------|---------------------|----------------------------|-------------|---|
|          |        | 開始年月日               | 終了年月日                      |             |   |
| 26.月原遺跡  | 落合町西側内 | 48.7.17<br>48.12.31 | 5.5<br>2,000m <sup>2</sup> | 高畠・山崎       | ②古墳時代・後期古墳群<br>柱穴土器割り<br>柱穴・刀子<br>土器<br>溝                         |
| 27.須内遺跡  | 落合町鹿日  | 49.1.8<br>49.6.30   | 6<br>800                   | 橋本・松本<br>浅倉 | ①弥生時代中期後半～後期・住居跡7、袋状土壙8、柱穴土器割り<br>②古墳時代・火葬土塚1<br>柱穴・刀子<br>土器<br>溝 |
| 28.宮の前遺跡 | 落合町一色  | 48.4.23<br>49.9.30  | 17<br>7,500                | 橋本・二宮<br>浅倉 | ③奈良～平安時代、火葬土塚1<br>袋状土壙8、柱穴土器割り<br>柱穴・刀子<br>土器<br>溝                |

|    |         |          |   |    |       |                    |   |
|----|---------|----------|---|----|-------|--------------------|---|
| 29 | 備中平遺跡   | 北房町 五名   | 48. 7. 17<br>49. 3. 31                          | 9  | 2,500 | 栗野・井上<br>岡田        | 1.縄文時代円形土塗1・早期土器片, 乳棒状石斧2・石鎌<br>2.弥生時代, 方形土壙・土器片・土器環・土器片・土<br>器片<br>3.古墳時代, 平安時代, 建物16・鉢・瓦・円盤1<br>4.奈良・平安時代, 織物・土師器・墨・鐵冶炉遺構3<br>5.中世, 煙跡・鐵鋸片・土器・土器片・土器・土器<br>6.戦後, 鉄器・土器・土器片・土器・土器片 |
| 30 | 谷尻遺跡    | 北房町 1.水田 | 48.10.20<br>48.12.27<br>49. 4. 1<br>50. 3. 31   | 15 | 4,500 | 高瀬・川崎<br>3. 北房町下皆部 | 1.縄文時代中期～後期, 包含層・石錐・石斧・サスカイト片<br>2.弥生時代, 住居跡4・柱穴溝・紡車輪・土製品・太刀行斧<br>3.包含層・瓦器・須恵器・土師器・土器・土器片<br>4.奈良・平安時代, 安建物・舟穴・窓・瓦器・土器<br>5.中世, 煙跡・鐵鋸片・土器・土器片                                       |
| 31 | 桃山遺跡    | 北房町 1.水田 | 48. 7. 17<br>48. 9. 26<br>49. 4. 1<br>50. 3. 31 | 2  | 2,800 | 田仲・二宮<br>3. 北房町下皆部 | 1.縄文時代, 後期土器片<br>2.弥生時代後期, 住居跡8<br>3.古墳時代, 古墳1 (横穴式石室) 土壙墓<br>4.平安時代, 住居跡8<br>5.中世～近世, 墳墓   |
| 32 | 植木遺跡    | 北房町植木    | 48.10.20<br>49. 3. 28                           | 6  | 1,280 | 田仲                 | 1.弥生時代末～古墳時代初頭, 水路<br>2.室町時代～鎌倉時代, 鋏跡・建物11・池?<br>3.古墳時代, 鉄鋸15本・たがね5本・短刀1・刀子1・火打鍊・鏃<br>4.奈良・平安時代, 住居跡4・瓦・瓦窓<br>5.中世, 灰窯4・瓦窓5・曲物2・井戸群   |
| 33 | 空 古 墳   | 北房町下皆部   | 48. 9. 22<br>9.25                               | 1  | 20    | 田仲                 | ①古墳時代, 円墳, 横穴式石室, 古墳の墳端が一部かかる, 地形測量を行なった  |
| 34 | 戸谷遺跡    | 大佐町 用治部  | 49. 7. 31                                       | 1  | 300   |                    | 段丘上に土師器の散布がみられる。未調査   |
| 35 | 塔の巣 墳墓群 | 新見市 上熊谷  | 49.10. 1<br>49.10.31                            | 1  | 100   |                    | 尾根の頂上に中世の墳墓が存在する。未調査  |
| 36 | 史跡七八冢   | 新見市青地    | 49. 7. 1<br>49.12.30                            | 6  | 1,400 |                    | 段丘の先端近くに中世の墳墓(市指定)があり, また附近に須恵器, 土師器の散布がみられる。<br>未調査  |
| 37 | 岩倉上古墳   | 新見市高尾下   | 49.   |    | 100   |                    | 尾根上に前方後円墳らしき地形があり, また附近には祭祀遺跡も予想される。未調査   |
| 38 | 宗金遺跡    | 新見市西方    | 49. 7. 1<br>50. 3. 31                           |    |       | {(800)}            | 平地より一段高い平坦部に土師器の散布がみられる。未調査   |
| 39 | 新見庄跡    | 新見市西方～高尾 | 49. 4. 1<br>50. 3. 31                           |    |       |                    | 平安～室町時代の遺跡で, 芝園を治めた当時の資料が東寺に保存されている。未調査   |
| 40 | 横見古墳    | 新見市西方    |   |    |       |                    | 尾根の斜面に横穴式石室が残存する。未調査  |
| 41 | 岩屋城跡    | 神郷町 下神代  |   |    |       |                    | 丘陵上に中世の山城が知られている。未調査  |
| 42 | 塙木墳墓群   | 神郷町 下神代  |   |    |       |                    | 山麓に中世の墳墓群がある。未調査  |

| 遺跡名           | 所在地          | 契約調査期<br>間<br>開始年月日<br>終了年月日 | 月<br>数 | 契約<br>面積<br>面積 | 主な調査員 | 概要                                    |
|---------------|--------------|------------------------------|--------|----------------|-------|---------------------------------------|
| 43 中林遺跡       | 阿智郡西町<br>上神代 |                              |        |                |       | 山腹に人工的な構築物があるが性格不明、岩倉へ通じる参道かも知れない。未調査 |
| 44 山中古墳群      | 哲西町矢田        |                              |        |                |       | 山麓に山世の墳墓群がある。未調査                      |
| 45 二野古墳       | 哲西町矢田        |                              |        |                |       | 畠に破壊された横穴式石室が残存する。尾根上にも2基の円墳が所在する。未調査 |
| 46 土井城跡       | 哲西町矢田        |                              |        |                |       | 丘陵の尾根を4本の溝で切断し独立をさせた中世の山城である。未調査      |
| 47 塚の峯<br>古墳群 | 哲西町大竹        |                              |        |                |       | 尾根上に2基の円墳が存在する。未調査                    |

- このうち久米庵寺は一部建物を高架橋にて保存、宮尾遺跡は盛土下に一部遺構埋没、他は調査後破壊。
- 資料整理中のため今後も追加補正されるものもあります。
- 遺跡の番号は以後の報告書に共通する。
- 未調査遺跡は調査予定期間である。
- 新見以西では49年7月に再度分布調査が実施され、多數の遺跡が追加された。次の機会に載せる。



橋本（作成）

遺圖第1 跡

総 目 次

は じ め に

例 言

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 1 美 作 国 府 (15) .....     | 1   |
| 2 二 宮 大 成 遺 跡 (16) ..... | 55  |
| 3 西 原 遺 跡 (24) .....     | 133 |

# 美 作 国 府

## 美作国府遺跡

### 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1章 調査の方法        | 5  |
| 第1節 はじめに         | 5  |
| 第2節 第1次調査        | 6  |
| 第3節 第2次調査        | 6  |
| 第4節 第3次調査        | 7  |
| 第2章 地理的景観        | 9  |
| 第3章 調査日誌抄        | 10 |
| 第4章 各時期の遺構・遺物の概要 | 33 |
| 第1節 国府期以前の遺構・遺物  | 33 |
| 第2節 国府期の遺構・遺物    | 33 |
| 第5章 出土遺物の概要      | 41 |
| (1) 弥生式土器        | 41 |
| (2) 石器           | 41 |
| (3) 須恵器          | 41 |
| (4) 土師器          | 45 |
| (5) 施釉陶器         | 46 |
| (6) 墨書き土器        | 46 |
| (7) ヘラ描き土器       | 47 |
| (8) 陶硯           | 47 |
| (9) 瓦・埴          | 48 |
| (10) 青白磁         | 48 |
| (11) 木器          | 50 |
| 第6章 まとめにかえて      | 52 |
| 文献ノート            | 54 |

### 図 目 次

|                             |      |
|-----------------------------|------|
| 第1図 グリッド設定及びトレンチ配置図(1/1000) | 折り込み |
| 第2図 遺跡分布図(1/5万)             | 8    |
| 第3図 地形図(1/1000)             | 折り込み |
| 第4図 い—b区実測図(1/100)          | 35   |
| 第5図 い—c・う—c区実測図(1/100)      | 36   |
| 第6図 建物Ⅲ平面図・断面図              | 37   |
| 第7図 建物Ⅳ平面図・断面図              | 38   |

## 美作国府遺跡

|                                |      |
|--------------------------------|------|
| 第8図 弥生式土器(1/4) .....           | 42   |
| 第9図 石庖丁(1/2) .....             | 43   |
| 第10図 須恵器(1/3) .....            | 43   |
| 第11図 須恵器(1/3) .....            | 44   |
| 第12図 緑釉陶器(1/3) .....           | 46   |
| 第13図 瓦(1/3) .....              | 49   |
| 第14図 美作国府址検出遺構全体図(1/200) ..... | 折り込み |

## 表 目 次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 挿図1 緑釉陶器(1/3) .....     | 46 |
| 第1表 建物計測値表 .....        | 39 |
| 第2表 井戸及び井戸状ヒット所見表 ..... | 40 |

## 図 版 目 次

|                       |  |
|-----------------------|--|
| 図版 1 1) か・き-d区全景(西より) |  |
| 2) か・き-d区溝状遺構(東より)    |  |
| 2 1) う-b・c区(東より)      |  |
| 2) う-c区(南より)          |  |
| 3 1) う-c区i-b区(西より)    |  |
| 2) i-b区(南より)          |  |
| 4 1) i-a・b区(西より)      |  |
| 2) i-a・b区う-c区(東より)    |  |
| 5 1) あ-c・d区(南西より)     |  |
| 2) i-A・B区(西より)        |  |
| 6 1) 建物Ⅳ(東より)         |  |
| 2) 建物Ⅲ(東より)           |  |
| 7 1) 建物Ⅲの柱穴           |  |
| 2) 建物Ⅳの柱穴             |  |
| 8 1) 建物Ⅴ全景(西南より)      |  |
| 2) 遺跡より東方を遠望          |  |
| 9 発掘風景                |  |
| 10 1) 井戸I検出状態         |  |
| 2) 井戸I発掘状況            |  |
| 11 1) 井戸I 井桁          |  |
| 2) 井戸I 井筒             |  |

美作国府遺跡

- 図版 12 1) 井戸 I 井筒  
2) 井戸 I 井筒の板を一枚取った状態  
3) 井戸 I を真上から見る。
- 13 1) 井戸 III 検出状態  
2) 井戸 III 遺物検出状態
- 14 1) 井戸 IV 遺物出土状態  
2) 井戸 IV 井桁
- 15 井戸 IV a 遺物検出状態
- 16 井戸 IV a 遺物出土状態
- 17 1) 井戸 IV a 井戸掘り方と井桁 (敷石あり)  
2) " (敷石なし)
- 18 井戸 IV a 井桁と隅木
- 19 1) 井戸 IV a 井桁  
2) 井戸 IV a 井桁細部
- 20 1) 井戸 IV b 掘り方と井戸  
2) 井戸 IV b 井桁と井筒
- 21 1) 井戸 IV b 遺物出土状態  
2) 井戸 IV b 井桁と井筒
- 22 1) IV b 横櫛出土状態  
2) 井戸 IV b 横櫛
- 23 1) 井戸 IV b 曲物と櫛  
2) 井戸 IV b 瓠
- 24 1) 井戸 V 掘り方  
2) 井 戸 V
- 25 1) 井戸 V 遺物出土状態  
2) 曲物出土状態
- 26 井戸 V 側板
- 27 発掘風景
- 28 1) 弥生時代の溝状遺構  
2) 弥生時代の石組遺構
- 29 1) 緑釉陶器出土状態  
2) 斎串出土状態
- 30 お一e区弥生期の遺物出土状態
- 31 弥 生 式 土 器
- 32 須 惠 器 (3)

美作國府遺跡

図版 33 平安～鎌倉期の遺物 (1/2 底面のみ)

34 出土遺物

1) 「少目」墨書き土器(文字 1/3)

2) 墨痕土器

35 緑釉陶器 (1/3)

36 瓦 (1/3)

37 陶 琥 (1/3)

38 青白磁

## 第1章 調査の方法

### 第1節 はじめに

美作国が、始めて日本の正史に見えるのは、和銅6年夏4月（註一）のことである。つまり、備前国の6郡を分割して、美作国を設置したのである。律令制度のもとに国を置くことは、その中枢であり、律令的地方都市である国府も占地され、しかるべき所に定められたものである。そして、建設の槌の音も高く、建物が築造され、官衙群が構成され、国庁が形成された。こうして地方の中枢的都市である国府が形成されていったものと推定される。律令制の華やかな時代に造営された国府も、律令制の衰退とともに、その機能を失い、いつしかその存在も忘れられてしまった。美作国の設置以来千数百年を経た現在、その存在を知る者もなく、一部の識者が、その幻の都市を追うのみであった（註二）。しかし、中国縦貫自動車道の建設に伴って、にわかに脚光をあびてきた。と言うのも、自動車道が推定国府域の一部を横切ることになったからである。国府としての機能を失って以来数百年にして、地下に埋れた遺構として、我々の眼前に姿を現わすことになった。

美作国府址の究明は、まず、トレントによる第1次、第2次調査により開始された。そして、そのトレント調査の結果をもとに、昭和46年4月から、翌年3月までの1ヶ年間で本格調査を実施した。発掘調査は、遺跡の総延長約450mにわたるものであった。それを、6名の調査員によって発掘を開始した。しかし、6名の調査員も、調査終了時には2名に減少しており、この調査に終始一貫して従事したのは、ただ一名のみであった。この変則的な体制のもとに調査を続行した。その結果、我々は数々の知見を得た。なかでも、単に推定美作国府址であったものが、国府址としての可能性が非常に大きくなかったことは注目すべきことであろう。さらに、多量の遺物を出土したことでも重要である。築地の溝出土の土器、井戸出土の一括遺物、多量の縁釉陶器、円面硯、風字硯、それらのいずれを取り上げても、重要な資料である。

調査結果は、我々に多くの知見を与えてくれた。しかし、その調査体制は変則的であった。変則的であったのは、調査体制のみではなく、報告書作成の段階においても同じであった。本報告を執筆するに当っても、調査の当初は、6名の調査員で出発したが、報告書作成の段階においては、専従できる調査員は1名であった。その一名も、調査に終始一貫して従事していた調査員ではなく、他の一人である。また、報告書作成のために与えられた時間は、4・5月の二ヶ月間であった。限定されていた調査に対し、与えられた整理の期間はさらに限定されたものであった。

## 第2節 第1次調査(註一3)

中国縦貫自動車道の路線決定に際して、従来から美作国府址と推定される区域の西北部を斜断する路線が決定した。その後、日本道路公団は、工期の切迫に伴い、県教委に調査を要請してきた。県教委は、その要請により、社会教育課(当時)の職員3名による第1次調査に着手した。

第1次調査の目的は、当該地区の遺構の有無を確認することが主目的であった。そして、遺構を確認した場合は、調査面積および、調査必要期間の算定に必要な資料を得ることであった。そこで、前記の目的を達成するために、3mグリッド及びトレンチによる調査を行った。まずSTA268+80～STA269地区に南北トレンチと、東西トレンチを設定した。(う-A区) また、STA268+20を中心に「T」字形にトレンチを設定した。(お-d・e区)

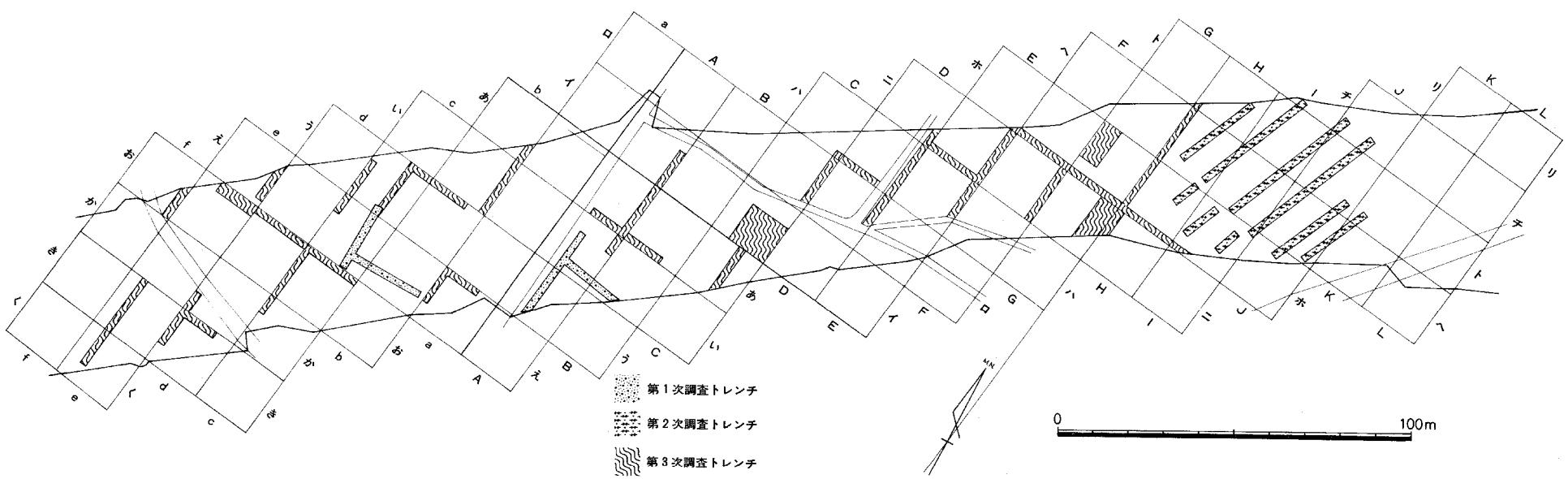
トレンチ調査の結果、各トレンチからは、奈良時代～平安時代の遺物が多く出土した。それらは、主として、須恵器、土師器である。その他にも、瓦、円面硯、綠釉陶器、曲物等の注目すべき遺物も出土した。また、遺構としては、柱穴状遺構等を確認した。その事は、この地域に、かつて建物が存在したことを窺わせる。今回の調査地域は、台地と台地にはさまれた浅い谷状の部分に当るにもかかわらず、建物遺構の存在が予測されることは注目しなければならない。また、出土遺物に見られる綠釉陶器、円面硯片は、付近に官衙をも考えさせる。さらに、出土遺物のほとんどが、古代律令制国家における国府期存続期間とほぼ軌を一にすることが注目に価する。

第1次調査の結果、当該地区は美作国府址の一部であることにはば誤りのないことを確認した。さらに、国府期の遺構の下層には、古墳期及び弥生期の遺構の存在することをも確認した。

以上のように、前記の目的を一応達成し、昭和45年3月5日から開始した第1次調査を、同年3月31日で終了した。

## 第3節 第2次調査(註一4)

第1次調査では、西限に近いと考えられる部分で遺構を確認した。そこで、第2次調査では、北限を確認することが主たる目的であった。そのため、地形から推定して、国府域の北限を画すると考えられる谷の部分を調査した。調査は、谷の部分に巾2mのトレンチを6本設定した。そして、その南側で、台地の縁辺に3本のトレンチを設定した。このトレンチ調査の結果は、谷に設定したトレンチの南端で、巾1.5m、深さ0.5mの溝を検出した。溝は、第三紀層の粘土層を掘り下げており、直線的につくられていた。それ等のトレンチから出土した遺物を見ると、須恵器、土師器の類が最も多く、他に、瓦、円面硯片、綠釉陶器片等も出土した。そ



第1図 グリッド設定及びトレンチ配置図

## 美作国府遺跡

れ等は、第1次調査より出土したものと共通する点をもっている。

第2次調査より得た結果を述べると、おおよそ次のようになる。

谷の南端に検出した溝は、ほぼ直線をなしており、人為的なものと考えられ、国府に関連した遺構と推定される。

出土遺物を見ると、奈良時代、平安時代のものがみられる。以上のことから、同調査地点も国府域に入るものと考えられる。

第2次調査は、昭和46年3月9日に開始し、以上のような知見を得て、同年3月31日で調査を終了した。

## 第4節 第3次調査（本格調査）

第1次・第2次調査の結果は、中国縦貫自動車道は、津山市総社地内において、国府城の一部を横切ることが、ほぼ誤りのないものと考えられるにいたった。そこで、昭和46年4月から、翌年3月までの一ヶ年で、自動車道建設に伴う発掘調査を実施することとなった。先の調査により、今回発掘の対象となる範囲は、総延長約450mにわたるものと考えられた。その広大な範囲を調査するにあたり、予定範囲内全面に方眼のグリッドを設定した。グリッドの単位は、10尺を一つの基準と考え、それに最も近い3mを基準単位とした。そして、その公倍数である18mをグリッドの1単位とした。また、グリッドの基準方位は、国府址の東方の低地に見られる推定条里制遺構により、そこに見られる畦畔の方向を基準とした。グリッドの設定後、遺跡地の東端から、グリッドの基準線に沿う巾2mのトレンチを設定し、遺跡の広がりと、遺構の密度の確認調査に着手した。その結果、E線以東の台地部分は、後世の削平が著しく、調査を必要としない部分と判断した。そして、あーb区より本格的調査を開始した。（註-5）

註-1 続日本紀 和銅6年夏4月

乙未、割備前国英多、勝田、苦田、久米、大庭、真嶋六郡 始置美作国

註-2 明治14年10月、有志により「国府遺跡碑」が津山市総社幸畑に建てられた。石碑は、現在、国府台寺の境内にみられる。

註-3 調査の概要是、昭和44年度の実績報告である「美作国府第1次調査概要」1970年3月31日、岡山県教育委員会によった。調査は、高橋謙、泉本知秀、枝川陽が担当した。

註-4 調査の概要是、昭和45年度の実績報告である「美作国府跡」昭和46年3月31日岡山県教育委員会によった。調査は、河本清、橋本惣司、柳瀬昭彦が担当した。

註-5 調査開始後の問題点、経緯は、調査日誌抄に詳しく述べるので、ここでは略す。

なお、調査員は、当初、高橋謙、伊藤晃、泉本知秀、井上弘、岡田博、池畠耕一の6名であった。

美作國府遺跡



第2図 遺跡分布図（1/5万）岡山県遺跡地図（第1分冊）岡山県教育委員会 昭和48年3月による

## 第2章 地理的景観

津山市街地の北側に広がる低地の西方に神楽尾山がある。その神楽尾山の東裾に広がる台地上に美作国府址は存在する。国府址の東方に広がる低地には条里制遺構が存在する。その低地のほぼ中央に、弥生時代前期の土器を出土した一丁田遺跡（9）がある。その低地の東に沼、野介代、押入、川崎といった低丘陵がある。沼の低丘陵上には、復元住居址で知られる沼弥生遺跡（107）がある。それを中心に、南北に延びる丘陵上には、弥生式土器の散布を見、同丘陵上には広い範囲の弥生時代の遺跡の存在が考えられる。さらに、その丘陵上には多くの古墳がみられ、沼古墳群と呼ばれている（254）。さらにその東に在る野介代、押入、川崎の低丘陵上にも弥生遺跡、古墳群がみられる。弥生遺跡では、野介代遺跡、押入西遺跡がある。併に中国縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査を実施した遺跡である。他にも、才谷遺跡（1）がある。古墳時代の遺跡としては、前方後円墳である玉琳大塚古墳（2）、六ツ塚古墳群（3）飯綱古墳群（4）、兼田丸山古墳（5）押入西古墳群等がある。その他にも確認されている遺跡は多い。吉井川の北、加茂川の西に位置するこの低丘陵上には、多くの遺跡の存在が知られている。

加茂川の南、吉井川の東には、前方後円墳である天王山古墳（204）をはじめとして、日上畠山古墳群（203）があり、その東には觀音山古墳群が知られている。又、この地域には、美作国分僧寺址（190）、美作国府尼寺址（191）がある。美作国分僧寺址からは、国府址から出土した瓦と同じ瓦が出土している。

吉井川の南の佐良山には、佐良山古墳群（87）があり、横山古墳群（33）がある。又、弥生遺跡である八出遺跡（34）がある。

国府址の北約1kmには、弥生時代後期の墳墓群である下道山遺跡（11、12）がある。さらに北約2.5kmには、美作国一宮である中山神社がある（註一6）。

第2図からも解ることであるが、国府址を囲む周辺には、弥生時代以後の遺跡が多く存在する。それ等の多くは、条里制遺構のみられる低地を中心に、それを囲む低丘陵上に分布する。美作国府址は、それらの中心にあり、条里制遺構のみられる低地を一望できる所に立地している。

註一6 文献ノート⑥、⑨

## 第3章 調査日誌抄

1971年4月1日～1972年3月31日

＜4月＞ 6名の調査パーティーが編成されたが、泉本は中国縦貫道建設に伴う久米廃寺発掘調査を続行、伊藤、井上は山陽新幹線建設に伴う雄町遺跡の発掘調査に従事していた。池畠、岡田は久米廃寺発掘調査に参加していた。上旬から中旬にかけては器材の整備、プレハブ調査事務所の整備、発掘調査現場作業員の募集等をおこなった。

中旬から下旬にかけて池畠、岡田は津山市役所にて津山市総社周辺の「切絵図」のトレースを数日間にわたっておこなった。その際、津山市教委の今井堯氏には有益な御指導、御援助を賜ったことを記しておく。

4月26日 晴 プレハブ整備、発掘機材の点検作業を行う。調査員6名全員現場に結集。地形の観察を行う。

4月27日 快晴 津山盆地の北方部分（国府の東方）の条里残存部より南北基線を発掘区域に移行設定する。同時に原点設定、周辺のグリッド割を行う。グリッドは天平尺の10尺に最も近い3mを最小基準距離とし、公倍数値18mを1グリッドの1辺とする。

4月28日（水）曇のち雨

グリッド割延長作業。作業員4名にて部分的な試掘を行う。池畠、岡田「切絵図」の字名表、図面をコピー、約100部作成。

4月30日（金）曇もりのち雨

土器洗い。（大半は第2次調査のものである）グリッド割。午後5時より対策委員会開催。

＜5月＞

発掘調査を本格的に開始。連休あけより20名以上の作業員、5名の調査員という編成で発掘を開始した。

5月6日（木） 曇

5月7日（金） 曇のち晴れ

5月8日（土） 晴

イ—C—5・6・8・9区、あ—a—7・8・9、ニ—G—1の各区の表土除去、遺構検出作業、グリッド割は引き続き行う。今後の調査の方針を打ち合わせる。(1) トレンチ調査を続行してゆく過程で、掘らねばならぬ地点の計画を漸次たててゆく。(2) 地名・字名・条里遺構の残存状態から美作国府の復元作業をこころみる。以上の2点を当面の課題とした。作業員休憩小屋の建築を始める。

5月10日（月） 曇

あ—C—2・5・8区に1m巾のトレンチを設定。い—C—1区表土除去、遺物多く全面包含層の遺存が推察される。ニ—G—4区表土除去、柱穴2本検出。市教委今井、矢野氏来跡。

## 美作国府遺跡

5月11日（火） 晴

5月12日（水） 晴

5月13日（木） 晴のち曇り

ニーH区、ホーH区両側に巾1mのトレンチ設定。発掘の結果遺構残存せず。ニーG—8区より須恵質人足片出土。Gライン西側巾2mのトレンチ設定。作業員休憩小屋棟上げ。電話開通する。この頃、気温はすでに30°Cを越える。

5月14日（金） 曇り夕立あり。

Gライントレンチ発掘。午後3時より鍛入れ式を行う。

5月15日（土） 曇り

Eライントレンチ設定発掘開始。

5月17日（月） 曇り

調査員連絡会議

5月20日（木） 晴

ハーダトレンチ・ローカトレンチ発掘続行。午後5時半より縦貫道関係調査員連絡会議出席。

5月21日（金） 曇り

イーBトレンチ、イーAトレンチ発掘。

5月22日（土） 曇り

あーA—9・あーB—7・8区発掘。午後、中国縦貫道埋蔵文化財対策委員会開催。於 領家遺跡、美作国府。

5月23日（日） 曇り

イーA—3トレンチ・あーB—7・8トレンチ発掘。

5月24日（月） 曇り時々雨

えーa—1・2・3区トレンチ発掘。グリッド設定作業。

5月25日（火） 晴

えーa—1・2・3区トレンチ発掘続行。

5月26日（水） 晴

えーa—1・2・3・7区発掘終了。あーb1・2区、おーc—2・3区発掘開始。グリッド設定作業続行。道路公団津山工事事務所津山工事区工事長他来跡。

5月27日（木） 雨

遺物整理。

5月28日（金） 雨

遺物整理。トレンチ及びグリッド内の排水作業。津山市総社在住の高谷氏、国府付近採集の遺物持参、円面硯片あり。

あーc—8区にて排土中より円形浮文を施した円面硯脚部片を表採。

## 美作国府遺跡

5月29日（土） 曇り

お—b・c区トレンチ延長。

5月31日（月） 曇り

お—b—1・2区。お—c—1・2・3区お—a—1・2・3区発掘。おトレンチより軒丸瓦片出土。市教委今井堯氏ら2名来跡。ベルコン到着。

<6月>

トレンチ調査を続行。梅雨期に入るため、作業員の田植え、降雨等で発掘調査区域の拡張は望めない。また、久米廃寺の調査応援のため上旬8日間は調査員2名～4名は本遺跡より離れた。中旬、伊藤、井上は山陽新幹線報告書作成のため数日間岡山出張。

6月1日（火）

係会議。岡山文化センターにて。

6月2日（水）

お—c—1・2区発掘続行。

6月3日（木） 雨

6月4日（金） 雨

遺物水洗、整理作業。

6月5日（土） 曇り

おトレンチ発掘続行。

6月7日（月） 晴

6月8日（火） 晴

6月9日（水） 晴

6月10日（木） 曇りのち雨

6月11日（金） 雨のち曇り

おトレンチ発掘、お—a—1・2・3区発掘続行。ベルコンのおおい作成。

6月12日（土） 雨

危険物小屋建築開始。遺物整理。

6月14日（月） 雨のち曇り

おトレンチ延長。トレンチの排水作業。危険物小屋完成。第2次調査区トレンチの周辺に鉄条網を張りめぐらす。学童の通学路に近く、満水時1m以上も雨水がトレンチにたまるので学童転落防止のため。

6月15日（火） 雨のち曇り

遺物整理、鉄条網（有刺鉄線）張り続行。

6月16日（水） 曇り

調査員連絡会議、東岡山収蔵庫にて。

6月17日（木） 晴

## 美作国府遺跡

遺物整理。現場作業員ゼロ、田植のため、本日より27日まで発掘休止。

6月18日（金） 曇り

遺物整理。レベルポイント移行。ニ—H—1・4・7セクション清掃

6月19日（土） 曇り

ニ—H—1・4・7土層断面図実測。（池畠、岡田）

6月21日（月） 曇時々晴

ニ—H—1・4・7土層断面図実測。写真撮影。

6月22日（火） 晴

6月23日（水） 晴

6月24日（木） 曇り

6月25日（金） 曇り

遺物水洗、整理。

6月26日（土） 晴

遺物水洗、整理、午後、天神原遺跡にて中国縦貫道文化財対策委員会開催。

6月28日（月） 曇り時々雨

発掘調査開始、お—e—2、お—e—3区の掘り下げ作業。円面硯片出土。遺物整理。3m  
尺の作成。実測用。

6月29日（火） 曇り

お—b—1、お—b—4区の掘り下げ開始、遺物整理。

6月30日（水） 曇り

お—b—1・4グリッド掘り下げ、い—c—8、う—c—2・5トレンチ掘り下げ作業。遺  
物多し。包含層は70~80cm。綠釉陶器片あり。

<7月>

本格的な平面（グリッド）発掘を開始する。一方、トレンチ調査も並行して行ない、旧地形の推定を急ぐ。作業員は常時20人は確保できている。炎天下のもと、本遺跡特有の粘土質の堆積土には苦労する。

7月1日（木） 雨

係会議。東岡山工業高校にて。

7月2日（金） 曇り

う—c—5区トレンチ、う—c—2区グリッド掘り下げ作業。cトレンチには井戸検出。

7月3日（土） 曇り

う—c—2、お—b—1・4のグリッド掘り下げ作業。

7月5日（月）

う—c区、お—b区発掘調査続行。神野文化課長、光嶋主幹、高橋主査来跡、今後の調査の打ち合わせ。

## 美作国府遺跡

7月6日（火） 晴

7月7日（水） 雨のち曇

りうーc区・おーb区続行。

7月8日（木） 晴

いーcー9区グリッド掘り下げ。おーeー1, おーfー6・9のトレンチ掘り下げ。井戸セクション・プラン実測。

7月9日（金） 雨のち晴

いーcー9区グリッド清掃。あーaー4・7区に南北トレンチ設定、発掘開始。おーeー1区のトレンチ掘り下げ、おーfー6・9のトレンチ掘り下げ及び清掃。各区写真撮影

7月10日（土） 曇り

おーeー1区トレンチ清掃。おーfー6・9のセクション及びプラン実測図作成。おーfー9では、柱穴10数本検出。あーaー2清掃、ピット1検出。いーcー9清掃続行。

7月12日（月） 雨

土器洗、遺物整理。

7月14日（水） 曇り

おーeー1区トレンチセクション写真撮影。えーeー6区の東側約2mのトレンチ設定。あーaー7・8・9区実測、写真終了。あーaー5区、実測割り付け作業。

7月15日（木） 晴れ

あーaー4・5区清掃、後、写真撮影、実測を行う。おーeー1区トレンチのセクション実測。えーeー6, えーcー1, うーcー7区トレンチ掘り下げ作業。埴片出土。美作国分寺でも出土しているので注目されている。あーaー4・5区清掃、写真撮影、実測。

7月16日（金） 晴

調査員連絡会議。山陽団地調査現場にて。

7月17日（土） 晴

あーa区実測続行。

7月19日（月） 晴

あーaー8区実測終了。あーaー5・7・8区セクション実測。あーaー7レベリング終了。あーaー9区発掘続行。えーeー6区、えーcー1区、うーcー4区トレンチ掘り下げ。うーcー4区では柱穴検出。

7月20日（火） 晴

連日猛暑。あーaー9区清掃、あーaー6, 3区設定発掘開始。あーaー8区レベリング終了。あーaー9区清掃、ピット検出、えーeー6, えーcー1, うーcー4・7区トレンチ掘り下げ。遺物多し。

7月21日（水） 晴

えーeー6, えーcー1, うーcー4・7区トレンチ掘り下げ。えーeー6区の部分は地山

## 美作国府遺跡

面まで掘り終る。

7月22日（木）雨

遺物整理、水洗。

7月23日（金）雨

遺物整理、水洗。

7月24日（土）晴

い—a—1・4区グリッドの掘り下げ。

7月26日（月）雨

遺物整理、水洗。萩原文化課参事、岡田社会教育課長来跡。

7月27日（火）雨

遺物水洗、整理、綠釉陶器片、陶硯片のピックアップ整理。

7月28日（水）曇り

遺物水洗、整理、発掘器材点検。

7月29日（木）雨

7月30日（金）晴

遺物水洗、整理。

7月31日（土）晴

あ—a—6・9区レベリング終了。図面整理、資料作成。

<8月>

4月～7月までの発掘調査により、遺構分布範囲、残存度の目安はほぼ確認できる。溝状遺構がやはり築地の溝となる可能性が強まるとして、本発掘調査区域は国府域と外郭域との境界部分であるかもしれない。作業員の方々も発掘調査の要領を体得され、スムーズな発掘作業が進められるようになった。たとえば土層断面の清掃あるいは遺構面清掃などの点においてその成果が認められた。

8月2日（月）快晴

係会議。県立博物館講堂にて。

8月3日（火）晴れ時々曇り

う—c—4区発掘開始。い—a—1～6区表土除去作業開域。い—c—9区実測のための清掃作業を行う。猛暑は相変わらず。

8月4日（水）曇り時々小雨

台風9号接近。い—c—8・9区実測終了。い—a—1～6区表土除去作業進行中。う—c—4・5表土除去。

8月5日（木）曇り

う—c—4・5区表土除去作業。い—a—1～6区表土除去ほぼ終了。

8月6日（金）晴れ

## 美作国府遺跡

う—c—4・5区掘り下げ。軒平瓦出土。い—a—1・2・4・5区遺構追求、検出。本日より池畠は新幹線岡山以東埋蔵文化財発掘調査開始のため岡山へ配転。

8月7日（土） 晴

い—a—2・4・5区にて溝（東西）検出。う—c—4・5区井戸付近ほとんど発掘終了。  
う—c—7・8区表土除去作業。

8月9日（月） 晴

い—a区清掃。ピット検出作業を中心に行う。溝清掃。う—c—4, 5区終了。う—c—7, 8区発掘続行。い—c—9区セクション清掃。東西溝、南北溝がほぼその全容を現す。

8月10日（火） 曇りのち晴

い—a—4区、溝のセクション写真撮影。実測終了。う—c—7, 8区グリッド掘り。い—a—1区井戸状ピット写真、実測、い—a—3区溝検出、い—a—2落ち込み遺構検出。

8月11日（水） 晴

い—a区各遺構の精査（発掘）開始。い—a—1区井戸状ピット $\frac{1}{2}$ 掘り上げ写真撮影。う—c—7, 8区包含層を発掘掘り下げ。遺物多し。遺物収納整理箱遺物小屋へ搬入。津山市教委文化財関係者1名来跡、見学。

8月12日（木）

い—a—1・3区井戸、溝写真撮影。い—a—1～3区実測ほとんど終了。い—b—3・6区トレンチ拡張。い—a—6区遺構面清掃溝検出。う—c—7・8区包含層下層から地山にかけて掘り下げ。

8月13日（金）～8月16日（月）まで盆休みとし、現場作業休止。

8月17日（火） 曇り

い—b区東半分表土除去。い—a区各遺構を掘り下げる。う—c—7・8区排水作業。

8月18日（水） 晴

前日と同様。い—a—3区北東隅のピットを掘り下げる。輪桿を確認し、断面を残す。

8月19日（木） 曇り

い—a—3区溝状遺構の掘り下げ作業。ピット掘り下げ終了。完形土師器2個出土。

8月20日（金） 曇り時々雨

い—a—3区溝状遺構清掃。

8月21日（土） 曇り

う—c—9区発掘。い—b—7・8区続行。あ—b—9区清掃、ピット検出。

8月23日（月） 曇りのち雨

発掘計画表資料（岡田・井上）。い—b区発掘続行。

8月24日（火） 曇り

い—b区続行。発掘計画打ち合わせ。津山市文化財めぐりとかで30人ほど来跡、見学。

8月25日（水） 曇り

## 美作国府遺跡

い—b—5区より円面硯破片出土。秀逸品である。伊藤、井上は発掘計画表をコピー。

8月26日（木） 晴

い—b区掘り下げ。津山文化財愛護少年団約20人見学。

8月27日（金） 晴

8月28日（土） 晴

い—b区掘り下げ。遺物多し。弥生式土器（中期）片多し。

8月30日（月） 雨

遺物水洗、整理作業。

8月31日（火） 雨

午前中、遺物水洗、9月発掘計画立案、午後、ポンプで発掘区の排水作業。食用蛙捕獲

<9月>

本遺跡の主要部分の平面発掘の進行に伴い、国府を思わしめる築地溝——東西、南北線はほぼグリッド線に平行している——の検出や、縁釉陶器、須恵器、瓦、陶硯片の出土が増大した。溝状遺構の追求が主要な課題であり、建物、井戸の検出に全力を投入することが必要となった。現場作業員数は20~30名で発掘の進行状態は良好。

9月1日（水） 曇り時々雨のち晴

い—a区排水作業。い—b区（2・3・4・5・6・7・8）包含層を掘り下げる。ピット、溝状遺構検出。

9月2日（木） 晴

い—b—5・7・9区発掘。遺構検出も並行して行う。い—a区全面清掃、い—a—2区、い—a—3区実測、写真撮影を行う。午後、い—a—6区を更に清掃。

9月3日（金） 曇り

い—b—7区溝検出。セクション、検出プラン写真撮影。い—a区写真撮影のための清掃、写真撮影のための小やぐら作成。高さ約2mほどのもので小さい遺構の写真撮影に便利。

9月4日（土） 曇り

い—a—1区井戸写真撮影。う—c—6・8・9区清掃。い—b区各遺構検出。い—a—3区井戸状ピットより白磁の完形に近いものを出土。う—c—9区より復元可能な縁釉陶器出土。

9月6日（月） 雨時々曇り

係会議。県立博物館講堂にて。

9月7日（火） 曇り

い—a・b区排水作業。か—c—1、お—c—1・4・7区草刈り後、トレンチ設定。発掘開始。か—c—1区では耕作土下30cm程で黄色粘土の地山層が検出できるが、お—c—7では1m程になり発掘しにくい。

9月8日（水） 快晴

## 美作国府遺跡

い—a区割り付け、実測。い—b区遺構追求。か—c—1, お—c—1・4・7区トレンチ続行。

9月9日（木） 曇り

う—c区発掘。清掃をほぼ終る。う—c—6区発掘開始。い—a区、い—b区遺構検出作業続行、写真撮影並行。

9月10日（金） 雨

遺物整理。

9月11日（土） 晴

い—b—2区遺構検出作業。う—c—3区包含層掘り下げ。か—d区にグリッド、トレンチを設定。

9月13日（月） 晴

い—b—4・5区遺構検出。う—c—3区発掘。き—e区、か—e区発掘開始。比較的掘り易い。

9月14日（火） 晴々曇り

う—c—5区、い—a—4区井戸状ピット精査、実測。い—A—7・い—B—1区表土除去作業。い—b—4区西端方形ピット断面実測。き—e—1区溝清掃、遺物多し。午後6時より市民寮にて対策委員会開催。

9月15日（水） 晴

朝来淡雲微風。う—c—5区井戸状ピット発掘終了。い—b—4区土手はずし、遺構追求。い—a—4区ピット掘り下げ、約1m下で板が出土。実測、写真撮影、津山高校の生徒3名来跡、見学。

9月16日（木） 晴

う—c区清掃、柱穴掘り下げ。い—b—4, 7区表土除去作業、い—b—2, 3区東西溝状遺構断面図作成。杯蓋転用硯完形品出土。い—B—1, 4・5発掘。津山東小学校教諭1名来跡、見学

9月17日（金） 雨

遺物水洗、整理。

9月18日（土） 曇り時々雨

調査員連絡会議。本遺跡と天神原遺跡にて

9月20日（月） 曇り

い—b区遺物出土状態の精査、第1次調査トレンチの平板実測。い—B区続行。え—b—1・2・3区設定発掘開始。い—b区排水作業。う—B—1・4・7区設定。津高生徒見学。本日より井上は宮尾遺跡へ配転。

9月21日（火） 曇り

い—b区柱穴掘り下げ。い—b—2・3区で掘立柱建物がまとまる見込み。い—b区全面清

## 美作国府遺跡

掃、写真撮影。津山教育事務所平井次長をはじめ8名の職員来跡。兵庫県文化課職員山本氏来跡。

9月22日（水） 曇り

いーb区清掃、午後より写真撮影。いーB—4・7区発掘。えーb区包含層まで掘る。津山市北小学校生徒10名見学。津高生来跡。岡山市教委出宮氏来跡、見学。便所くみとりようやくバキュームカーが来てくれる。ベルコン点検、整備。

9月23日（木） 晴

うーc—2・3区柱穴、溝状遺構検出。掘立柱建物1棟判明。えーb—1区、えーc—2・3区表土除去作業。

9月25日（土） 晴

いーa・b区写真撮影。いーc—8・9区、うーc—2・3区遺構検出ほぼ終了、えーb—1区・えーc—2・3区包含層除去。津高生来跡。

9月27日（月） 晴

えーc—2・3区表土除去、包含層上層掘り上げ。軒丸瓦ほぼ完形品出土。うーc—2・3区遺構検出。いーb—2・5・8区の表土除去作業。水洗済の遺物整理。道路公団津山工事事務所より所長、庶務課長他1名来跡、工事用道路の件。

9月28日（火） 晴

いーB区、えーC—1・2・3区発掘作業。図面整理敢行。

9月29日（水） 晴

いーB、えーC区発掘続行。いーb—3・4・5・7・8区実測、夜、遺物整理。

9月30日（木） 曇り

いーb区実測。いーa・b区土層断面図作成。いーB区、えーC—1包含層除去。いーa区、あーa区ピッチラインの断面図作成

<10月>

発掘調査を開始して6ヶ月、主要遺構として築地溝、掘立柱建物、井戸状ピットの検出が進んだ。築地溝の東端確認や全体的プラン、掘立柱建物の追求が今後の調査の重要課題となつた。沼古墳の調査準備が始まり、あわただしい状況となってきた。井上はすでに久米町宮尾遺跡の第1次調査に出向き、伊藤、泉本、岡田の3名が本遺跡の担当として残留することになった。年度当初の調査パーティはすでに乱れ、種々の支障をきたすこととなった。

10月1日（金） 曇り一時雨

えーc—1区発掘。土器水洗。

10月2日（土） 曇り

えーb—4・7区掘り下げ。いーB区盛土除去、包含層まで掘り下げ。

10月4日（月）

県立博物館にて係会議

## 美作国府遺跡

10月5日（火） 曇り

い—B—3・6区発掘。あ—B区とい—B—1区の東西土手のセクションに近世の炭窯の断面があらわれ、調査員を驚かせた。あ—B—9区では弥生式土器が出土。

10月6日（水） 晴

い—b区レベリング。い—B—3, え—C—9区発掘。夕方大山主任、高橋主査、泉本沼古墳へ向かう。道路公団5名来跡。

10月7日（木） 晴

い—b区レベリング終了。あ—b—9プラン実測、レベリング。い—B—2区、あ—B—2区、え—c—6・9区発掘続行。

10月8日（金） 晴

い—B—2区溝状遺構判明。え—C—6区完了、西側凹みは谷部か。あ—b—9区柱穴検出。い—c—1区表土除去、奈良期の良質土器出土。最も遺物が多量に出土する。

10月11日（月） 曇り

い—C—1・2区、あ—C—1・2区、う—b—1・2・3・4区表土除去。あ—b—9区柱穴追求精査。

10月12日（火） 曇り

あ—C区、い—C区、う—b区発掘続行。い—C区東西溝発掘。い—b区建物I（3間×4間）写真影。

10月13日（水） 曇り

う—b区表土除去。い—C区東西溝発掘作業。う—C区、え—C区東西溝（築地溝）実測。夜、分庁舎にて調査員会議。

10月14日（木） 曇り一時雨

う—b区表土除去。夜、対策委員会。

10月15日（金） 快晴

う—b—4・7区発掘作業。包含層下層（黒色土）上面まで掘り下げ。作業員小屋ビニールでおおう。土器水洗。道路公団、森本組関係者来跡。

10月16日（土）

県立博物館にて連絡会議。

10月18日（月） 快晴

う—b—1・4区の包含層下層除去作業。柱穴検出。

10月19日（火） 快晴

う—b—1・5・6区包含層除去作業。築地溝付近精査。

10月20日（水） 快晴

連日、好天続き。秋晴のもとで発掘進行。う—b区続行。女性作業員は、多量の出土遺物の水洗作業。

## 美作国府遺跡

10月21日（木） 快晴

うーb区続行。遺物水洗。

10月22日（金） 曇り

うーb区続行。遺物水洗。うーc区平板測量。おーb区南北セクション実測。

10月23日（土） 晴

うー区柱穴掘り下げ。東端南北ラインを地山まで掘り下げ。午後、遺物水洗。えーcー3土手除去。対策委員会、領家、久米東（宮尾）遺跡見学。

10月25日（月） 晴

えーcー2区発掘。東端で灰釉陶器片出土、石庖丁出土。うーbー1・2区両端南北壁とりはずし。朝日新聞記者来跡。

10月26日（火） 晴のち曇り時々雨

いーbー9区土手はずし。うーcー1区表土から包含層除去。

10月27日（水） 晴時々曇り

いーbー7・9区包含層中層除去。うーbー5区築地溝プラン確認。うーcー1区発掘続行。読売新聞記者。高谷氏来跡。

10月28日（木） 晴

いーb区・うーc区続行。

10月29日（金） 晴

いーb区、うーc区続行。いーbー3区で検出した溝状遺構がうーcー3区の東西溝とゆるやかにカーブしてつながる。

10月30日（土） 雨のち曇り

現場作業休止。係会議用資料作成。

10月31日（日） 曇り時々雨

いーb区、うーc区発掘、遺構検出続行。えーcー4区の発掘に重点を置く。

<11月>

10月に着手し検出した遺構の精査を重点を置く。一連の築地溝は東西約50mにわたって検出した。建物は3棟のみ検出した。又、かーd区・かーe区の精査を再開、平坦な水田面を一挙に平面発掘にとりかかった。

11月1日（月）

県立博物館にて係会議。

11月2日（火） 晴

いーc・b・a区、うーc区水のかえ出し作業。えーcー4区発掘続行。

11月3日（水） 晴

午前中は濃霧発生、いーc区、うーc区清掃。えーcー1・4区溝検出のため掘り下げ。うーcー1区築地溝分層発掘。

## 美作国府遺跡

11月4日（木） 晴

うーb区・いーc区・うーc区清掃。あーb区清掃。溝状遺構曲折部写真撮影。いーc区、うーc区の建物写真撮影。

11月5日（金） 曇り

建物Ⅲ写真撮影。あーb区写真撮影。いーc区、うーc区トランシットで割り付け。

11月6日（土）

分庁舎にて調査員会議。

11月8日（月） 曇時々雨

えーc—5・6区表土除去作業。間壁忠彦氏、今井堯氏来跡、見学。

11月9日（火）

えーc—5・6区続行。きーe・f区、くーe・f区坪掘り作業。

11月10日（水） 晴

えーc溝プラン検出確認。西南端地区続行。

11月11日（木） 晴

かーd区・かーe区・きーd区遺構検出作業。いーc—1区・いーB—3区発掘、いーB—5区で検出した溝を追求。いーb区・あーa—9区の柱穴検出を急ぐ。えーc区終了。

11月12日（金） 晴

前日と同様。きーd・e区は地山面まで掘り下げる。トレント2本設定。

11月13日（土） 晴

うーd—6・9区設定。発掘開始。臨時係会議開催。

11月14日（日） 晴

各地区表土除去。

11月15日（月） 曇り

うーd—9区、えーd—3表土除去。津山市教育長、県文化財専門委員来跡。奈良文研文部技官町田章氏・横田拓美氏来津。

11月16日（火） 曇り

うーd—9・えーd—3区発掘続行。町田、横田氏来跡、地形図、切絵図説明。国府周辺踏査。午後、現場作業員に町田氏より御講演していただく。

11月17日（水） 曇り

うーd—9・えーd—3区包含層掘り上げ終了。午後、遺物水洗。

11月18日（木） 曇り

うーd—9区西南端発掘。うーc区、いーc区割り付け終了。遺物水洗。二宮大東遺跡作業員見学のため来跡。公団庶務課長他2名来跡。夜調査員会議。

11月19日（金） 晴

うーd—8区、えーd—6区発掘開始。福岡県より下条氏来跡見学。森本組関係者来跡。

## 美作国府遺跡

11月20日（土） 晴

朝は濃霧。うーdー8区（北半）終了。えーdー6区（東半）発掘続行。うーc区実測。

11月21日（日） 晴

えーdー6区遺構面まで除去終了。えーc区蛇行溝（当初曲水かと思われた）発掘着手。大津京調査補助員中野氏来跡。滋賀県丸山氏来跡。

11月22日（月） 晴

えーc区蛇行溝発掘終了。遺物の出土は皆無。えーbー1区土層断面図。うーd区遺構追求。

11月23日（火） 晴

えーbー2区表土除去。かーeー9区攪乱面掘り下げ。柱穴検出作業。きーdー1区整地面掘り下げ。

11月24日（水） 曇り

えーbー2区表土除去続行。土器水洗。市民寮にて連絡会議。その後調査員会議、「梨園」にて。

11月25日（木） 晴

えーbー2区清掃。えーcー9区表土除去作業開始。土器水洗。久米町文化財保護委員会諸氏来跡、見学。本日より伊藤は沼古墳の調査に向う。

11月26日（金） 晴

えーcー9区表土除去。かーe区柱穴精査。うーc区、いーc区プラン実測。

11月27日（土） 晴

えーcー9区包含層掘り下げ。かーd、e区柱穴精査。対策委員会午後2時より緊催。文化財保護協会関係者10数名来跡見学。

11月29日（月）

土器水洗

11月30日（火） 曇り時々晴

えーbー2区南半掘り下げ、蛇行溝の精査。えーcー8区表土除去。かーd、e区柱穴検出。うーb、c区レベリング。久米東（宮尾）遺跡作業員来跡、見学。森本組関係者2名来跡。

<12月>

発掘調査区の拡大、たとえば二ーH～K区ホーH～K区、ヘーH～K区設定等を行う。この地区は発掘調査区域の東部の谷で第2次調査区の対象でもあった。また、自然溝（蛇行溝）の検出作業によって調査区の地形復原資料を得た。また、中旬にはおーeの区で井戸枠、井筒が完存する井戸を粘土層下部で検出した。調査員の移動はさらに複雑になり、12月中旬には、本遺跡担当者は、岡田、井土の2名となる。

12月1（水） 晴

## 美作国府遺跡

う—c—2区実測。え—c—2区北端南北壁断面実測。い—a—3・6区表土除去。か、き—d・e区柱穴掘り作業。き—d—3区より綠釉出土。

12月2日（木） 曇り

い—a—3・6区土手はずし、遺物多量に出土。い—a—1・4区終了。き—e区、き—d区地山面清掃。溝状遺構掘り上げ、精査。綠釉が伴う平安初期の遺構が密集している。え—c—8区・え—c—9区掘り進める。夜、緊急調査員会議。

12月3日（金） 曇り

え—c—7区掘り進む。え—d—6区蛇行溝の追求。き—e—8区地山面まで掘り下げ。き—d—2・3区溝状遺構地山面まで掘り下げ。遺物多量に出土。

12月4日（土）

県立博物館にて係会議開催。

12月5日（日） 晴

え—c区自然溝（蛇行溝）清掃、写真撮影準備。え—c—3区溝断面写真撮影。き—e区中世溝掘り下げ。

12月6日（月） 曇り

自然溝写真撮影。き—e区続行。井上宮尾遺跡より復帰し泉本は二宮大東遺跡に配転。

12月7日（火）

え—b—1・2区清掃、写真撮影。き—e区南北溝（近世）発掘。え—c—7区続行。

12月8日（水）

え—c—7区終了。自然溝（蛇行溝）終了。い—a—1区発掘続行。え—d—9区発掘区設定掘り下げ開始。

12月9日（木）

え—c区、え—d区発掘続行。

12月10日（金）

前日と同様。本日より伊藤岡山へ配転。新幹線文化財調査に従事するため。

12月11日（土）

え—c区、え—d区、お—d区、お—e区続行。

12月12日（日）

遺物水洗、整理。

12月13日（月）

え—c区、え—d区、お—d区、お—e区続行。

12月14日（火）

お—e区掘り下げ中、井戸検出。井戸枠、井筒等完存。周辺では木片の出土が顕著。え—c—8区で弥生中期の溝（V字溝）検出。お—d区、え—c、d区セクション清掃終了。

12月15日（水）

## 美作国府遺跡

え一c区周辺発掘

12月16日（木）

え一c, d区発掘

12月17日（金）

係会議、岡山県立博物館にて。

12月18日（土）

き一e区等（西南端部）実測開始。え一c区周辺続行。

12月19日（日）

き一e, d区実測続行。え一c, d区続行。

12月20日（月）

第2次調査区割り付け、グリッド設定）作業を行う。ニ一H～K区、ホ一H～K区、ヘ一H～K区が該当する区域である。

12月21日（火）

第2次調査区トレンチ壁面清掃、え一c区終了。お一e区灰黒色土層まで掘り下げ、お一d区土層断面図作成。

12月22日（水）

お一e区井戸周辺拡張区ほぼ掘り上げ終了。自然溝（蛇行溝）西端部確認。東部谷地区弥生中期土器溜り清掃。谷トレンチ、グリッド設定。ユンボ導入し、自然溝南部にトレンチ2本を入れる。工事用道路の建設を迫られたための緊急確認調査である。き一e区実測。

12月23日（木）

谷部続行。井戸周辺清掃。

12月24日（金）

東部谷地区の土層断面図作成。平板測量。トレンチを新設。この頃、作業員は30名を越える。

12月25日（土）

人夫休憩小屋撤去。発掘のため。道具小屋増設。遺物の整理。器材の点検。ユンボ使用によるトレンチ土層断面図終了。

12月26日（日）

各地区補足実測。谷部（東）トレンチ清掃。泉本、二宮大東遺跡より復帰。

12月27日（月）

遺物整理。実測図整理。現場作業休止。

12月28日（火）

現場作業休止、道路公团工事長、森本組、大山主任、調査員等、現場事務所にて工事用道路の協議。午後、西南端部き一d区間周辺の平板測量、レベリング。ユンボ使用トレンチの平板測量。蛇行溝西半部の平板測量。

## 美作国府遺跡

12月29日（水）

本日より1月5日まで現場作業休止。

<1月>

調査期間も残り3ヶ月となった。お一e区の平面調査等の精査、実測がさしあたっての調査の大半を占めている。特にお一e区井戸Iは井戸枠材、くりぬきの井筒が完存しており細心の注意を払って精査を続けた。井戸Iより、植物遺体も比較的多量に出土した。井戸I付近には自然湧水源があり、調査中間断なく湧水がみられた。

1月中旬から井上は押入西遺跡へ配転。当初6名もいた調査員はついに泉本、岡田の2名のみとなった。

1月6日（木）

東方谷部の実測、写真撮影、レベリング。

1月7日（金）

井戸I北側拡張。井戸東数10cmより木筒（斎串状）出土。墨書きは判読できず。付近精査、木片、加工片多量に出土。う一b—3, 6, 9区設定、旧作業員休憩小屋の下部である。後にこの地区より井戸が2個発見されることになった。東方谷部西端部グリッド設定発掘開始。

1月8日（土）

係会議にて現場休み。

1月9日（日）

遺物整理

1月10日（月）

え一c区実測、写真撮影。

1月11日（火）雨

遺物整理、図面整理

1月12日（水）

え一c区実測続行。東方谷部掘開始。井戸I実測用割り付け作業。

1月13日（木）

東方谷部発掘続行。井戸I実測。実測図は、展開図、側面図等を中心に行う。

1月14日（金）

東方谷部発掘続行。井戸I実測続行。

1月15日（土）

東方谷部発掘続行。井戸I実測続行。

1月16日（日）

東方谷部西端拡張区掘り下げ。井戸Iは井戸枠外周の縦板を除去。縦板と横板の間で箸出土。

1月17日（月）

## 美作国府遺跡

連絡会議。

1月18日（火）

う—a区、お—e区掘り下げ開始。本日より井上は押入西遺跡へ配転、天神原パーティーの一部と合流。

1月19日（水）

お—e区、う—a区掘り下げ作業続行。

1月20日（木） 曇り時々雨

お—e区掘り下げ開始。う—a—1区溝状遺構検出。礎石らしき石材を灰褐色土層下半より検出。北側より流出したものか。遺物水洗作業。う—b区の遺物を多量に水洗する。小形硯、土師器七角面取り高坏、綠釉陶器をピックアップ。

1月21日（金）

東方谷部弥生時代ピット平面測量開始。トレンチ掘り下げ開始。井戸I周辺ほぼ終了。弥生式土器（後期）片、その他加工木片出土。

1月22日（土）

東方谷部トレンチより綠釉陶器片、七角面取り高坏脚部片出土。弥生ピット平面測量続行。

1月23日（日） 晴

東方谷部トレンチ断面実測、弥生ピット平面測量終了。

1月24日（月） 曇りのち雨

谷部トレンチ掘り下げ。午後降雨のため現場作業休止。調査員は分庁舎にて会議。

1月25日（火） 曇り

お—e区井戸清掃、写真撮影。い—a—7区ピット土器多量に出土。検出状態で清掃。東方谷部トレンチ調査続行。弥生ピット断面観察。

1月26日（水） 曇り

い—a—7区ピット写真撮影。東方谷部発掘続行。繩出土。

1月27日（木） 曇り一時雨

東方谷部坪堀り。井戸Iがほとんど清掃を終ったので作業員全員見学。文化財愛護少年団来跡見学。山陽テレビ記者來跡。

1月28日（金） 晴

井戸I周辺土層断面清掃。井戸細部写真撮影井筒内より簫串完形品出土。う—a—1区ピット掘り下げ。井戸と判明。う—a—7, 8, 9トレンチ南北壁終了。う—a—4, 7, 8区へトレンチ設定。東方谷部発掘続行。各地点で写真撮影。

1月29日（土） 曇り

井戸周辺土層断面の写真撮影、実測。う—a—1区ピット掘り下げ続行。井戸枠の四隅支柱は3本残存。完形品土器多数。いづれも平安末～鎌倉期のものか。東方谷部、溝写真撮影。夕方、対策委員来跡。他の遺跡調査員も来跡見学。

## 美作国府遺跡

1月30日（日） 晴

県立博物館にて係会議

1月31日（月） 曇りのち雨

東方谷部南端部掘り下げ。

<2月>

井戸Iの精査続行。あーcー2, 3区及びローc区周辺で掘立柱建物を検出。うーaー1区  
井戸II（ピットと呼称していた）の精査。2月2入り、個々の遺構の精査が重なった。下旬に  
は工事用道路造成のためのブルドーザーが調査区域に進入した。

2月1日（火） 曇り一時雨のち晴

東方谷部第2拡張区終了。津山朝日新聞記者来跡取材。

2月2日（水）

東方谷部西端拡張区弥生溝掘り上げ。あーcー3区付近で掘り方80~60cmの柱穴を検出、建  
物としてまとまる可能性あり。うーbー6区遺構検出作業。井戸I実測。夜、展示会（縦貫道  
出土文化財）うちあわせ。

2月3日（木） 曇

東方谷部拡張区終了。あーcー2, 3区建物追求。うーbー6区掘り下げ、井戸IV検出。井  
戸II写真撮影。4回にわたって遺物をとりあげたが、本日をもって発掘終了。

2月4日（金） 曇りのち雨

あーcー1, 4表土除去。降雨のため他の地区ははからず。

2月5日（土）

あーc区表土除去。

2月6日（日）

赤野遺跡発掘調査応援、泉本、岡田現地に出張。

2月7日（月）

ローc区にて建物検出。2間×4間と推定、建物IVと命名。井戸I続行。

2月8日（火）

ローc区建物IV続行。井戸I周辺土層断面実測

2月9日（水）

建物IV・II検出続行。井戸I周辺続行。ぬかるみの中で作業は難航。

2月10日（木）

建物IV写真撮影、建物II検出続行。

2月11日（金）

建物IV実測開始。掘り方は極めて浅くからうじてプランが検出できた。建物II写真撮影

2月12日（土）

建物IV実測続行。あーB区掘り下げ。井戸I井戸枠材解体続行。

## 美作国府遺跡

2月13日（日）

図面整理、遺物整理。

2月14日（月）

あ一B区掘り下げ、建物IV実測続行。

2月15日（火）

建物IV実測終了。あ一B区掘り下げ。井戸I井筒内木片採取、井筒埋置状況精査。

2月16日（水）

ロ一E区設定。遺物は僅少、遺構は削平し尽されている。あ一B区、ほぼ地山面まで検査出、地山面で清掃。井戸I井筒埋置裏込め土内の木片とり上げ。井筒はくり抜きの丸太を用いているが、2~3ヶ所を接ぎあわせている。その接合部分には板材（廃材）を各所にあてている。井筒とその板材との間には、しつくいをうめている。う—a—1区井戸IIIの第1回目~第5回目までの遺物とり上げ順に整理箱にならべる。約200個体分の須恵器、土師器。

2月17日（木）

井戸Iの土層関係図作成。う—a—1井戸清掃、写真撮影。

2月18日（金）

井戸I地山面まで検出。弥生式器片出土。仄かひょうたんと思われる種子多量に出土。昆虫の羽根も検出。板材の比較的巾広のものが出土、ちょうな（扁平片刃石斧）による加工痕がよく観察できる。径数cmの杭が2本遺存している。自然湧水原より水を引くための何らかの構造物があったのかもしれない。

2月19日（土）

お一e区井戸I東西方付近精査。

2月20日（日）

遺物・図面整理。

2月21日（月）

ブルドーザ東方より侵入、工事用道路いよいよ着工。覚え書を読み直す。あの騒音だけでも現場作業は支障をきたす。い—B—4・7区発掘、東西方向の溝あり。

2月22日（火） 井戸Iセクション清掃。い—B—4・7引き続き地山まで発掘。

2月23日（水）

い—B区掘り下げ完了。井戸I側面図終了。本日、連絡会議岡山にて開催。

2月24日（木）

井戸縦板とり外し作業。横板（おとし板）清掃検出。

2月25日（金）

井戸横板構築状態写真撮影。土層断面精査観察。あ一G区清掃。う—a—3区設定発掘開始。い—A—1・4・7発掘終了。イ—a—9区発掘開始。

2月26日（土）

## 美作国府遺跡

前日と同様作業続行。午後、対策委員会。

2月27日（日）

あ一D区溝状遺構3検出掘り上げ。い一G区検出掘り下げ。う一A-3・6区包含層面まで掘り下げ。あ一G区・あ一D区全面平板測量。2棟の建物あり。3間×4間1棟か1間×4間2棟か。

2月28日（月）

建物Ⅲ実測開始、い一A区掘り下げ。お一e区弥生時代の遺物とりあげ。平板実測終了。え一C区拡張、プラン清掃。

2月29日（火）

建物Ⅲ実測続行。遺物、図面整理。き一d区土手はずし、遺物採集。建物柱掘りあ一G区、い一G区、イ一G区。い一A-8・9弥生中期溝掘り。

<3月>

あと1月を残すのみとなった。あ一G区で新に井戸検出、い一b区で検出保留していた井戸IVの再開、意外の事実をそれらは内包していた。重要遺構の検出。精査が重なると共に、期限の切迫がひしひしと感じられてきた。今迄検出した遺構の有機的関連性もようやく把握でき、個々の残された遺構の性格究明、をできうるかぎり追求することが課題となった。発掘終了遺構の補足的精査も欠かすことなく続けた。天候の不順に悩まされながら、残された遺構の調査を開始した。

3月1日（水）

建物Ⅲ実測終了。い一A区、う一A区を発掘。あ一D区遺構検出作業。井戸I板材とりあげ。

3月2日（木）

い一A区、う一A区包土上層発掘、遺物多し。あ一D区溝状遺構発掘、完形品遺物多し。綠釉陶器片多々みられる。住居址状凹地より平安期遺物多量に出土。のちに、井戸Vとなった遺構である。井戸I板材とり上げ。

3月3日（金）

い一A区、う一A区掘り下げ続行。あ一D区続行。

3月4日（土）

前日と同様作業。

3月6日（月）

係会議、岡山出張。

3月7日（火）

い一A区、う一A区続行。弥生式土器片多し、弥生期の溝か。

3月8日（水）

い一A区、奈良期良質須恵器出土。う一A区清掃。い一G-3区溝検出面まで掘り下げ。井戸I井筒のみ残して板材とり上げ終了。

## 美作国府遺跡

3月9日（木）

い—A区、う—A区西端南北壁清掃、写真撮影。奈良文研佐藤興治氏来跡、見学。御教示を仰ぐ。

3月10日（金）

い—A区、う—A区西端南北壁実測。井戸I井筒とりあげ準備。井戸底面の観察、プラン実測。

3月11日（土）

い—b—5区梢円形ピット掘り上げ。平安期軒平瓦片出土。い—B—5・6発掘。井戸I井筒埋置状況清掃。写真撮影。

3月12日（日）

い—b区梢円形ピット実測。い—B区周辺続行。

3月13日（月）

あ—B—7区柱穴、ピット検出、お—b、C拡張区発掘。

3月14日（火）

い—A区・B区東築地溝周辺遺構検出及び掘り上げ作業。奈良期良質土器多量に出土。特に須恵器多し。

建物V清掃。井戸I井筒とり上げ、これをもって井戸Iの精査終了。津山北小学校生徒約140人見学。ハンドスピーカーで各遺構の説明。

3月15日（水）

東築地部分検出作業続行。建物V写真撮影。

3月16日（木）

あ—G—7区井戸掘り下げ。遺物極めて多し。東築地溝ほぼ完掘。遺物多量。

3月17日（金）

東築地部分清掃、写真撮影。あ—G—7区井戸V掘り下げ作業続行。ひとりしか入れぬ大きさの掘り方で、作業難航

3月18日（土）

遺物整理、図面整理、現場作業休み。

3月20日（月）

遺物整理、図面整理、現場作業休み。

3月21日（火）

緊急係会議のため岡山出張。現場作業休み。

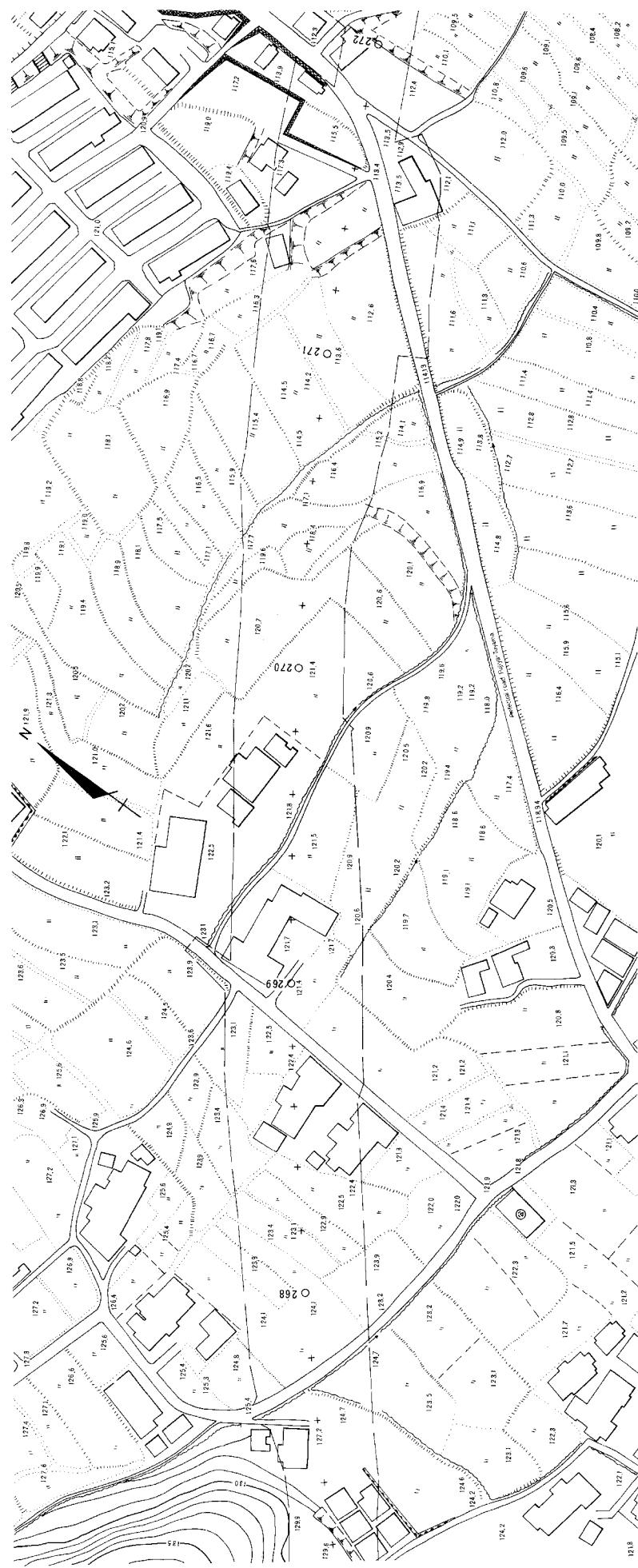
3月22日（水）

東築地部分平面実測。あ—G区井戸V写真撮影。井戸枠縦板検出。廃材使用か。

3月23日（木）

東築地部分土層断面実測。柱穴列切断。あ—G—7区井戸掘り下げ、曲物2個体遺存。写真撮影。

第8図 地形図 ( $\frac{1}{1000}$ )



## 美作国府遺跡

3月24日（金）

あ一G区井戸掘り上げ終了。い一b区井戸掘り下げ開始。あと一週間、調査員2名専従。

3月25日（土）

い一b区井戸IVの井戸枠検出。「少目」墨書き師器坏出土。その他完形土器出土。

3月26日（日）

井戸IV平面図、断面図作成。い一b区、い一C区平板測量。

3月27日（月）

道具小屋解体、作業員と座談会、発掘の成果の説明。い一b区井戸IV下半で井戸IVよりも古い井戸検出。斎串完形品出土。炭化米付着土師器出土。

3月28日（火）

休憩小屋解体作業。道具・器材片付け。遺物整理作業。い一b区井戸IVの下半より検出した井戸を井戸IV—bとする。井戸枠基板だけ遺存、刀子、櫛、曲物、杓、カゴなど出土。写真撮影、実測準備。

3月29日（水）

現場事務所付近片付け修業。遺物整理。い一b区井戸IV—b平面図、断面図作成。夕方対策委員会。

3月30日（木）

片付け作業続行。遺物分類整理作業、補足実測作業。井戸IV—bの井筒（曲物）とりあげ作業。

3月31日（金）

現場片付け作業。補足実測続行。井戸IV補足精査続行。

本日をもって美作国府全調査を完了せしめたが4月に入っても、補足作業を行なった。実質的期限延長は認められず、調査員2名のみ残留してその補足調査をおこなった。補足調査終了後、1日の猶余もないまま、調査員は次年度の調査予定遺跡にすみやかに移動を開始した。

## 第4章 各時期の遺構・遺物の概要

第14図に掲げたように、本遺跡の発掘範囲はほぼ東西250mにわたる長大なものである。東端から西端まですべての地区に何らかの遺構の存在が認められた。検出できた遺構も弥生時代中期から近世・近代にかけての長期にわかる生活遺構である。それらについて逐一説明する余裕をもたぬ状況から、本稿では国府期を中心として記述する。

### 第1節 国府期以前の遺構・遺物

発掘調査の対象とした地区のほぼ全面から弥生式土器片の出土をみた。また、部分的に弥生時代の生活遺構および自然堆積土の残存が良好な所では石器の出土もみた。更に、国府期の遺構からの出土も顕著である。

発掘調査区の北東谷部の南側斜面では多量に弥生式土器を出土し、そのほとんどは中期のものである。遺構としては、柱穴・石組み（石敷状）遺構などを検出した。土器の出土は、通例の堆積状況を示さず、二次的な移動によって各所に「土器溜り」を思わしめる出土状態を示している。この移動の直接的契機となったのは、やはり国府の造営・造成であり、発掘調査区の大半を占める低位台地の削平によるものであろう。その低位台地の南側には深い谷があり、おーe区から東方に沿って中期・後期の遺物の出土をみた。

いーA区では溝やピットを検出しておらず、えーC区では蛇行するV字溝を検出している。また、先述のおーe区では井戸Iの上手で自然湧水がみられる湿地があり、付近からは多量の土器・木器・石器・植物遺体などが出土地している。土器の中にはミニチュアの甕・器台片・土玉などがみられ、木器の中には板材や紡織具の部品とみられるものも出土している。

以上のことから、国府期以前には大規模な弥生時代の遺跡が存在したことが知られよう。その大半の地域は国府造営の際、破壊を受けたことと推察される。

古墳時代の遺物遺構については明確な資料を確認していない。二重口縁の土師器高坏片など若干の土師器片と、7世紀代の須恵器片をわずか出土しているのみである。はたして、古墳時代の集落が存在したかどうかは不明である。まして、古墳そのものの存在も定かではない。

### 第2節 国府期の遺構・遺物

国府期と総称する時期は、和銅6年（713年）以降、鎌倉時代初頭までを指している。上限の設定は美作国の備前國より分國された年に置くことができるが、下限は平安末期～鎌倉時代初頭という巾のある時期に設定した。その下限の設定は、本国府の場合、国府そのものが律令的存在価値を失い形骸化してゆく過程でただ単に地方都市、あるいは交通・交易の場としての

## 美作国府遺跡

みその存在を示すという時期として設定することが妥当であろうとの判断から行なったものである。事実、下限にあたる時期の遺物・遺構は本発掘調査区の中でも重要なウエイトを占めているのである。

国府期と考えられる時期を、検出した遺構によって分類すると次のようになる。

第1期—奈良時代～平安時代初期

第2期—平安時代初期～末期

第3期—平安時代末期～鎌倉時代初期

以下、各時期について説明を加えておく。

### <第1期>

この第1期は、更に細分化できる可能性をもっているが、現段階では大半の遺物の整理・検討が完了していないのであえて述べない。

検出した遺構の中で最大規模をもつものとして築地遺構をあげることができる。巾約1m・深さ平均0.4mの溝2本によってはざまれた断面台形状の部分を指す。検出時には、築地基底部を残すのみであったが、東西約90mにわたって途切れたり、曲折したりしながら延びている。築地基底部分の巾は約2.4mで総じて平坦である。築地曲折部では2本の溝が途切れ、通路あるいは簡単な構造の門があったことを示す部分も各所にみられる。

この築地を構成する2本の溝からは多量の遺物が出土しているが、その大半は奈良時代後期に属するものである。特に須恵器・土師器・瓦などの出土が目立つ。更に鉄滓・吹子口の出土、土製馬などの出土も特記しておかなくてはならない。

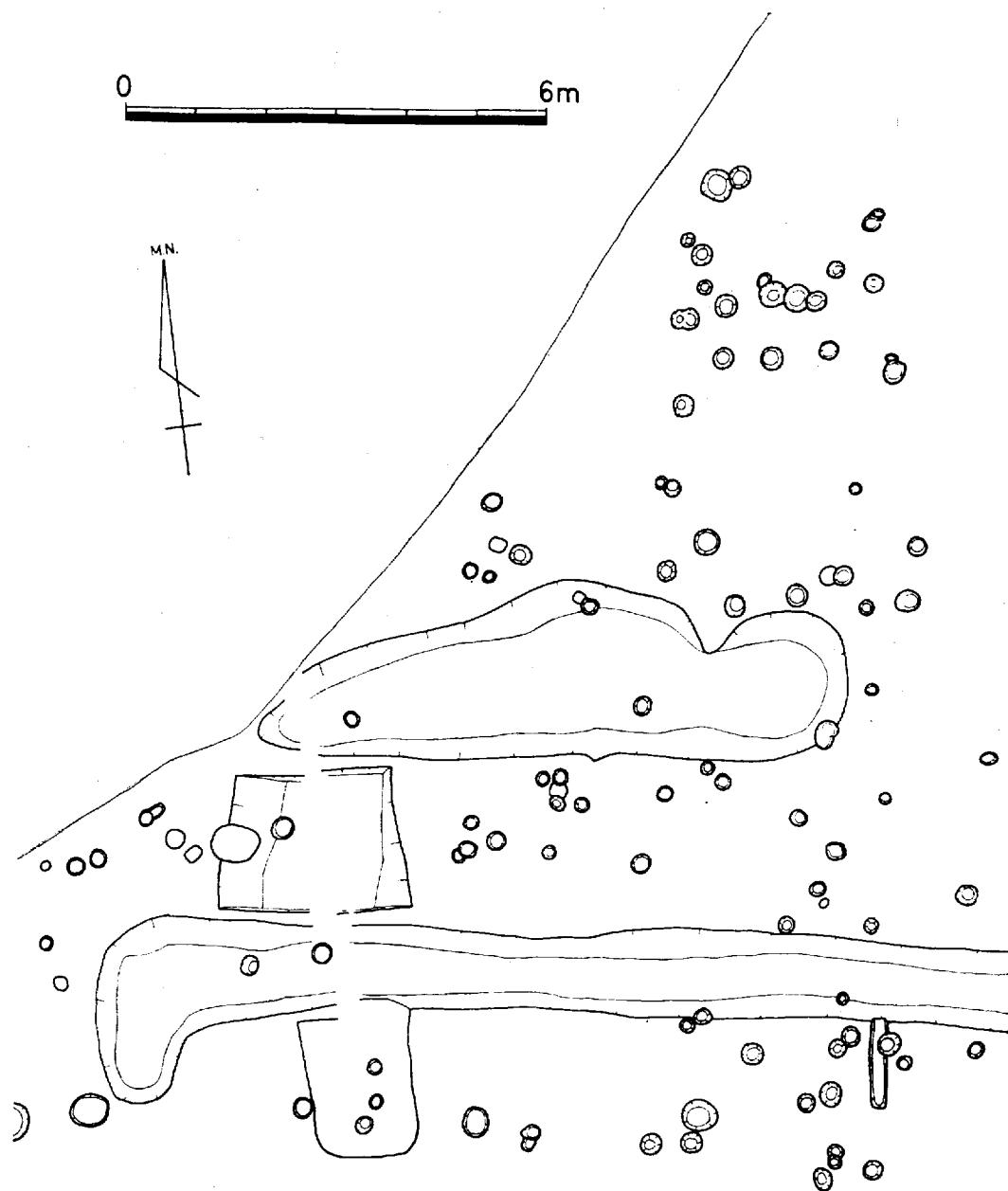
掘立柱建物は第14図に掲げた如く、5棟検出している。中でも大きな掘り方をもつ建物Ⅲ・建物Ⅳ・建物Ⅴなどが築地存続期の建物すなわち奈良時代の建物と考えられる。この建物の性格は、築地溝の性格によってその機能を推定することができるであろうが、現段階では官人住居あるいは雑舎的な建物ではないかと考えている。築地溝が国府域の地限線を示すか、国府域の地限線を示すかのいずれにせよ、これらの建物は従来の国府調査において明確にとらえられていない建物に相違ない。この点において、今後の整理・検討に負うところが多い。以上の問題は、奈良時代に比定される4つの井戸の位置とも関連がある。

井戸は、明確に奈良時代に比定されるものとして井戸I・井戸II・井戸IV-a・井戸IV-bをあげることができる。井戸IIを除いて他の井戸は、井戸枠・井筒等の付属設備がほぼ完存している。井戸IV-a・bはいずれも同一掘り方より検出したもので、aが新しい。その廃絶期を示す遺物として「少目」墨書き師器が井戸枠内より出土している。bからは、横櫛・曲物・くりぬきつるべなどの木製品が出土しているが井筒自体も直径約55cmを測る曲物を用いている。以上述べたほかに、木筒・糸串の出土もあるのがそれについては後述する。

### <第2期>

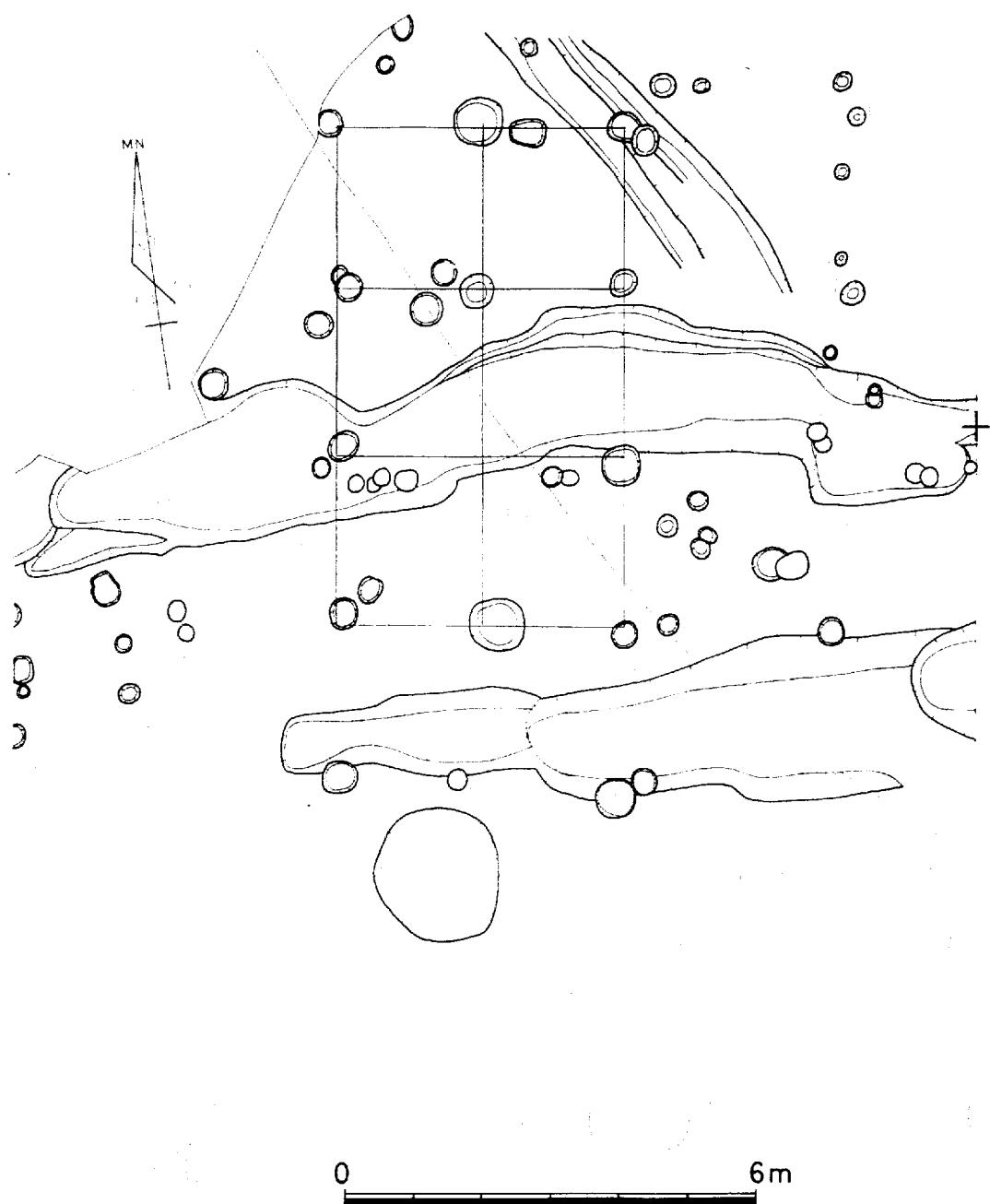
厳密には、奈良末期も含まれるであろうが便宜的に第2期に含まれる遺構・遺物もあることを予め述べておく。

美作国府遺跡



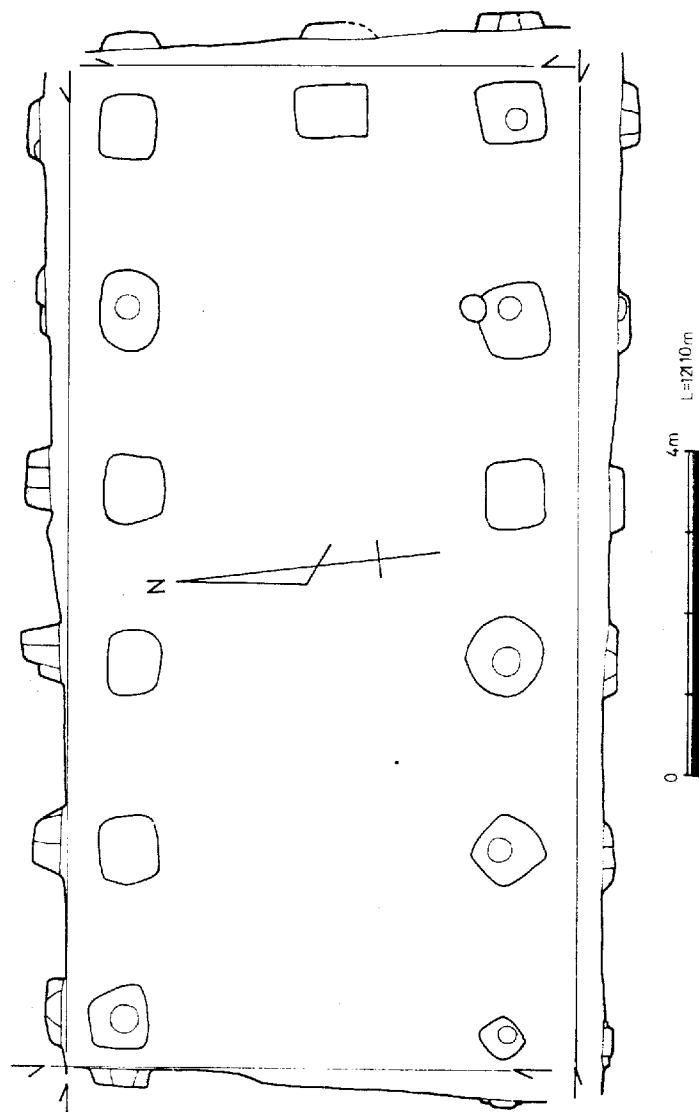
第4図 い 一 b 区 実測 図

美作国府遺跡



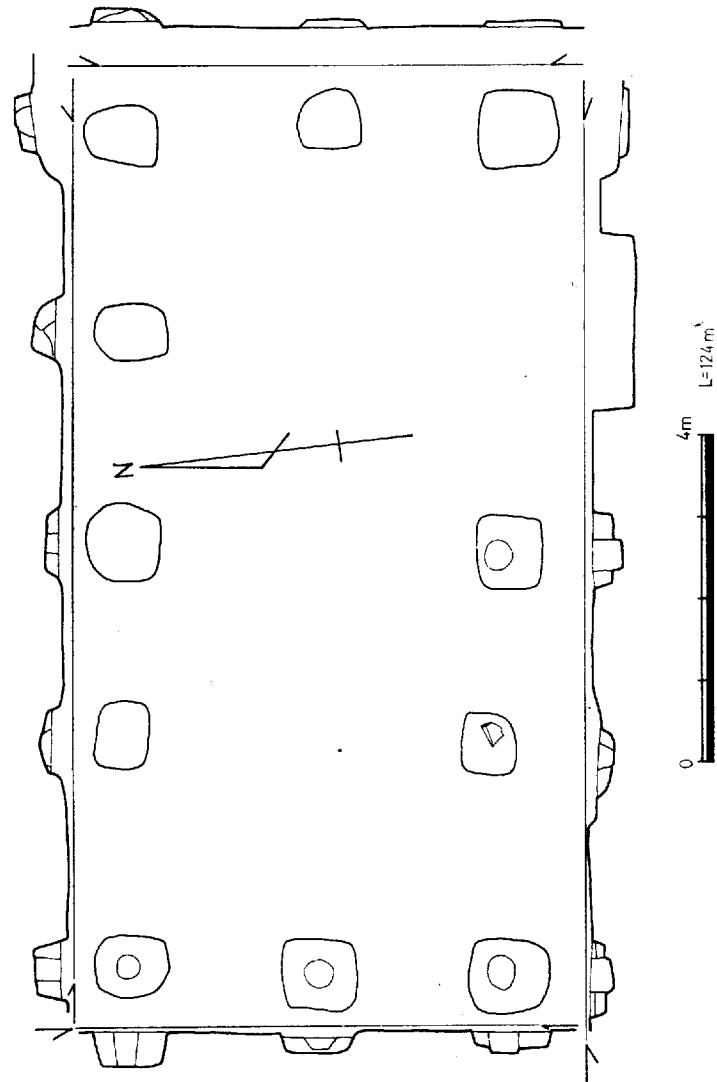
第5図 いーこ・うーこ区実測図

美作国府遺跡



第6図 建物III平面図・断面図

美作国府遺跡



第7図 建物N平面図・断面図

## 美作国府遺跡

遺構としてはき一d区周辺を中心とする溝状遺構、あ一c区周辺の建物（1間×2間2棟の可能性もある）、その周辺で検出した溝状遺構・円形ピット等がこの時期の主要な遺構である。それらの遺構からは須恵器・土師器を中心とする遺物を出しているが、綠釉陶器を伴出していることが注目される。この第2期に該当する遺物として風字硯がある。

### 〈第3期〉

第1期の築地はほとんど廃絶している時期である。主な遺構としては、建物I・建物IIなどの掘立柱建物と、井戸状ピットをあげることができる。中国製陶磁器が多々みられ、須恵器・土師器と共に伴出している。また、備前焼にみられる擂鉢様の土器なども出土している。井戸Vはこの時期に該当する井戸であるが、多数の土器と共に曲物が出土している。総じてこの時期の遺構は井戸V・井戸IIIとピットによってしか知られず、溝状遺構の大規模かつまとまりのあるものは認められない。

### 〈まとめ〉

以上、述べたように検出遺構を国府期を中心として3時期に分類できることを明らかにした。しかし、それは今後の整理・検討ならびに更なる国府域の現地精査によって解明さるべき問題である。本発掘調査区平面が、国府の変遷の中で重要な位置を占めることは種々の点から明らかであるが、その機能の変遷については未知なる問題が残されている。たとえば、1期においては築地線を確認し、また2期においても部分的に築地線あるいは地割線に該当すると思われる溝状遺構を検出しているが、3期に於てはそういう遺構が検出されていない。相対的に新しい時期の遺構は往々にしてその姿を早々と消してしまう——破壊されてしまう——場合が多く、その例に準ずるかもしれない。これら諸問題の解決を今後の課題として更なる整理・検討を続けなければならない。

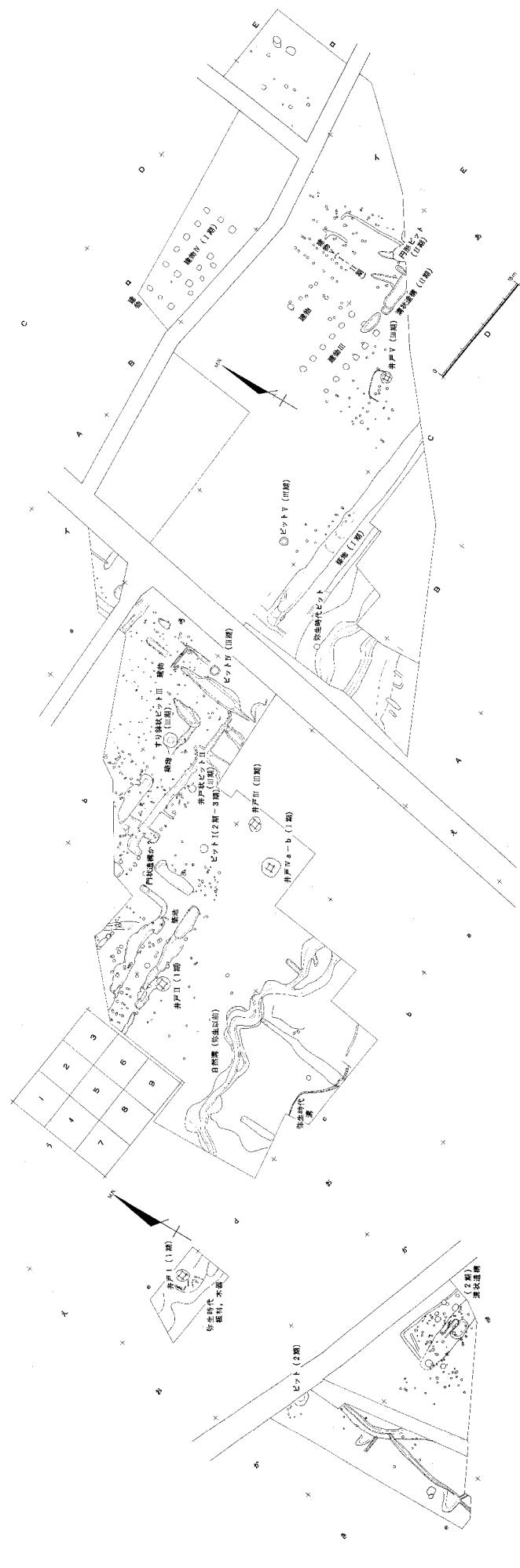
〈表I〉 建物計測値表

|         | 規 模 (東西×南北) | 柱 間 (東西、南北)  | 柱 穴 数 | 時 期     |
|---------|-------------|--------------|-------|---------|
| 建 物 I   | 2 間 × 4 間   | 2.1, 2.4 (m) | 15    | 平 安 末   |
| 建 物 II  | 3 間 × 4 間   | 2.4, 2.1     | 20    | 平 安 末   |
| 建 物 III | 2 間 × 5 間   | 2.4, 2.4     | 14    | 奈 良     |
| 建 物 IV  | 2 間 × 4 間   | 2.4, 2.4     | 12    | 奈 良     |
|         | a 1間 × 4 間  | 2.1, 1.8     | 10    | 不 明     |
| 建 物 V   | b 1間 × 4 間  | 2.4, 1.8     | 10    | (平安末以前) |

美作国府遺跡

<表II> 井戸及び井戸状ピット所見表

|         | 平面計測値              | 深さ      | 付属設備           | 時期           | 遺物                          | 備考                |
|---------|--------------------|---------|----------------|--------------|-----------------------------|-------------------|
| 井戸 I    | 90 × 90cm<br>(井戸枠) | 約 1 m   | 井戸枠, 井筒等<br>完存 | 奈 良          | 斎串, はし<br>須恵器               | 井筒は丸太をく<br>り抜いている |
| 井戸 II   | 径 1.3 m            | 約 4.5m  | な し            | 奈良～平<br>安前期? | 須 恵 器 片                     |                   |
| 井戸 III  | 1 × 1 (m)          | 約 60 cm | 井戸枠 (一部)       | 平 安          | 椀, 燈 明 盆                    | 土器完形品<br>多数       |
| 井戸 IV   | a   60×60(cm)      | 約 1 m   | 井 戸 枠          | 奈 良          | 墨書土器須恵器                     | 遺 物 多 数           |
|         | b   約80×80(cm)     | 約 2 m   | 井戸枠, 基板,<br>井筒 | 奈 良          | 斎串, 刀子, 横櫛                  | 井筒は曲物を使<br>用している  |
| 井戸 V    | 70 × 70cm<br>(井戸枠) | 約 2.5m  | 井戸枠ほぼ完存        | 平安末          | 椀 (縁グロ)<br>燈 明 盆<br>曲 物 2   |                   |
| ピット I   | 径 約 1 m            | 約 50 cm | な し            | 平 安          | 椀・土 師 器<br>風 字 風 壺          |                   |
| ピット II  | 径 約 1 m            | 約 1 m   | 木 片 数 点        | 平安末          | 土 師 器<br>須 恵 質 土 器          |                   |
| ピット III | 径 約 2 m            | 約 90 cm | な し            | 平安末          | 土 師 器<br>須 恵 質 土 器          | すり鉢状ピット           |
| ピット IV  | 径 約 1.3 m          | 約 1 m   | な し            | 平安末          | 土 師 器<br>須 恵 質 土 器<br>白 磁 挽 |                   |
| ピット V   | 径 1 m              | 約 60 cm | な し            | 不 明          |                             |                   |



## 第5章 出土遺物の概要

### (1) 弥生式土器

美作国府址は、それ以前の遺構と重複して、もしくは、それを削平して造営されていた。そして、それ以前の遺構としては、主に弥生時代のものである。そのため、今回の調査においても相当量の弥生時代の遺物が出土している。

弥生式土器（第8図）(1)は、頸部から肩部にかけての破片である。そして、その堺を指頭圧痕文を付す貼付凸帯で飾るものである。土器は比較的大きな壺である。壺の頸部と考えられるものがある。口縁部外面には、円形浮文を等間隔に配置している。頸部は、断面三角、及び台形の貼付凸帯で飾り、さらに棒状浮文で加飾するものである。壺もしくは器台の口縁部と考えられるものがある。口縁部上面に平坦面をもち、その平坦面を凹線文、円形浮文等で飾る。口縁端部は、ほぼ垂直に大きく垂れ下るもので、凹線文、刻目、円形浮文で加飾するものである。

甕は、口縁部が上下に肥厚し、その外面は、凹線文、円形浮文で飾る。肩部にヘラ描の斜格子文で飾るものもある。

壺の口縁部で、その端部がやや内傾して立ち上るものがある。口縁部内面は、端部の立ち上り部分において、明瞭に一線の入るものと、その部分が、断面において厚みをもち、ゆるやかな弧をなすものとがある。胴部内面は、肩部の高い部分からヘラ削りを為すものが一般的である。外面の文様は、無文のものが多く、文様のみられるものは、雑な凹線がみられる。

弥生式土器は、若干の前後はあろうが、古いものから順に図示した。第8図1・2は中期中葉、3・4は中期中葉を下るもの、5～9は後期のものと考える。

### (2) 石器（第9図）

弥生時代の遺物として石器も多く出土している。磨製石庖丁、石製紡錘車、石斧、砥石等が出土している。その数は多く、中でも石庖丁が多い。石庖丁は、完形のものではなく、全て欠損品である、また、未完成の類もなく、全て完成品の破片である。形は、橢円形のものが多く、刃部は直線的なものがほとんどである。

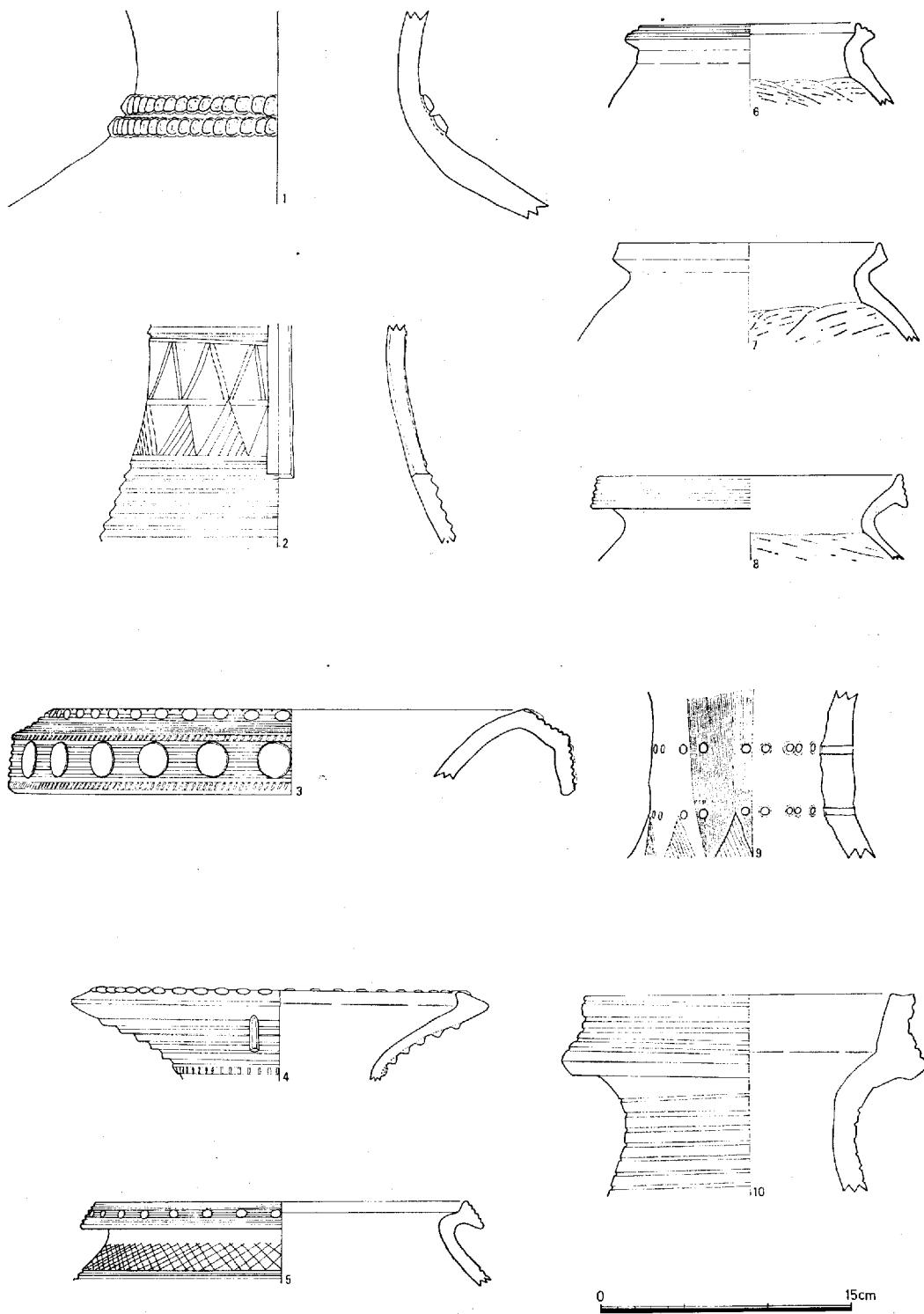
### (3) 須 恵 器

本遺跡の出土遺物の中で最も多量に出土した遺物である。第1期～第3期までの各時期の指標となる一括資料を得ている。

#### <第1期>

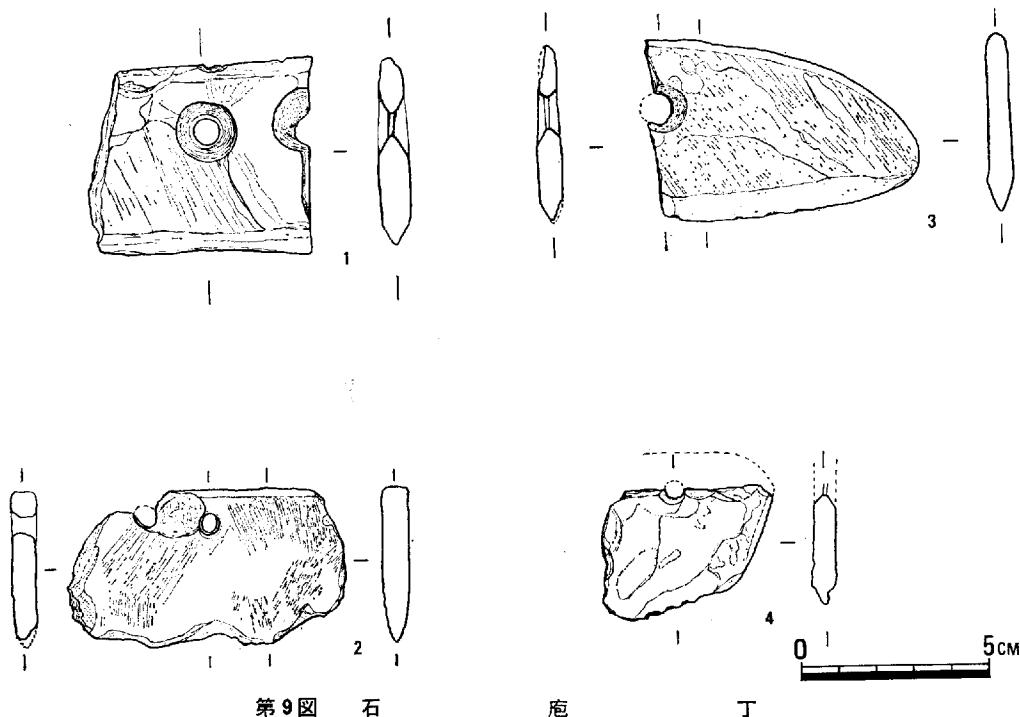
一括資料としての出土品は、井戸N-1-a、築地溝でかなりの量の須恵器の一群に見出すことができる。器種は、壺蓋・壺身・盤・高壺・各種壺・甕などが最も多い。個々の器形に、綿密

美作國府遺跡



第8図 弥生式土器

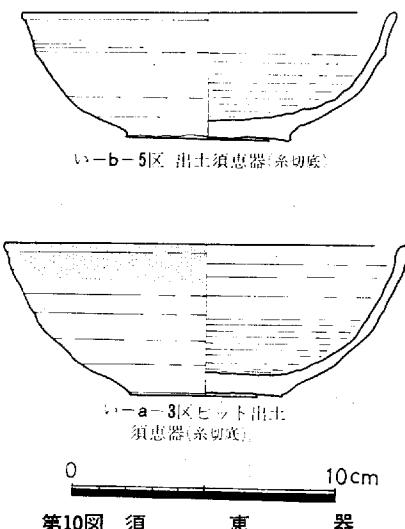
美作國府遺跡



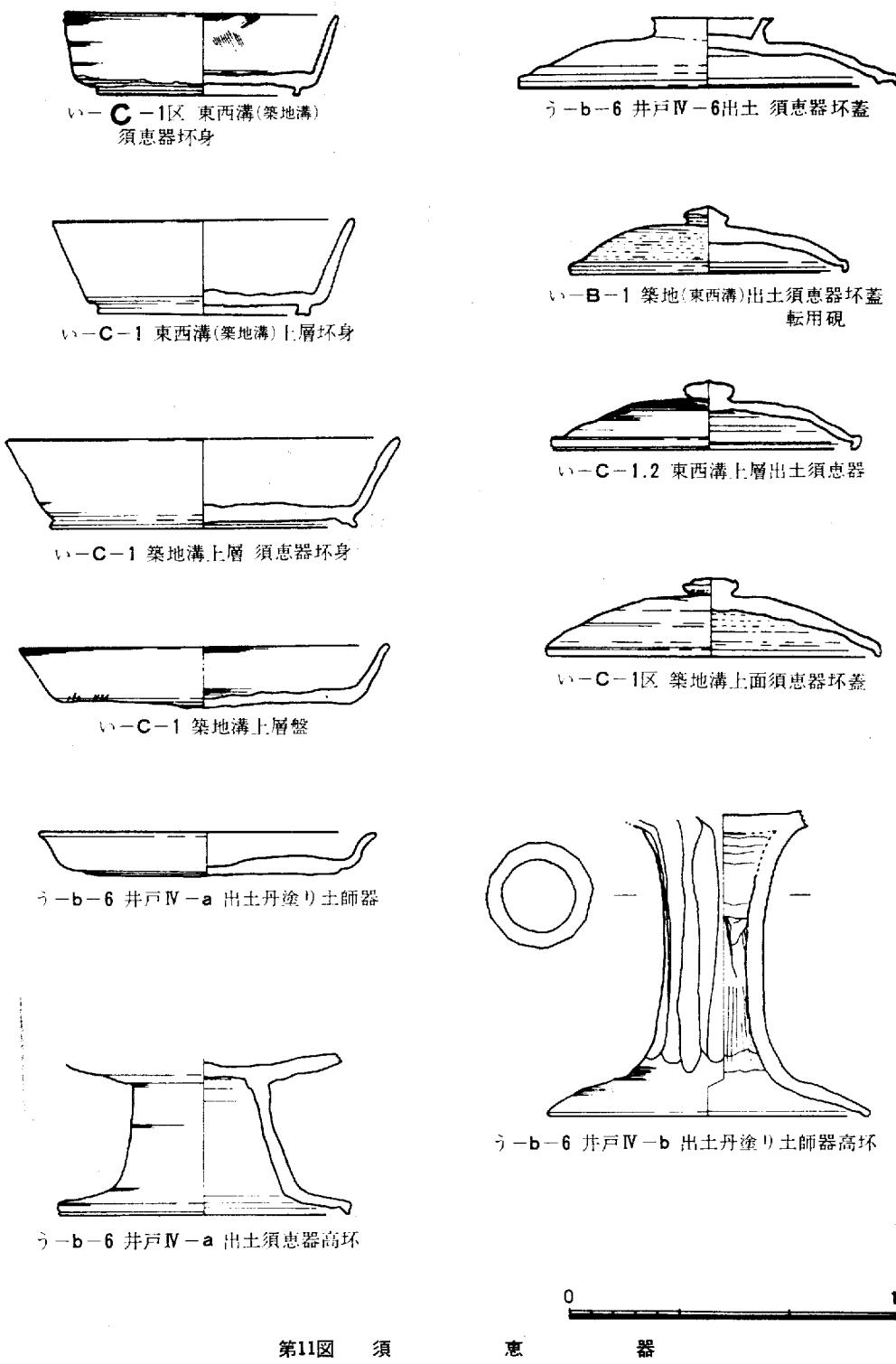
な分類も可能で、共伴する土師器とあわせて編年あるいは製作技法の研究に欠かせぬ基礎資料である。総体的にみて、数か所の供給源が推察され、質（胎土・形態・焼成）にかなりの差異を見出すことができる。備前古窯との関連、あるいは美作地方の各地の生産品がもたらされたものであろう。特に築地溝中より、実に多量な良質須恵器を認めることができる。ほとんど完形品である細頸壺は底部糸切底であるが、1期に属し出雲国庁などでもその類品を見る能够である。胎土・焼成等はきわめて良好である。

<第2期>

綠釉陶器と共に、主にき一d区より出土している。器種は1期にほとんど同じものであるが高坏は減少する。坏蓋の中には「ツマミ」を持たぬものもみられる。胎土・焼成等はかなり良好で1期にひけをとらぬものが多い。壺などでは、胴部にタガをめぐらしたものもみられる。いわゆる四耳壺とみられる破片の出土も少なからずみうけられる。



美作国府遺跡



第11図 須 恵 器

## 美作国府遺跡

### <第3期>

各時期を通じて、最も多量の出土をみる時期である。井戸Ⅲ・井戸Vなどから一括して出土している。また包含層の中でも多量にその出土をみる。椀あるいは皿の類の出土が最も多い。瓦器ともいべき椀も出土しているが、本稿では須恵器として扱っている。器形は、土師器の椀・皿とほとんど同じである。そのほとんどは糸切底であり、更に高台を附加したものもみられる。東海地方にみる、山茶碗といわれるものとその製作・生産形態が似るものである。

以上の須恵器の検討は、時期決定も問題を解決する重要な作業である。文化史的研究の中でも特にこの基層文化資料の整理・検討は必要不可欠の課題であろう。

### (4) 土 師 器

1期から3期にかけての土師器の出土量は、須恵器ほど多くはないが、各時期の特色を示す土師器を多く認めることができる。各時期について簡単な説明を加えておく。

#### <第1期>

壺・椀・皿・高壺等を認める。その多くは、築地溝中あるいはその周辺から須恵器の共伴関係を明らかにしながら出土している。壺・椀・皿などのいくらかは丹塗りが施され、官衙的な様相を示している。また高壺もその多くは丹塗りが施されたもので脚部はていねいに面取りが為された優美な形態を示すものである。そのほか特記すべき遺物としての土師質馬がある。手綱の部分がはっきり観察できる破片であるが、築地溝付近から出土していることに興味がもたれる。他に、日常生活に欠かせぬ、甕などの出土も井戸Ⅳ-1bから出土している。その中の1点には焼け焦げた米が内面に付着しているのを観察することができる。

#### <第2期>

緑釉陶器を伴って、各地区の2期の遺構から出土している。器形は1期の高壺を除く他の器形と同一であるが、量的にはやや少ない。椀・皿の出土が最も多い。この時期の明確な資料は、美作地方では少なく他の遺跡出土品との比較検討がなされねばならないであろう。

#### <第3期>

井戸Ⅲ・Vなどの井戸やピットから多量に出土している。圧倒的に多い器形は椀・皿で、数100個体に及ぶ。皿はほとんど燈明皿といるべきものである。その器形は、従来知られていたものより多種多様で高台が付いているものなどが出土している。椀も同様で、実にバラエティーに富んでいる。これらはいずれも共伴する須恵器の器形に類似するものもあり、同一の窯(供給源)群からもたらされていると考えられるものである。古代末期から中世初期の窯業生産の基礎資料となる一群の遺物である。

以上、土師器について略述した。逐一、製作技法について述べる余裕が与えられず、略述に終わってしまった。実測図等については後日の公表を期したい。

## (5) 施釉陶器

本発掘調査で得た出土遺物の中で、質・量の点からして重要な遺物の部類に入る。完形品に近いものとして約5個体の椀、1個体の皿を出土している。いずれも緑釉陶器であるが、破片としては実に200点に及び、その器形も椀・皿・塔屋蓋片と思われるもの・把手様破片などをみる。また花文が施されているものもみられる。これらの緑釉陶器は通例のように硬陶・軟陶に分けることができる。数的データによれば、前者10に対し後者は3である。技法的な点では底部の製作技法によって種類に分類される。すなわち削りだし高台のもの、底部削りだし後高台を付けたもの、糸切底のもの、糸切後高台を付けたものである。個々については更に分類が可能である。特に削りだしのものについてはその点種類が多い。

灰釉陶器については約5~10点の存在を認める。皿あるいは耳皿の破片が大半を占めるが、若干の椀もみられる。

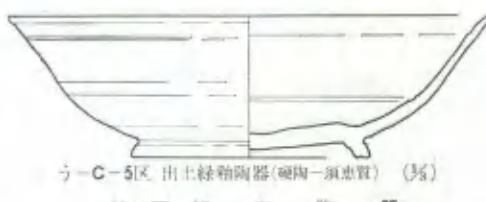
以上、施釉陶器について略述した。緑釉陶器の中にはいわゆる平城上皇期に比定されるものもみられ、かなり時期的巾を認めることができる。いずれにせよ、2期の最盛期にあたる遺物であろう。

## (付記)

現段階では、いわゆる二彩・三彩陶器片は認められない。

## (6) 墨書土器

総数6点出土している。文字の判読が可能なものは「大」2点、「少目」1点、「秀」1点計4点である。「少目」墨書土器は井戸N-aから出土しており、達筆な墨書が鮮かに認められる。墨書は丹塗り土師器坏の底部外面に書かれている。井戸N-bから出土した「秀」墨書土器は、「秀」以外に「香」・「秃」などの文字も考えられる。「禾」の部分だけ残している須恵器坏蓋肩部片である。「大」墨書土器は、1点は土師器片で、坏あるいは皿と考えられる破片の底部外面に書かれている。筆致は巧みである。もう1点は須恵器の高台を有する坏身底部外面に書かれている。文字はやや稚拙である。



第12図 緑釉陶器



挿図1 緑釉陶器(2)

## 美作国府遺跡

以上の墨書き土器のほかに墨痕土器があるが、その中でも文字が書かれた痕跡を残すものがある。1点は井戸Iの井筒内より出土したもので土師器椀の内面底部に書かれ、その文字の上に更に墨痕が残されている。文字は「高」あるいは「商」という文字の感じがするが判読できない。さらに1~2字文字が書かれているようであるが墨痕のため判読できない。もう1点は、おそらく壺蓋転用硯の破片と考えられる破片で戯画的な墨書き痕が認められる。小片のため、何が書かれているのか定かでない。

以上述べた墨書き土器は、ほとんど1期に属するものである。風字硯が使用された時期に比定される2期に属する墨書き土器は、現段階ではその資料を確認していない。

### (7) ヘラ描き土器

2点の出土を見る。1点は薄手の須恵器口縁部片で、壺身と考えられるが、「有」という字が書かれている。本発掘調査区一帯は「有居」という字名が残っているが、何らかの関連がある可能性もある。もう1点は須恵器耳皿の糸切底部外面に書かれ「ろ」という字形が認められる。前者は1期、後者は2期の遺物と考えてよいだろう。

### (8) 陶 砚

本遺跡からは発掘中及び収蔵庫搬入後の遺物整理中に総数45点の、いずれも破片ではあるが、陶硯片が出土している。大別して円面硯・風字硯・転用硯の三種に分類することができる。本稿では転用硯については別項を設け、円面硯・風字硯について述べておく。

#### a 円 面 砚

蹄脚硯片2点を含み30点の出土を確認している。脚部の形態・加飾手法により数種類の型式に細分することが可能であり、通例の長方形の透しが施されているもの、透しを持ち更に円形浮文を加飾したもの、透しを持たず円形浮文あるいはヘラ描き鋸歯文が描かれているものもある。又、陸部・海部の製作技法についても均一的技法によっていない。脚部端部の形態も、「カエリ」を有するものもあり、蹄脚硯などのように、接地面に平行する断面長方形を示すものもある。小型円面硯の出土を1点みる。陸部径約7.2cmを測る小型の円面硯であるが、製作技術・胎土・焼成等はすぐれている。

#### b 風 字 砚

確認している破片は15点である。いずれも通例の風字硯で特に異形の硯はみられない。製作技法あるいは胎土・焼成の点からみると、若干の優劣を認める。直線的なシャープな形態を示すものと丸味を帯びた重量感のあるものの2通りは分けることができる。それが時期的なものであるか、用途によるものであるかは明らかではない。本調査区より出さしている風字硯は、ほとんど2期から3期にかけてのものであろう。

## 美作国府遺跡

### c 転用硯

転用硯と考えられるものの大半は、須恵器壺蓋である。若干、甕片などを用いている例もみられる。それらを単に、滑沢であるという理由で転用硯とする判断を下すことにはいささか軽率のそりをまぬがれないが、詳細な観察に基く所見として10数点を確認している。若干の墨痕を残すものもあるが、その例については墨書土器の項で述べた。これら壺蓋転用硯を逆転して壺・椀などの上にのせた状態で使用されたとする場合の壺身・椀などが前述の墨痕土器ではないかと考えられる。今後の整理作業の進行によって更に転用硯は増大するであろう。

以上、陶硯について略述した。陶硯の即物的研究は今後の課題であろうが、美作地方の陶硯の総括研究も地方単位としての解明・検討すべき問題であろう。美作地方においては、本遺跡を加えて英田郡作東町所在高本遺跡、勝田郡勝央町平（たいら）遺跡、同所在勝間田遺跡、津山市河辺所在天神原遺跡、久米郡久米町宮尾遺跡（久米郡衙推定遺跡）、同所在久米廃寺、同所在領家遺跡などから数多くの各種陶硯が出土している。文字資料と共に、地域的時代史の新たな研究の基礎資料として看過できぬ遺物であろう。

### (9) 瓦・埴

美作国府址の調査において、相当量の瓦の出土があった。又、1点だけではあるが、埴の破片の出土もあった。

#### 軒丸瓦（第13図）

軒丸瓦は、2種類出土している。(1)は、平城宮址出土の6225と同類のものである。複弁蓮華文で、圈線は2本あり、周縁の内側に鋸歯文がみられる。(2)は、単弁のもので、圈線は2本あるものと考えられる。

#### 軒平瓦

(3・4)は、平城宮址出土の6633と同類のもので、(1)の軒丸瓦と対となすものである。文様は、均正唐草文で、2本の圈線をもつものである。(5・6)も、均正唐文である。文様の線は鋭どく、断面は三角形を呈す。ともに2本の圈線をもつ。(7)は、均正唐草文の変化したもので、文様の下部に2本の圈線と、その間に珠文をもつものである。

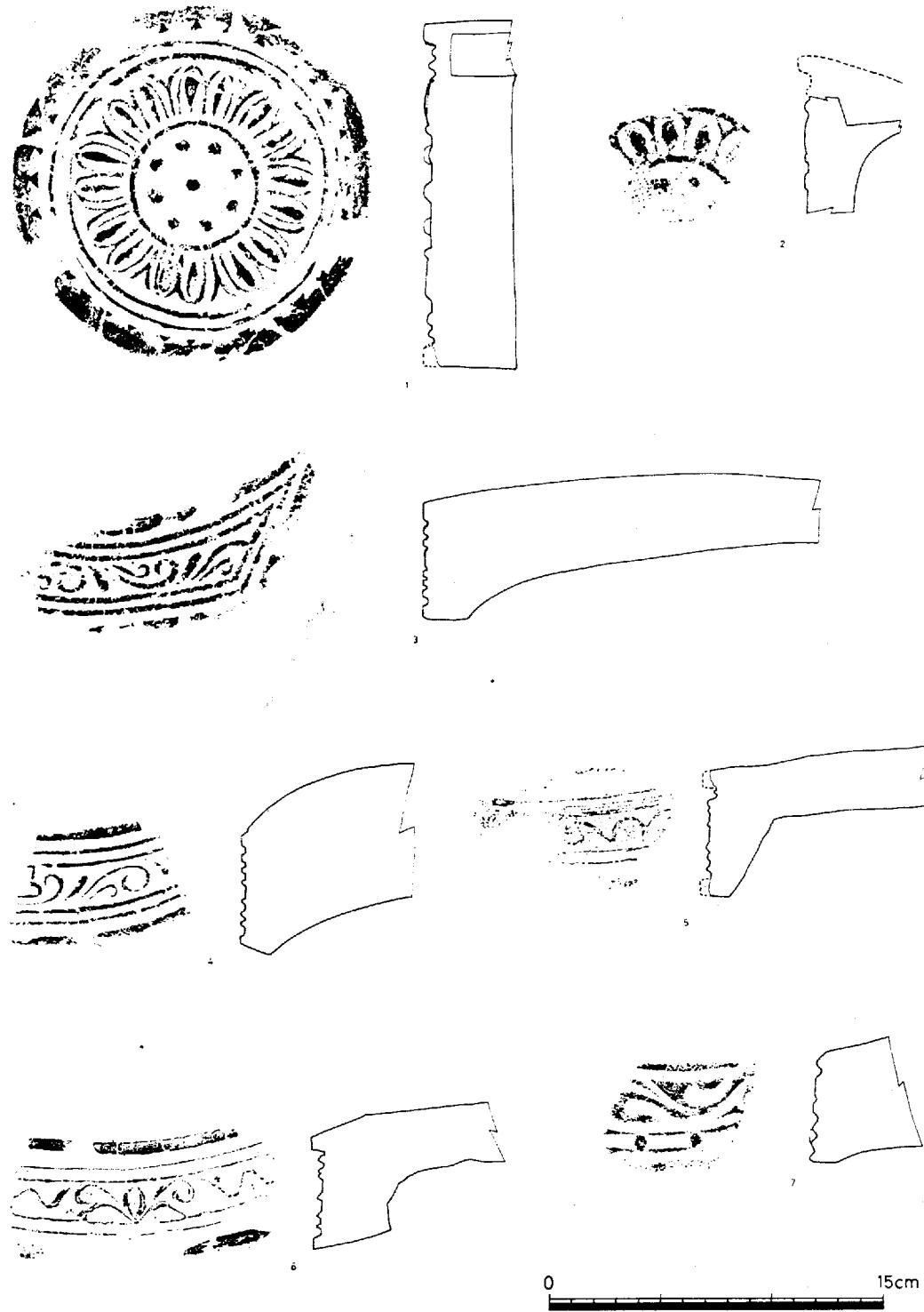
#### 埴

埴は、小片であるため大きさは不明である。しかし、厚さは4.9cmを測る。同様の埴が美作国分僧寺址からも出土しており、26.4cm×27.5cm×6.2cmを測る。

### (10) 青白磁

青磁、高台の作りは、削り出しによるもので、高台の高さは低いが、その巾は広く、約1.6cmある。中央のくぼみの径は小さく、約2cmを測り、深さは浅い蛇の目高台で、綠釉陶器に、これに似るものがある。釉は全体へ均一にかかり、厚さは薄い。色は淡緑色である。胎土は良

美作国府遺跡



第13図 瓦、拓本、実測図

## 美作国府遺跡

質で、淡灰色を示す。時期は本遺跡出土例中で、最も古いもので、唐代末と考えられるものがある。出土した磁器は、そのほとんどが小片である。それ等にみられる文様等を述べると、櫛描のものとヘラ描のものがみられる。櫛描のものをみると、櫛を押し、列点状の鋸歯文状の文様を付すもの、直線的に線を引くものがみられる。また猫描による文様もみられる。釉の色は、淡緑色、もしくは、青緑色である。様式としては、珠光青磁もしくは、その系統のものと考えられる。

白磁 玉縁の見られるものが多く、その断面が、完全に弧状になり、器体の薄いものがある。釉は、部分的に白色を呈するところもあるが、他は無色透明である。又、玉縁ではあるが、その形のやや崩れたもの、もしくは、口縁部直下に一本の凹線の入るもの等がある。いずれも胎土は良質で、白色を呈する。釉は無色透明である。白磁の時期としては、宋代（北宋）とすることができるであろう。

### (1) 木 器

発掘調査区の各所には谷あるいは湿地などが地表下に残されていた。お一e区では地表下約2m50cmの深さで井戸Iの検出をおこない、その周辺から多数の木器・木材の出土をみた。又、井戸IV-b・井戸Vからも1期・3期の木製品が遺存していた。各地区の遺構別に出土木器を箇条書きしておく。

<お一e区>—第1期

- 1 井戸枠材一括
- 2 井筒、そえ板一括
- 3 斎串 2 ~ 5
- 4 木簡 1
- 5 牛の鼻輪 1
- 6 箸
- 7 板材（桜皮のついているものもある）

<お一e区>—弥生時代後期

- 1 板材 一括
- 2 紡織具の部品（縋打具・綜棒と推定されるもの、一部丹塗り）

<う一b区>

- ③ 井戸 III
- 1 井戸枠材一部
  - 2 木片
- ④ 井戸 IV
- 1 斎串 2
  - 2 つるべ（くりぬき）

美作国府遺跡

- 3 曲物（しゃく？）
- 4 横櫛（3～5）
- 5 井戸枠材一括（井戸IV-a）
- 6 井戸材一部（基板等）—（井戸IV-b）
- 7 井筒（曲物）
- 8 瓢 残 欠
- 9 木片 多 数
- その他
- 1 牛の角
- 2 木葉 等

<あ—c区>

- 1 井戸枠1部（井戸V）
- 2 曲物2個体

以上が木器についてのデータである。木筒は斎串の形態を示すが肩部の切り込みはみられない。文字は判読できない。以上のはか、植物遺体・動物遺体・繩なども出土しているが、本稿では割愛した。

付記 青白磁については、東京国立博物館 長谷部樂爾氏、九州歴史資料館 亀井明徳氏から多大の御教示を得た。記してその感謝の意を表わします。蛇の目高台のものは越州窯で生産されたものであろうとの教示を得た。

## 第6章 まとめにかえて

この章は、本来は、美作国府址発掘調査から得た知見をもとに、そのまとめをなす章として予定していた。しかし、整理を進める段階で、種々の事由により、整理の人員と期間が大巾に限定された。そのこともあるて、報告書には当然掲載すべきことも、その多くを割愛せざるを得なくなつた。そのような現状で、美作国府址発掘調査のまとめをなすことは、多くの誤解と混乱を招くことは必至であろうと考える。その様な誤解をさけるために、ここでは特にまとめをしなかつた。

美作国府址の調査において、非常に多くの出土遺物をみた。そして、それ等のいづれを取り上げても、全て重要な資料となるものばかりである。調査を担当した者としては、それらが一日も早く公表出来ることを期してきた。しかし、こうして報告書が出来上った現在、我々は、むしろ虚しいものを感じている。それは、種々の事由があるにせよ、実測図をほとんど掲示することが出来なかつたことにもよる。如何なる理由にせよ、本稿が報告書となる以上は、それは必要不可欠の要素である。それが出来なかつた現在、更に整理、検討を重ね、必ずや補完を期したい。又、それが調査に従事した者の義務でもあろうかと思う。

以上のこととを理解していただき江湖の御了解を得たい。

### あとがき

発掘調査を実施するにあたり、下記の方々の御協力を得た。記してその謝意を表わします。

|       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 大郷留治郎 | 竹内忠   | 佐々木一郎 | 小林正夫  |
| 石賀ようじ | 玉置武夫  | 玉置貞雄  | 益田賢一  |
| 細川實   | 松永正広  | 日原利夫  | 真名子栄一 |
| 小林安治  | 土居英雄  | 杉本利一  | 杉本尚   |
| 河井孝止  | 杉本竹雄  | 北原喬   | 北原義雄  |
| 河井洋   | 竹内信義  | 安東義明  | 坂手順二  |
| 河野健吾  | 未沢三平  | 友保光弘  | 坂本照夫  |
| 近藤晴司  | 進賀敏雄  | 杉本美智男 | 山岸和正  |
| 坂本晃造  | 杉本敏一  | 北原信一郎 | 甲本竜己  |
| 西川敏雄  | 大郷福治郎 | 清水文一  | 北原明   |
| 山下均   | 坂藤正司  | 寺坂昌三  | 大上武士  |
| 池田毅   | 敏岡定夫  | 竹内静枝  | 竹内正子  |
| 小林かおり | 小林淑子  | 竹内悦子  | 小川浩子  |
| 大郷勇子  | 竹内貞子  | 龟尾憲子  | 二口貞香  |
| 松永代里子 | 太田明美  | 松本富子  | 竹内里子  |

美作国府遺跡

小林弘子

日笠三智江

北原君子

土居すみ江

高谷久枝

田渕敦子

池田光枝

沖田功子

日笠あさ代

長尾トク

敏岡みち子

和田良望

日笠松代

北原郁子

土居順子

大上恵美子

(敬称略)

## 文献ノート

鳴動如先、其響如雷霆之漸動

六国史等の中に見える 美作国関係の記事を記載した。特に必要と思えるもの以外は割愛した。

今後、他の文献にもあたり、完全を期したい。

- ① 繼日本紀 和銅六年夏四月  
乙未、割備前國英多、勝田、苦田、久米、大庭、眞嶋六郡、始置美作國上
- ② 延喜式 卷廿二 民部上  
美作國上 英多、勝田、苦東、苦西、久米、大庭、眞嶋
- ③ 令集解卷六 職員令  
上國  
守一人、介一人、掾一人、目一人、史生三人
- ④ 繼日本紀卷卅三 實龜六年  
三月乙未、始置伊勢少目二員、參河大少目一員、遠江少目二員、駿河大少目一員、武藏下總少目二員、常陸少掾一員、少目二員、美濃少目二員、下野大少目一員、陸奥越前少目二員、越中、但馬、因幡、伯耆大少目一員、播磨少目二員、美作、備中、阿波、伊豫、土佐大少目一員、肥後少目二員、豐前大少目一員。
- ⑤ 繼日本紀 天應元年三月  
乙酉、美作國言、今月十二日未三點、苦田郡兵庫鳴動、又四點
- ⑥ 三代實錄卷四 貞觀二年正月  
廿七日 美作國正五位下中山神從四位下
- ⑦ 三代實錄卷六 貞觀四年三月  
十六日、美作國久米郡始置主政一員
- ⑧ 三代實錄卷七 貞觀五年五月  
廿六日 分美作國苦田郡、爲苦東、苦西、郡
- ⑨ 三代實錄卷九 貞觀六年八月  
十四日戊辰、詔以美作國從四位下仲山大神、武藏國從五位下蒲田神並列官社
- ⑩ 三代實錄 貞觀八年九月  
十五日己巳、美作國從五位下長田神、兔上神、前社神、佐原神、形賣神、壹栗神、橫見神、久止神、高野神等並授從五位上
- ⑪ 三代實錄卷十四 貞觀九年八月  
十四日 加置美作國苦東郡大領一員、苦西郡少領一員
- ⑫ 三代實錄卷十六 貞觀十一年七月  
廿七日癸未、加置美作國苦東苦西二郡司職田十町
- ⑬ 三代實錄 貞觀十二年十月  
二日庚辰、美作國置國掌二人把笏



1 かき-d 区全景（西より）



2 かき-d 区溝状遺構（東より）

図版 2



1 うーb・c区（東より）



2 うーc区（南より）

図版 3



1 うーc区 いーb区（西より）



2 いーb区（南より）

図版 4



1 い-a・b区（西より）



2 い-a・b区　う-c区（東より）

図版 5



1 あ-C・D区（南西より）



2 い-A・B区（西より）

図版 6



1 建物 VI (東より)



2 建物 IV (東より)



1 建物IIIの柱穴



2 建物IVの柱穴

図版 8



1 建物 V 全景 (西南より)



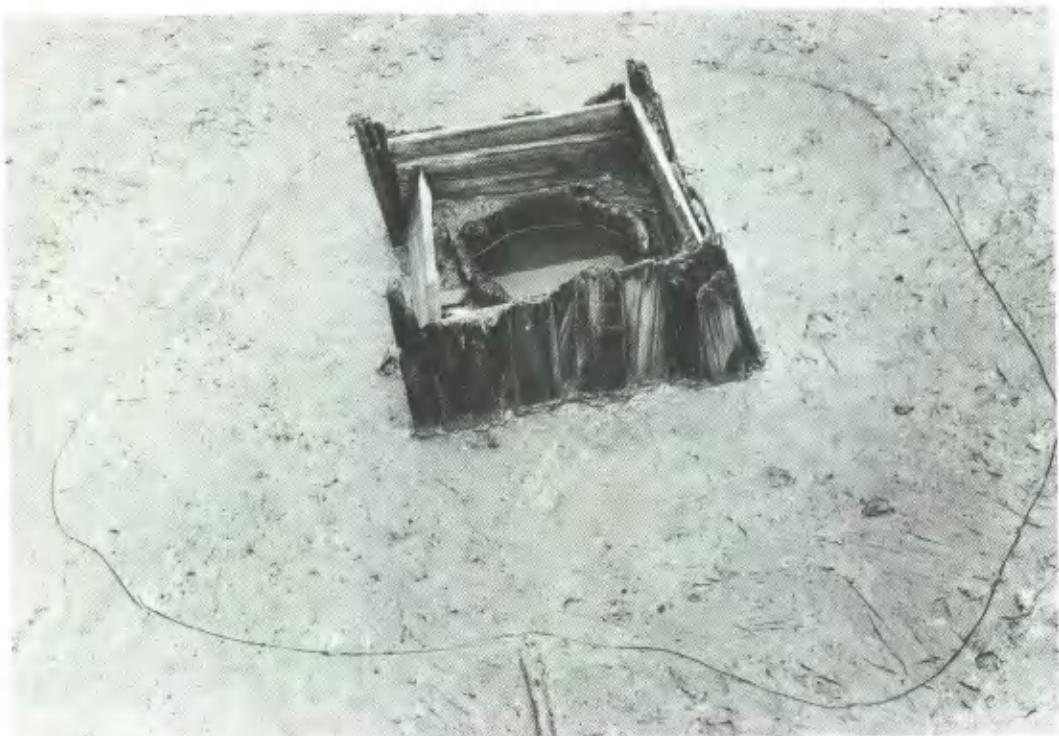
2 遺跡より東方を遠望

図版 9



発掘風景

図版10



1 井戸 I 検出状態



2 井戸 I と弥生時代板材・石器出土状況



井戸I 井戸枠と掘り方



井戸I 井筒埋置状態

図版12



1 井戸 I 井筒埋置状態



2 井戸 I 井筒の板一枚取り去った状態  
(接合部に漆喰を用いている)



3 井戸 I を真上より見る



1 井戸III検出状態



2 井戸VI遺物検出状態

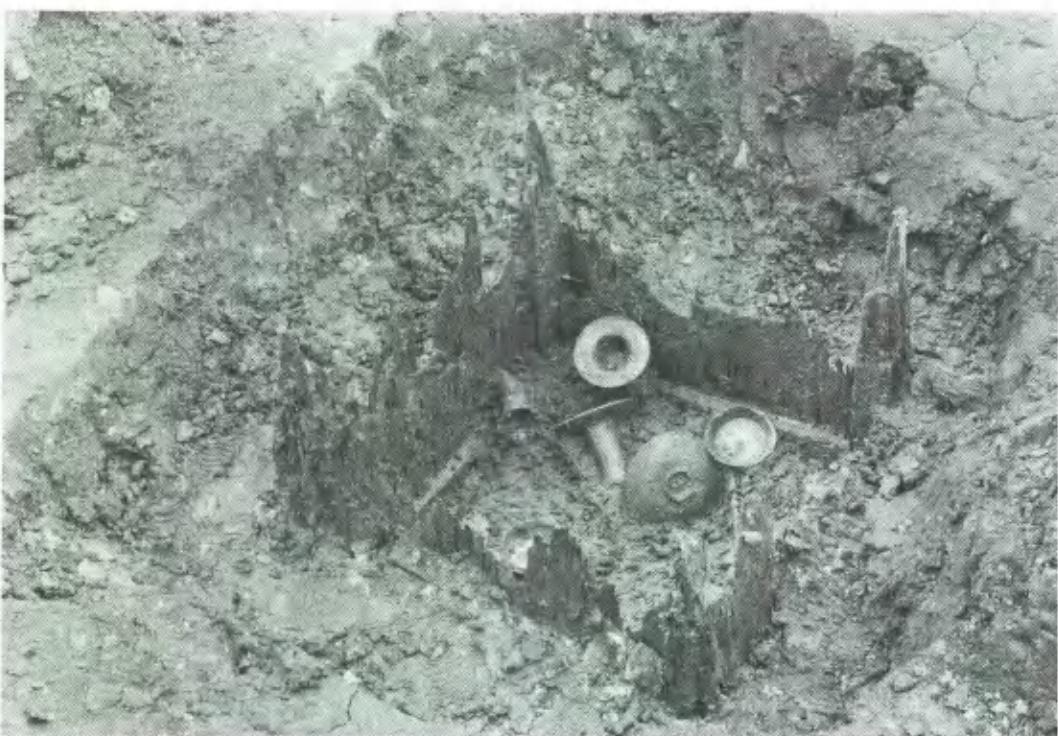
図版14



1 井戸 III 遺物出土状態



2 井戸 III 井戸枠検出状態

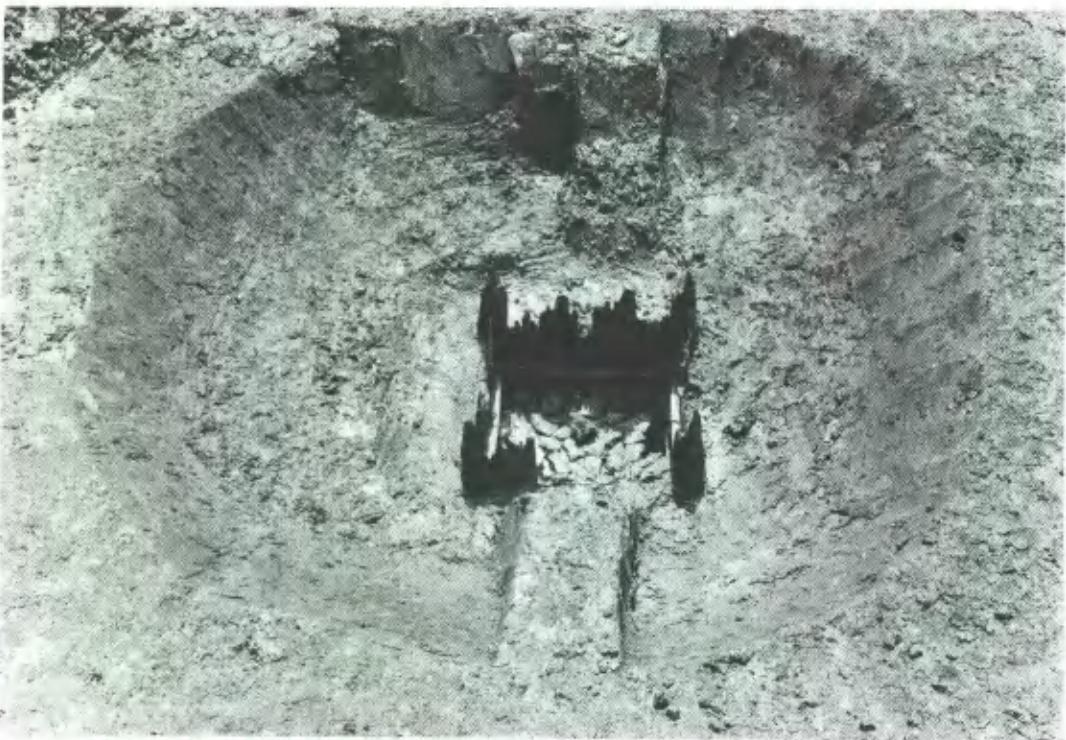


井戸 IV-a 遺物出土状態

図版16



井戸 IVa の遺物出土状態（細部）



1 井戸IV-a 井戸掘り方と井戸枠（敷石の状態）



2 井戸IV-a 井戸掘り方と井戸枠（敷石を取り去った状態）

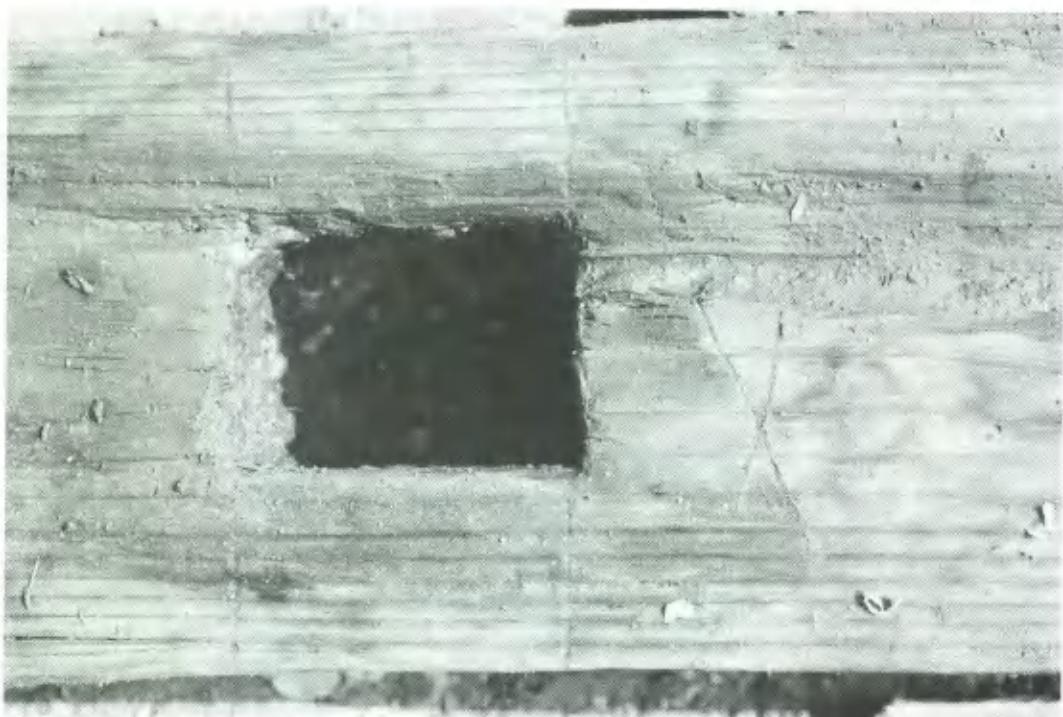
図版18



井戸IV-a 井桁と隅木・敷板検出状態

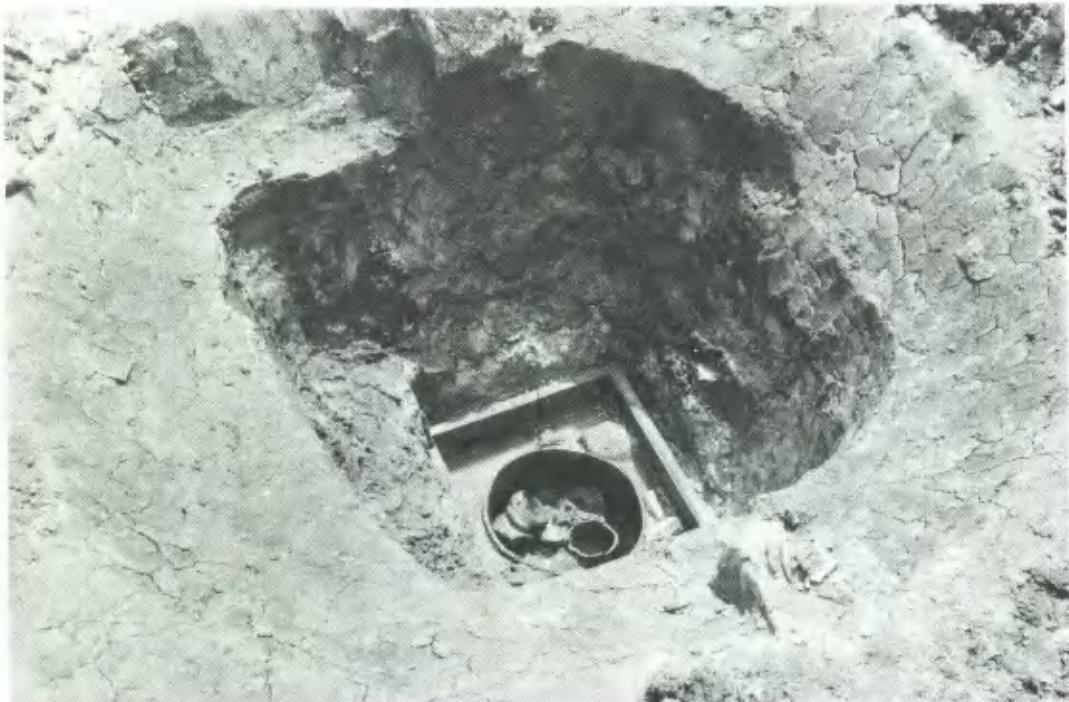


1 井戸IV-a 井桁



2 井戸IV-a 井桁ほぞ穴の位置を示すしるし

図版20



1 井戸 IV-b 掘り方と井戸



2 井戸 IV-b 井桁と井筒



1 井戸IV-b 横櫛出土状態

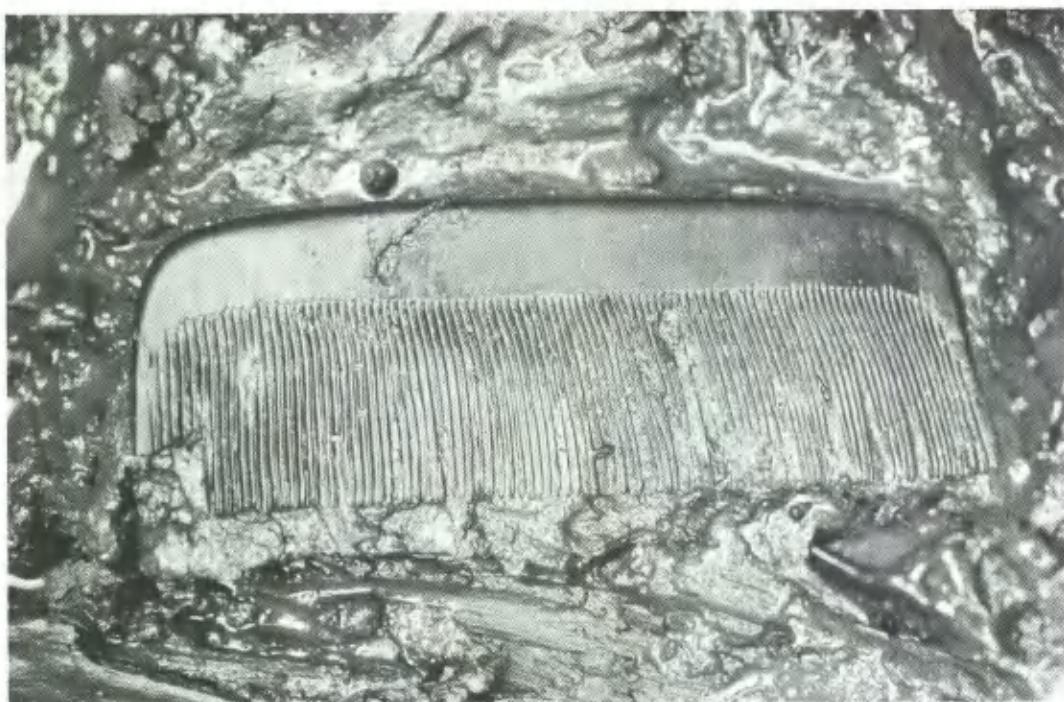


2 井戸IV-b 井枠と井筒埋置状態

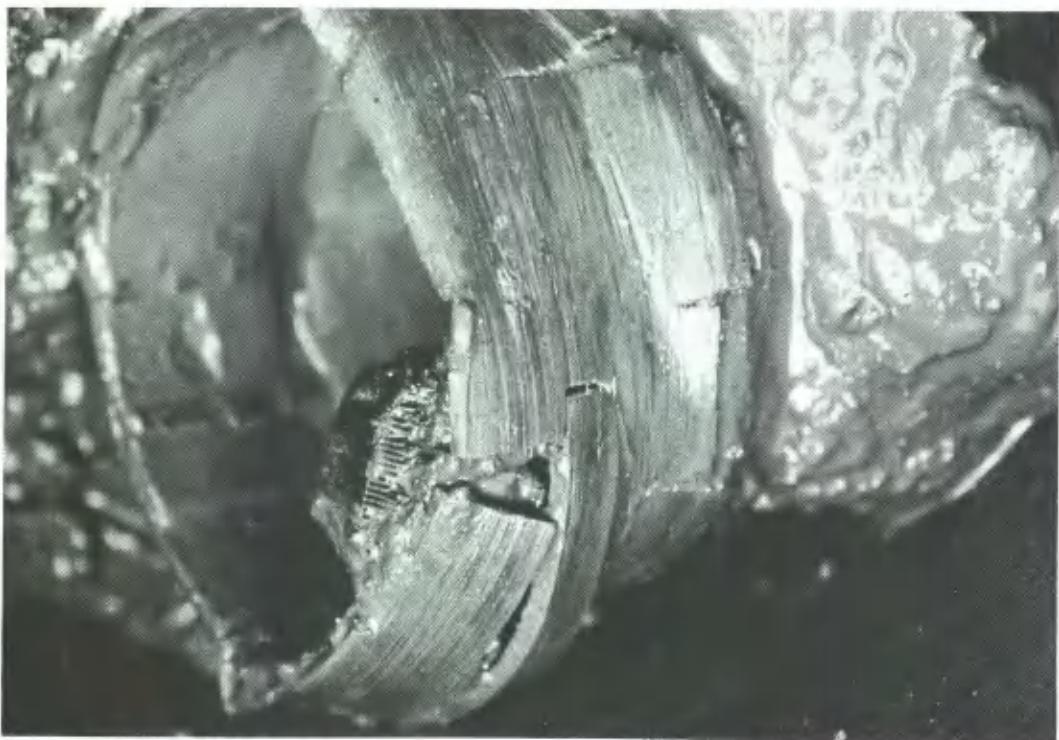
図版22



1 井戸IV - b 横櫛出土状態



2 井戸IV - b 横櫛細部



1 井戸 IV - b 曲物と 槌残片



2 井戸 VI - b 瓢

図版24



1 井戸 V 掘り方



2 井戸 V 井戸枠と遺物



1 井戸 V 遺物出土状態

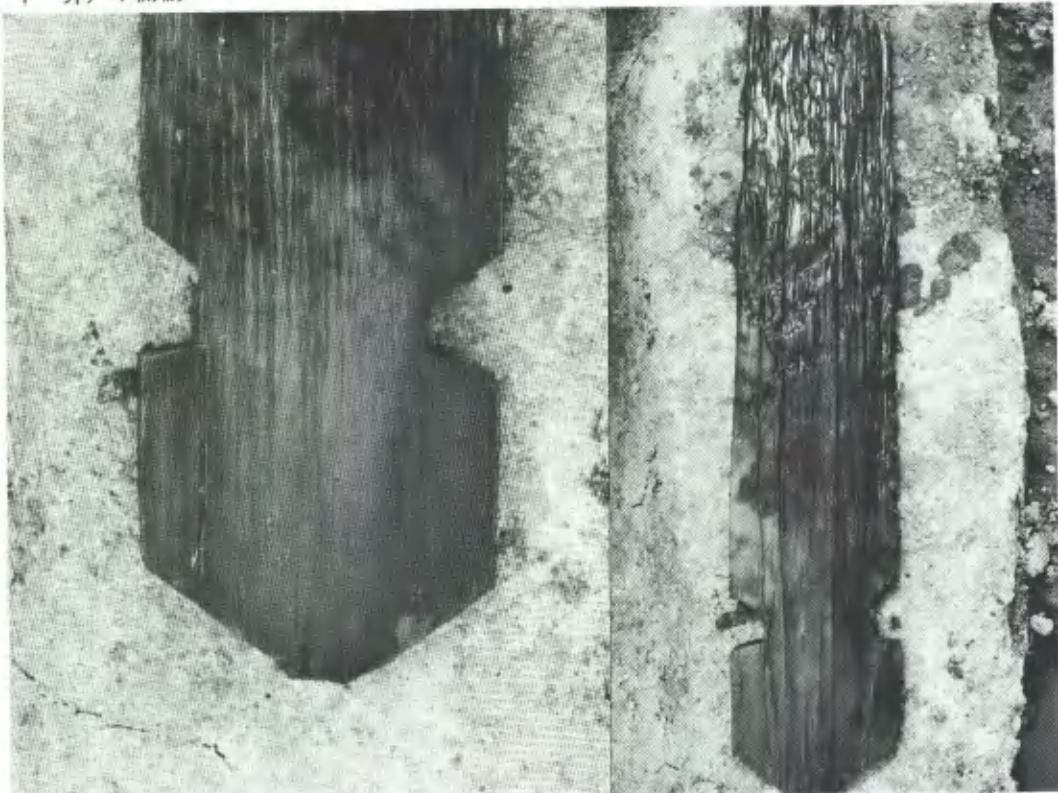


2 井戸 V 曲物出土状態

図版26



1 井戸V側板



2 井戸V側板材（廃材）



1 井戸 I 発掘風景



2 調査区西半部と築地溝発掘風景

図版28



1 弥生時代中期 V字溝



2 弥生時代の石組遺構

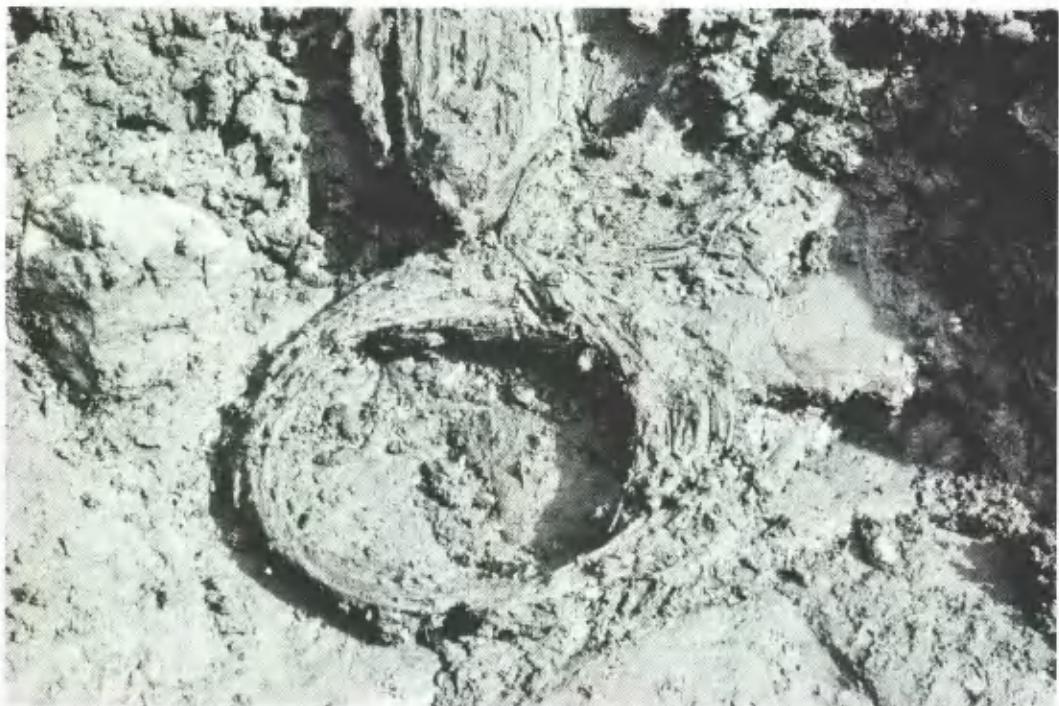


1 線軸陶器出土状態（き-d区溝状遺構）

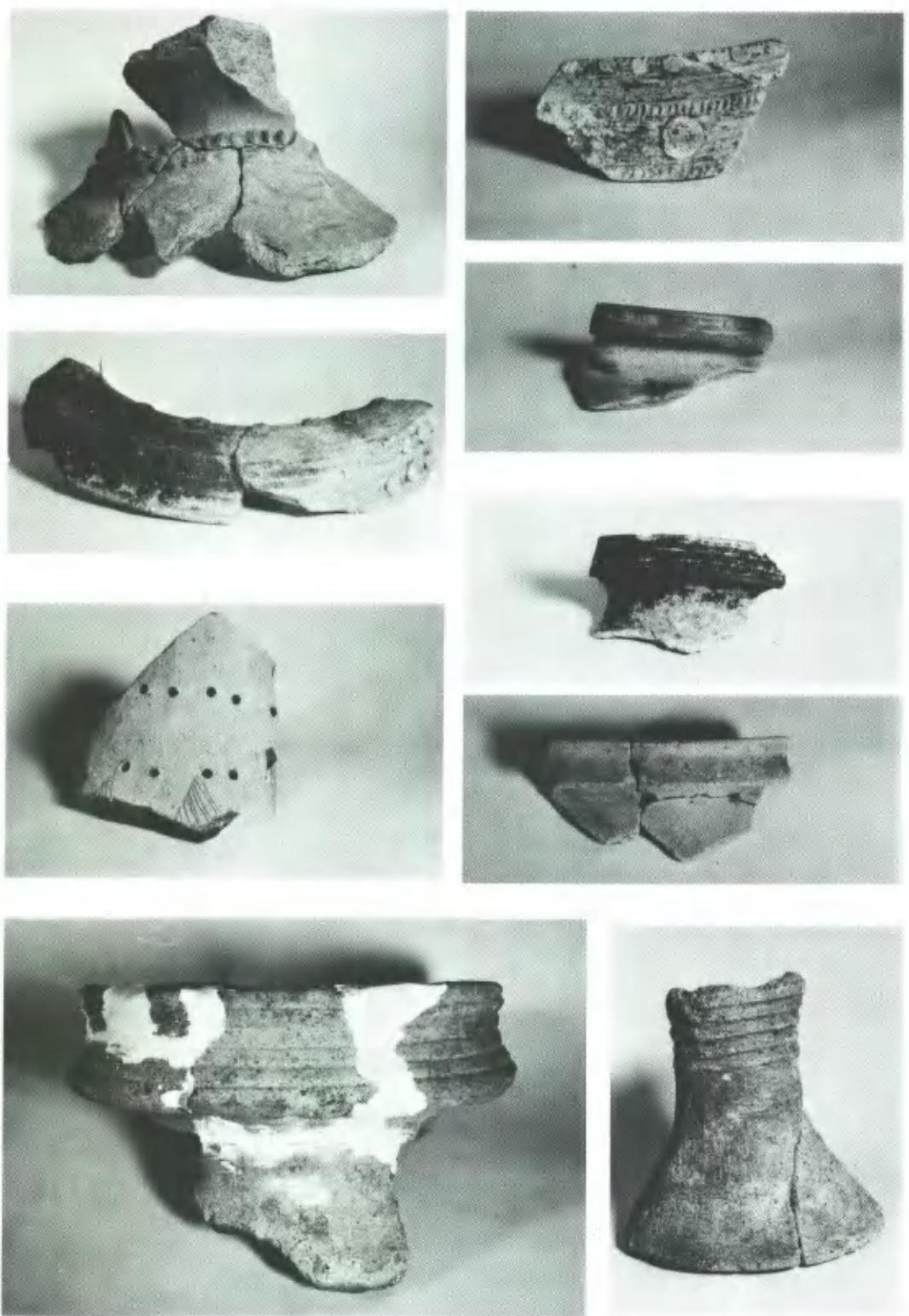


2 斎串出土状態（井戸IV-b上面）

図版30

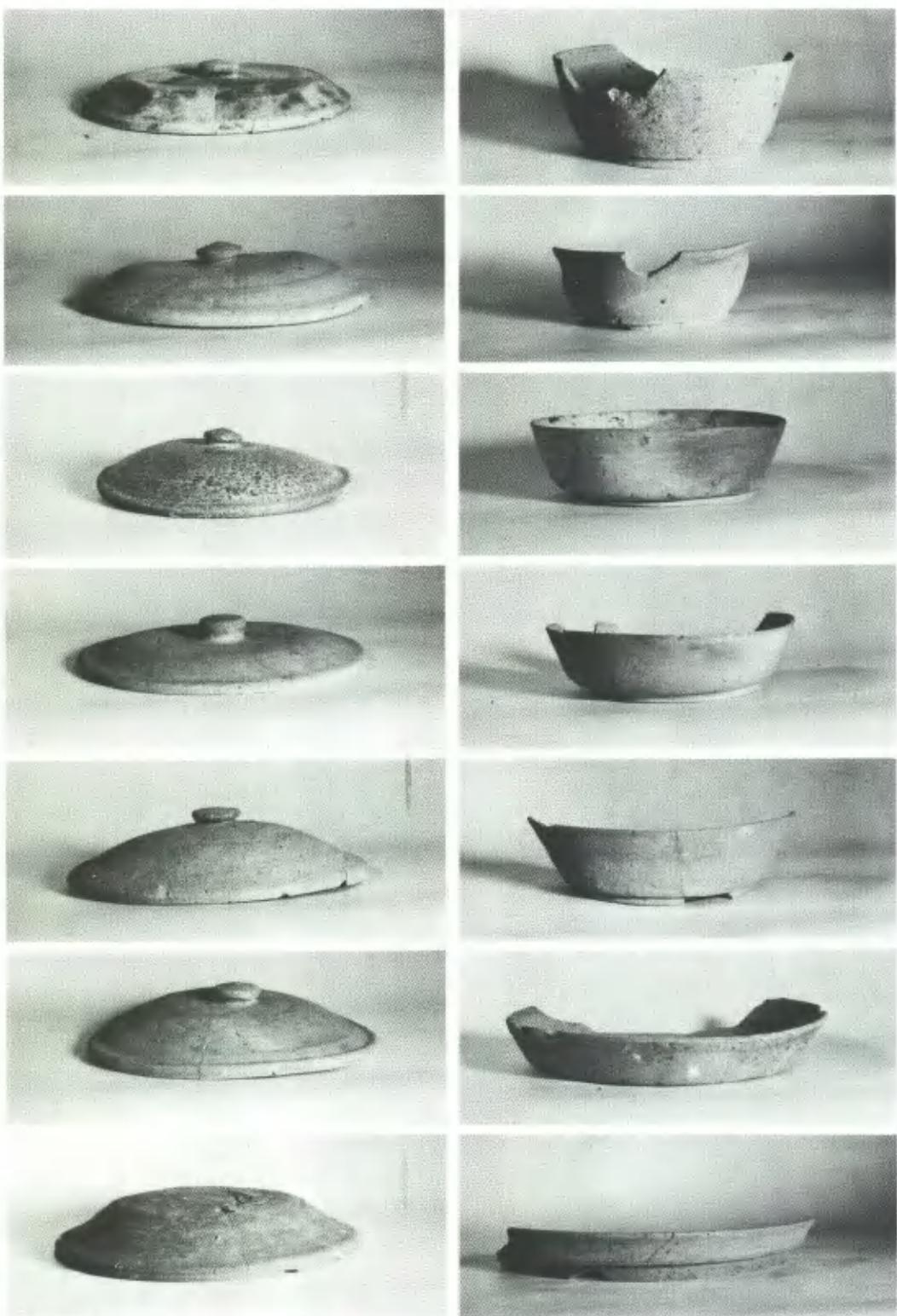


右-e区弥生期a遺物出土状態

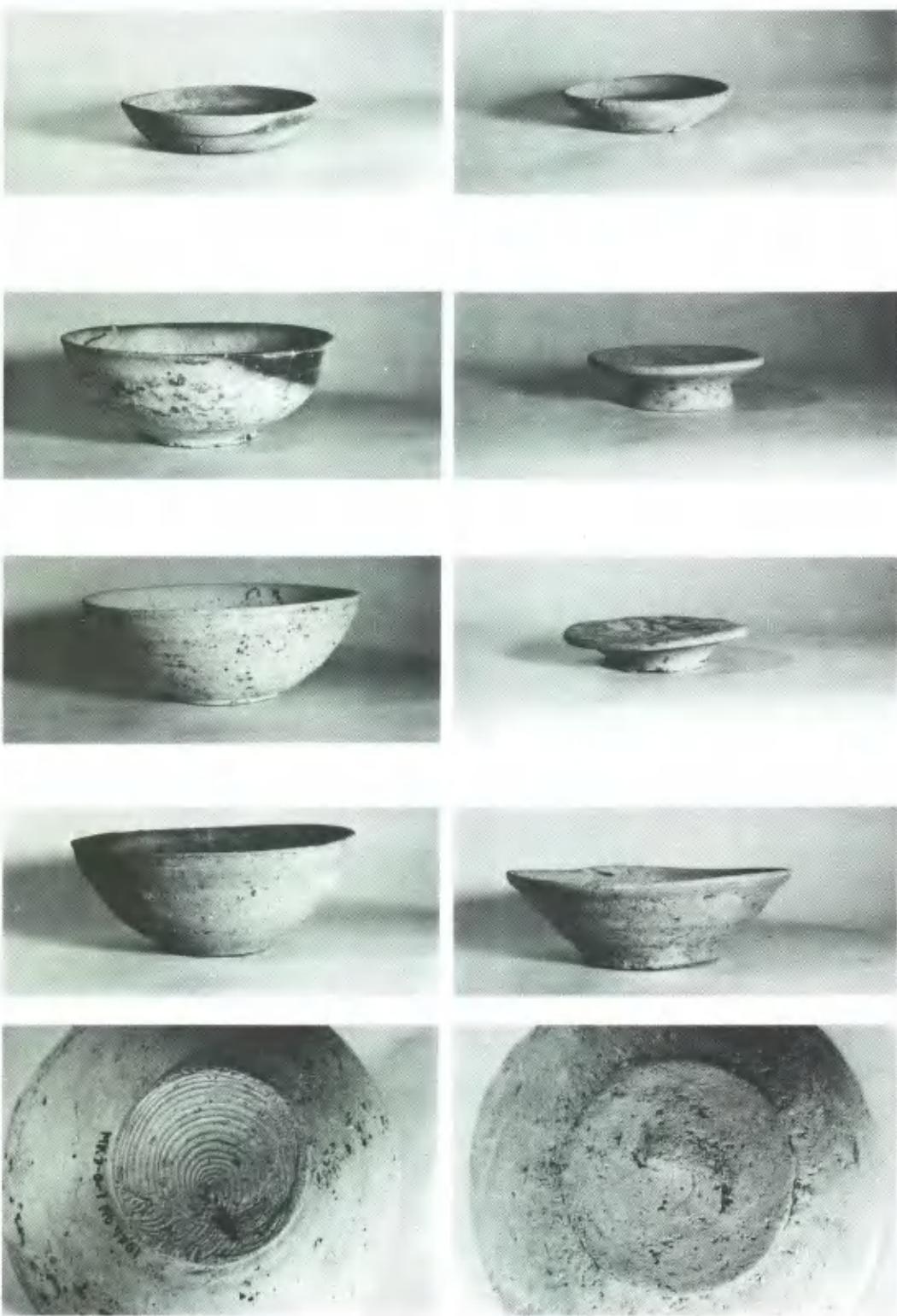


弥生式土器

図版32



I期の須恵器 (上)



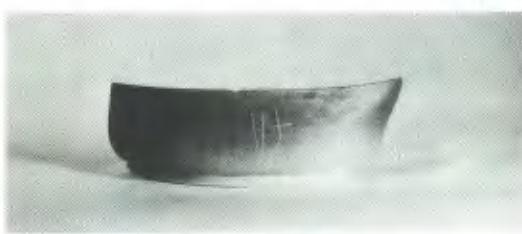
3 期の遺物（<sup>主</sup>底面のみ）



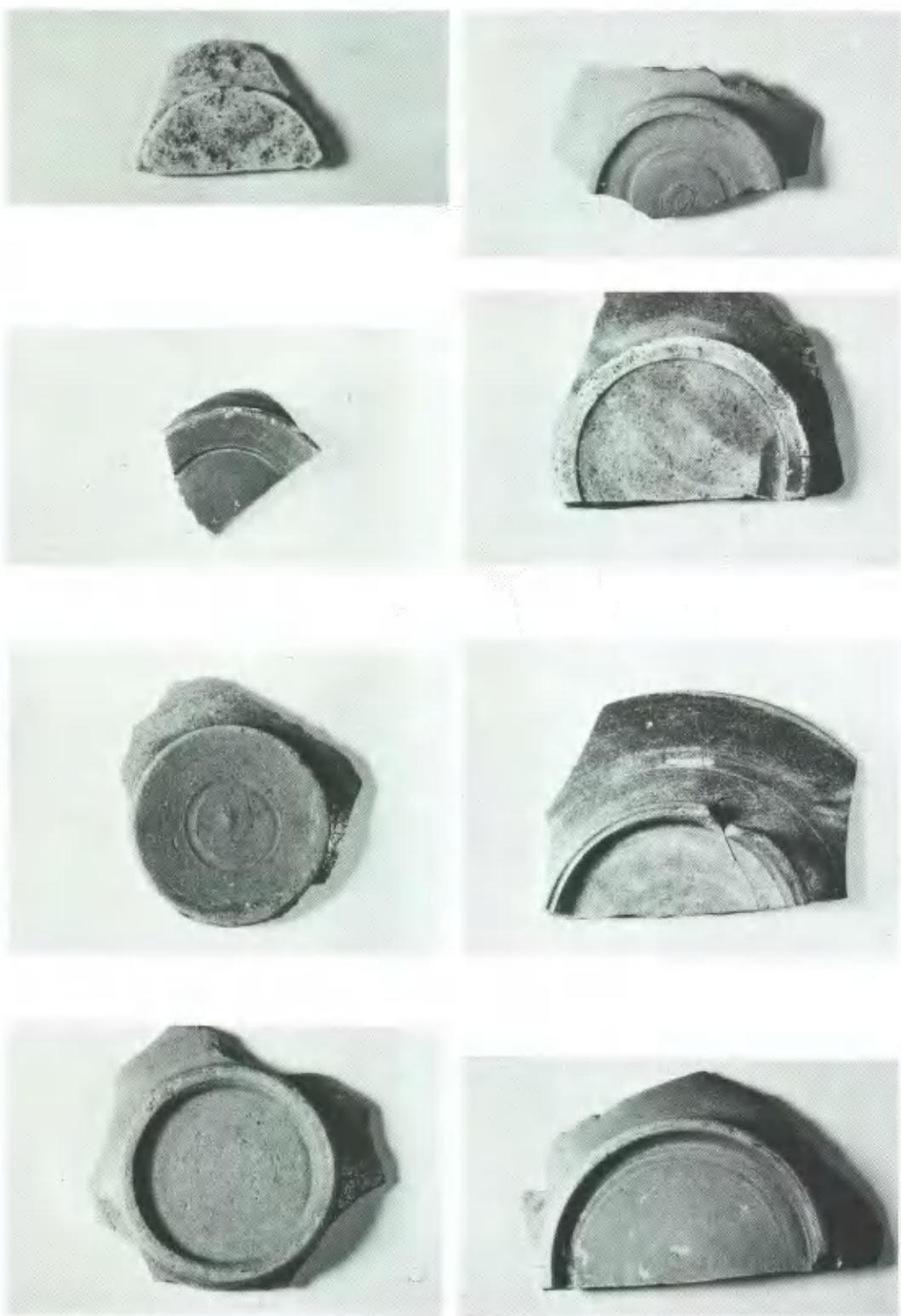
3



2



出土遺物  
①「少目」墨書土器 (文字<sup>少</sup> 土器<sup>少</sup>) ②墨痕土器 ③細頸壺 (糸切底)

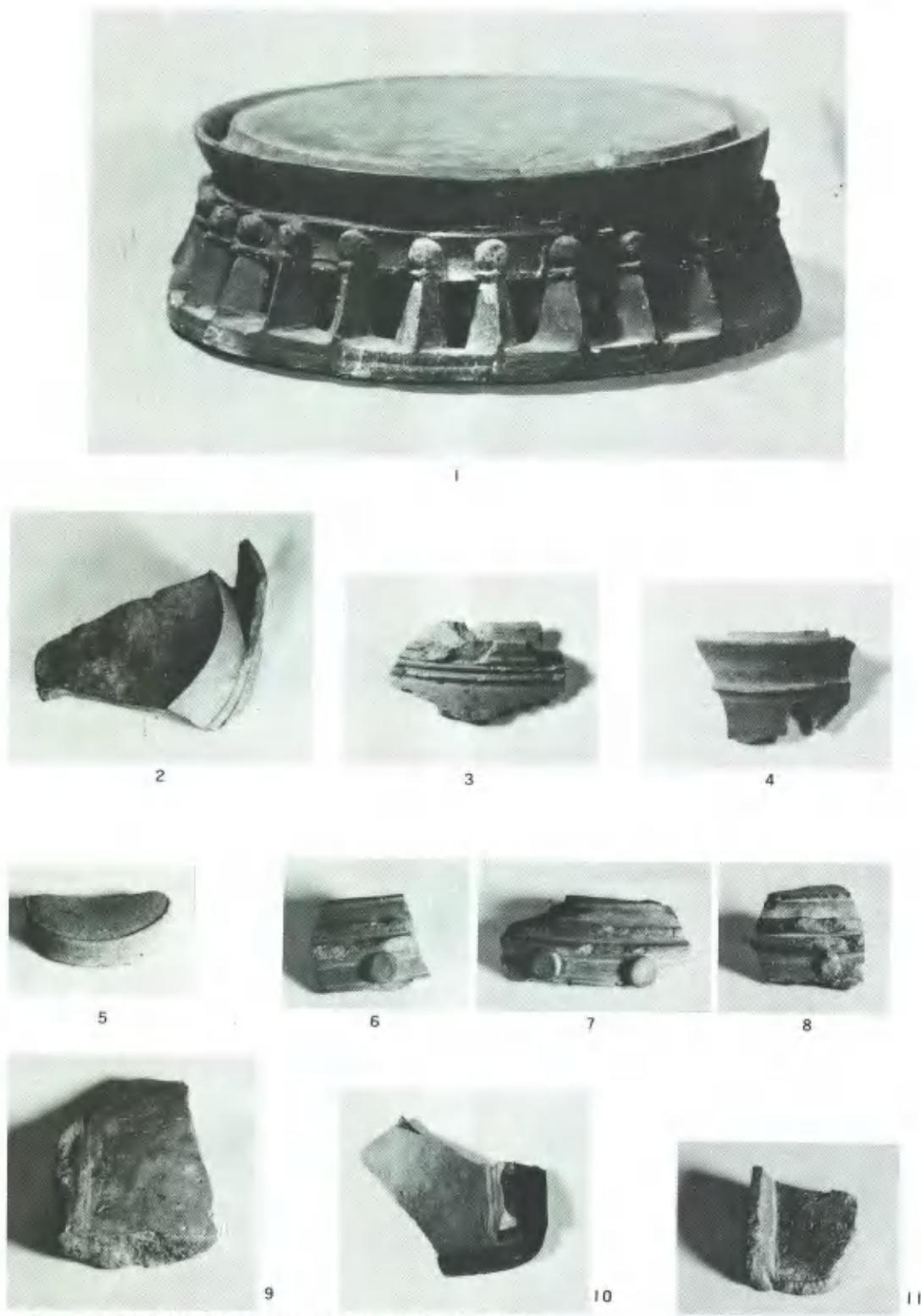


2期縁軸陶器(壺)

図版36

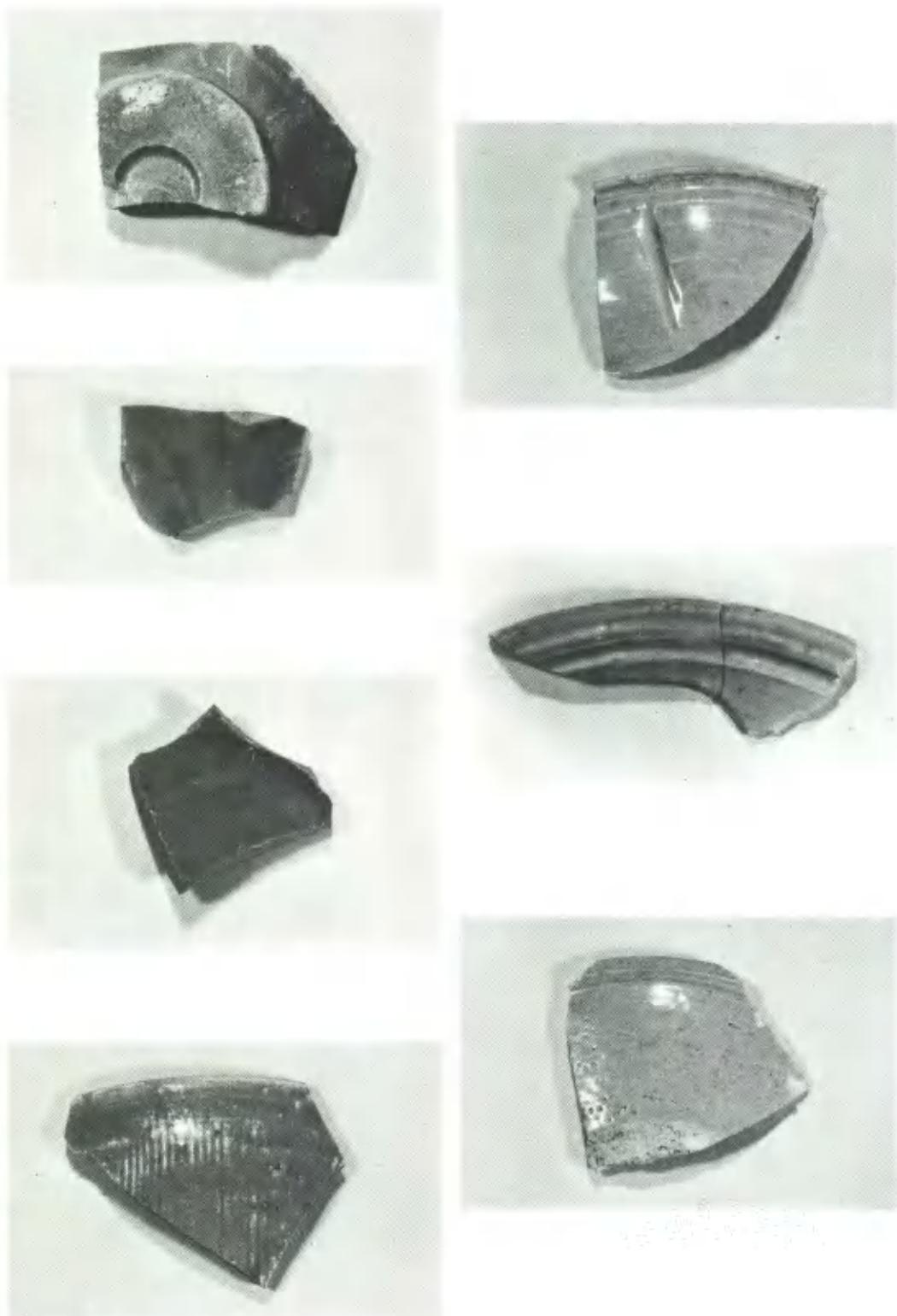


瓦 (一)



陶 砚 (土) ① 踏脚硯 ②～④ 円面硯 ⑤ 小型円面硯  
⑥～⑧ 円面硯片 (同一個体) ⑨～⑪ 風字硯片

図版38



青白磁

二宮大成遺跡 (16)

## 二宮大成遺跡

### 目 次

(執筆担当)

|              |          |     |
|--------------|----------|-----|
| 第1章 遺跡の位置と環境 | (山 磨 康平) | 61  |
| 第2章 調査の経過    | (栗野克巳)   | 64  |
| 第3章 調査の概要    |          |     |
| 第1節 1区の概要    | (山 磨)    | 69  |
| 1) 塹穴住居址     |          |     |
| 1号住居址        | (山 磨)    | 69  |
| 2号住居址        | (栗野)     | 80  |
| 3号住居址        | (栗野)     | 81  |
| 2) 溝状遺構      | (山 磨)    | 81  |
| 3) 古 墳       |          |     |
| 立地と調査前の概況    | (山 磨)    | 83  |
| 墳 丘          | (栗野)     | 83  |
| 掘 方          | (栗野)     | 85  |
| 石 室          | (栗野)     | 86  |
| 陶 棺          | (山 磨)    | 88  |
| 遺物出土状態       | (栗野)     | 90  |
| <出 土 遺 物>    |          |     |
| ① 須 恵 器      | (山 磨)    | 94  |
| ② 土 師 質 土 器  | (山 磨)    | 103 |
| ③ 武 器        | (栗野)     | 107 |
| ④ 農 工 具      | (栗野)     | 107 |
| ⑤ 馬 具        | (栗野)     | 108 |
| ⑥ 装 身 具      | (栗野)     | 108 |
| 4) 小 結       | (栗野・山磨)  | 111 |
| 第2節 2区の概要    |          |     |
| 1) 位 置・層 位   | (泉本知秀)   | 117 |
| 2) 遺 構       | (泉本)     | 119 |
| 3) 遺 物       | (泉本)     | 119 |
| 4) 小 結       | (泉本)     | 122 |
| あ と が き      |          | 131 |

## 二宮大成遺跡

### 図 目 次

- 第1図 周辺地形図・主要遺跡分布図（1/50,000）（作成：山磨）……………62  
第2図 二宮大成遺跡付近地形図（1/3,000）（作成、製図：栗野）……………63  
第3図 第1次調査グリッド・トレンチ設定図（1/1000）（作成：栗野、  
製図：山磨）…折り込み  
第4図 1区遺構全体図（1/500）（実測：栗野・山磨、製図：山磨）……………68  
第5図 1区1号住居址平面図・土層断面図（1/60）（実測・製図：山磨）……………70  
第6図 1区1号住居址断面図（1/60）（実測・製図：山磨）……………71  
第7図 1区1号住居址平面図・断面図（1/60）（実測・製図：山磨）……………73  
第8図 1区1号住居址出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）（実測・製図：山磨）……………76  
第9図 1区1号住居址出土石器・鉄器（ $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4}$ ）（実測・製図：山磨）……………77  
第10図 1区2号住居址実測図（1/60）（実測：栗野・山磨、製図：栗野）……………79  
第11図 1区2号住居址・溝状遺構B・D出土土器（ $\frac{1}{4}$ ）（実測・製図：栗野）…79  
第12図 1区3号住居址実測図（1/60）（実測：山磨、製図：栗野）……………80  
第13図 1区溝状遺構実測図（1/50・1/100）（実測：栗野・山磨、  
製図：山磨）…折り込み  
第14図 1区古墳地形図（1/300）（実測：栗野・山磨、製図：山磨）……………84  
第15図 1区古墳墳丘実測図（1/200）（実測：栗野・山磨、製図：山磨）……………85  
第16図 1区古墳土層断面図（1/50）（実測：栗野・泉本・山磨、  
製図：山磨）…折り込み  
第17図 1区古墳石室上面実測図（1/50）（実測：栗野・山磨、製図：山磨）……………87  
第18図 1区古墳石室実測図（1/50）（実測：栗野、製図：山磨）……………折り込み  
第19図 1区古墳遺物出土状態実測図（1/50）（実測：栗野・山磨  
製図：栗野）…折り込み  
第20図 1区古墳出土2・3号陶棺（1/20）（実測・製図：山磨）……………91  
第21図 1区古墳出土土器(1)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………96  
第22図 1区古墳出土土器(2)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………97  
第23図 1区古墳出土土器(3)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………100  
第24図 1区古墳出土土器(4)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………101  
第25図 1区古墳出土土器(5)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………104  
第26図 1区古墳出土土器(6)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………105  
第27図 1区古墳出土土器(7)（ $\frac{1}{3}$ ）（実測・製図：山磨）……………106  
第28図 1区古墳出土武器・馬具（ $\frac{1}{2}$ ）（実測・製図：栗野）……………109  
第29図 1区古墳出土武器・農工具（ $\frac{1}{2}$ ）（実測・製図：栗野）……………110  
第30図 1区古墳出土装身具（ $\frac{1}{2}$ ）（実測・製図：栗野）……………111

## 三官大成遺跡

- |      |   |     |
|------|---|-----|
| 第31図 | 2区坪掘4625断面図(1/40)(実測:泉本、製図:栗野) .....          | 117 |
| 第32図 | 2区トレンチ設定図(1/500)(実測:泉本、製図:山磨) .....           | 124 |
| 第33図 | 2区遺構配置図(1/200)(実測:泉本、製図:山磨) .....             | 125 |
| 第34図 | 2区土層断面図(1/50)(実測:泉本、製図:久貝健) .....             | 126 |
| 第35図 | 2区石詰土塗・平断面図(1/30)(実測:泉本・栗野,<br>製図:福岡澄男) ..... | 127 |
| 第36図 | 2区出土弥生式土器(1/4)(実測・製図:山本雅靖・竹田勝) .....          | 128 |
| 第37図 | 2区出土須恵器(1/2)(実測・製図:山本、竹田) .....               | 129 |
| 第38図 | 2区出土須恵器・その他(1/2)(実測・製図:山本、竹田・栗野) .....        | 130 |

## 圖 版 目 次

|        |                                 |    |
|--------|---------------------------------|----|
| 図版 1   | 二宮大成遺跡遠景（南より）（撮影：山磨）            | 1  |
| 図版 2—1 | 1区, 1号住居址遺物出土状況（南西より）（撮影：山磨）    | 2  |
| 図版 2—2 | 1区, 1号住居址完掘状況（南西より）（撮影：山磨）      | 2  |
| 図版 3—1 | 1区, 1号住居址土層断面（東より）（撮影：山磨）       | 3  |
| 図版 3—2 | 1区, 1号住居址ピット3土層断面（南東より）（撮影：山磨）  | 3  |
| 図版 4—1 | 1区, 1号住居址遺物出土状況（東より）（撮影：山磨）     | 4  |
| 図版 4—2 | 1区, 1号住居址鉈出土状況（北より）（撮影：山磨）      | 4  |
| 図版 5—1 | 1区, 1号住居址ベッド状遺構（東より）（撮影：山磨）     | 5  |
| 図版 5—2 | 1区, 1号住居址ベッド状遺構切断状況（東より）（撮影：山磨） | 5  |
| 図版 6—1 | 1区, 1号住居址ピット1（北より）（撮影：山磨）       | 6  |
| 図版 6—2 | 1区, 1号住居址ピット4・5（西より）（撮影：山磨）     | 6  |
| 図版 6—3 | 1区, 1号住居址中央ピット（南より）（撮影：山磨）      | 6  |
| 図版 7—1 | 1区, 1号住居址ピット1（南東より）（撮影：山磨）      | 7  |
| 図版 7—2 | 1区, 1号住居址ピット2（南より）（撮影：山磨）       | 7  |
| 図版 7—3 | 1区, 1号住居址ピット3（南西より）（撮影：山磨）      | 7  |
| 図版 8   | 1区, 1号住居址出土遺物（撮影：山磨）            | 8  |
| 図版 9—1 | 1区, 2号住居址（北西より）（撮影：栗野）          | 9  |
| 図版 9—2 | 1区, 2号住居址（南より）（撮影：栗野）           | 9  |
| 図版10—1 | 1区, 2号住居址（南より）（撮影：栗野）           | 10 |
| 図版10—2 | 1区, 3号住居址（北より）（撮影：栗野）           | 10 |
| 図版11—1 | 1区, 溝状遺構全景（北西より）（撮影：山磨）         | 11 |
| 図版11—2 | 1区, 溝状遺構A（南東より）（撮影：山磨）          | 11 |
| 図版12—1 | 1区, 溝状遺構B・C・D（南東より）（撮影：山磨）      | 12 |
| 図版12—2 | 1区, 溝状遺構B・C・D（南東より）（撮影：山磨）      | 12 |

## 二宮大成遺跡

|        |   |    |
|--------|---|----|
| 図版13—1 | 1区, 古墳全景(西より) (撮影:栗野)                             | 13 |
| 図版13—2 | 1区, 古墳全景(東より) (撮影:栗野)                             | 13 |
| 図版14—1 | 1区, 古墳, 石室及び掘方全景(北東より) (撮影:栗野)                    | 14 |
| 図版14—2 | 1区, 古墳, 石室及び掘り方全景(東より) (撮影:栗野)                    | 14 |
| 図版15—1 | 1区, 古墳, 奥壁(南東より) (撮影:栗野)                          | 15 |
| 図版15—2 | 1区, 古墳, 棺台(南東より) (撮影:栗野)                          | 15 |
| 図版16—1 | 1区, 古墳, 石室(南より) (撮影:栗野)                           | 16 |
| 図版16—2 | 1区, 古墳, 石室内(北西より羨道部をのぞむ) (撮影:栗野)                  | 16 |
| 図版17—1 | 1区, 古墳, 西南壁を奥からみる。 (撮影:栗野)                        | 17 |
| 図版17—2 | 1区, 古墳, 東北壁を奥からみる。 (撮影:栗野)                        | 17 |
| 図版18—1 | 1区, 古墳, 3トレンチ奥壁のうしろの断面<br>(E F断面F側, 西南より) (撮影:栗野) | 18 |
| 図版18—2 | 1区, 古墳, 9トレンチ, 石室掘方断面(南東より)<br>(撮影:栗野)            | 18 |
| 図版19—1 | 1区, 古墳, 10トレンチ, 石室掘方断面(南より) (撮影:栗野)               | 19 |
| 図版19—2 | 1区, 古墳, 5トレンチ, 石室掘方断面(南東より)(撮影:栗野)                | 19 |
| 図版20—1 | 1区, 古墳, 3トレンチ, 周溝断面(南西より) (撮影:栗野)                 | 20 |
| 図版20—2 | 1区, 古墳, トレンチ, 周溝断面(東より) (撮影:栗野)                   | 20 |
| 図版21—1 | 1区, 古墳, 9トレンチ, 周溝断面(南東より) (撮影:栗野)                 | 21 |
| 図版21—2 | 1区, 古墳, 7トレンチ断面(北より) (撮影:栗野)                      | 21 |
| 図版22—1 | 1区, 古墳, 15トレンチ周溝部分(南より) (撮影:栗野)                   | 22 |
| 図版22—2 | 1区, 古墳, 5トレンチ周溝部分(東より) (撮影:栗野)                    | 22 |
| 図版23—1 | 1区, 古墳, 遺物出土状況全景(北西より) (撮影:栗野)                    | 23 |
| 図版23—2 | 1区, 古墳, 遺物出土状況全景(南東より) (撮影:栗野)                    | 23 |
| 図版24—1 | 1区, 古墳, 陶棺出土状況(南東より) (撮影:栗野)                      | 24 |
| 図版24—2 | 1区, 古墳, 1号陶棺と出土遺物(真上より) (撮影:栗野)                   | 24 |
| 図版25—1 | 1区, 古墳, 1号陶棺北側遺物出土状況(北より) (撮影:栗野)                 | 25 |
| 図版25—2 | 1区, 古墳, 1号陶棺南西側遺物出土状況(北東より)<br>(撮影:栗野)            | 25 |
| 図版25—3 | 1区, 古墳, 1号陶棺短頸壺(38)に刀子(71)出土状況<br>(東南より) (撮影:栗野)  | 25 |
| 図版26—1 | 1区, 古墳, 1号陶棺, 奥側半分の脚の状況(南東より)<br>(撮影:栗野)          | 26 |
| 図版26—2 | 1区, 古墳, 2号陶棺, 脚の間の遺物出土状況(南東より)<br>(撮影:栗野)         | 26 |

## 二宮大成遺跡

|        |  |    |
|--------|--|----|
| 図版27—1 | 1区, 古墳, 3号陶棺北側隅付近遺物出土状況（南より）                         | 27 |
| 図版27—2 | 1区, 古墳, 3号陶棺北西角の脚と土器(41)（西より）<br>（撮影：栗野）             | 27 |
| 図版28—1 | 1区, 古墳, 石室内東南部遺物出土状況（北東より）                           | 28 |
| 図版28—2 | 1区, 古墳, 石室内遺物出土状況（南東より）（撮影：栗野）                       | 28 |
| 図版29—1 | 1区, 古墳, 石室内東半部遺物出土状況（南より）（撮影：栗野）                     | 29 |
| 図版29—2 | 1区, 古墳, 石室内入口右側部分, 提瓶(52), 膜(55)<br>出土状況（南より）（撮影：栗野） | 29 |
| 図版30   | 1区, 古墳出土土器1（撮影：山磨）                                   | 30 |
| 図版31   | 1区, 古墳出土土器2（撮影：山磨）                                   | 31 |
| 図版32   | 1区, 古墳出土土器3（撮影：山磨）                                   | 32 |
| 図版33   | 1区, 古墳出土土器4（撮影：山磨）                                   | 33 |
| 図版34   | 1区, 古墳出土土器5（撮影：山磨）                                   | 34 |
| 図版35   | 1区, 古墳出土土器6（撮影：山磨）                                   | 35 |
| 図版36—1 | 1区, 古墳出土柄頭（鞠尻）, 釘, 鐸（撮影：栗野）                          | 36 |
| 図版36—2 | 1区, 古墳出土鉄鎌・刀子（撮影：栗野）                                 | 36 |
| 図版37—1 | 1区, 古墳出土杏葉, 留金具, 鍔（鋤）先（撮影：栗野）                        | 37 |
| 図版37—2 | 1区, 古墳出土鞍金具（撮影：栗野）                                   | 37 |
| 図版38   | 1区, 古墳出土装身具（撮影：栗野）                                   | 38 |
| 図版39—1 | 2区全景（南東より）（撮影：泉本）                                    | 39 |
| 図版39—2 | 2区東半発掘状況（西より）（撮影：泉本）                                 | 39 |
| 図版40—1 | 2区全景（北西より）（撮影：泉本）                                    | 40 |
| 図版40—2 | 2区, 建物2, 土壙4（北西より）（撮影：泉本）                            | 40 |
| 図版41—1 | 2区, 建物1, 土壙1・2（東より）（撮影：泉本）                           | 41 |
| 図版41—2 | 2区, 建物1, 土壙1・2（南より）（撮影：泉本）                           | 41 |
| 図版42—1 | 2区, 土壙1（南東より）（撮影：泉本）                                 | 42 |
| 図版42—2 | 2区, 土壙2（南東より）（撮影：泉本）                                 | 42 |
| 図版43—1 | 2区, 1号住居址, 炉3（北より）（撮影：泉本）                            | 43 |
| 図版43—2 | 2区, 1号住居址, 炉3（南より）（撮影：泉本）                            | 43 |
| 図版44—1 | 2区, 土壙4（西より）（撮影：泉本）                                  | 44 |
| 図版44—2 | 2区, 土壙4（東より）（撮影：泉本）                                  | 44 |
| 図版45—1 | 2区, Eトレンチ西側壁面出土土器（西より）（撮影：泉本）                        | 45 |
| 図版45—2 | 2区, Fトレンチ柱穴上面出土土器（西より）（撮影：泉本）                        | 45 |
| 図版46   | 2区, 出土土器（撮影：栗野）                                      | 46 |

三宮大成遺跡

表 目 次

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 表1 須恵器法量表（作成：山磨）      | 98  |
| 表2 石室内出土遺物分類関係（作成：栗野） | 112 |
| 表3 土器計測表（作成：山磨）       | 114 |
| 表4 2区遺構一覧表（作成：泉本）     | 119 |
| 表5 2区出土遺物一覧表（作成：泉本）   | 121 |

## 第1章 遺跡の立地と環境

本遺跡は二宮大東遺跡と呼称して発掘調査を行なったが、付近の字名を取り二宮大成遺跡と変更した。位置は津山盆地の中央で現在の津山市街地の西方にあたる。中国山地に源を発し津山盆地を貫流する吉井川は、古代より美作の主要交通路の一つであった。吉井川の本流は盆地西辺を南流し苦田郡鏡野地域で支流の香々美川を合流し肥沃な沖積低地を形成している。さらに南流した吉井川は久米郡久米地域の低地を形成し、東流する久米川を合流しながら急角度に東方へと向きを転じ途中皿川を台流し津山市街地を貫流した後再び南下する。

市街地の北西に位置する神楽尾山塊（308m）の南縁辺部には比高30～40mの第三紀丘陵が巡り、東西5kmの丘陵中央には田邑の小盆地を形成している。低丘陵の谷は深く、谷頭部まで水田化されている。また丘陵上は近世より近年に至る開墾のためほとんど畠となっている。さらに丘陵南端では最近の開発により地形は大きく変貌しつつある。

このような地形を呈した低丘陵の南端の吉井川を眼下に臨む位置に本遺跡は立地している。周辺の弥生時代の遺跡としては同丘陵の北西2.5kmの外道山山頂に弥生墳墓群が知られており、丘陵上には多くの遺跡の存在が推定される。

本遺跡の立地する低丘陵の南方は東を佐良山・笹山、西を嵯峨山に挟まれた皿川の小冲積地を形成している。この地は総数200余基にものぼると推定される後期古墳が存在し群集墳の典型的な姿を現わしている。又、多くの横穴式石室からは美作の地域的な特徴を示す陶棺の出土が報告されている。（註1）

二宮大成遺跡の立地する低丘陵上の西方1kmには美作最大級、全長92mの前方後円墳胴塚を含む美和山古墳群が南の吉井川流域の低地と交通の要衝地を見下す位置に立地している。さらに同丘陵北西の津山市田邑平尾には、仿製三角縁神獸鏡を出土した径30m級の古墳群が知られている。（註2）又、北東の宮川の冲積地を臨む段丘上には美作国府が推定されている。縦貫道が国府域の北西部を通過することになり、それに伴う発掘調査（註3）により美作国府の一部が解明された。本遺跡の西方3kmには史跡院庄館址が位置している。

このように津山盆地の中心地域を占める本遺跡周辺には数多くの遺跡が知られ古代美作の歴史の解明に貴重な地域である。しかし、貴重な文化財は最近の開発により重大な危機にひんじている。本遺跡も工事工程の時間的な制約により充分な発掘調査とはい難く、多くの未掘部分を残し、検出遺構と共に永久的に消滅した。

註一 1 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』津山（1952年）

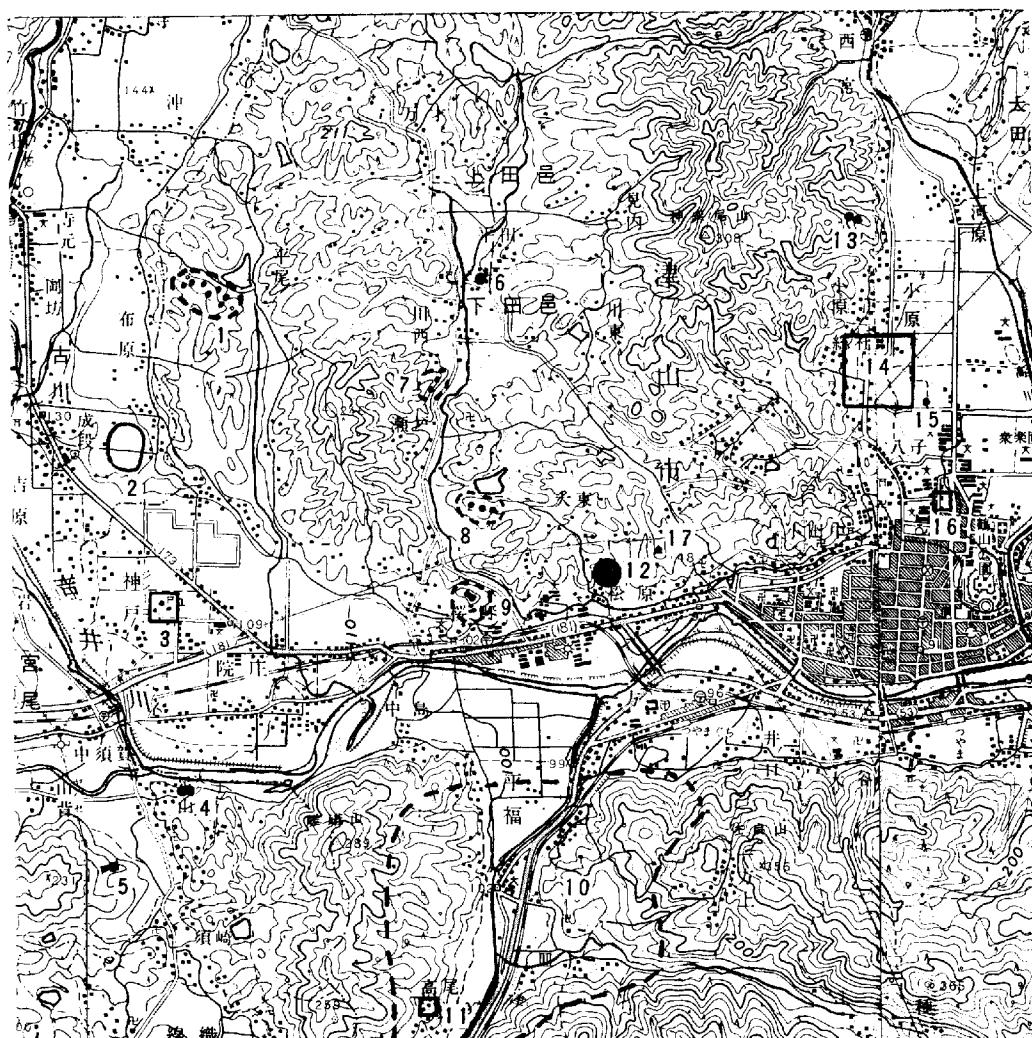
註二 2 今井堯「原始社会から古代国家への成立」津山市史第1卷、原始・古代、1972年

註三 3 本報告書掲載

参考文献

津山東部 5万分の1、地質図幅説明書、地質調査所 昭和32年

二宮大成遺跡



第1図 周辺地形図・主要遺跡分布図 (1/50,000)

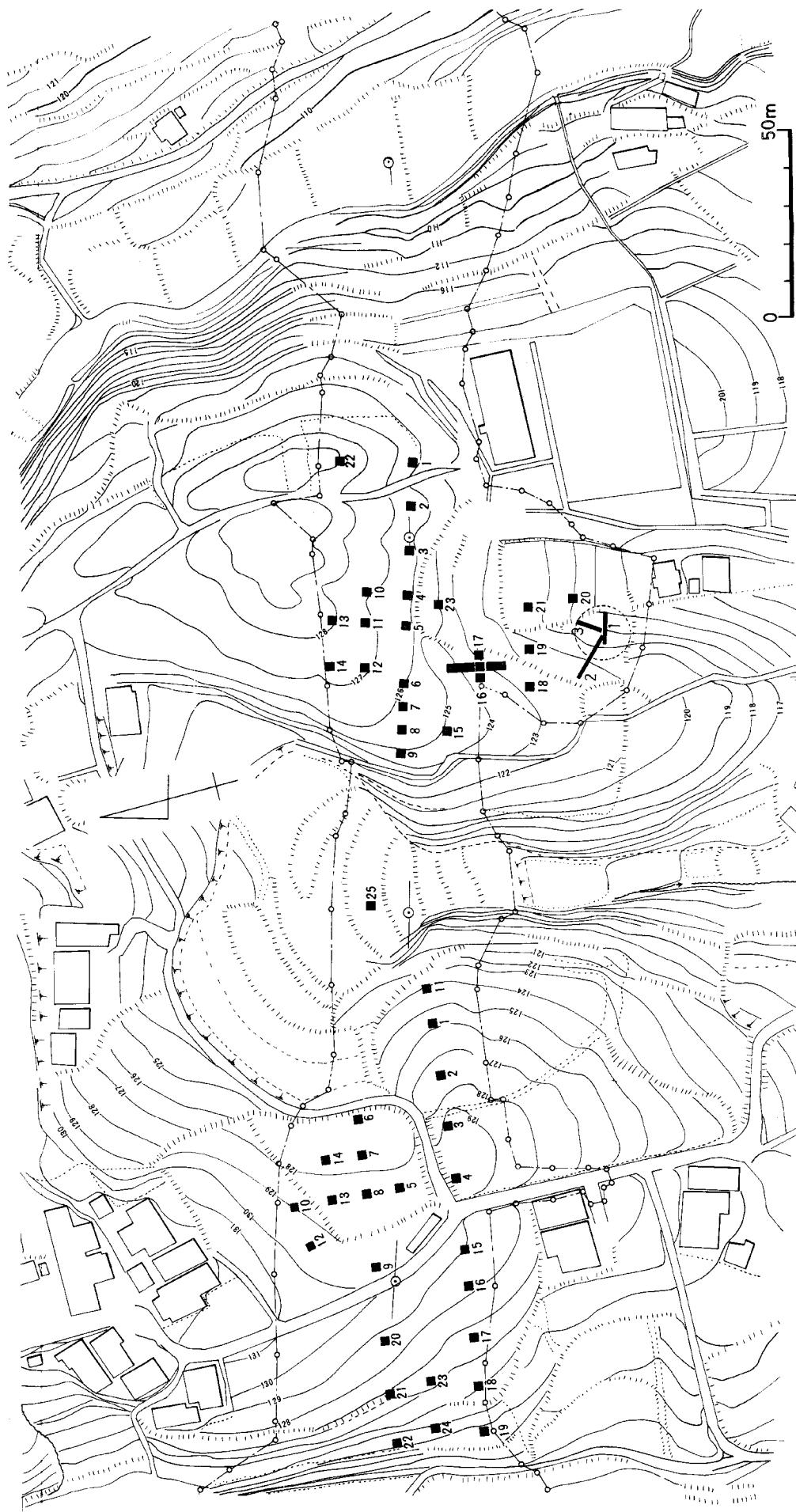
- |           |             |             |
|-----------|-------------|-------------|
| 1 田邑丸山古墳群 | 7 菊成古墳群     | 13 外道山弥生墳墓群 |
| 2 布原遺跡    | 8 中禪奥古墳群    | 14 美作國府     |
| 3 院庄館址    | 9 美和山古墳群    | 15 山北一丁田遺跡  |
| 4 龍王塚古墳   | 10 佐良山古墳群   | 16 椿高下靡寺    |
| 5 狐塚古墳    | 11 高尾廃寺     | 17 狐塚古墳     |
| 6 (田邑収蔵庫) | (12) 二宮大成遺跡 |             |

二宮大成遺跡



第2図 二宮大成遺跡付近地形図 (1/3,000)

第3図 第1次調査グリッド・トレンチ設定図



## 第2章 調査の経過

### 発掘調査に至るまで

昭和42年中国縦貫自動車道岡山県内第一次整備区間の路線が発表され、県教委は路線を含めた巾約400mについて分布調査を実施した。この時は「須恵細片（平安）？」を1区・2区から採集している。ここからはじめて弥生式土器・大型蛤刃石斧が採集され、津山郷土館に収蔵されているという。

昭和45年度事業として本遺跡の第一次トレンチ調査が予算化されたため、昭和46年1月下旬から準備、「久米廃寺」の発掘調査進行中ではあったが、栗野・泉本の二名の調査員が担当し、2月4日から第一次発掘調査に入った。

### 第一次トレンチ調査

第一次調査の目的は遺跡の範囲・状況を把握することにあった。この丘陵は江戸時代に開墾された折に削平されて遺構の残り具合が悪いとみられていた。

予算上の調査予定面積は200m<sup>2</sup>であったので2m×2mの坪掘りを約50ヶ所程考えた。用地買収はほとんど終了していたが作付してある畑があったのでできるだけはずして設定した部分もあり結果的には全体に平均していない。東側の丘陵を1区とし、西側の丘陵を2区とした。

1区では3・4・5・16・17・21・23のグリッドより弥生時代後期の土器片を伴う包含層を発見した。3・4・5は黒色土層がみられた。16・17では多量の焼土を伴い、さらに南北トレンチを設定して住居址であることを確認した。調査中に訪れた地元の人の話により「古墳がある」ということで20の地点で鉄棒によるボーリングを行なった。石にあたったのでトレンチを設定、横穴式石室を発見した。石室の巾1.7mでトレンチを入れた部分では、ほとんど床面まで攪乱されていた。陶棺・須恵器・土師器などが発見された。

2区では5・6・7・8・13・14より弥生時代後期の土器および柱穴～鎌倉～室町時代の土器片と包含層が確認された。この部分は浅い谷になっており開墾の歴史がよんでいた。他の坪掘りでは、耕作により攪乱されて須恵器の破片が数片発見されたのみであった。2区25は、丘陵上に弥生時代の遺跡があるので、谷水田の発見を目的として行ったものである。2m余りの灰色粘土層の下に30cm程の黒褐色土層があり、ここからは鉄滓と共に平安時代の須恵器片が出土、弥生時代の土器片も2片程混るが、この谷の開墾の時期は平安時代以降としか考えられない。あるいは別の地点で水田遺構を発見できるのかも知れない。2月20日終了した。

以上の結果に基づいて第二次発掘調査に予想される調査期間を算出した。調査員3名で1区の弥生時代遺構に約50日、横穴式石室約10日、2区の遺構に約50日、合計100日程度の日数が必要と思われる。（昭和46年3月稿）

## 二宮大成遺跡

### 第二次発掘調査

昭和46年度事業として本遺跡は調査対象になっていた。事務担当者は第一次トレンチ調査だけで本遺跡の調査は完了したものと思っていたらしい。45年度実績報告では第二次調査の必要を明記してあった。昭和46年9月頃、津山市内でも工事着工の話があり二宮大東遺跡の処置が問題となった。11月から工事着工することで、日本道路公団・請負業者・文化課の三者で現地立会、調査地区の繩張りを行った。昭和46年度第二次調査は、予算的処置のないまま、「領家遺跡」の調査を担当していた栗野・山磨の調査員が入ることになった。このため領家遺跡の調査は一部中断された。調査期間は昭和46年11月8日から始め、12月25日で終了した。調査期間が短いため、1区では住居址一軒・包含層の遺物採取・古墳一基、2区では包含層のある谷の部分の遺物採取だけを目標として行なわれた。しかし1区では工事中ブルドーザーの削平により住居址が一軒追加された（2号住居）。2区では調査員不足により不充分な調査を進行させていたが、美作国府を調査していた泉本が12月6日より12月25日まで応援したので一部の遺構の検出を行うことができた。

### 第一次発掘調査日誌抄

昭和46年

- 2月1日 栗野は津山用地事務所で用地買収状況の確認をする。未買収が一ヶ所ある。墓地移転二ヶ所未了、この三ヶ所以外は、作付してある作物について一週間程の余裕期間をみて通知すれば工事着手してもよいとのこと。
- 2月2日 地元地権者代表者福本潔氏に埋蔵文化財の調査について説明、了解を求めた。今回は全面発掘調査ではなく坪堀りなので排土場所を含めてその部分だけに限って作付の取り除きをお願いした。埋蔵文化財保護対策委員に電話で承諾を求めた。
- 2月3日 久米廃寺で器材の準備をする。
- 2月4日 久米廃寺より器材を運搬。器材小屋の建設、及び坪堀りを3ヶ所程度開始する。  
調査員栗野・泉本2名
- 2月5日 器材小屋完了。坪堀り
- 2月6日 1区器材小屋北側崖面削り。2mグリッドを2区1~19まで割付け。
- 2月8日 1区3・5・6・7・9・11・12・13・14・15・16・17・18・19を掘り下げ、  
20は古墳があると地元の人が話していたところへトレンチを設定。横穴式石室を  
発見する。
- 2月9日 1区16・17の部分南北方向トレンチ設定掘り下げ、住居址の北端部、南端部確認。
- 2月10日 2区6・7・8の発掘、弥生式土器、備前焼破片出土。
- 2月12日 1区20横穴式石室の反対側壁確認、石室巾1.70m、2区道路より西側15・16・17  
・18・19・20・21・22掘り下げ、

## 二宮大成遺跡

- 2月13日 1区20奥壁の西方トレンチ掘り下げ、2区13・14・23・24を掘り下げ。13は黒色土を確認。14は土器多し。
- 2月15日 平板測量及びオフセットによりグリッドの位置を全体図に記入する。2区25は谷の部分で深いので最後になったが写真撮影・実測、以上で第一次トレンチ調査終了。

### 第二次発掘調査日誌抄

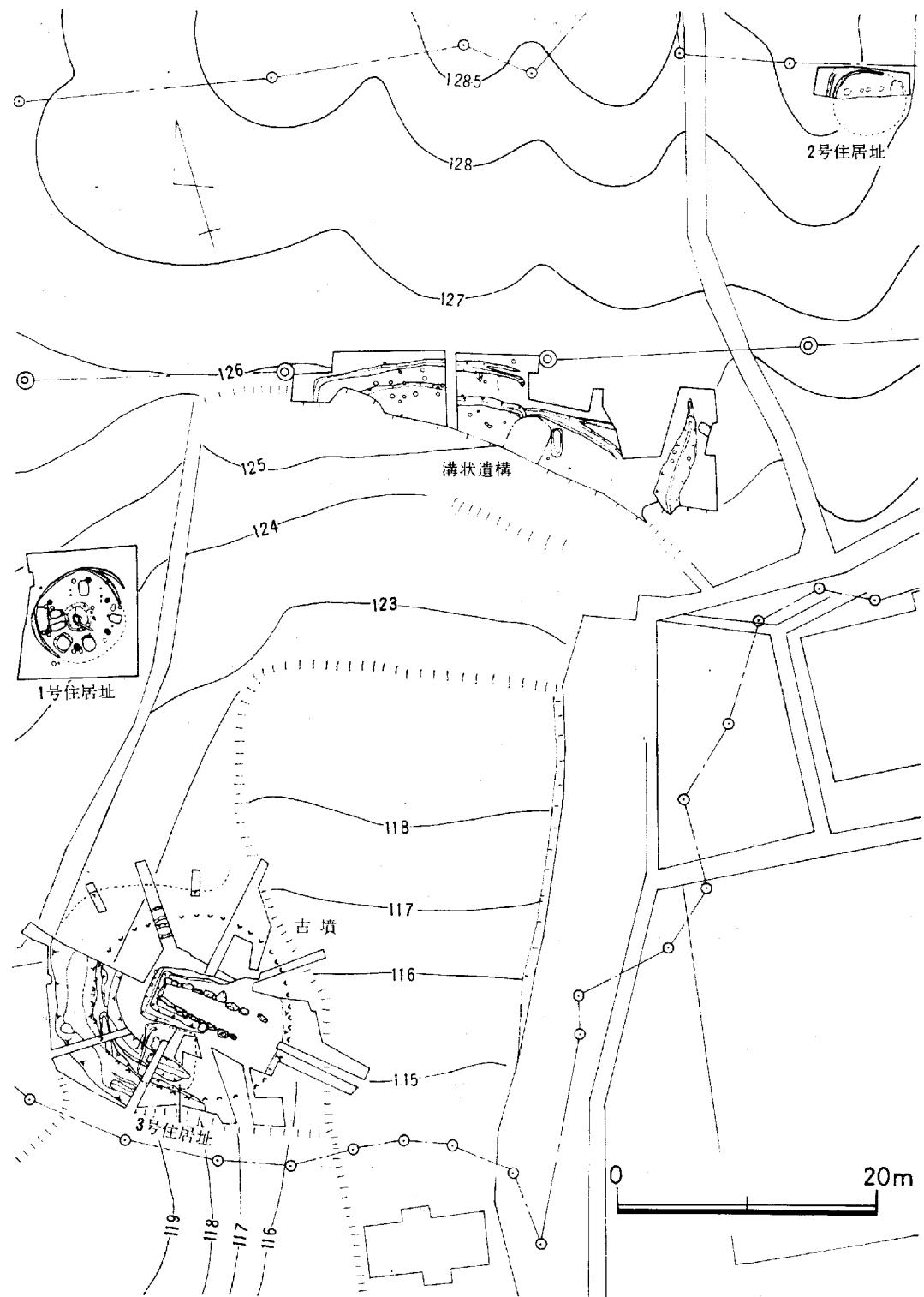
昭和46年

- 11月5日～6日 領家遺跡で器材準備。
- 11月8日 器材運搬、草刈り。
- 11月9日 栗野・山磨の二名の調査員で発掘開始、1区で発見された住居址のトレンチ清掃ののち住居址の範囲全体の表土除去作業。
- 11月10日 <1区>1号住居址表土除去作業及び検出を行う。擾乱のためプランが明確でなく、さらにトレンチによりプランの確認を行う。古墳の第3トレンチの清掃を行う。墳丘の直径は20m程度と思われる。
- 11月11日 1号墳地形測量開始、第3トレンチ北半部掘り下げ。石室内掘り下げ。
- 11月12日 1号墳地形測量完了・第1～3トレンチの排土は北東の谷部分に運搬。
- 11月13日～15日 1区古墳石室内埋土発掘。
- 11月16日 1区古墳第4・5・6・7・8・9・10トレンチ設定・石室内発掘。
- 11月17・18日 <1区>1号住居址内炭化材検出、掘り下げ、古墳第5・9トレンチ掘り下げ中、奥壁上部断面写真、レベル、<2区>C・Dトレンチ掘り下げ中。
- 11月19日 <1区>1号住居址、東西・南北土層断面観察・写真・実測。古墳第4・6・7・8・10トレンチ発掘、<2区>A・Bトレンチ発掘2区グリッド設定
- 11月20日 <1区>1号住居址東西・南北土層断面実測、古墳第4・6・7トレンチ掘り上げ壁面清掃、<2区>Aトレンチ発掘完了。
- 11月21日 <1号住居址>土手除去作業<古墳>第7トレンチ発掘終了。
- 11月22日 1区<古墳>石室内掘り下げ。奥から陶棺出土これを1号陶棺として前にあるのを2号3号とした。勾玉・ガラス玉など出土。<1号住居址>遺物出土状況写真撮影全面清掃。<2区>トレンチからの排土を東方の谷部に運搬。
- 11月23日 <1号住居址>炭化材など写真撮影。<古墳>石室内掘り下げ、一号陶棺付近から須恵器多く出土。石室の入口付近は石を抜き取られている。第3・4トレンチ壁面清掃、土層断面観察、第6・9トレンチ発掘中。<2区>Dトレンチ黒色土層掘り下げ中。
- 11月24日 本日は調査員連絡会議で二宮大東遺跡見学。1区古墳、石室内発掘中、第7トレンチ拡張区発掘開始。

## 二宮大成遺跡

- 11月25日 1区<古墳>石室内発掘陶棺破壊状況写真撮影。<1号住居址>炭化材出土状況写真撮影、細部写真終了、実測用の水糸割付け。
- 11月26日～30日 1区<古墳>原位置でない陶棺の破片取りはずし遺物出土状況写真撮影、実測開始、遺物取上げ、第9トレンチ東側拡張区掘り下げ、トレンチ11～14設定、周辺の外側確認。<1号住居址>平面図実測ほぼ終了、遺物取り上げ。<2号住居址>工事用道路の作業中、1区北東端にて住居址を発見し発掘開始。全形の1/6ぐらいしか残っていない。
- 12月1日 1区<1号住居址>柱穴・土壤掘り下げ。<2号住居址>床面清掃柱穴一段下げ、古墳石室内陶棺出土状況・平面図作成
- 12月2日 1区<1号住居址>平面図補足ピット掘り下げ、2号住居址とA地点、溝1写真撮影。<古墳>陶棺断面図作成
- 12月3日 <1号住居址>土壤、柱穴掘り下げ中。<2号住居址>断面図実測、A地点南北トレンチ設定東西方向の溝発見、さらに西への延長を追求。
- 12月5日 <1号住居址>ピット1掘る。<A地点>トレンチで溝の追求。<古墳>陶棺断面実測、1号陶棺、棺の下から須恵器坏出土。
- 12月6日 <1号住居址>土壤・柱穴掘り下げ、レベル設置、断面図作成。<2号住居址>柱穴掘り部分掘り上げ。<A地点>全面調査のため表土はぎ開始。<古墳>第3トレンチ水系はり。<2区>本日より泉本調査員が入る。トレンチにより焼土・柱穴を確認した場所の拡張を行う。
- 12月7日～8日 <1号住居址>平面図補足実測中。<2号住居址>レベリング終了。<A地点>表土除去のうち黒色包層発掘。<古墳>第4・5・9トレンチ実測用水系張り。
- 12月9日～15日 1区<1号住居址>床面写真、炭化材除去、六本の柱穴掘り、全景写真、中央ピット写真・実測、ピット断面実測写真、レベリングのうち貼床を取り除く。柱穴があらたに出現、発掘のうち実測、通しの断面図完了。<A地点>溝を掘り上げ、溝2～5とする。柱穴掘り下げ。<古墳>3・4・5・7・9トレンチ実測、9～10の間平面掘り、平板実測、1号陶棺断面図作成、1・2・3号陶棺取り上げ、石室内掘方検出、うらごめ部分掘り上げ。
- 12月16日～19日 <1号住居址>掘り上げ全景写真撮影、補足実測完了。
- 12月20日～25日 <A地点>平面図作成しベーリング完了。<古墳>実測図補足写真撮影完了、石室方位計測。<3号住居址>古墳の墳丘内に発見掘り上げ実測のうち完了。<2区>終了、トラックで器材運搬

二宮大成遺跡



第4図 1区遺構全体図 (1/500)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 1区の概要

1区検出遺構は、1堅穴住居址、2溝状遺構、3横穴式石室古墳と分類できる。堅穴住居址は弥生時代後期～終末期に比定でき、特に1号住居址は火災により廃棄されており、出土遺物の一括資料としては意義がある。溝状遺構は弥生時代中期～後期終末と古墳時代後期の二時期の遺構である。横穴式石室古墳は盗掘により半壊状態であったが、多くの副葬品とともに、3棺の陶棺が出土した。これらの出土遺物は、古墳時代後期の陶棺埋葬古墳の追葬形態をよく現わしていた。

#### 1) 堅穴住居址

##### 1号住居址（第5・6・7図）

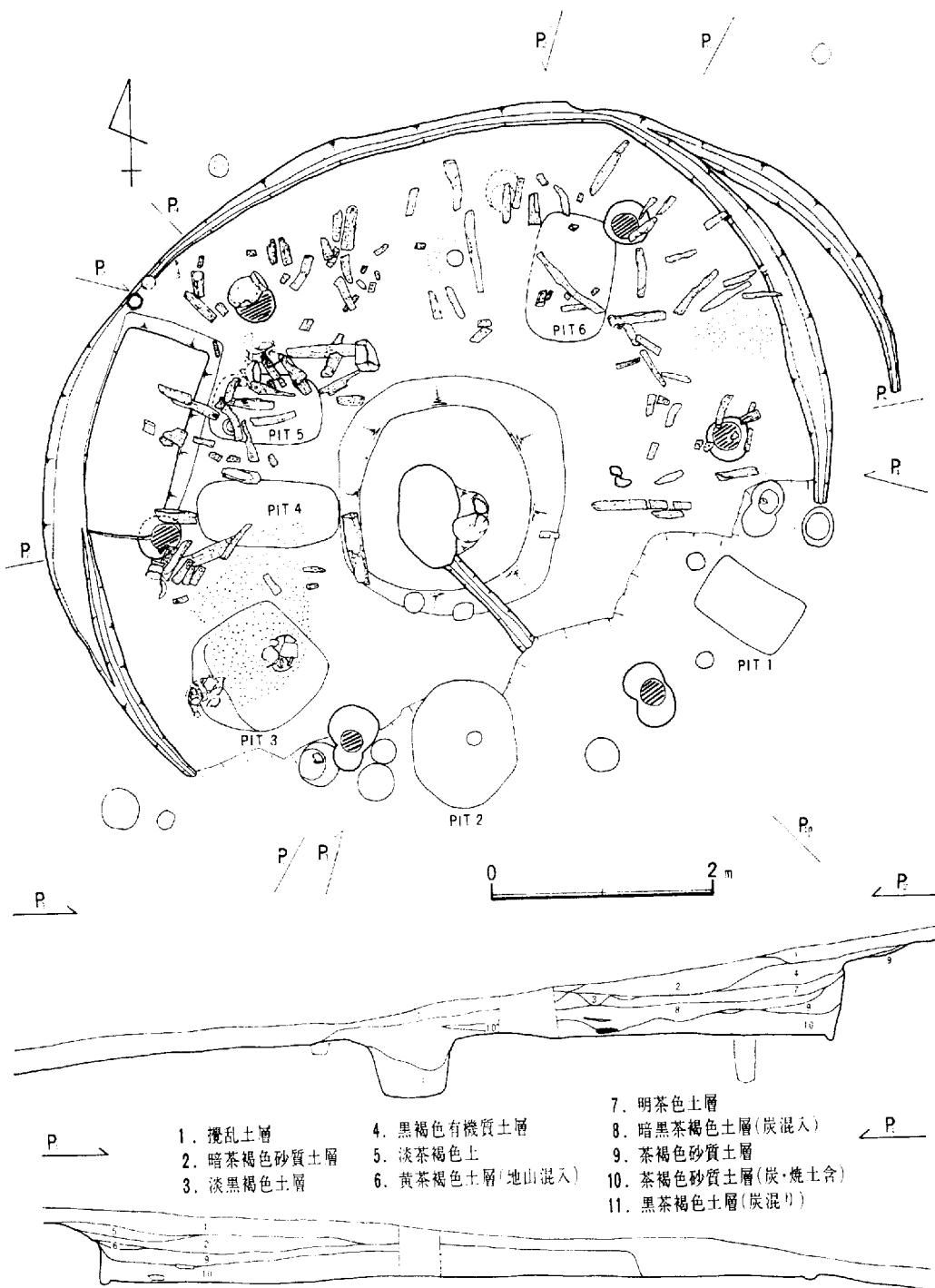
1号住居址は第1次グリッド調査により火災にあった住居址の存在を確認した。1区中央部の丘陵平坦面よりやや尾根に下った南緩斜面上に位置する。

住居址は火災により放棄された状況で掘り込み全面より炭化した家屋構造材と多量の焼土が出土した。南斜面上に位置しているため住居址南半分は削平され、南端では床面も削平されている。住居址の残存掘り込みは北側で床面まで65cmを測り、南に向って削平により、漸次低下している。平面形態は円形に近い形と推定され残存最大径は7.3cmを測る。壁下の溝と床面が東西の一部で重複しており建直しがみられた。最終床面は旧面より5cm程度深く掘り下げ、貼床を行ないほぼ水平である。

壁下の溝は上端巾20cm前後、底部巾は東よりやや広く15cm、その他は5cm前後、床面よりの深さ5cm前後を測る。溝底部レベルは北西部を最高とし南側の両端削平部分まで-5cmを測り、除々に下降している。住居址内西側の壁に接し長方形のベッド状遺構を設けている。上端巾1.85×0.8m、下端巾2×1m、床面よりの最大高20cmを測り、貼床と同様の土を使用して盛土している。ベッド盛土、及び周辺貼床除去後にはベッド下端周辺に巾10cm、深さ5cm前後の浅い溝が開っていた。又、壁に接した部分では壁下の溝を検出した。ベッド状遺構を伴う住居址は、美作地域で数例みられるが、いづれも住居址内周辺に段状に設けたものであり、本住居址のベッド状遺構とは異なっている。（註1）本住居址のベッド状遺構は寝床としての機能よりも住居内の床間的な施設と考えるのが妥当であろう。

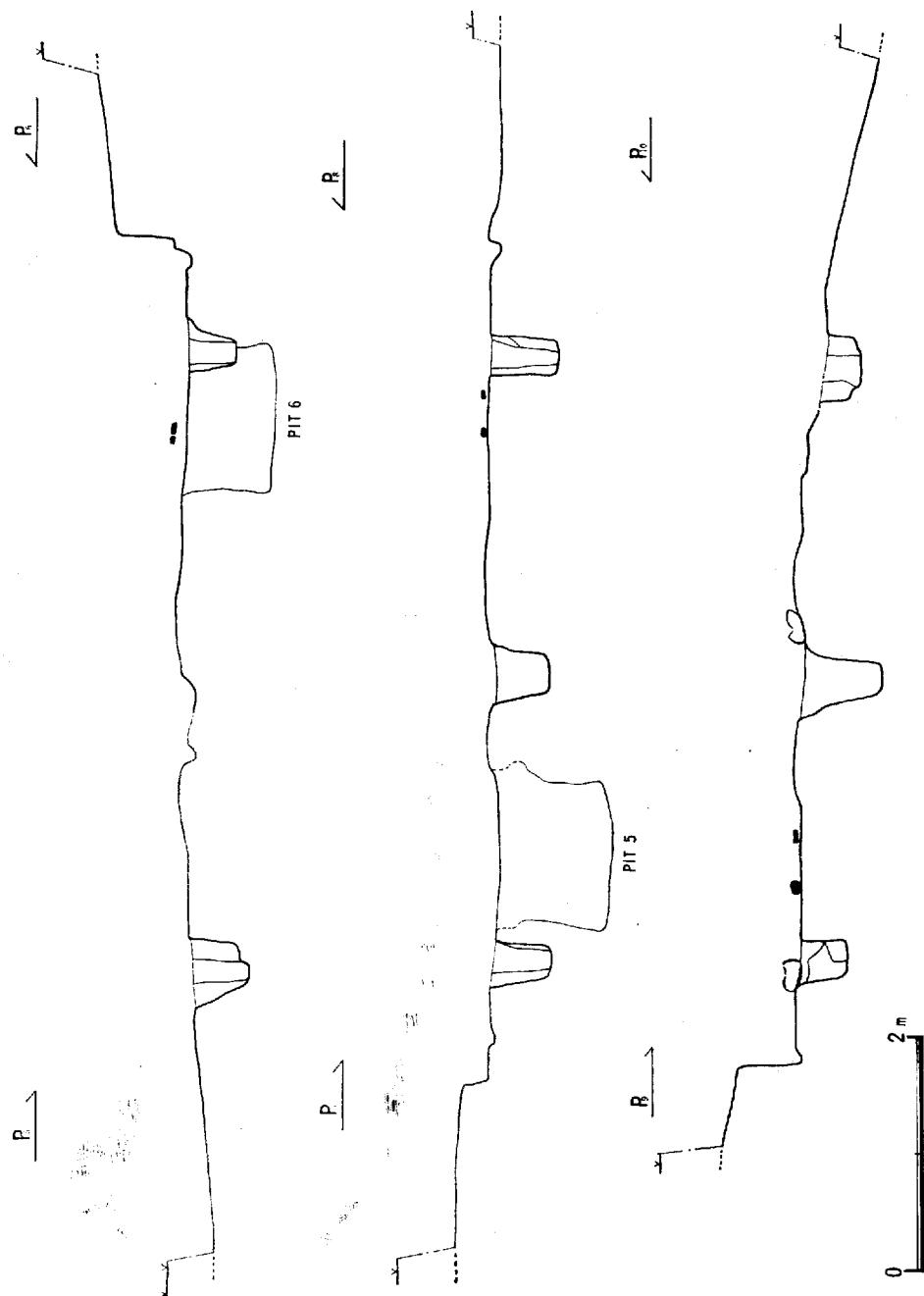
柱穴A～Fは住居址最終時期の明瞭なものである。間隔はA B間3.5m、B C間2.1m、C D間2.5m、D F間2.8m、E F間2.5m、F A間2.2mを測る。A B・A F間、及びC E・E F間はほぼ等間隔で、A B間は他よりかなり長い間隔を設けている。柱穴総数は掘り込み内に44、掘り込み外北側に1、南側に2の計46を検出した。大きさは径30～40cm前後と径10cm前後に分

二宮大成遺跡



第5図 1区1号住居址平面図・土層断面図 (1/60)

二宮大成遺跡



第6図 1区1号住居址断面図 (1/60)

## 二宮大成遺跡

類できるが、小柱穴については、住居址との関連は確認できなかった。最終時期の柱穴A～Fの周辺には貼床面下より、2本前後の柱穴が一単位として確認でき、住居の建て直しの状況を現わしていた。

他に住居址内には中央ピットと周囲の柱穴間に6個の貯蔵用ピットを確認した。以下ピットについて記述する。（第7図）

中央ピット：住居址床面のほぼ中央に位置し、上面95×55cm、ピット内面は焼けた状態ではなく、下層に炭を多く含み、上層には床面下層と同様の炭・焼土が堆積していた。中央ピット周囲には2.2×2m、巾50～80cm前後の浅い縁堤状の施設を設けている。又、中央ピット南端縁より巾15cm、深さ4cmの浅い溝を南側の床面削平部分まで検出した。溝の底部レベルは中央ピットより南へと下降している。

中央ピット周囲の縁堤状の土手除去後に中央ピットの南に接して同様のピット2ヶ所と北側に浅い溝状遺溝を検出した。南側に接して検出した2ヶ所の旧中央ピットは最終時期のピットと同様に埋土に多くの炭を含んでいる。

ピット1：住居址南西部の床面削平部分に位置する。掘り込みは長方形を呈し長径90cm×短径60cmで、現存深さ60cmを測る。底部はほぼ水平である。断面は底部がやや広く、わずかに袋状を呈している。伴出遺物は下層より、小形壺2個体分と他の口縁部片が出土した。

ピット2：柱穴D・E間に位置する。ピット上面は削平されており、わずかに北端の一部が残存していた。掘り込みは隋円形を呈し、長径115cm×短径92cm、深さ115cmを測り、底部はほぼ水平である。ピット内堆積土の北端上面には厚さ5cm程度の貼床を検出した。断面は底部が南にやや広く袋状を呈している。伴出遺物は中層より河原石2個、土器片が出土した。

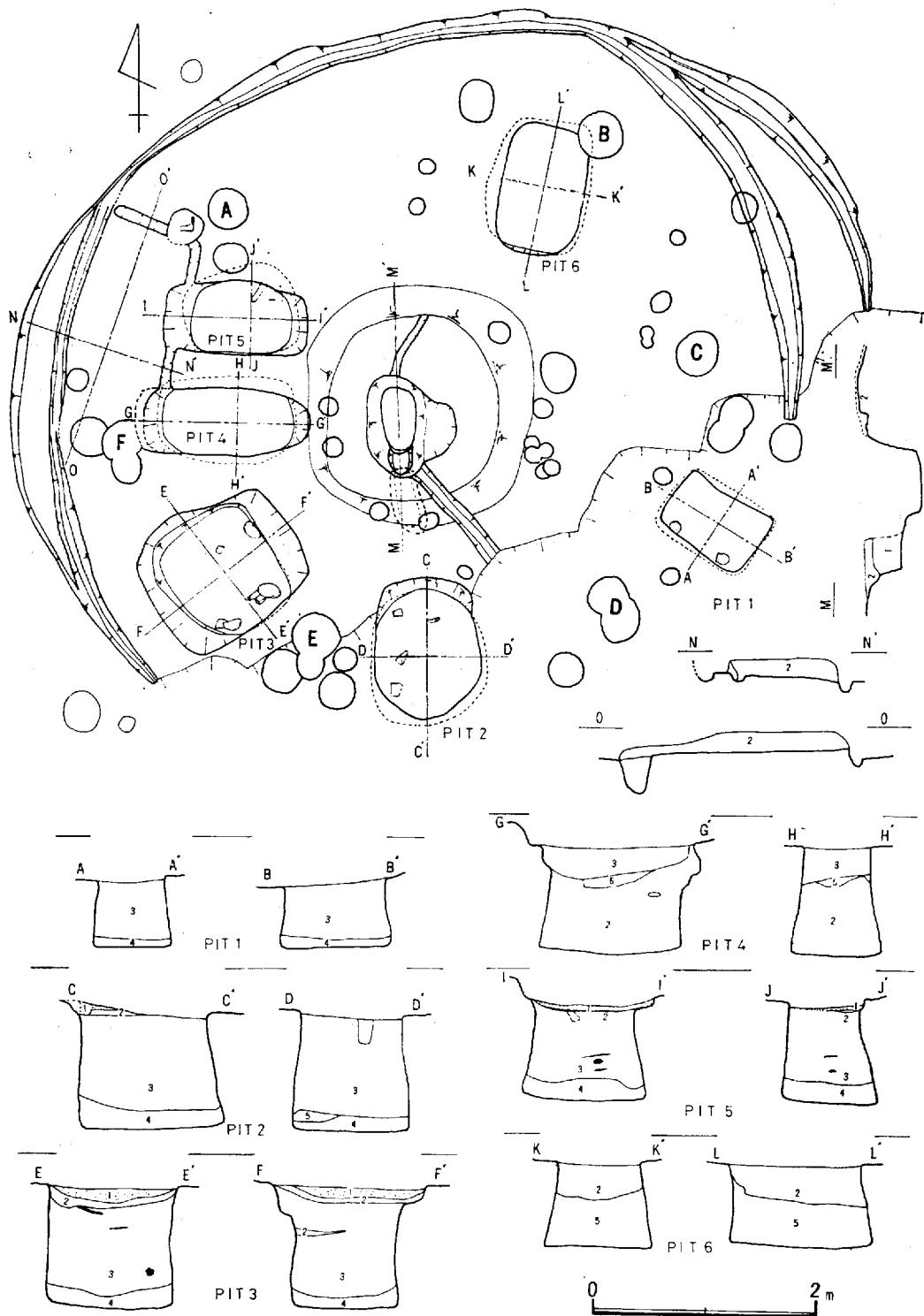
ピット3：柱穴E・F間に位置する。ピット上面は5cm程度の貼床層があり、土圧により中心部で10cm程度落込んでいる。貼床面除去後は100×110cmの方形に近い形を呈し、両端に浅い段を設けている。床面よりの深さ110cmを測り、底部のやや広い袋状ピットを形成している。底部は水平である。伴出遺物は中層より河原石7個と土器が出土した。

ピット4：ベッド状遺構と中央ピット間に位置する。中央の掘り込みは長円形を呈し、長軸120cm×短軸60cm、床面よりの深さ100cmを測る。長軸の両端にはピット3と同様に段状の掘り込みがみられる。断面は底部が広い袋状を呈し水平である。伴出遺物は河原石2個と高坏片が出土した。

ピット5：ピット4と同様にベッド状遺構と中央ピット間に位置し、ピット4とは30cmの間隔を置き平行に検出した。中央の掘り込みは長円形を呈し、長軸90cm×短軸70cm、床面よりの深さ90cmを測る。ピット3・4と同様に長軸の両端に段状の掘り込みがみられる。ピット上面には薄い貼床が施されていた。断面は底部が北に向って広い袋状を呈している。伴出遺物は中層より河原石3個と壺頸部片が出土した。

ピット6：住居址掘り込みの北よりに位置し、ピットの北東隅を最終時期の柱穴Bが切っている。上面は長方形を呈し、長軸72cm×短軸75cm、床面よりの深さ75cmを測る。断面は底部が

二宮大成遺跡



第7図 1区1号住居址平面図・断面図 (1/60)

## 二宮大成遺跡

- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| ① 炭焼土混り土             | ④ 黄褐色，白褐色粘質土層 |
| ② 白黄褐色粘質土層又は（床面）土層   | ⑤ 黄褐色粘質土層     |
| ③ 暗褐色粘土層（炭・黄色地山土を含む） | ⑥ 暗茶褐色粘質土層    |

やや広い袋状を呈している。遺物は皆無である。

住居址出土遺物は床面周辺より炭化した家屋構造材が出土した。炭化材は中央に向ったものが多く、ピット5付近では組込まれた炭化材も出土した。しかし、家屋のどの部分に当る炭化材かは明瞭に確認できなかった。焼土は柱穴B・C間とピット3・4間に多量に出土した。

床面出土土器は柱穴A・F、ピット5付近に一個体分出土した。

ピット3上面では、削平により底部のみ2個体出土した。他に中央ピットに接して一個体分の出土がみられたが軟質のため取上げられなかった。その他の遺物としては、ピット5内側の段状掘り込み部分より完形の鉢一点が刃先を下にして出土した。又ピット5のやや北東よりには大形の砥石が置かれていた。

1号堅穴住居址は住居址東と西に高さの異なる旧床面及び周溝が残存していることや、A～D柱穴のそれぞれ周辺に2本程度の柱穴が床面下より検出したこと。中央ピットの2回の造り替え、及び袋状ピットの個数と切合の状況等より、火災による廃棄以前に最底2回の大規模な建て直しが行なわれたことが考えられる。

6個の袋状ピットは、ピット1と6、ピット2と3及びピット4と5がそれぞれ最終床面より同一の深さを測り、上面及び断面の形状が類似している。ピット6は北東隅を柱穴Aが切り、ピット1は最終時期の周溝の推定延長と重複する位置にあり、最終時期には共存はありえない。ピット1・2・3・5はピット上面に黄褐色粘質土の貼床が行なわれており、又最終床面の残っていたピット2～6の上面には火災による焼土・炭化材が堆積していた。このような状態から考えて、火災による住居址廃棄のおりには、すでに6個の袋状ピットは人意的に埋土されていたものと考えられる。又、前述の同形態のピットの新旧は、住居址建て直しに伴う床面の掘り下げ、及び中央ピットのレベルの低下からピット1・6→ピット4・5→ピット2・3と順次造り替えが行なわれたものと推察される。

### 床面上の土器（第8図）

多くの土器が非常にもらくなってしまっており、復元実測の可能なものは8点であった。器形では壺・甕・台付甕・小形壺・高杯等が確認できた。

#### 壺・甕

(1)はピット5の北側に破碎された状態で出土した。口径16.5cm・高さ2.8cm前後、底部径4cmを測る。口縁部は大きく外反したのち、やや外傾しながら立ち上っている。立ち上り、外面には4本の平行沈線を施している。胴部外面には縦のハケ目が施され、内面は胴部上端までへラ削りされている。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含んでいる。(2)は柱穴Aに接して出土した。口径16cm、高さ32cm前後・底部径4cmを測る。口縁部は(1)と同様大きく外反したのちやや外傾して立ち上っている。立ち上り外面は荒れており、施文の有無は確認できなかった。胴部

## 二宮大成遺跡

外面は剝離面が多く、一部で縦のハケ目が施されているのが確認できた。内面はヘラ削りされている。淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を幾分多く含んでいる。(3)は(1)と同様ピット5の北側で破碎された状態で出土した。口径13.5cm、高さ18cm前後、底部径3cmを測る。口縁部は外反したのちほぼ垂直に立ち上り外面には文様を施していない。胴部外面は縦のハケ目が施され内面はヘラ削りされている。焼成は本住居址出土の中で最も良好で赤褐色を呈している。胎土には幾分多く砂粒を含んでいる。(4)は北東部の周溝上面、(5)(6)はピット3の上面より出土の底部片である。(4)は器が荒れており整形不明である。底部径は3cmを測る。(5)の内面はヘラ削りされ、黒灰色を呈し、外面は丹塗りされている。胎土に砂粒が多い。底部径は6.5cmを測る。(6)の外面は縦のハケ目が施され、胴下部には指頭圧痕がみられる。内面は器壁があれ、整形不明である。胎土に砂粒が多い。底径部は8.5cmを測る。

### 台付塊

(7)は14cm前後、底部径11cmを測る。口縁部はやや曲折しながら外反している。脚端はくせがなく終っている。淡灰褐色を呈し、やや軟質な土器である。胎土には他の土器と異なり、精製された粘土を使用しており、きめが細かい。

### 小形壇

(8)は本住居址唯一の完形品で(1)(3)と同様ピット5の北側より出土した。口径6.5cm、高さ9cm、底部径3cmを測る。口縁部はくせがなく外反しており、内外面ともにナデ整形が施されている。色調は淡赤褐色を呈し胎土焼成とも良好である。

他に住居址床面出土の土器には高坏片・壺口縁部片等がみられるが、実測不可能な小片であった。

### 床面下の土器

#### 壺

(9)はピット1下層より出土した。口径10cm前後、高さ7.4cm前後、底部径4.5cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部で丸味を持っている。胴部外面は縦のハケ目が施され、内面はヘラ削りされている。色調は内外面とも灰色を呈し、胎土に幾分多く砂粒を含んでいる。図示できなかつたが同一ピットより、小形壇が出土している。

他に、柱穴A付近の床面下の柱穴内及びピット1・5下層よりは壺頸部に凹線文を施した同一個体とみられる破片が出土している。

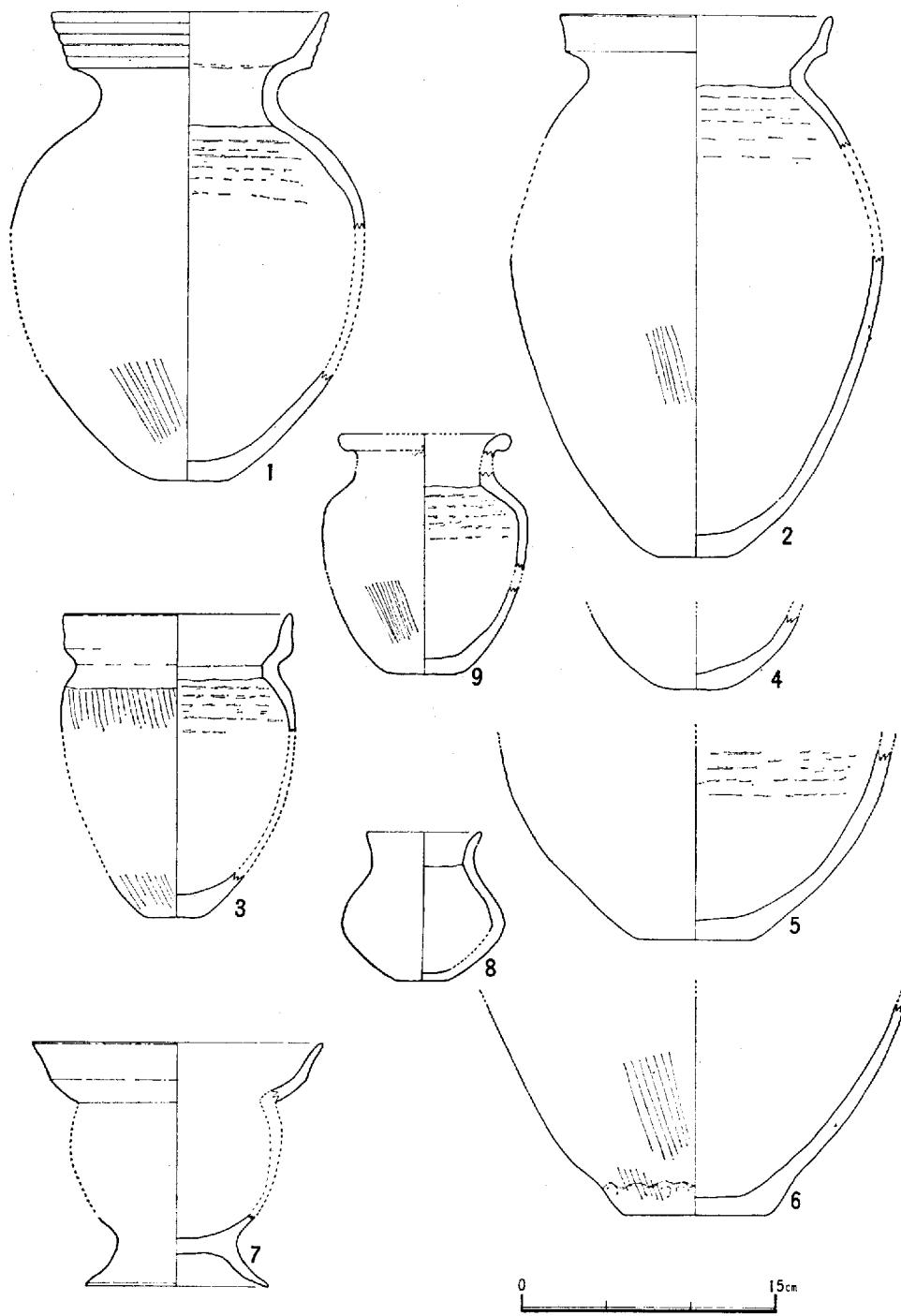
### 石器(第9図)

砥石 (1)はピット2付近で攪乱により、床面より遊離した状態で出土した。現存長12cm、巾4~5cm、厚さ1~1.5cmを測る。小形の砥石である。研ぎ痕は二面に認められ、きめ細かい砂岩である。(2)は中央ピット北より、床面に接して出土した。長径28cm×短径17cm、厚さ15cmを測る。大形の砥石である。研ぎ痕は上面のみでやや荒い花崗岩類の石である。(註-2)

### 鉄器(第9図)

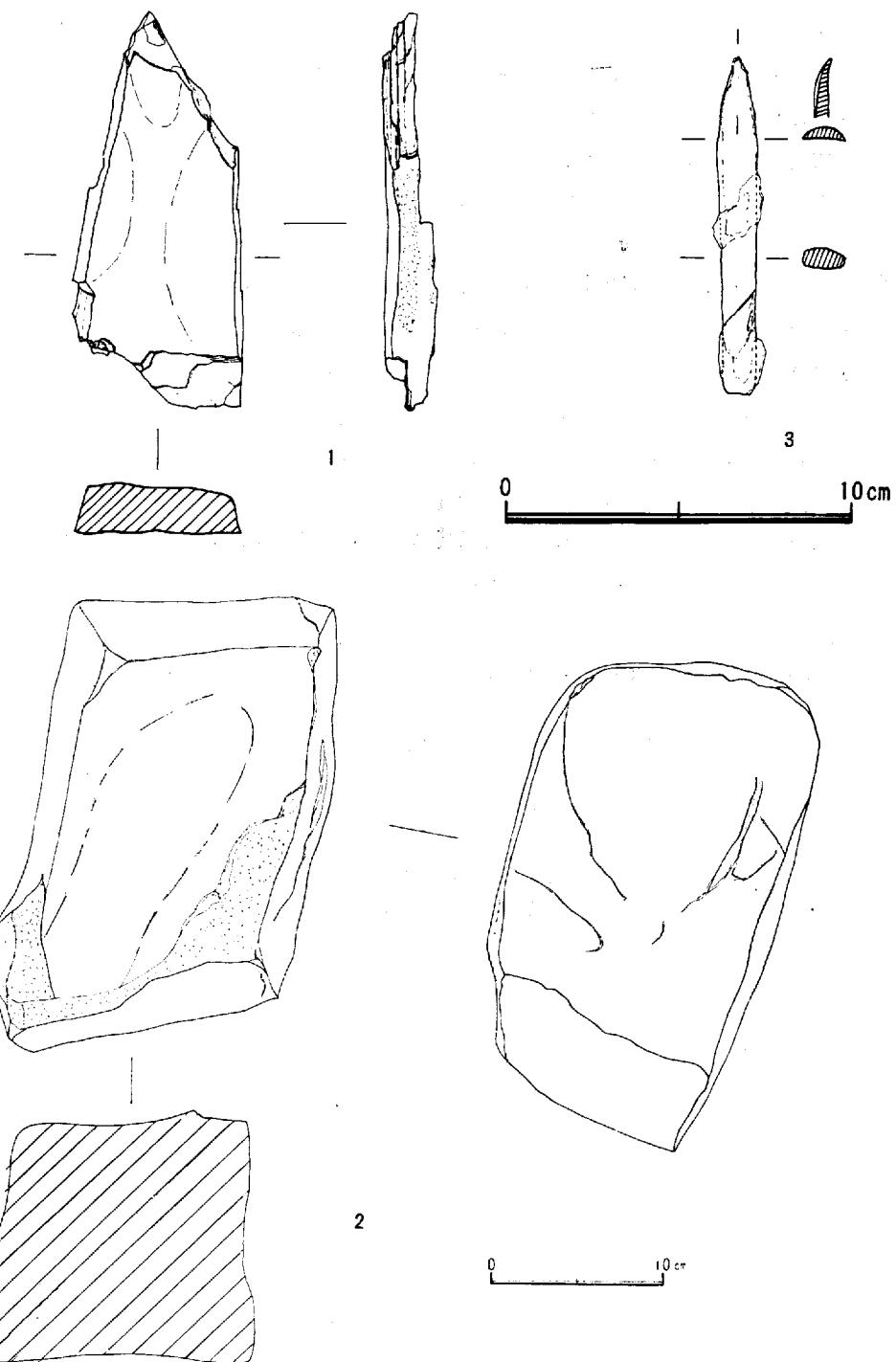
鉈 ピット内側の段状の掘り込み部分に刃先を下にした状態で出土した。全長9.8cm、巾1.3

二宮大成遺跡



第8図 1区1号住居址出土土器 (1)

二宮大成遺跡



第9図 1区1号住居址石器・鉄器 (1, 3, 1/2・2, 1/4)

## 三宮大成遺跡

cm前後を測り、尖端部が5mm程度そっている。刃は尖端部両側に1.7cm程度つけられ、柄部分には一部木質が認められる。

本住居址は火災によって廃棄された状況から遺物の一括資料としては意義がある。しかし、住居址南端は削平されており一住居の全ての遺物とはいがたい。

住居址床面上の土器の器形特徴は、胴部外面のハケ目整形、内面のヘラ削り整形が多くの土器に認められ、さらに壺・甕の二重口縁と口縁部の上方向への拡張が顕著に認められる。土器底部径は3～4cm前後で小形化しており、台付壺の脚端はくせがなく終っている。器壁外面の装飾は少く(1)の口縁部に平行沈線が認められただけであり、全体的に簡素なつくりが認められる。器形の簡素化は、住居址ピット5・床面下の柱穴出土の壺頸部片に凹線文が施され床面上の土器には認められない点からも器形の変化が把握できる。

以上のような器形特徴は美作においては比較検討すべき充分な公表資料がみられない。したがって周辺地域の出土資料を参照すると、瀬戸内地域の酒津式土器・美星町五万原遺跡出土土器等に類似しており、又、山陰地方の鳥取県福島遺跡出土土器等にも類似点が認められる。

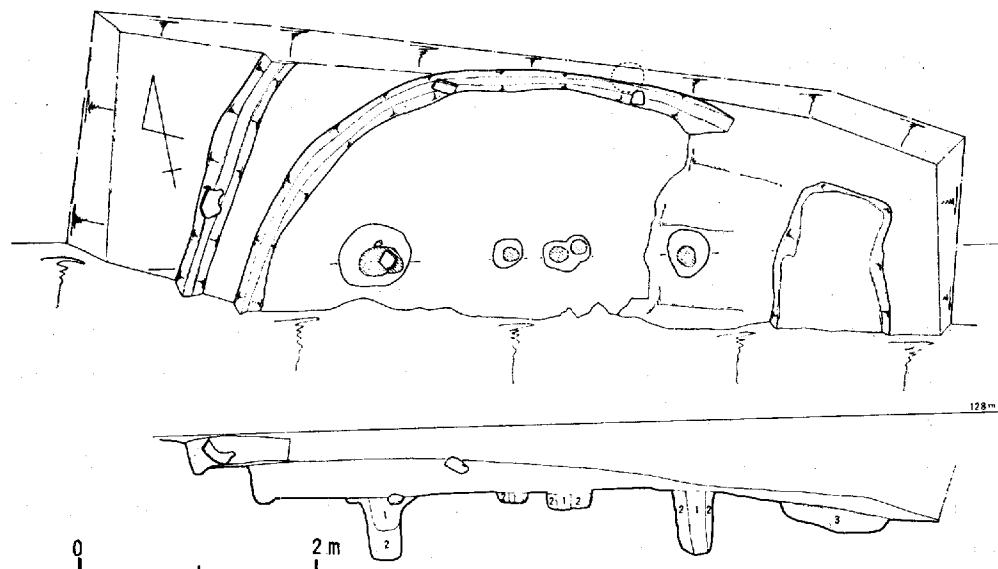
(註3)これら的事柄から本住居址は弥生時代後期に数回の建て直し後、弥生時代終末酒津式土器併行と考えられる時期に火災により廃棄されたと考えられる。

註1 美作地方で住居址にベッドを設けた類例として以下の遺跡をあげることができる。津山市天神原遺跡、英田郡美作町鎌倉山遺跡、勝田郡勝央町小中遺跡、真庭郡落合町赤野遺跡、宮ノ前遺跡などである。

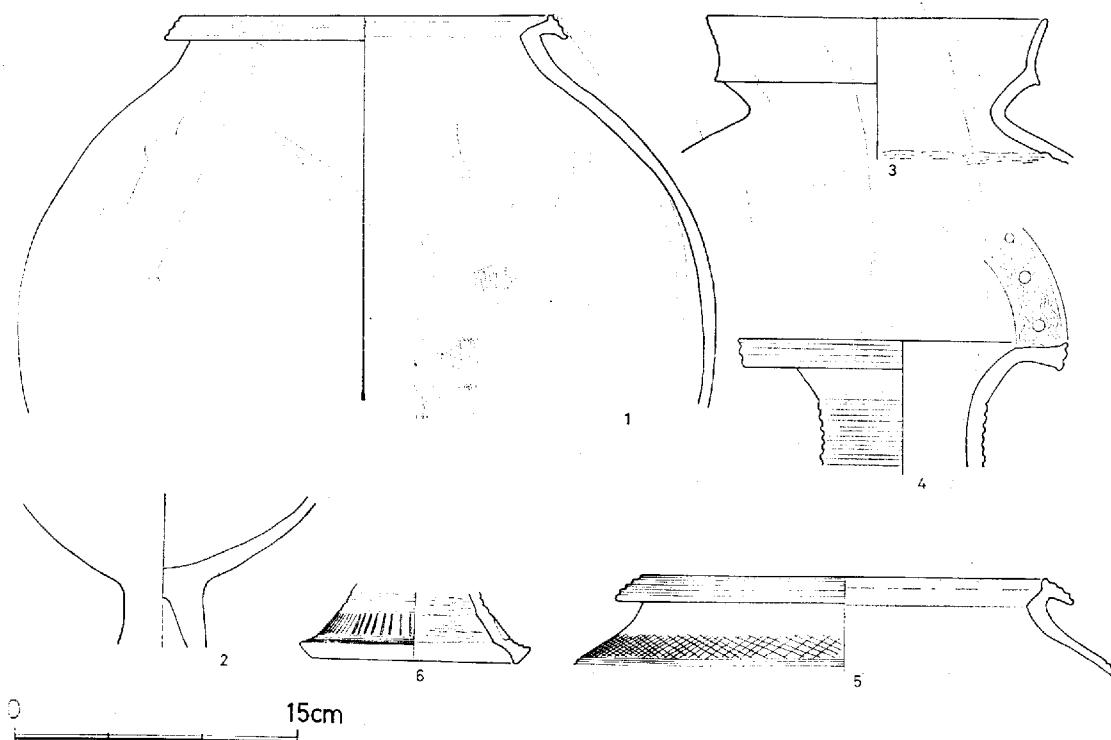
註2 壺穴住居址の床面に密着した大形の石はその形態から調理用、工作用の用途を持つものと考えられる。本住居址出土のものは砥石の項目で取り上げたが調理用の台石状のものとも考えられる。県北の出土例は、落合町西原遺跡・津山市野介代遺跡、押入西遺跡、天神原遺跡、勝田郡勝央町小中遺跡など多くの壺穴住居址より出土している。しかしその用途については充分把握されていない。

註3 間壁忠彦「倉敷市酒津及び新屋敷出土の土器」瀬戸内考古学第2号 1958年。間壁忠彦、間壁謙子、「岡山県美星町五万原遺跡」倉敷考古館研究集報第5号 1968年。杉原莊介、大塚初重編「土師式土器集成」1, 1973年。

二宮大成遺跡



第10図 1区2号住居址実測図 (1/60)



第11図 1区2号住居址(1・2), 溝状遺構B(3), D(4, 5, 6)出土土器 (1/4)

## 二宮大成遺跡

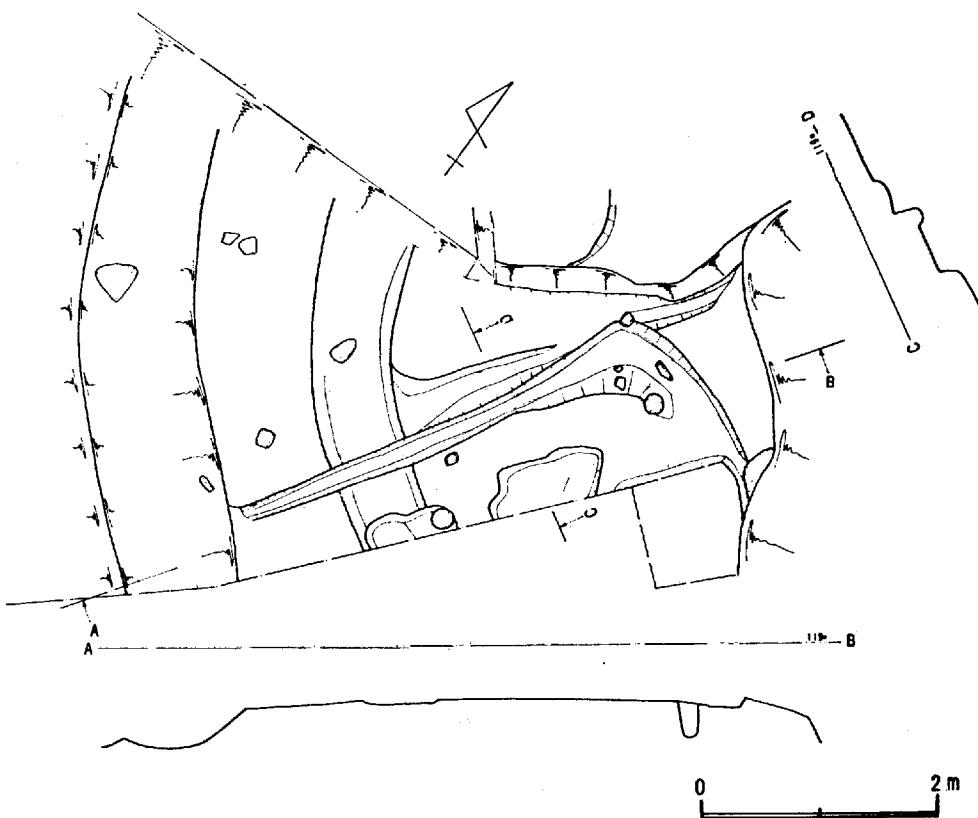
### 2号住居址（第10図）

第二次発掘調査中に工事用道路造成作業のブルドーザーにより発見された。そのため住居址の南半部が破壊された。2軒の住居址が切合っており西側をA、東側をBとする。A住居址は断面観察によつてもB住居址に先行するものであり、やや古い土器片が同溝の上から発見された。この住居址に所属する柱穴はB住居址の北壁にかかる所に点線で示したもの一本だけである。

B住居址は、東半部はすでに畠の腰斜面となっており床面、壁溝は削平されていた。残存部による平面形は正円にはならず、やや隅丸方形に近くなるだろう。推定径5m～5.5m。柱穴は5本発見されたが中央の三本は浅く、東西端の二本が深いのでこの住居址は本来4本柱であったと推定できる。床面はほぼ水平である。

A住居址の出土遺物は甕が一点、周溝上に発見された。（第11図1）赤褐色で最大径は36.6cmで胴部上位にあり肩のはった土器である。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部が上下に拡張、3条の凹線文を施している。弥生時代後期初頭である。

B住居址からは、本遺跡1号住居址出土の（第8図1）口縁端部が上方に拡張し、巾の広い凹線を四条つけた壺形土器と同じ形の破片が出土している。西側の柱穴から出土した高坏（第



第12図 1区3号住居址実測図 (1/60)

## 二宮大成遺跡

11図2)は赤褐色で短脚化している。弥生時代後期終末頃のものである。

### 3号住居址(第12図)

二宮大成古墳の墳丘発掘中に発見した住居址で方形の住居址である。古墳造成のためかなりこわれておらず、現存長一辺3.7mを測る。この住居址に伴う柱穴は確認していないが、C-D断面にかかる凹みは可能性がある。この住居址の西北辺の上の段に巾20~45cmの溝がある。これは切り合い関係で住居址より先行するものであるが性格不明である。

弥生時代後半の土器片が出土しているが細片なので図化しなかった。

### 2) 溝状遺構(第11・13図)

遺構は1号住居址と2号住居址のほぼ中間の南緩斜面上に位置している。調査面積は東西33m前後、南北7~8mと小範囲であったが、総数4本の溝状遺構とピット及び柱穴を検出した。発掘調査時は南側崖面に包含層がのぞいており「A地点」とよんでいた。

**溝状遺構A** 遺構は調査区の東端に位置し、北東から南西方向にやや蛇行して低下し、北端と南端では160cmのレベル差を測る。現存長9.1m、最大巾2m、最大深さ45cmを測り、放物線状を呈した断面である。北端は削平により巾30cm程度しか残存していなかった。遺構中央部では3ヶ所に径30cm程度の浅い掘り込みを検出した。出土遺物は南端の遺構下層全面より多量の炭が出土した。他に遺構内より須恵器片が出土している。

**溝状遺構B** 遺構は調査区の中央に位置し、丘陵南斜面の等高線に平行に東西方向と、両端の南北方向とで成立っている。東西方向は全長16mを測り、わずかに西に低下している。西端の南北方向は1.5mを測り、北端から南端まで10cm程度低下している。上端巾50cm前後、下端巾20cm前後を測り放物線状の断面を呈している。東端は南にやや曲り北側で段を設けている。遺構内出土遺物は西半の2ヶ所程度で河原石とともに土器片が出土した。

**溝状遺構C** 調査区の中央に位置し、溝状遺構Bの3m程南に弓状に連なっている西半の遺構である。現存長13m前後を測り、弓状の遺構が2本やや段を持って連なっている。西端部は現存長7m、巾50~60mを測る。南側の肩は非常に低く、一部では断面段状を呈している。遺構底部レベルはほぼ中央を境に東西に分かれて低下している。東半部分は現存長5.5m、巾60cmを測り、放物線状の断面を呈している。東端の南に曲折した部分は後世攪乱のため確認できなかった。遺構底部レベルは西半部及び切合っている溝状遺構Dより10~20cm低くほぼ水平である。溝状遺構B及びCは黒褐色の遺物包含層が上面に堆積しており出土遺物等からもほぼ同時期の遺構と考えられる。

**溝状遺構D** 溝状遺構Cに連続して検出した東端の遺構である。遺構の切り合い状況より溝状遺構DがCより先行するものと考えられる。南側の遺構は全長8m、上端最大巾1m、平均50cm前後、下端巾30前後を測り、逆台形状の断面を呈している。遺構底部レベルは西端を最高として東端で-40cm前後を測る。東端の北側に1部検出した遺構は現存3m、上端巾40cm前後、下端巾20cm前後を測り、南側と同様逆台形状の断面を呈している。遺構西端のレベルは南

## 二宮大成遺跡

側の遺構より20cm程度高くほぼ水平である。遺構内の明確な伴出遺物は確認できなかったが推積土中より甕・壺等の土器片が出土している。

他に調査区内では径20~30cm前後の柱穴を33個検出し、東半部では長径2.2m×短径0.8m、深さ20~30cmを測る長方形の掘り込みを検出した。出土遺物は小数の柱穴で土器片が出土したのみであった。

溝状遺構B・C・Dに囲まれた南側の部分は平坦面がみられ、又、建物等のまとまりは確認できなかったが、多数の柱穴を検出した。

この様な溝状又は段状の遺構を斜面に設けた例は県内に数例知られ、(註1)津山市押入西弥生遺跡では段状遺構に伴い掘立柱建物が発見されている。(註2)本遺跡の溝状遺構B・C・Dも何らかの付属する遺構を持ったものと考えられ、南側に建物等の遺構が想定される。

溝状遺溝Aは遺構B・C・Dとはやや異なり、遺構内に多量の炭を含み、須恵器片の出土がみられ、時代も下るものである。遺構の性格については不明である。

### 溝状遺構出土土器 (第11図)

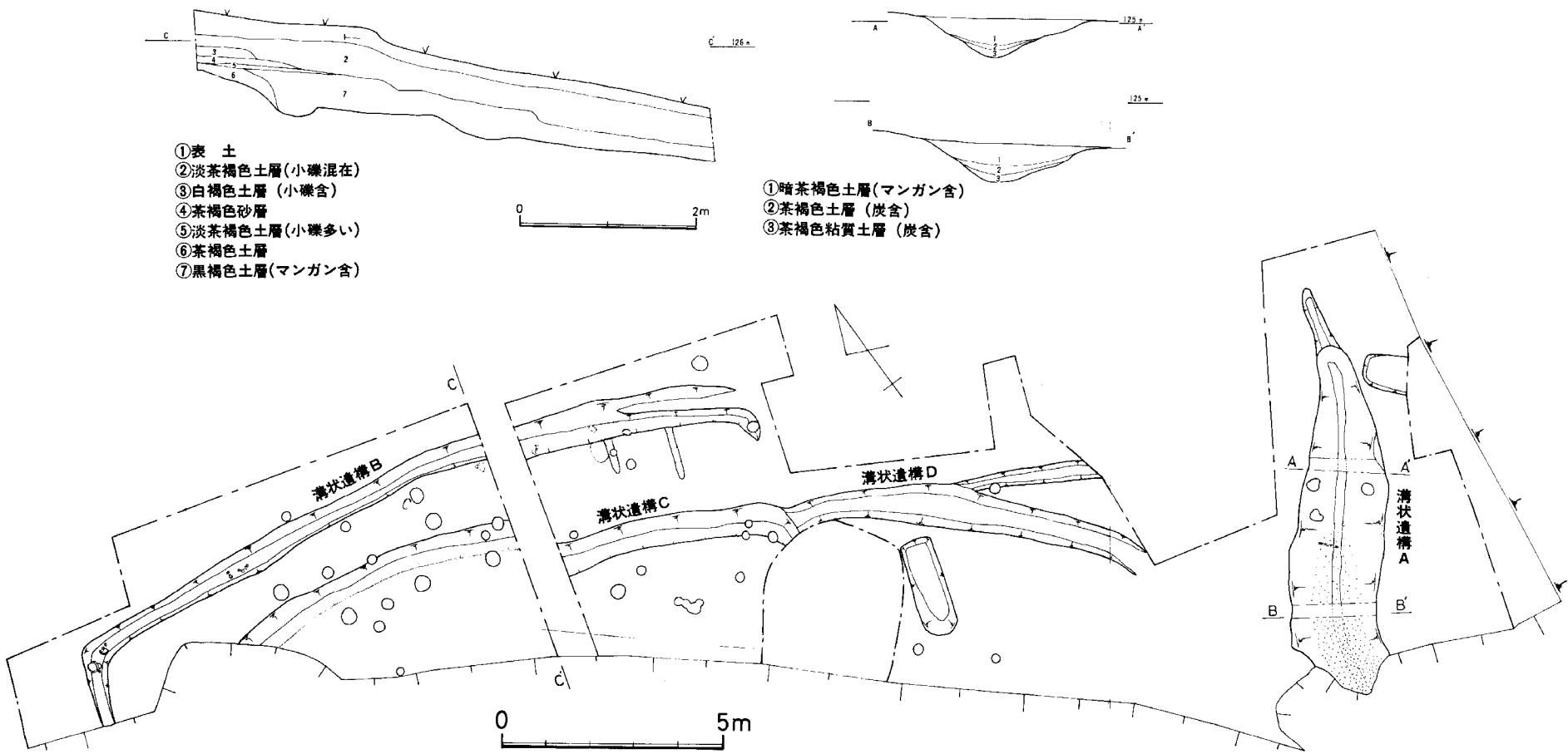
(3)は溝状遺構B内より出土した口縁部片で口径約18cmを測る。口縁部は外反したのち、上方向に外反しながら立ち上っている。二重口縁の土器である。立ち上り外面には文様を施していない。胴部内面はヘラ削りされている。胎土にはやや砂粒が多く、淡赤褐色を呈している。(4)は溝状遺構Dの推積土下層より出土した口縁部片で口径約17.5cmを測る。口縁部は除々に外反し、口縁端部では横に曲折している。口縁部外面には2本の凹線を施し、上面には櫛描波状文と径0.5cm程度の円形浮文を施し頸部には平行凹線を施している。色調は淡茶褐色を呈している。(5)は(4)と同様溝状遺構Dの推積土下層より出土した口縁部片で口径約21cmを測る。口縁部は「く」の字に曲り、斜め下方に下っている。口縁部外面には4本の凹線を施し、胴部外面には斜格子文と凹線文が施されている。胴部内面は上端よりやや下った場所からヘラ削りされている。色調は赤褐色を呈している。(6)は高坏脚部の破片で最大径12.3cmを測る。外面には透しの退化した縦位のキザミが5mm間隔につけられ、その上下には3条づつの凹線が施されている。端部はやや肥厚し、内面の少し上ったところから上はヘラ削りされている。色調は淡茶褐色を呈している。

溝状遺構D推積土下層出土の土器は中期の特徴をよく示しており、津山市押入西遺跡出土の土器等に類似している。(註3)溝状遺構C出土の土器は西側に検出した1号住居址出土の土器に器形特徴が類似しており、同時期と考えられる。

註1 県内で同様の遺構を伴う遺跡としては以下をあげることができる。赤磐郡山陽町県営住宅用地内遺跡、久米郡久米町領家遺跡などである。

註2 岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』1「押入西遺跡」 1973年

註3 (註2)「押入西遺跡」、弥生式土器の項参照。



第13図 溝状構造実測図

## 二宮大成遺跡

### 3) 古墳

#### 立地と調査前の概況（第2・4図）

本古墳を含む一区の南に派生した尾根は西側を二区と境をなす谷が入り、東側も同様に深い谷が入り込んだ地形を呈している。東西を深い谷により切斷された巾約200mの尾根の北側はややくびれて鞍部状になり、南に派生した尾根の中央には浅い谷をいだいている。古墳はこの浅い谷の西側の小尾根東斜面に立地している。古墳の立地する尾根周辺は古く開墾がなされて全て畠地となっており、墳丘は確認できなかった。石室は前土地所有者の開墾時の話から、周辺にトレンチを設定し発見した。又、本古墳より20m南の用地外の同一尾根上にも石材が見られ、所有者の話から横穴式石室古墳と考えられる。

#### 墳丘（第15図）

南へゆるくさがる南北方向の尾根の稜線より4m程下った東斜面に作られており、調査着手前の地形測量では、まったく墳丘らしい状況は認められなかった。当初石室を中心にして8本のトレンチを放射状に設定したところ古墳の範囲は22m×18mの楕円形を呈するもので盛土の範囲をVで示したように墳丘は16m×14mで石室長軸方向にやや長い不整楕円形を示す。その後作業の状況をみながら古墳西南部をほぼ発掘することができた。石室は玄室部分を墳丘のはば中央部に位置するよう築かれている。

山側の高い方にだけ半円形にめぐる溝が2本検出されているが内側溝は墳丘盛土によって埋められており、外側溝が周溝と考えられる。周溝巾1.8m～4m、深さは西北部では旧地形から測って1.9mで一番深く、北側も南側も斜面の低い東側へぬけて馬蹄状を示す。

内側溝は巾1m～1.7m、深さ20～30cmで埋土の状況は地山の黄褐色土が薄く入ったあとで、黒色土・黄色土などのブロック状の土が斜めに入っている。墳丘平坦面の土が水平に盛られているのに対して、内側溝が斜めに埋められていることは、墳丘盛土の最後に化粧土がかけられたものといえよう。

断面観察で特に注意を引いたことは、内側溝に斜めに埋った土は粒子が荒く、周溝に入っている土は粒子が細かい土層であり盛土と堆積土は大別できる。

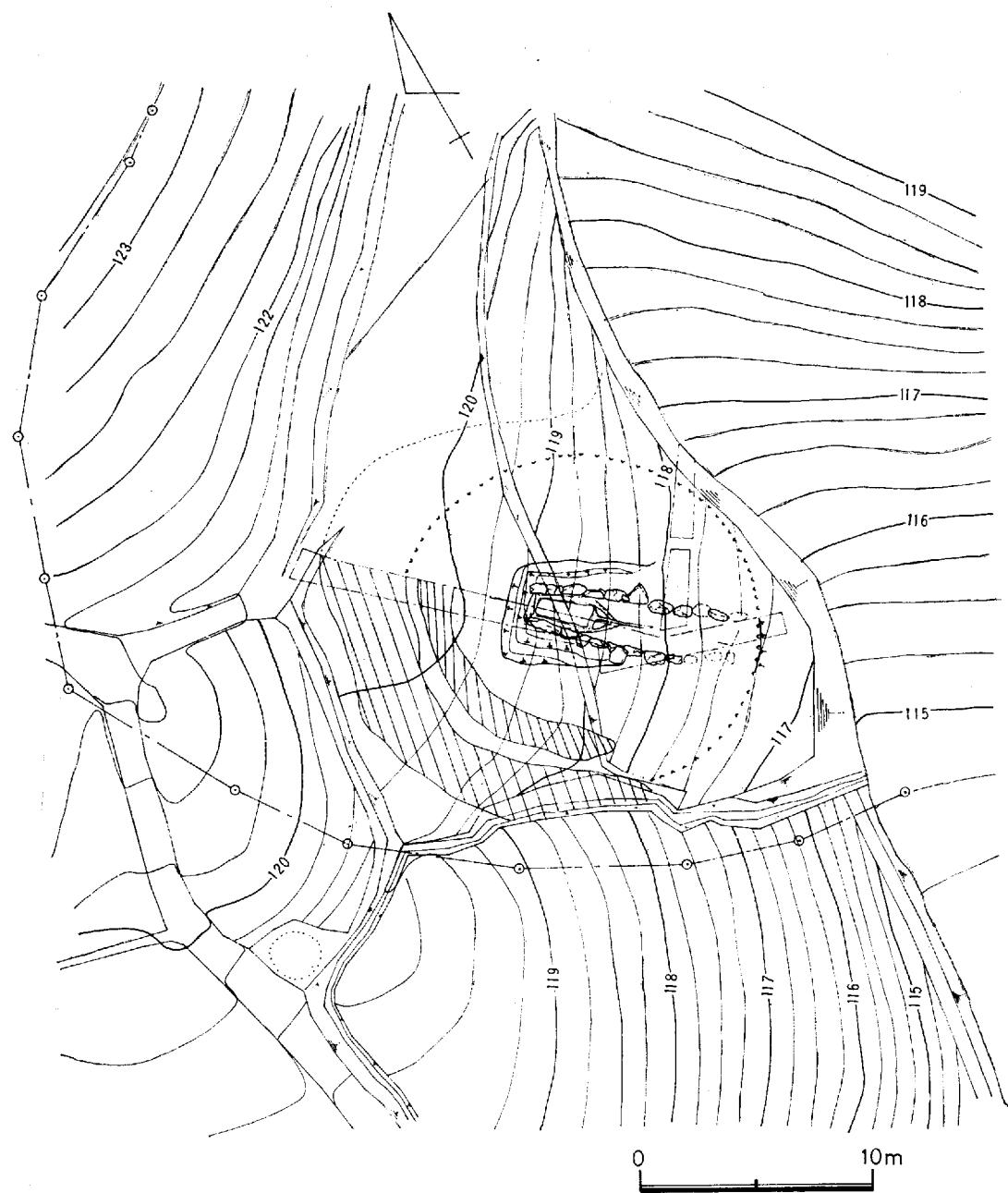
各トレンチ断面図において（第16図）矢印で示したところは、盛土末端部分であり、外側は前記のように自然堆積で人為的盛土とは区分される。

周溝の埋土は第16図②の3層、③の5層、①の西南側周溝（左側）の5層に示されるように途中に黒色土層をはさんで一時的に表土を形成し、時間をかけて埋没していった状態を示している。また④の4層に示されるように谷の堆積土においても見られる現象である。

内側溝の性格は(1)周溝に並行して掘られていることから、本古墳にかかわるものであること。(2)盛土により埋められていることから、墳丘築造に先だって位置を示したり、規模や範囲を示すものとして掘られたものと考えられる。

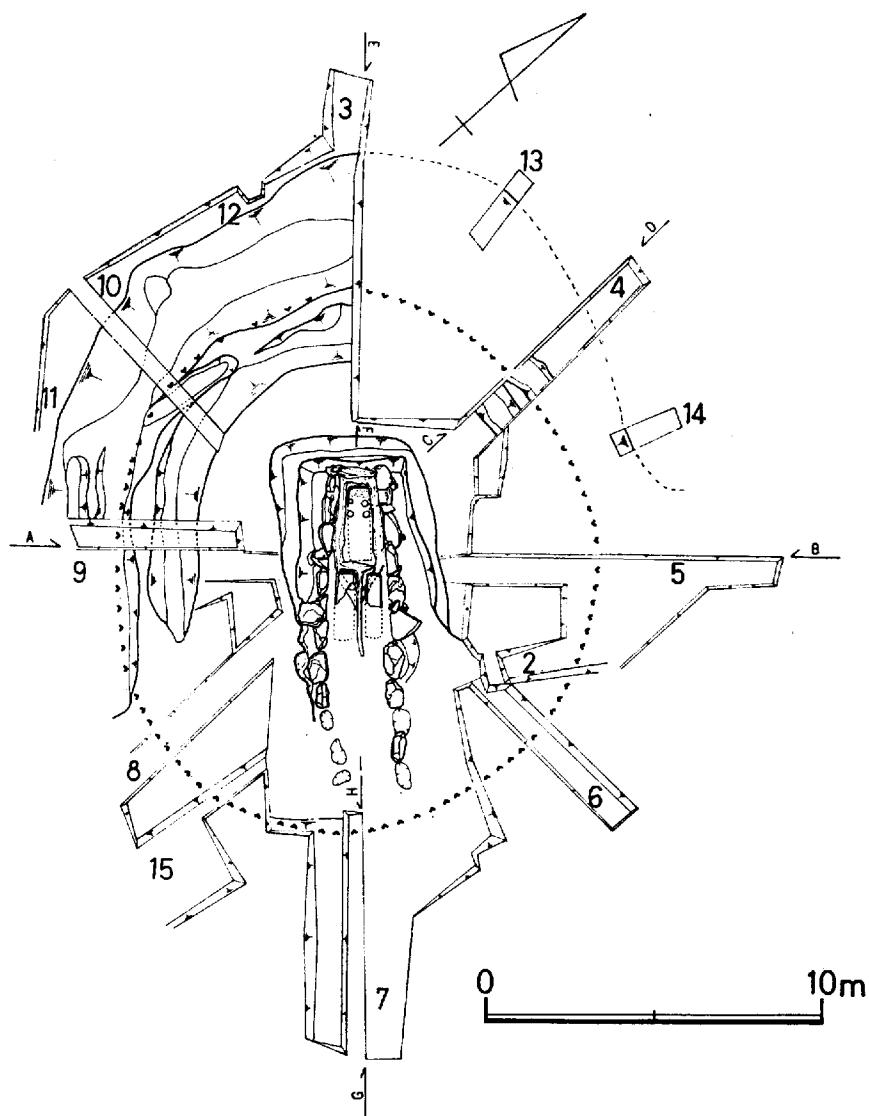
墳丘の築成過程は(1)、内側溝で位置を示し、(2)、石室の掘方を掘り、(3)、石室を下段から築きながら掘方を埋戻し、(4)、周溝を掘りあげた土を盛上げながら石室を築く、(5)、最後に墳形

二宮大成遺跡



第14図 1 区 古 墓 地 形 図 (1/300)

二宮大成遺跡



第15区 1 区 古 墓 墓 丘 実 測 図 (1/200)

全体を整えた、という工程が考えられる。

掘方内の埋土は東北壁側（第16図①）では掘方の巾が広いためか水平たたきしめを行なっており、側壁にあたる部分は斜めに残されている。いずれも一度に埋めてしまうのではなく少しづつたたきしめながら埋戻している。

**掘 方 方** (第17図)

長方形を呈しており巾約4.5m西南壁側で長さ約8.1m (A), 東北壁側では約5.5m (B)までである。深さは一番深い所で約1.8m, 入口に行くにしたがい浅くなり盛土となる。これは旧地形が西から東へ傾斜した斜面であったことによるもので、A・Bを結ぶ略南北の線から

## 二宮大成遺跡

東側では旧表土の黒色土の上に盛土をして床面を造成、石室を構築している。掘方壁面の角度は上半部は外反しており下半部はほぼ垂直に近い状態であるので平面図の作成には苦労した。掘方底面で1号陶棺を安置する場所はあらかじめ長方形に一段高く掘残し、掘りすぎた穴の部分は埋め戻し平坦面が造り出されていた。長さ2.4m、高さ約10cm、奥壁に近い方の巾は0.6m入口に近い方の巾は0.95mとやや広がっている。またこの棺台の周囲には巾15~34cm、深さ14cmの溝がめぐり、図に示したように棺台より入口方向に向って石室中軸線の溝と集合している。この溝は第2・3陶棺追葬の時点では埋っていたと思われる。石室を築く際には、石材一点づつに合せて穴を掘り設置していったものと思われる。個々の石材に合せて掘ったつもりでも石材を置いてみて具合が悪い場合には、奥壁、西南壁奥から2・3・4、東北壁1・2・3・4・5・6などのように、小石を詰込んで石材の上面や壁面を合せるように調整を行なっている。また二段目の石材を積む折に、石材が掘方壁面に当る場合には、その部分を掘って石材に合せている。西南壁奥から5・7の上の二ヶ所認められる。これらの石材のための掘方は、石室内部においては埋め戻され床面を調整している。

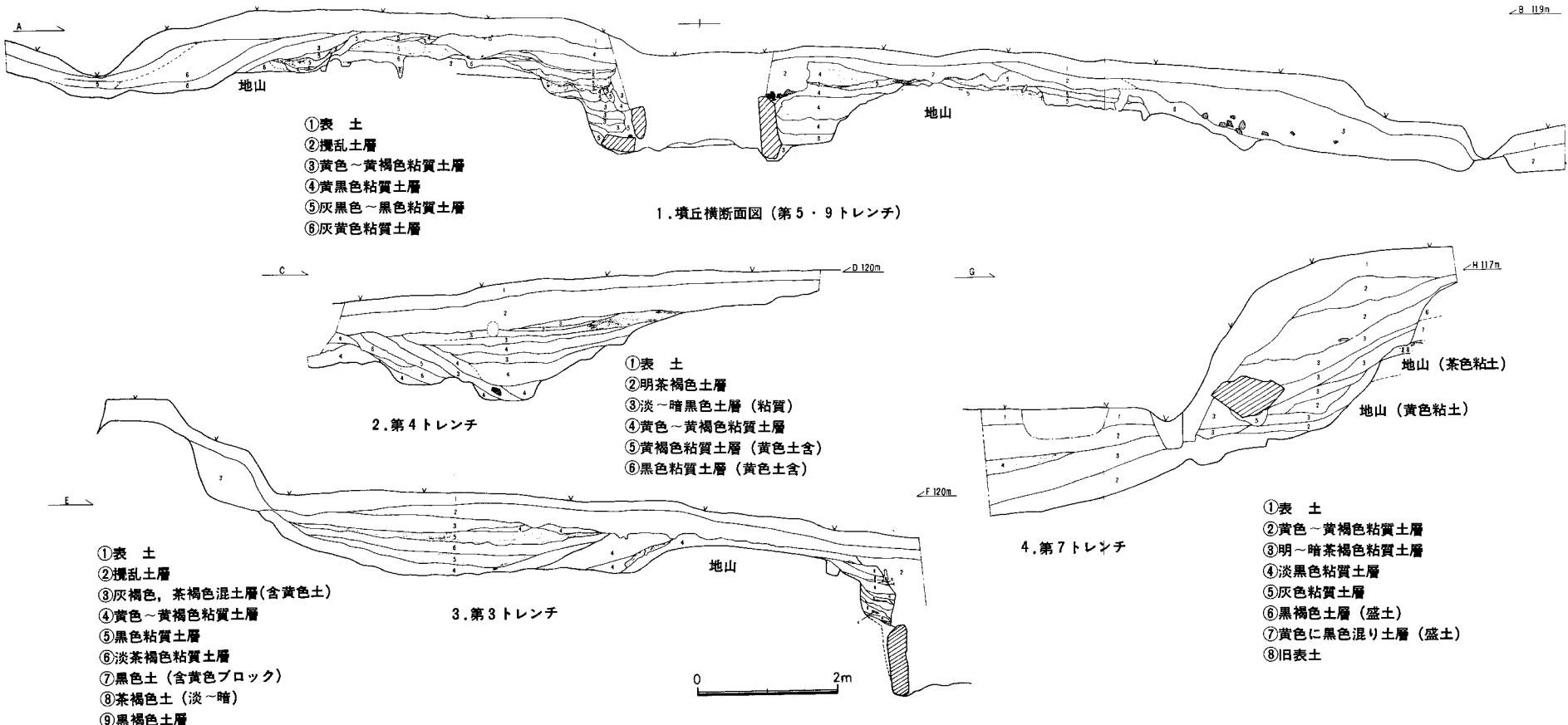
### 石室（第18図）

石室は地山を掘り凹めた中に石室を構築した半地下式の横穴式石室である。後世の攪乱のため石室の石材の大半は失なわれており、入口部分では根石まで持去られている。しかし石材の痕跡を検出することにより5個の根石痕跡を検出することができた。特に西南壁側では旧表土である黒色土の面まで掘り下げて検出できたものもある。これにより石室全長9.1m、奥壁巾1.1m、石室最大巾2.06m前巾1.4mとなる。石室のほぼ中央部で最大巾が得られ、胴張りした平面形を呈する。石室方位はN—48°30'—Wである。

東南壁奥から6番目の石がわずかに内側に置かれており、面が石室内に向って傾斜していることから玄門的な性格を有するものとも考えられる。この石より奥に3個の陶棺が置かれていたことが、あたかも玄室と羨道の区別をしめすものかも知れない。またこの位置から奥と前では石材の面のそろえ方が若干異なる。奥壁から4.8mまではほぼ直線的に面が削っているのに對して、入口部に向ってはわずかに凹凸がみられる点と石室の平面形が主軸よりやや東に曲っていく点である。また床面の状況も奥壁からほぼ水平だった床面がこの付近から入口部に向って約5°~7°の傾斜が始まっている。以上の観察によりここが玄門だとすれば、片袖式横穴式石室で玄室長4.75m羨道長4.35mである。

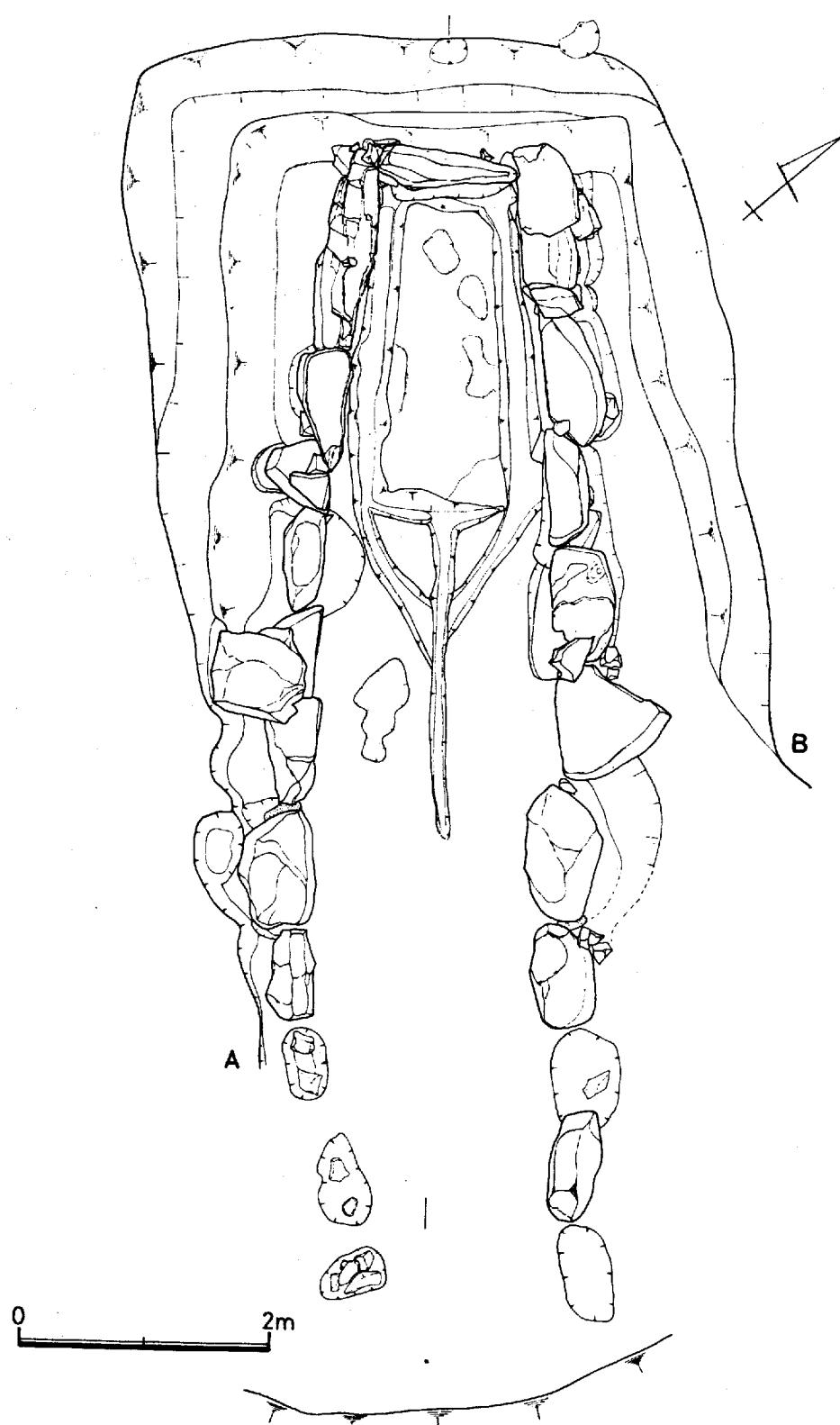
奥壁は床面から90cmの高さの六角形の扁平な石を置いているが、本来は同程度のものが2枚あったと仮定すれば石室高1.8m以上のものと推定できる。

奥壁のうらの土層断面が良好に残っており（第16図③）このことからすれば、一段目と同じ扁平な板石が、やや内傾して置かれていたことがわかる。奥壁の東北部と西南部の間隙には小石を2個づつはめ込んでいる。両側壁石積の状況から西南壁→奥壁→東北壁の順に構築されたものと思われる。掘方の中にしめる石室の位置は、奥壁部においてはほぼ中心になつてるのでほぼ割り付を行なつたものと考えられるが、西南壁は入口部に行くにしたがつて掘方の



第16図 1区古墳土層断面図

二宮大成遺跡



第17図 1区古墳石室上面実測図 (1/50)

## 二宮大成遺跡

壁に接してしまい、奥から3・7の根石は掘方の壁を若干掘り込んで設置している。それに比べて東北壁は余裕のある置き方をしている。玄室内の石材は奥から2~3点までは大きく、入口に向って若干小さくなる。根石の石材のほとんどは扁平な石を、扁平な面を内側にして置かれているが、西南壁3は2の調整の役割をなすものとしても、西南壁5・6・7、東北壁4・5は横口積となっており(註1)不統一である。第2段目の石材は四点程しか残っていないがいずれも小さい石の横口積あるいは小口積である。このことによって2段目以上が扁平な小さい石の横口積であるか、あるいは小口積であるか積極的に判断できない。大きな石材の間隙を埋めるものとして使用されたものかも知れない。

石材は、ほとんど流紋岩を使用しており、詰め石などの一部の小さい石の中に河原石の花崗岩が使用されている。流紋岩は神備山=笠山=高鉢など、「佐良山古墳群」近辺に産出する石材で、二宮大成古墳の所在する丘陵方面には産しない。したがって吉井川を横断して1km以上運搬されたものと考えられる。(註2)なお閉塞施設は何ら検出できなかった。

註1 扁平で長方形の石材を基準にして最大面積を有する面を内側に向けた場合広口積、その次の大きさの面積を有する面を向けた場合横口積・最小面積の部分を内側に向けた場合小口積と呼称する。

註2 植月莊介氏の御教示による。「佐良山古墳群の研究」P13註6参照

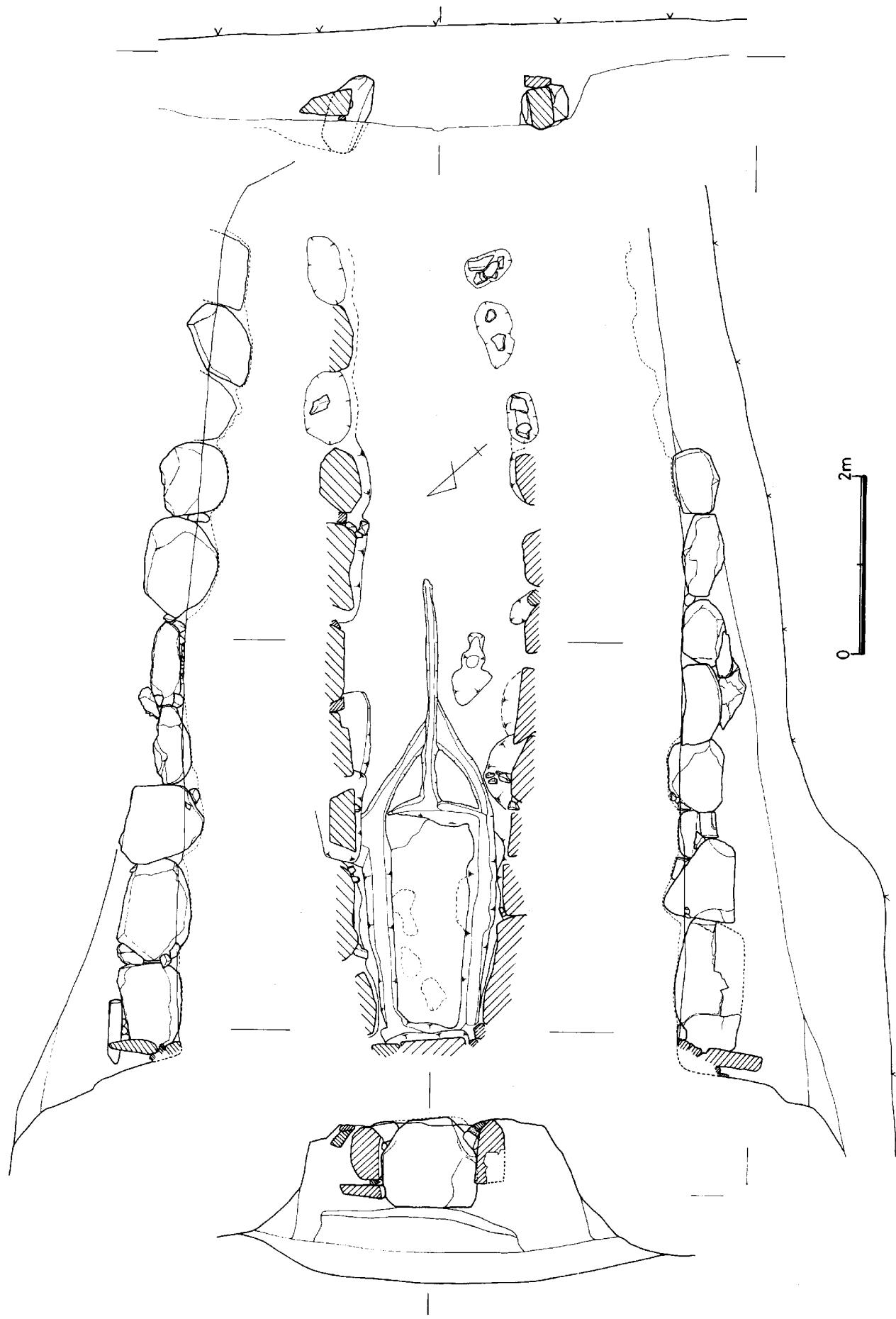
### 陶 棺

石室内より3棺の土師質亀甲形陶棺が出土した。陶棺の追葬順は奥の陶棺・前面南側の陶棺・前面北側の陶棺の順と考えられ、それぞれ1~3号陶棺と呼称した。全て無文である。

#### 1号陶棺

石室内最奥部に石室に平行した状態で出土した土師質亀甲形陶棺である。1号陶棺安置場所には長径2.4m×短径0.8~1.2m、高さ10~15cmの土壇が設けられている。さらにその周囲には排水溝状の浅い溝が巡り、土壇前面で結合して入口方向にのびている。陶棺はこの土壇を中心の一體分が破碎されて出土した。推定全長2m、巾60cm、棺身高60cm前後を測り、棺身プランは隅丸長方形を呈している。棺は蓋、身とも中央部で2つに切断されている。脚は2列6本で両端には、さらに1本が加えられ総計14本である。脚高19cm前後、脚径18cm前後、脚の厚さ2~2.5cmを測り、中空円筒状で、外面には縦にハケ目が施されている。棺身側壁は厚さ3.5~4cm、蓋と接する部分の厚さ4.5~5cm、底部厚さ3cm前後を測る。棺身の凸帯は蓋と接する部分で巾4~4.5cm厚、さ1cm前後を測り、他では巾5~6cm、厚さ0.5cm前後を測る。蓋は破片のため詳細は不明であるが通常の土師質亀甲形陶棺の蓋の形態を有している。2つの蓋が中央で接する端部は一方を凸状に、他方を凹状に作り密着できるようつくっている。厚さ3.5~4cm、凸帯は巾5~6cm、厚さ0.5cmを測る。棺身と接する部分の凸帯は巾3~3.5cm、厚さ1.5cmを測る。凸起は上端径5~7cm、下端径7~8cm、高さ4~5cmを測り、円柱状を呈している。位置は蓋上端の凸帯より下端の凸帯を結ぶ縦方向の凸帯上の下端(一部は凸帯よりやや離れている)につけられている。凸起の取りつけは蓋に径5cm程度の孔を穿って凸起の取り

第18図 1区古墳石室実測図



## 二宮大成遺跡

つけ部分を挿入している。色調は赤褐色を呈し、焼成は他の2棺にくらべてやや悪い。

### 2号陶棺

棺蓋及び棺身半分は破壊され、石室内前面、周辺内に散乱して出土した。わずかに棺身残り半分程度が原位置にかろうじて存在していた。陶棺は蓋、身ともほぼ中央で切断している。このことから推定すると、全長2m、巾60cmを測り、脚は2列6本計12本と考えられる。脚高18cm前後、脚径19cm前後、脚の厚さ3cmを測り、中空円筒状で、外面には縦のハケ目が施されている。棺身側壁は厚さ5～6cm、蓋と接する部分の厚さ6.5cm前後、底部厚さ6cmを測る。棺身の凸帯は蓋と接する部分で巾4～5cm、厚さ1cm前後を測り、他では巾7～7.5cm、厚さ1cm前後を測る。蓋は破片のため詳細は不明であるが1号陶棺と同様の亀甲形陶棺である。厚さ5～5.5cm、凸帯は巾6～7cm、厚さ1cm前後を測る。棺身と接する部分の凸帯は巾4cm、厚さ1cm前後を測る。凸起は上端径5～6cm、下端径7～8cm、高さ6～7cmを測る。位置は蓋上端の凸帯と下端の凸帯を結ぶ縦方向の凸帯下端に接する状態につけられている。凸起の取りつけ方は1号陶棺と同様である。1・3号陶棺にくらべて厚手の作りで、淡赤褐色を呈した焼成良好な土師質陶棺である。なお陶棺脚は床面よりわずかに浮いていた。

### 3号陶棺

2号陶棺と同様、棺蓋及び棺身半分は破壊されて、棺身残り半分程度が原位置にかろうじて存在した。推定全長2m、棺身高55cm、巾50cmを測り、脚は2号陶棺と同様2列6本、計12本と考えられる。脚高17cm前後、脚径16～17cm、脚の厚さ2～2.5cmを測り、中空円筒状で外面には1・2号陶棺と同様に縦のハケ目が施されている。棺身側壁は厚さ3～3.5cm、蓋と接する部分の厚さ4～4.5cm、底部厚さ4～5cmを測る。棺身の凸帯は蓋と接する部分で巾3.5cm前後、厚さ0.5cm前後を測り、他では巾5cm前後、厚さ0.5cm前後を測る。蓋は破片のため詳細は不明であるが、1号陶棺と同様の亀甲形陶棺である。2つの蓋が中央で接する端部は1号陶棺と同様の作りである。厚さ3.5cm、凸帯は巾5cm前後、厚さ0.5cm前後を測る。凸起は上端径3.5cm、下端径5～5.5cm、高さ3.5～4cmを測り、1・2号陶棺にくらべて小形である。位置は蓋上端と下端の凸帯を結ぶ縦方向の凸帯内の平坦部下端につけられている。凸起の取りつけ方は1号陶棺と同様である。色調は赤褐色を呈し、焼成良好な土師質陶棺である。陶棺脚は床面よりかなり浮いており、一部では調整のために台付長頸壺(41)の破片を脚下につめていた。

亀甲形陶棺は蓋の上面プランが亀甲形に類似しているところより起った名称であり、他に家形の陶棺がみられる。亀甲形陶棺は多くの出土例より通常棺身底部に中空円筒の脚を設け、棺身、蓋とも外面の両側面・両端面に巾5～6cmの凸帯を縦横に貼付し、蓋外面の両側面・両端面には凸起を取りつけている。通常棺は蓋・身ともほぼ中央で2分され棺外面はていねいに整形されている。棺外面の文様は1～3号陶棺では全て無文であったが、櫛描波状文、ヘラ描直弧文、竹管文が施されたものが数例知られている。(註)1～3号土師質亀甲形陶棺は、この様な特徴を全て有し、最も普遍的な亀甲形陶棺の形態を現わしている。1～3号陶棺は全長2

## 二宮大成遺跡

m前後、棺巾は1・2号陶棺が60cm、3号陶棺はやや小さく50cmを測る。棺の厚さは2号陶棺が最も厚く、1・3号陶棺がこれに続く。3号陶棺の凸起及び凸帯は1・2号陶棺に比べてやや小形で、巾の狭い作りである。又1・2号陶棺は、陶身下端の横方向の凸帯より棺底部にかけて丸味を持っている。3号陶棺では、棺身下端の凸帯より棺底部にかけて厚味を持たず、直接脚に続いている。

1～3号陶棺の形態特徴は、詳細な点ではそれぞれ異なる。大別すると、1・2号陶棺は棺全体が大形の作りで、棺外面の凸帯・凸起も3号陶棺に比べて大きく作られている。さらに棺身底部の厚味の差が認められる。各陶棺の伴出須恵器は、1・2号陶棺が後述する蓋坏A類の土器を伴い、3号陶棺がB類の土器と共に存すると考えられる。このように伴出須恵器の器形特徴からも陶棺の形態的な差が認められる。

註 久米郡中央町打穴西出土の土師質亀甲形陶棺には、棺両側面・両端面に白色塗料による文様が描かれしており、同「定国古墳」出土の土師質亀甲形陶棺には、蓋全面に竹管文が施されている。

### 遺物出土状態（第19図）

大きく分けて石室内・墳丘・周辺の三ヶ所から発見された。石室内は1号陶棺付近は崩壊していたものの後世の攪乱をまったく受けておらず、ほとんど原位置のまま出土した。2・3号陶棺は棺身の奥壁寄りの部分が破壊を受けながらもかろうじて原位置に存在したが入口方向の棺身部分と蓋は攪乱にあい掘り出されたものが破片として埋められていた。この2・3号陶棺より入口にかけては、かろうじて攪乱に合わなかつたものだけが原位置にあっただけで、ほぼ床面近くまで攪乱をうけていた。

石室内の遺物出土場所は1号陶棺と奥壁に挟まれた箇所（A）、1号陶棺と東北壁の間（B）、1号陶棺と西南壁の間（C）、1号陶棺棺内（D）、1号陶棺下の脚の間（E）、1号陶棺と2・3号陶棺の間（F）、2号陶棺下の脚の間から西南壁の間（G）、3号陶棺下の脚の間と足の下（H）、2・3号陶棺より入口までの間（I）、の9箇所に細別できる。（表2参照）

まず土器類についてのべてみよう。

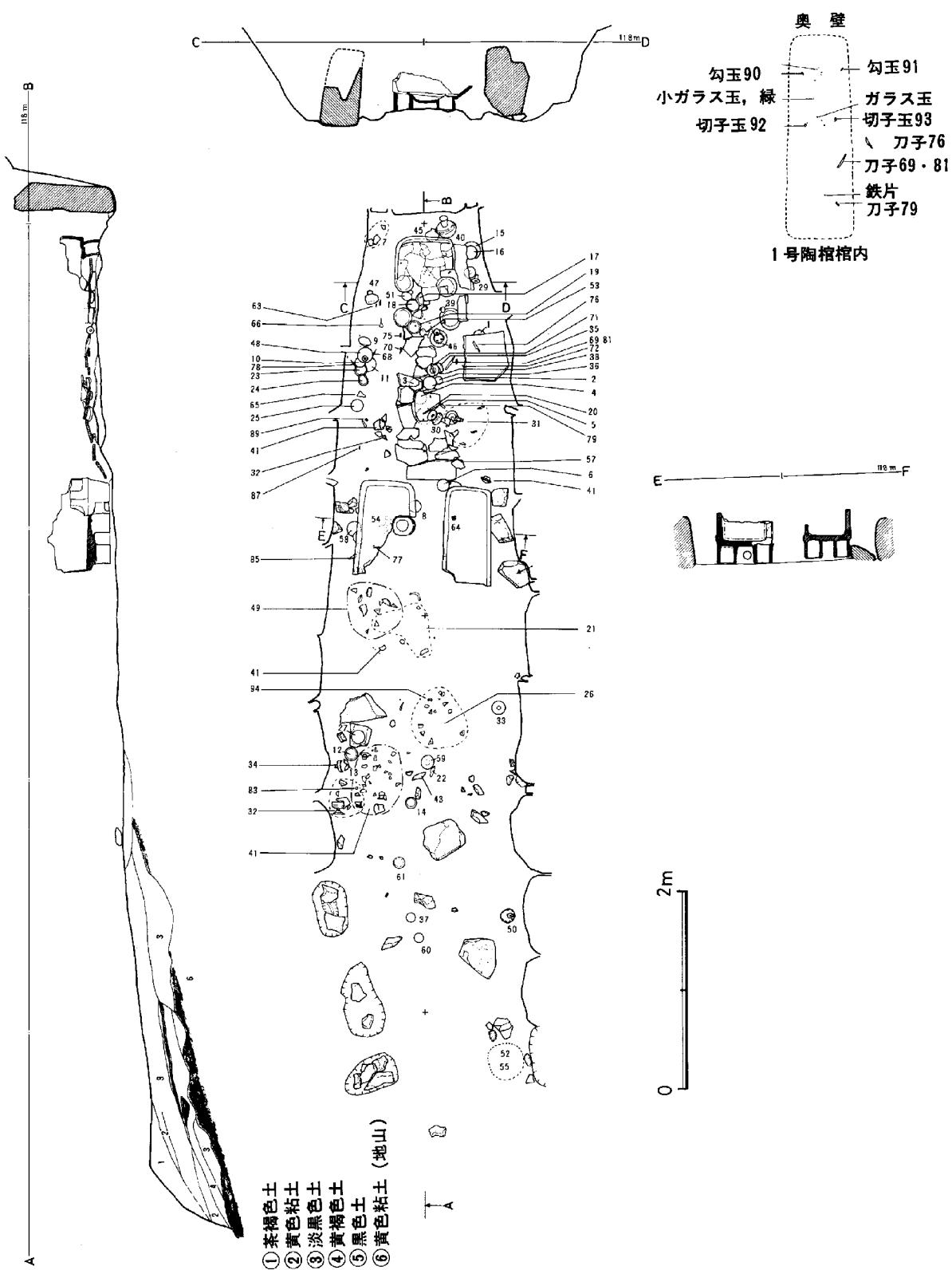
Aからは自然釉のきれいな長頸壺（40）、平瓶（45）が特別扱いをしたように置かれている。

Bには坏蓋（1）、坏身（15・16）が伏せて置かれており、高坏（29）はやや浮いている。

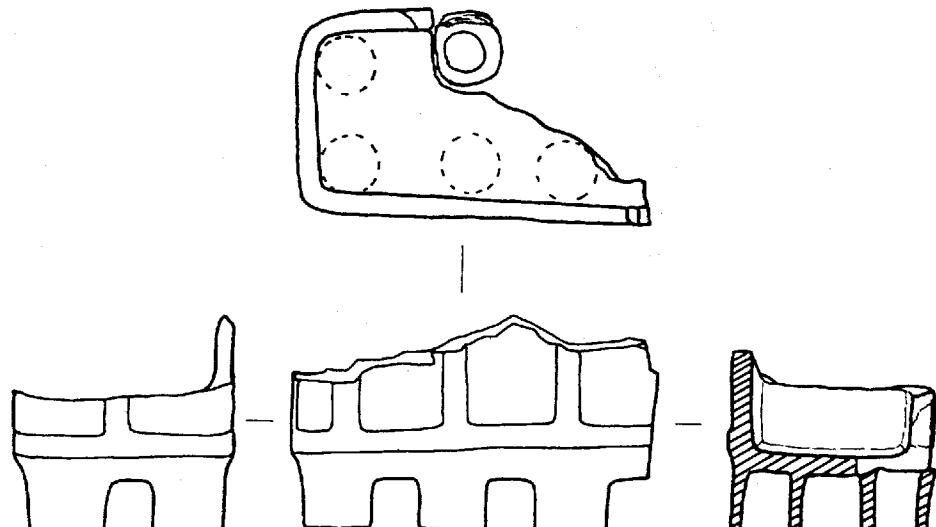
Cからは坏蓋（7）が割れて出土している。他の土器は坏蓋（9・10・11）、坏身（23・24・25）、平瓶（47・48）すべて床面より4cm～7cm程高い位置で出土しており、あとから置かれたものである。（11・25）がふせてあり他は上向きである。壺（41）の破片が（25）の東に床面より10～13cmも浮いて出土した。

Dからは勾玉（90・91）、切子玉（92・93）が左右に分かれて出土している。着装の状態とするには、広がりすぎているが、小玉類は少なく発掘時の見落しがあるのかもしれない。1号陶棺床面は細かに割れており、割れ目の間から勾玉（90）が出土し、棺下の土を袋詰めにして発掘後に少しづつ崩しながら14点の土玉を検出した。棺内には刀子が4点も出土している。

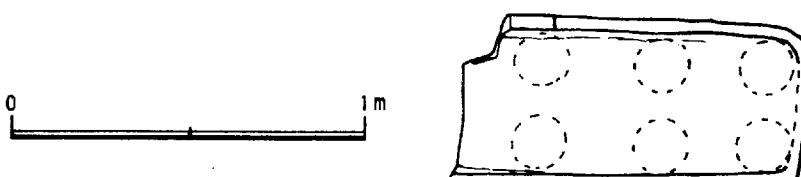
第19図 1区古墳遺物出土状態実測図



二宮大成遺跡



2号陶棺



3号陶棺

第20図 1区古墳出土2・3号陶棺 (1/20)

## 二宮大成遺跡

Eからは壺蓋(2・3・4・5), 壺身(18・19・20)高壺(30・31)短頸壺(35・36), 提瓶(51), 平瓶(46), 磨(53), などが一括出土している。壺蓋, 壺身共にA類としたもので1号陶棺の時期決定資料である。短頸壺(38)の中に斜めに刀子(71)が入っていた。短頸壺の蓋は(36)が質感, 直径とも(38)に合うようだ。そうすると(35)は他のものの蓋だろうか。(35)は(38)の胴部にかけてあり, (36)は(38)の横にふせてあった。Eでは壺身・蓋ともすべて上向きに置かれ, 供獻物が入れてあったのかもしれない。

Fからは壺蓋(6)が3号陶棺の脚の下に敷いた台付長頸壺(41)の上にあり, 土師質壺蓋(57)が床面より13cm上にあり遊離している。3号陶棺追葬時かそれ以外の移動だとすれば, 壺蓋(6)が壺身(16)とセットであることから, Bに置かれた遺物も二次的移動を受けていふことになる。

Gから土師質壺身(58)と蓋(図化不可能)がふせて出土している。須恵器壺蓋(8)もふせてあり, 脚間からは, 磨(54)も出土している(図版26—2)。2号陶棺は後世の攪乱により破壊を受けているが, 入口側棺身のあるべき所から, 壺身(21), 平瓶(49)が細片となって出土した。これらも2号陶棺埋葬時の副葬品であろう。

Hでは3号陶棺脚下に台付長頸壺(41)の破片を敷いてあった(図版27)。また脚間から金銅製鐸も出土しているが, 遊離した状態でいずれも3号陶棺の副葬品とは認められない。

Iは羨道部と考えられるが, 特に陶棺に近い所に集中しているものと点在しているものに分けられる(図版29・30)。2・3号陶棺のすぐ前面からは壺蓋(12・13・14), 壺身(26・27・28)高壺(32・33・34), 台付長頸壺(41), 土師質土器(59)が出土している。(26)・(41)と平瓶(図化不可能)は細片となっていた。ここより入口部には短頸壺蓋(37), 土師質壺(60), 土師質蓋(61)などが点在しているほか, 東北壁に近く平瓶(50)があり, 提瓶(52)の中に磨(55)が入った状態で発見された。(トレンチ調査時に取上げたので一部復元した状態で原位置に置いてみた。図版29—2)

鉄鎌は(65・66・68)がCの土器群と同じく床面から6cm程上から出土したほか, 一号陶棺の脚間から(67)が出土している。

刀子は1号陶棺内から, (69・76・79・81)の4本が出土している。さらに脚間から(70・75・82・84)と短頸壺内に(71)が出土, 玉類検出土より発見した(73・74・78)も1号陶棺下から出土したものとすれば合計5~8本もE部分に置いてあり注目される。Bからは(72)が斜めに立って出土, Cからは(78)が床面から20cm上で出土した。2号陶棺脚間Gからは(77)が出土している(図版26—2)。Iからは台付長頸壺(41)の破片の間から(83)が出土した。

刀装具は鞘尻金具(62)が石室内攪乱土中に出土した。釘(63)はCで床面より4cm上で出土。鐸(64)は3号陶棺の脚間から出土した。これら刀装具は原位置から移動しているのでどの被葬者の副葬品か特定しがたい。なお, 刀身部は検出されていない。

馬具は杏葉がB付近やCで41とともに出土したり, Fで壺蓋(6)の横から出土, また2・

## 二宮大成遺跡

3号陶棺の付近からも接合できるものが出土している。鞍金具も杏葉と同様散在しているが、特に1号陶棺下Eから出土が多く13片以上、Cから数片、2・3号陶棺付近から数片である。留金具(89)はCにおいて床面より高い位置で出土している。

鉄(鋤)先は、2号陶棺下Gから出土している。

玉類は1号陶棺内遺物と、2号陶棺付近で攪乱されて移動した状態で出土しているものとに分けられる。

周溝からの出土遺物はほぼ西半部に集中してみられた。甕3個、鉢1個体である。甕の胴部破片は80点あり、そのうち74点は(43)の胴部破片である。(44)は頸部破片しか発見されていない。第3トレンチから、13・4・14・5・6・7・15トレンチ間は、調査工程の関係からトレンチ調査しか実施しておらず、掘り残しがあるため他の破片が残存していた可能性もある。(43)の頸部破片は石室内攪乱土から発見されたが、(図版29-1)墳丘外表面に散布していた可能性がある。もう一点短かい口縁をもつ甕(42)がある。これらの破片は、周溝を埋めている黒色土二層目より下の黄褐色粘土層中より最も多く出土した。これより上層からは少ない。

墳丘盛土および旧表土(黒色土層)から弥生式土器片などが出土しており、石室掘方西方部分で弥生式土器を含む方形住居址の壁溝および柱穴が検出された。(3号住居址の項目参照)

## 二宮大成遺跡

### <出土遺物>

出土した遺物を列記すると次の通りである。

- (1) 土器 須恵器63個体、土師質土器7個体、近世陶器破片。
- (2) 武器 鞘尻1、釘1、鐔1、鉄鎌4、刀子15。
- (3) 農工具 鍤(鋤)先1。
- (4) 馬具 杏葉2、鞍金具1、留金具1。
- (5) 裝身具 勾玉3、切子玉2、ガラス玉20、土製玉21。

#### ① 須 恵 器 (第21~27図)

出土須恵器総数は63点にのぼる。そのうち実測可能な56点を掲載した。器形は壺蓋・壺身・高壺・短頸壺蓋・短頸壺・甕・平瓶・提瓶・壺・鉢である。有蓋壺は総数28点と最も多く、又、器形の形態的特徴を把握しやすいことからA・Bの2分類を行なった。

**壺蓋 A類 (1~8)**は口径11.9~13.5cm・器高3.8~4.2cmを測る。さらに細別すると(1)・(5)の如く天井部が平で、体部との境に稜線を有するものと、稜線が認められず、天井部が丸味を持っているものとである。(1~8)の天井部は全てヘラ削りが行なわれ、体部及び内面は横ナデの整形である。ヘラ削り方向は1・6・7が右廻りで、2・3・4・5・8が時計廻りである。

(1)は1号陶棺下より出土した完形品である。口縁部はややくびれて口縁端部は外反している。内面は灰色で、外面は灰色~灰白色を呈し、表面はやや荒れている。(2)は(1)と同様1号陶棺下より出土した完形品である。内外面とも灰白色を呈し、やや軟質な土器である。(3)も(1)・(2)と同様1号陶棺下より出土したほぼ完形の土器である。内面は灰色で、外面は灰色~青灰色を呈している。胎土焼成ともやや悪い。(4)は(1)~(3)と同様1号陶棺下より出土した完形品である。口縁部は(1)と同様にややくびれて口縁端部で外反している。内外面とも灰白色を呈し、胎土にはやや砂粒が多い。天井部に「×」印の白色のヒダスキ文様がみられる。(5)は(1)~(4)と同様1号陶棺下より出土した整形良好な完形品である。口縁部は(1)・(4)と同様くびれて口縁端部でわずかに外反している。内面には斜め方向のハケ目痕がみられる。色調は濃灰色を呈し、一部天井部で灰白色を呈す。胎土焼成とも良好である。

(6)は1号陶棺と3号陶棺の間より出土した整形良好な完形品である。濃灰色を呈し、内外面には黒色の斑点ができている。焼成良好な土器である。壺身(16)とは同様の胎土焼成でセットである。(7)は奥壁南より出土した2/3程度の破片である。口縁端部はやや内傾している。内面は淡灰色で外面は灰白色~淡灰色を呈す。焼成はやや悪い。(8)は2号陶棺下より出土した整形良好な完形品である。外面は灰色~濃灰色で内面は灰色を呈す。胎土にはやや大きい砂粒を含むが、焼成良好である。

**B類 (9~14)**は口径10.3~10.8cm、器高3.1~4.1cmを測る。口径に対して器高が高い特徴が認められる。

## 二宮大成遺跡

整形は天井部ヘラ削り、他はヨコナデ整形である。

(9) は1号陶棺と南西側壁との間に出土した整形良好な完形品である。天井部に1本の凹線が施され、口縁端部はやや内傾している。内外面とも濃青灰色で断面は淡赤褐色を呈す。胎土焼成とも良好である。(10) は(9)と同様1号陶棺と南西の側壁との間で出土した整形良好な完形品である。内外面は淡青灰色で断面は淡赤褐色を呈す。内外面に幾分大きい砂粒が認められるが、胎土、焼成とも良好である。坏身(23)とは同様の胎土焼成でセットである。

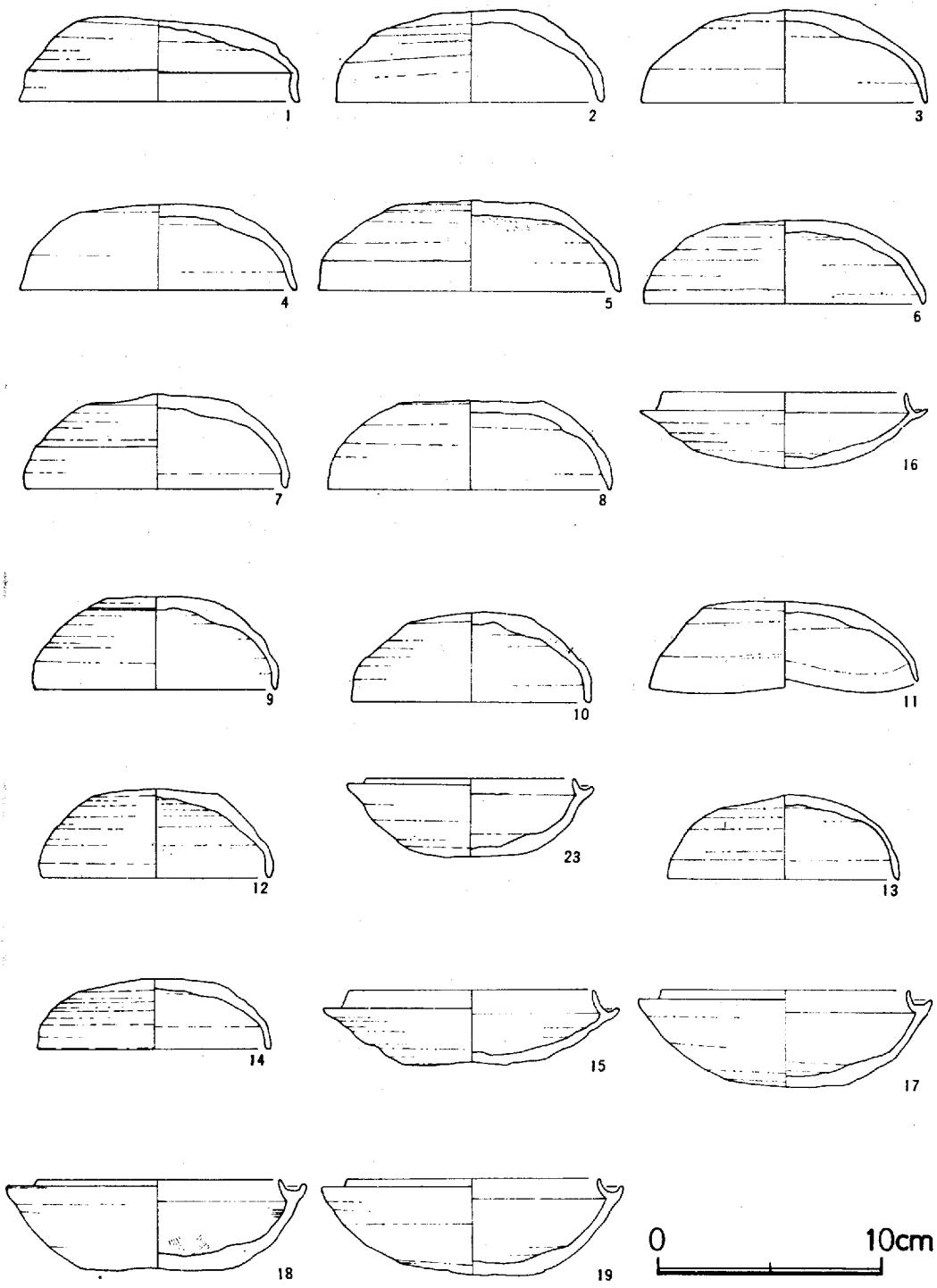
(11) は(9)・(10)と同様1号陶棺と南西の側壁間で出土した歪みが大きい完形品である。外面は黒灰色で内面は濃灰色を呈す。焼成良好である。(12) 美道部南より出土したほぼ完形品の土器である。外面は灰色で、内面は濃灰色を呈す。胎土焼成とも良好で、断面で淡茶色を呈す。胎土焼成とも良好で、断面で淡茶色を呈す。(13) は(12)と同様美道部南より出土した口縁部欠損の土器である。内外面とも濃青灰色で断面では赤褐色を呈す。胎土焼成とも良好な土器である。(14) は2号陶棺前面より出土したほぼ完形の土器である。内外面とも灰色～灰白色を呈し、断面では茶褐色を呈す。胎土焼成とも良好である。

**坏 身 A類** (15~22) は口径10.7~11.4cm、最大径13.0~13.5cm、器高3.4~4.3cmを測る。立ち上りは0.6~1.0cm程度のものである。さらに細別すると17~19の如くやや厚手で、受部がやや上に立ち上っているものと、やや薄手でシャープなつくりものである。天井部は全てヘラ削りを行い、体部及び内面はヨコナデ整形である。

(15) は1号陶棺と北東の側壁との間より出土した整形良好な完形品である。立ち上りは1cm程度で内傾している。内面は濃灰色を呈し、外面は灰白色で一部自然釉がかかり、器表面はやや荒れている。(16) は(15)と重って出土した完形品である。立ち上りは0.8cm程度で内傾している。器形全体はシャープなつくりである。内外面とも灰色～灰青色を呈し、黒色の斑点が認められる。焼成は良好である。(17) は1号陶棺下より出土した整形良好な完形品である。作りはやや厚手である。内面は淡紫灰色で、外面は全面に緑色の自然釉がかかっている。胎土焼成良好な土器である。(18) は(17)と同様1号陶棺下より出土した完形品である。立ち上りは0.5cm程度で内傾している。底部はヘラ削り後、指頭圧痕による凹凸がみられる。内外面とも灰色～濃灰色を呈す。(19) は(17・18)と同様1号陶棺下より出土した完形品である。(17・18)と同様の厚手のつくりで立ち上りは0.6cm程度で内傾している。外面底部は灰白色で、体部は灰色を呈す。内面は淡灰色である。胎土には比較的大きい砂粒を含む。(20) は(17~19)と同様1号陶棺下より出土した整形良好な完形品である。立ち上りは0.6cm程度で内傾している。内面は淡紫灰色で、外面は淡青色を呈す。胎土に砂粒多いが焼成良好である。(21) は2号陶棺前面より出土した1/2程度の破片である。立ち上りは0.8cm程度で内傾している。内外面とも淡灰色を呈し、胎土には砂粒が少ない。(22) は美道部より出土した1/2程度の破片である。立ち上りは0.7cm程度で内傾している。内外面とも灰色を呈し、胎土に砂粒がやや多い。

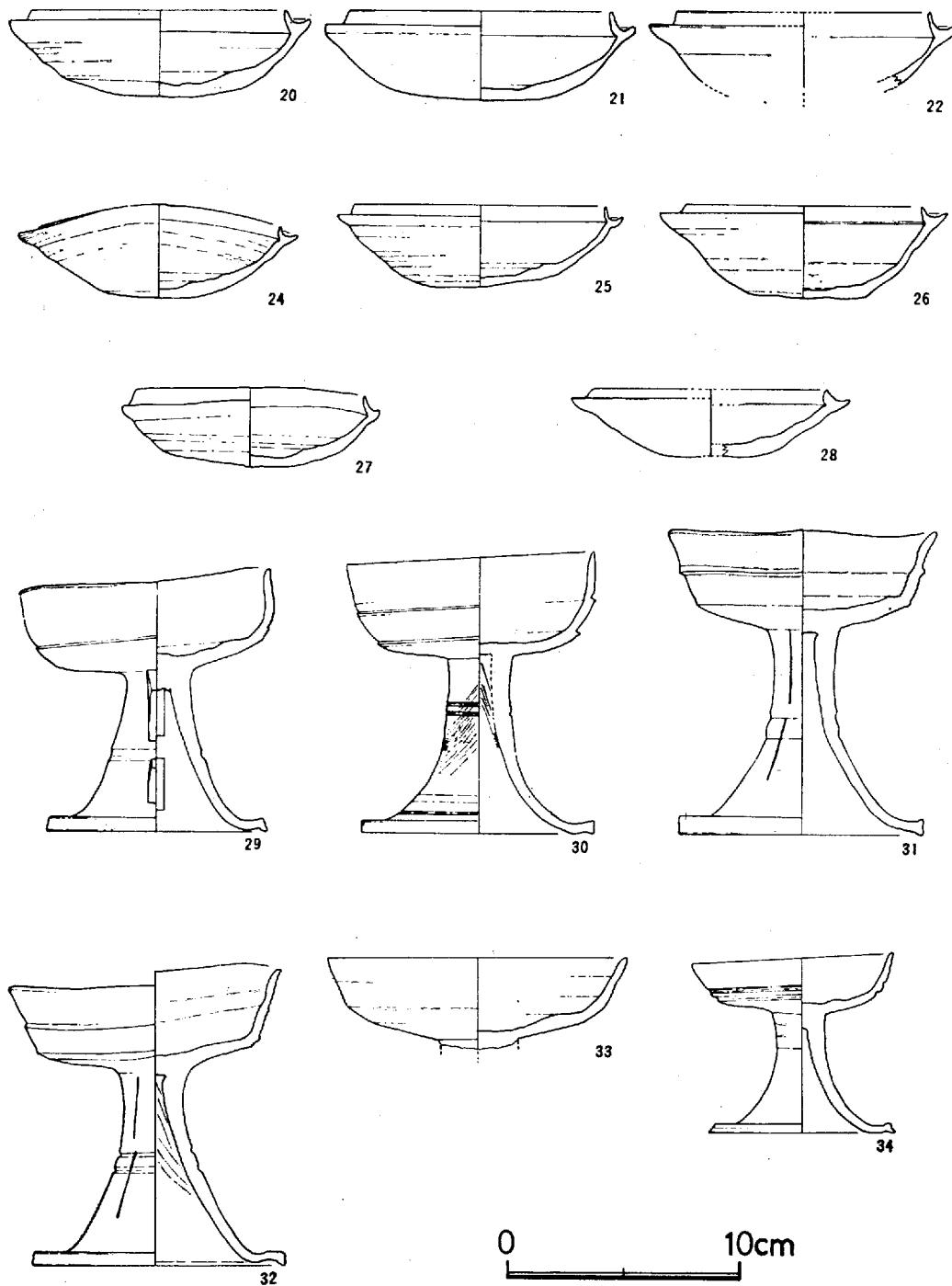
**B類 (23~28)** は口径9.3~10.8cm、最大径11~12.5cm、器高3.5~4.0cmを測る。立ち上り

三宮大成遺跡



第21図 1区古墳出土土器(1) (1)

三宮大成遺跡



第22図 1区古墳出土土器(2) (1/3)

## 二宮大成遺跡

は0.3~0.6cm程度である。さらに細別すると(25・26)の如く口径が10cm以上で、やや径の大きいものと、小形のものとに分類できる。底部のヘラ削り痕は不明瞭なものが多い。

(23)は1号陶棺と南西の側壁間より出土した整形良好な完形品である。立ち上りは0.5cm程度で内傾している。内面は濃青灰色で、外面は灰色を呈し一部に自然釉がかかっている。胎土に比較的砂粒が多いが焼成良好である。(24)は(23)と同一の場所より出土した完形品である。最大径12.4cm、最小径10.2cmと大きく歪んでいる。立ち上りは0.5cm程度で内傾している。内外面とも濃灰色~黒灰色を呈し、断面では淡赤褐色である。胎土には幾分大きい砂粒を含んでいる。焼成良好な土器である。(25)は(23・24)と同一の場所より出土した整形良好な完形品である。立ち上りは0.6cm程度で、器形全体がシャープなつくりである。内面は淡緑灰色で、外面は青灰色を呈す。胎土焼成良好で、断面淡赤褐色を呈す。(26)は3号陶棺前面ではほぼ一個体分が破片となって出土した。立ち上りは0.4cm程度で内傾している。内外面とも青灰色を呈し、胎土、焼成とも非常に良好な土器である。(27)は羨道より出土した完形品である。立ち上りは0.6cm程度で内傾している。内外面とも灰白色で全体に黒色の斑点がみられる。焼成良好である。(28)は羨道部攪乱層より出土した寸程度の破片である。立ち上りは0.5cm程度で内傾している。灰白色を呈し軟質の土器である。胎土はきめ細かい。

**高 壁** 1号陶棺下及び北東の側壁間より3例、羨道部南より2例、北より1例の計6例が出土した。ともに無蓋高壺である。

(29)は1号陶棺下より出土した完形品である。壺部には1本の凸帯状の稜線が認められ、

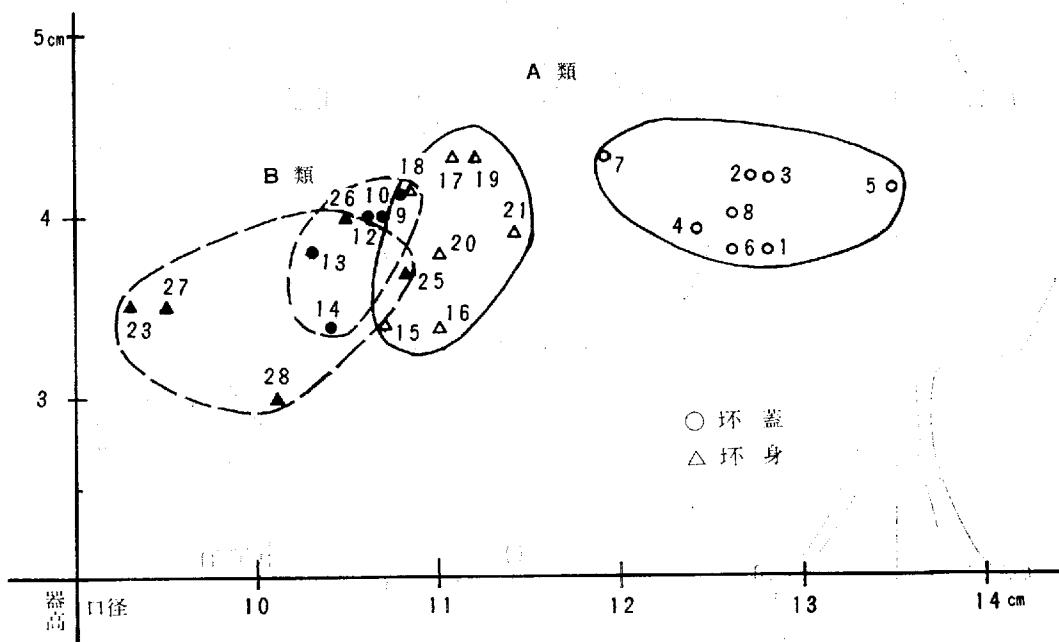


表1 須 惠 器 法 量 表

## 二宮大成遺跡

脚部は中央の一本の浅い凹線を境に二方向に透孔を二段に穿っている。器壁内外面ともヨコナデ整形を行なっている。色調は灰色を呈し、外面の半分には自然釉がかかっている。胎土に砂粒が多いが、焼成良好である。(30)は1号陶棺下より出土した完形品である。坏部には2本の断面三角形状の凸帯が明瞭であり、器形全体はシャープな作りである。脚は中央に2つの凹線と脚下端に一本の浅い凹線を施している。外面はヨコナデ整形で、一部脚中央部に斜方向のナデ痕が認められる。内面はヨコナデ整形で、脚内面の上端にはシボリ痕が認められる。脚部に透孔はない。色調は濃灰色を呈し、部分的に黒色を呈している。胎土焼成とも良好である。

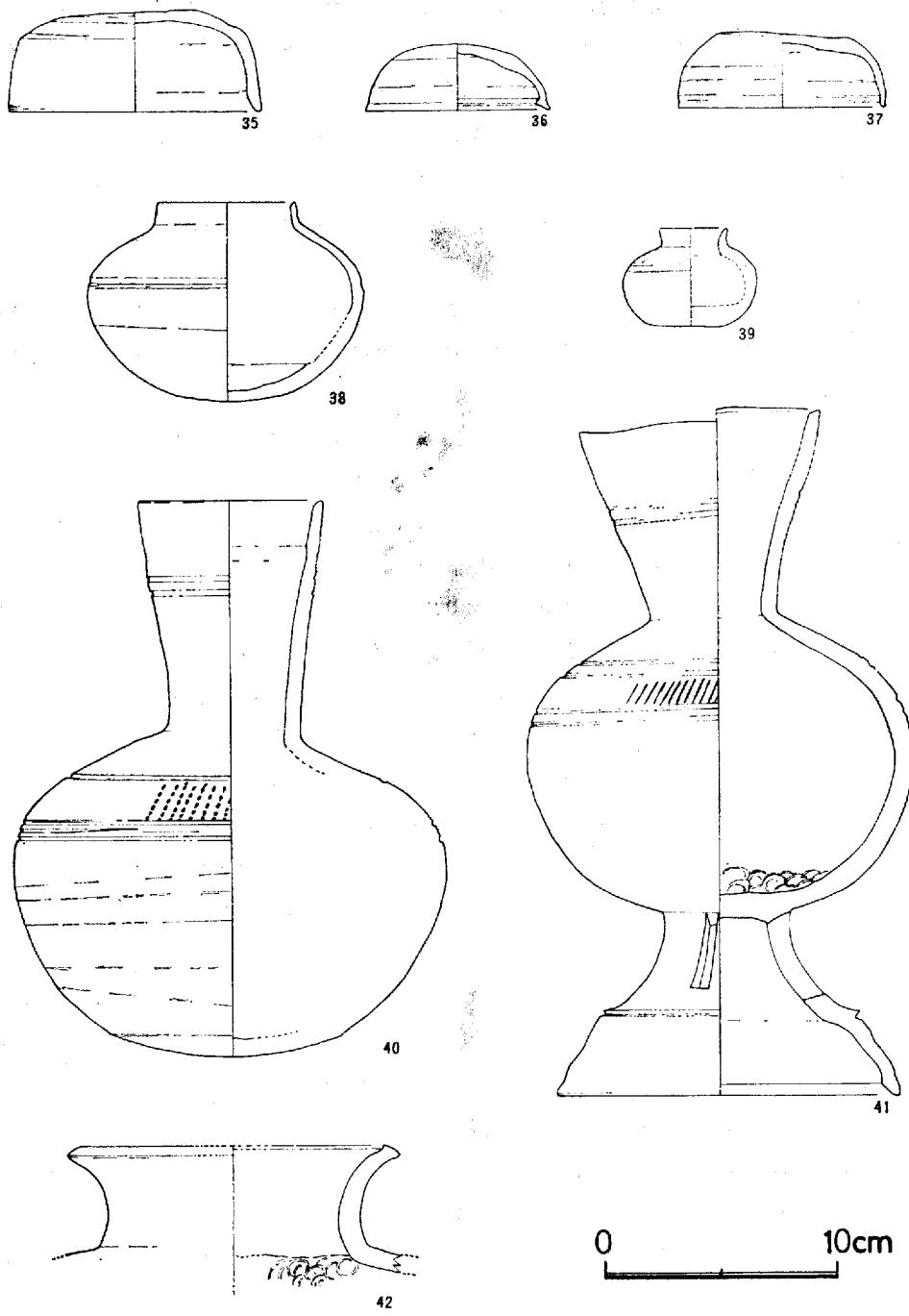
(31)は1号陶棺下より出土したほぼ完形の土器である。坏部中央には1本の断面三角形状の凸帯が明瞭であり、坏部下端にも稜線が認められる。脚は中央に2つの浅い凹線を施し、凹線を境に120度の角度で2方向に2段の切込みを穿っている。内外面ともヨコナデ整形を行ない、脚部内面の上端ではシボリ痕が認められる。色調は灰色～濃灰色を呈し、内面では自然釉がかかっている。胎土に最大5mm程度の砂粒を含む。(32)は美道部の南より出土したほぼ完形の土器である。(31)とほぼ同形同大の器形で、脚の切込みは90度の角度で2方向に穿っている。色調は灰色～黒灰色を呈し、焼度に普通程度の土器である。(33)は美道部の北より出土した坏部である。脚との接続部分は磨滅しており、脚部欠損後の坏部のみを転用して使用したとみられる。色調は灰白色で、焼成悪く軟質である。胎土は砂粒が少なくきめ細かい。(34)は美道部の南より出土した小形の高坏である。坏部には2つの凹線が施されている。脚部にはヨコナデ整形が認められるのみである。色調は外面で濃灰色、坏内面は灰褐色を呈し、全体に自然釉がかかっている。胎土には砂粒が幾分多いが焼成良好である。

**短頸壺蓋** (35)は1号陶棺下より出土した完形品である。やや肩の張ったつくりで天井部は右方向のヘラ削りを行ない、他はヨコナデ整形である。色調は灰色～濃灰色を呈し、一部黒光りしている。胎土焼成とも良好である。(36)は一号陶棺下より(35)と接して出土した小形の完形品である。外面の天井部はヘラ削り、他はナデ整形である。口縁部はややくびれて口縁端部では外反している。口縁端部内面には断面三角形の稜線がみられる。色調は灰色を呈し、胎土良好である。(37)は美道部より出土した完形品で(36)と同様の外面整形である。口縁端部はくせがなく丸味を持って終っている。色調は淡灰色を呈し、表面はざらざらしている。砂粒は幾分多いが、焼成良好である。

**短頸壺** (38)は1号陶棺下より出土した完形品である。胴部中央より口縁部にかけてはヨコナデ整形を行ない、胴中央部より底部にかけて右方向のヘラ削りを行なっている。胴中央部には1本の凹線を施している。灰～灰白色を呈し、胎土にはやや大きい砂粒を含み幾分軟質な土器である。器内には鉄製刀子(71)が入っていた。(39)は1号陶棺下より出土した小形品である。胴中央部～口縁部はヘラ削りを行なっている。灰色を呈し、焼成良好な土器である。胎土には砂粒を幾分多く含む。

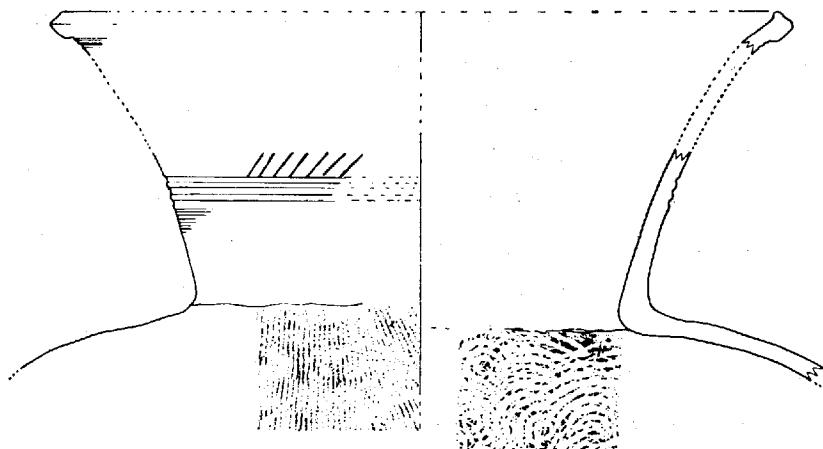
**長頸壺** (40)は奥壁と一号陶棺の間より出土したほぼ完形の土器である。胎土には砂粒を幾分多く含む。頸部に2つの凹線を施している。胴部には上端に1本と中央部に2本

三宮大成遺跡

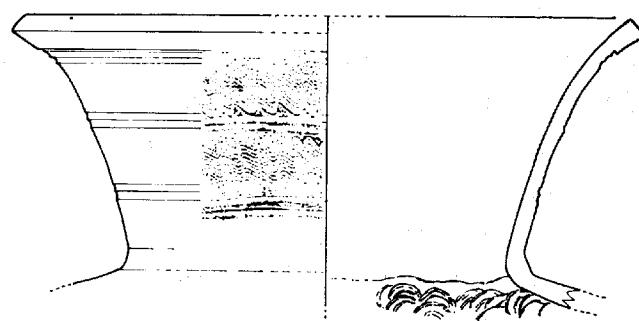


第23図 1区古墳出土土器(3) (3)

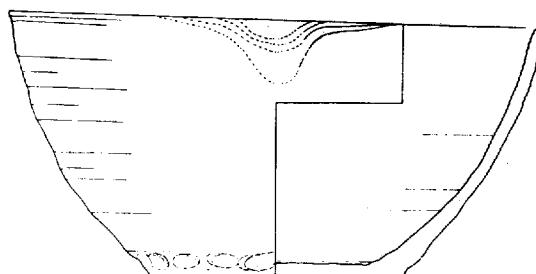
二宮大成遺跡



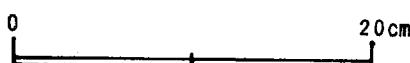
43



44



56



第24図 1区古墳出土土器 (4) (下)

## 二宮大成遺跡

の凹線を施し、この間に櫛描刺突文を斜方向に施している。胴中央部より底部にかけては右方向のヘラ削りを行なっている。色調は灰色を呈し、上端には自然釉があり、焼成良好である。胎土にはやや砂粒が多く含んでいるが優秀品である。

**台付長頸壺** (41) は器全体が破片となり、石室内の4ヶ所程度に散乱して出土した。脚の一部破片は1号陶棺と2号陶棺の間に浮離した状態で出土し、胴部片は1号陶棺と3号陶棺の間で一点、3号陶棺の脚下より数点出土した。他は羨道部南より散乱して出土した。頸部には2本の凹線を施し、胴部には上端に2本と中央部に2本の凹線を施し、その間にヘラ描平行線文を施している。胴部内面の下端では脚部の接合を強固にするため同心円のタタキを施しており、他ではヨコナデ整形である。脚部には三方向に透孔を穿っており、色調は淡灰色を呈し、口縁部の一部には自然釉がかっている。胎土にはやや砂粒が多いが、焼成良好である。脚下半部には断面三角形状の凸帯を施し、脚端はくせなく終っている。

**壺** (43) の一部は羨道部攪乱部分より出土したが、他の破片は全て周溝内の出土である。(42) は口縁部の破片のみである。口縁部は直立し、口縁端部で外反している。内面は頸部下端より胴部にかけて同心円のタタキを施している。外面はヨコナデ整形である。色調は灰色～濃灰色を呈し、胎土焼成とも良好である。(43) は頸部破片2点・胴部破片74点が出土した。口縁端部は小破片のため全体的な器形の把握は困難である。頸部は除々に外反し、口縁端部で折返して厚みを持たしている。口縁部下端に2本と頸部中央に3本の沈線を施し、その間に斜方向の櫛描刺突文を施している。頸部下端にはクシナデの整形を行ない、頸部内面にはヨコナデの整形を行なっている。胴部外面には平行タタキを施し、内面には同心円のタタキを施している。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を含み、やや軟質な土器である。(44) は口縁部と胴部の破片である。口縁部は頸部より除々に外反し、口縁端部では折返して厚みを持たせている。頸部から口縁部にかけての外面は3ヶ所等間隔に2～3本程度の凹線を施している。さらにその間の2ヶ所に櫛描波状文を施している。頸部下端より胴部にかけての内面は同心円タタキを施し、胴部外面には平行タタキとヨコナデの整形を行なっている。色調は灰色を呈し、外面には自然釉がかかり焼成良好である。胎土にはきめ細い砂粒を含んでいる。

**平瓶** 石室内より計7例の出土をみたが、1号陶棺と南西の側壁間より出土した(48) は盜難にあった。

(45) は1号陶棺と奥壁間より出土した完形品である。頸部に一本の凹線を施し、胴部中央より底にかけては右方向のヘラ削りを行なっている。底部は丸味を持ち、胴部に稜線はみられないが、肩部がやや張り気味である。色調は灰色～濃灰色を呈し、砂粒が幾分多い。(46) は1号陶棺下より出土したやや大形の完形品である。口縁部はヨコナデ整形を行ない、胴部ではクシナデ整形を行なっている。胴部下端より底部にかけてはヘラ削り後クシナデ整形を行なっている。胴部上面には径1.4cm前後の円形の粘土を2ヶ所に貼り付けている。さらに中央より二本の凹線を一単位として3ヶ所に施し、その間に斜方向の櫛描刺穴文を施している。胴部はやや偏平で、安定感のある土器である。色調は灰色で、普通程度の焼成である。(47) は1号

## 二宮大成遺跡

陶棺と南西の側壁間より出土し、口縁部が一部欠損している。頸部には2本の凹線を施し、胴上半部にはクシナデを行なっている。底部は右方向のヘラ削りを行ない、他はヨコナデ整形である。底部は丸底で胴部には稜線ではなく、丸味をもっている。色調は灰黒色～赤褐色を呈し、一部に自然釉がかかっている。胎土焼成とも良好である。(49) 2号陶棺前面より一個体分が破片となり出土した。頸部と胴部の境に一本の浅い凹線が施されている。口縁部より胴部下端及び内面はヨコナデ整形を行ない、底は右方向のヘラ削りである。胴部最大径はほぼ中央で丸底である。色調は灰色を呈し、普通程度の焼成である。(50) は羨道部より出土し、口縁部が欠損している。頸部より胴部にかけてはヨコナデ整形を行なっている。底部は4cm程度の平底で一部ヘラ削りが認められる。胴部上端には「×」印のヘラ記号がある。色調は青灰色を呈し、一部自然釉がかかっている。胎土、焼成、整形とも良好な土器である。

**提 瓶** (51) は1号陶棺下より出土した完形品である。頸部はほぼ垂直で、中間に一本の凹線が施されている。胴部の両肩には径0.8cm程度の凸起が貼り付けられている。色調は青灰色～淡赤褐色を呈し、頸部より胴部にかけて自然釉がかかっている。胎土焼成とも良好な土器である。(52) は羨道部前面で娘(55)と重って出土した大形品である。口縁部内外面はヨコナデ整形され、頸部に断面三角形の凸線が一本施されている。口縁端部は外反して丸味を持っている。胴部内面は同心円の叩目が施され、外面には一部平行に叩目がみられる。胴部両肩には環状の取手が付いていたとみられる。外面は灰色～黒灰色で、内面は濃灰色を呈している。胎土に幾分多く砂粒を含んでいるが、焼成良好な土器である。

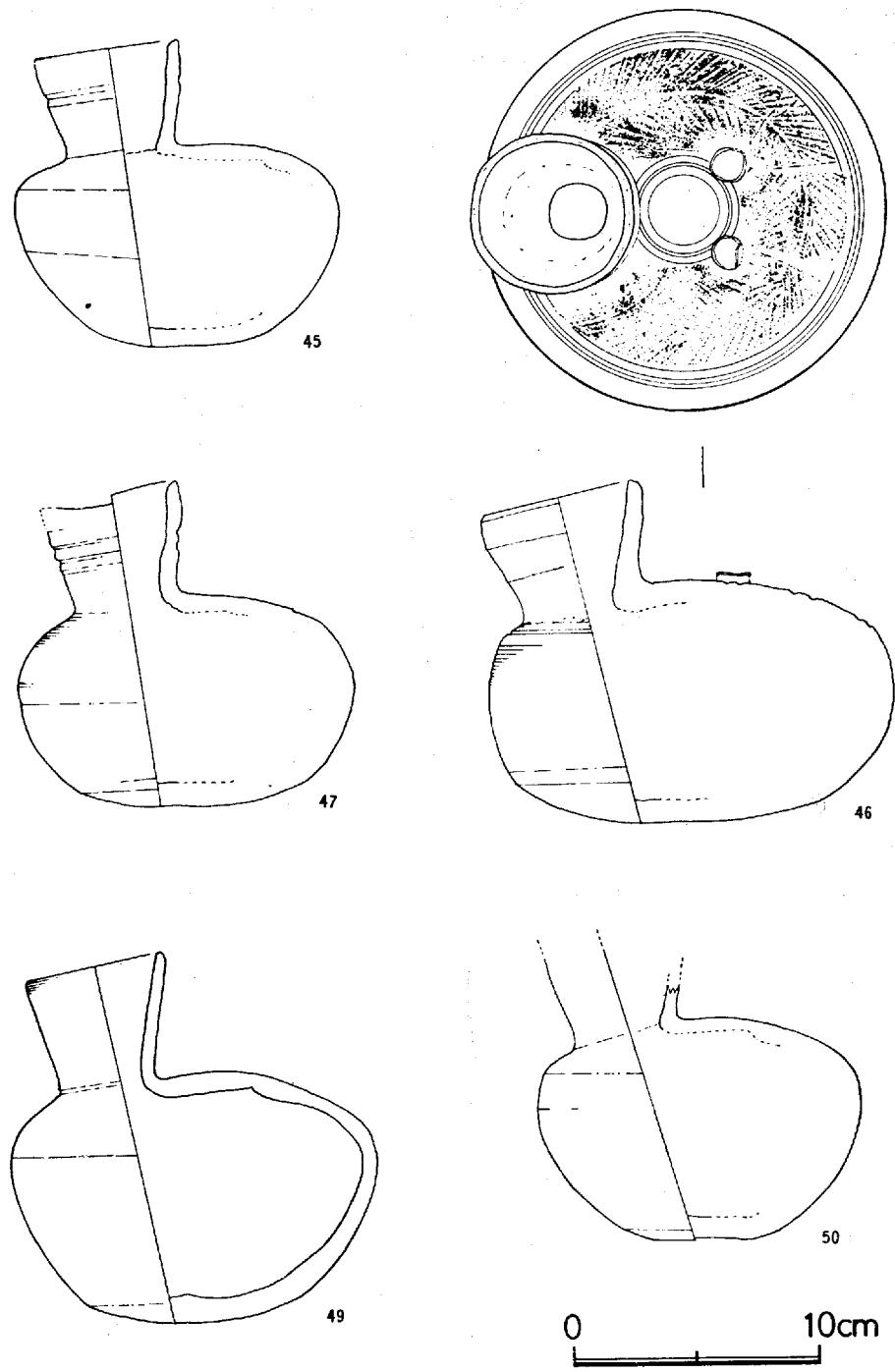
**罐** (53) は1号陶棺より出土したやや小形の完形品である。胴部上端より口縁端部にかけてはヨコナデ整形を行い、胴中央部より底部は右方向のヘラ削りを行なっている。口縁部は外反し、口縁端部ではやや丸味を持っている。胴部上端は幾分はっており口縁部下端に2本の凹線が施されている。色調は濃灰色を呈し、一部黒光りしている。胎土焼成とも良好である。なお底部には一本のヘラ記号がみられる。(54) は2号陶棺下より出土した。外面は底部をヘラ削り後にナデ整形を行なっている以外は(54)と同様の整形を行なっている。凹線は口縁下端と胴上端に一本、頸部に2本施されている。胴部が他の2例にくらべてやや大きく、安定感がある。色調は灰色～灰青色を呈し、胎土には砂粒がやや多く、表面はざらざらしている。(55) は羨道部より大形提瓶(52)と重なり出土した。外面は(53)と同様の整形を行なっている。口縁端部は他の2例に比べてシャープなつくりである。口縁部下端と胴部上端に1本の凹線が施されている。色調は灰色を呈し、やや軟質な土器である。

**鉢** (56) は周構より出土した寸程度の片口を有する破片である。内外面はヨコナデ整形を行ない、外面下端では指頭圧痕による凹凸がみられる。色調は灰色～青灰色を呈し、胎土に砂粒が少く良好な土器である。

### ② 土師質土器(第27図)

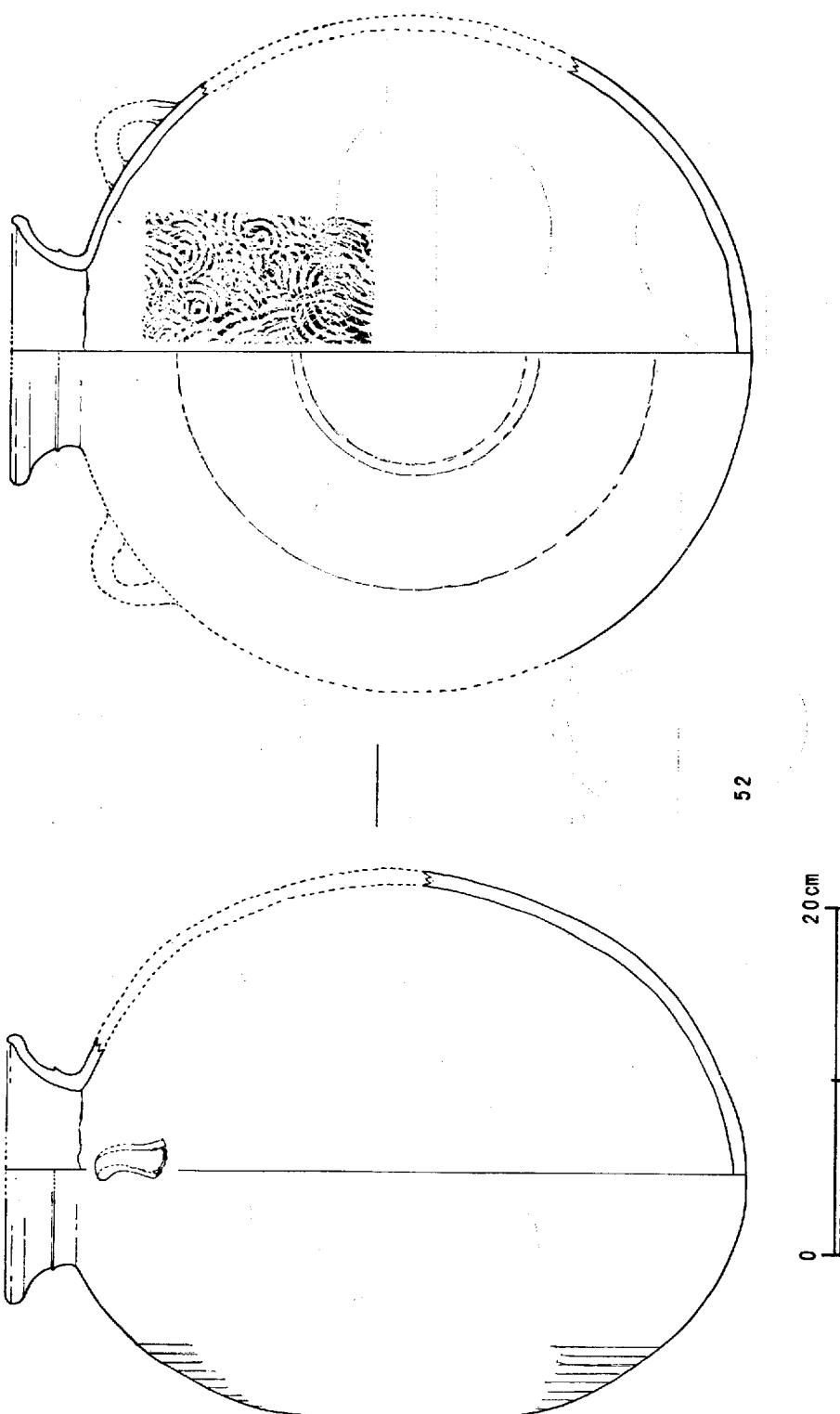
**壺 蓋** (57) は1号陶棺と2号陶棺の間に浮離した状態で出土した半分程度の破片である。天井部は右方向のヘラ削りを行ない、口縁端部及び器壁内面は、ヨコナデ整形を行

三宮大成遺跡



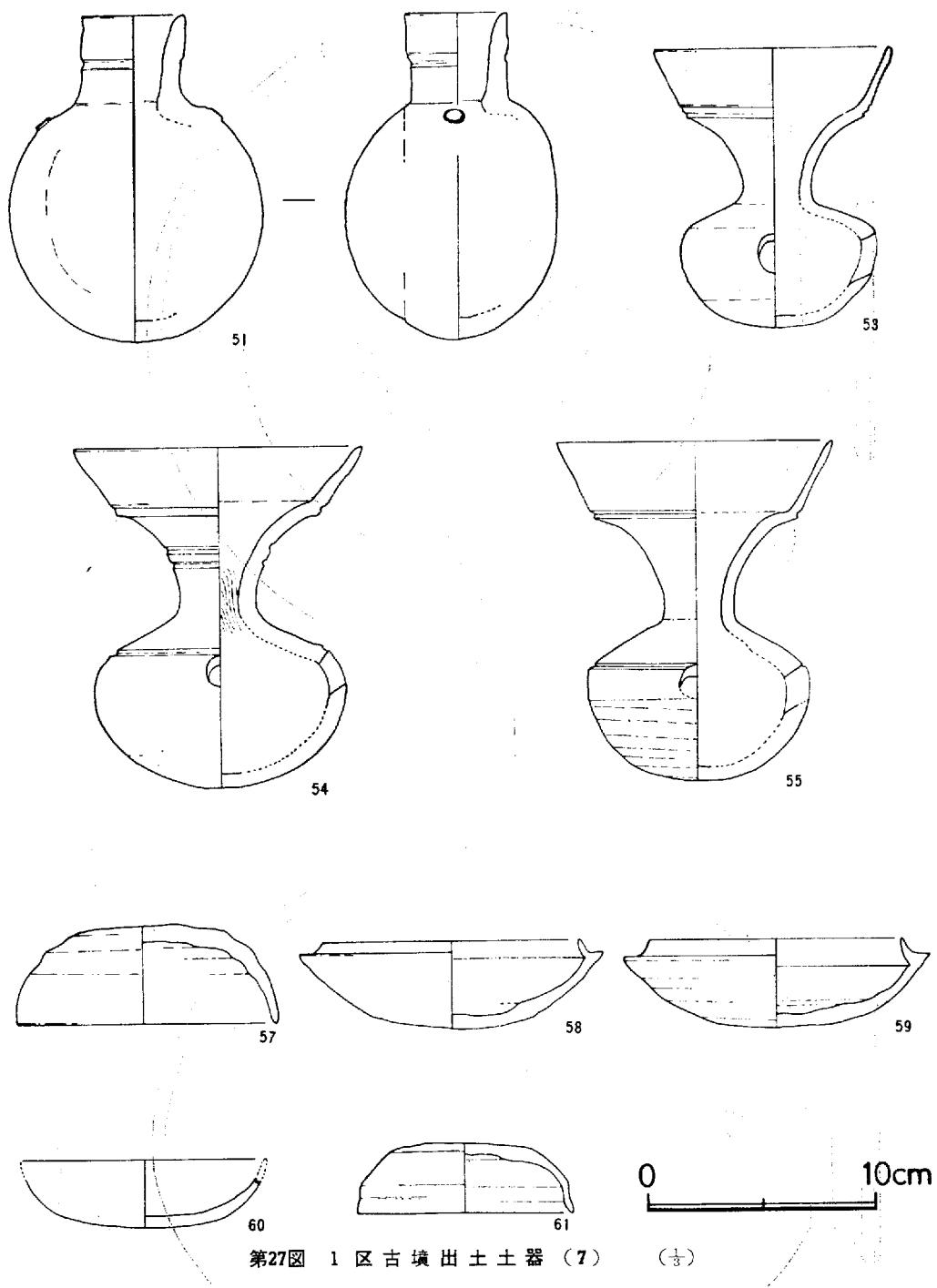
第25図 1区古墳出土土器(5) (上)

二宮大成遺跡



第26図 1区古墳出土土器 (6) (1/4)

三宮大成遺跡



第27図 1区古墳出土土器 (7) (1)

## 二宮大成遺跡

なっている。淡赤褐色を呈した軟質の土器で、胎土には砂粒を幾分多く含んでいる。

**壺身** (58) は2号陶棺下・(59) は羨道中央部より出土した。内面はヨコナデ整形を行なっている。外面は荒れており、整形不明である。(58)・(59) はほぼ同形同大であり、立ち上りは内傾し、受部は横方向である。胎土焼成とも(57) と同様である。

**壺** (60) は羨道部より出土し、口縁部が欠損している。壺として扱ったが、壺蓋の可能性もある。器内外面とも荒れており、整形は不明である。赤褐色を呈した軟質の土器で、胎土には砂粒は少い。

**短頸壺蓋** (61) は羨道部中央より出土した完形品である。外面は剝離により整形は不明だが、内面はロクロ痕が認められる。口縁部はややくびれて、口縁端部で外反している。淡赤褐色を呈した軟質の土器である。

### ③ 武器 (第28・29図)

**鞘尻** (62) 断面形は倒卵形で、全長4.1cm、内径は2.55cm×1.4cmである。内面には木質が一部付着している。縁はやや厚くなっている。長さ7.3cm、巾4cm、厚さ1.5mmの鉄板をまるめて環状部を作り、倒卵形の鉄板で蓋をして作ったものである。鉄製であるが一部に錆がみられるところから金銅張であった可能性がある。外面の一部に布痕がみえる。

**釘** (63) 鉄製で長さ2.3cmやや隅円方形で平坦な頭がつき2.5mmの方形断面の釘である。先端部は折曲っており、対象物の厚さは約1.8cm前後と考えられる。ちょうど柄の厚みに近いので目釘の可能性がある。

**鍔** (64) 金銅製品で、表面に錆と泥が付着しており無理にはがすと欠けたり剝離したりする。一部で金の表面を露出させてみたところやや白っぽい金色で、表面には鏽で磨いたような細かい線がみられる。全形は8.6cm×6.5cmの倒卵形でバチ形の透孔が6個ある。中央部に3.25cm×1.9cm倒卵形の茎樋孔がある。厚さ2mmで、縁の部分は4mmと厚さを増している。

**刀子** (69~84) 15点ある。完形品は少なくて巾0.9cm~1.5cm程、全長11.3cm(69) が一番長い。欠損しているものでも推定全長14~15cm以内の小形のものばかりである。5mmも研ぎ減りしているもの(73) があってかなり実用的なもので武器とするよりは工具とした方が良いかも知れない(註)。(69・71・77) には鉄製の鉗がついている。他にも剝落してしまっているが、(72・76) などは木質部の残り具合から鉗がついていた可能性がある。(84) は剝離した鉗である。錆や木質部の保存のため、闇についてはあまり観察できなかったが、刃闇だけのもの(72・78) もあるが、他は両闇らしい。(77) だけは茎部と刃部が直線的にならず曲っている形式のものである。すべて鉄製品である。

(註) 今井堯「木工技術」日本の考古学V 古墳時代下 河出書房 昭和41年

### ④ 農工具 (第29図)

**鍬(鋤)先金具** (85) 9.5cm×3.2cmで刃部は半円形であるが、先端は使用により減ったものが直線的になっている。上面からみると弧状を示しており6mm程の折り返しが左右の部分のみつく。鉄製品である。古墳築造に役に立っただろう。

## 二宮大成遺跡

### ⑤ 馬 具 (28図)

**杏葉** (86・87) 4片あるが(87)は3片を合成復元した。心葉形で立聞のついたものである。中の透し部分は上・下から突出しているので三葉文に推定復元してみたが心葉文かも知れない(註)。7.9cm×9cmの大きさで、厚さ約1mmの鉄板に透しをつくり表に金銅張を施している。透しの部分は一段低くして文葉を浮出している。そのうちに上下左右に各1個づつと立聞の部分に1個、合計5点の鉢を打っている。鉢の頭断面は半円形で全長約1cmあり、裏側には約6mm程突出している。鉢は頭の部分だけ金銅張をしている。金色は黄味がかったものである。

**鞍金具** (88) 幅約7mm、厚さ約1.5mm～2mmの鉄板に、1cm～1.3cm間隔に小鉢を打ったもので直線的なものと弧を描いているものがある。裏面に黒漆が付着しているものがある。鉢の頭は直径4mm、高さ1.5mmの半円形断面で裏側に2mm～4mm程突出している。端部を斜に切った末端部と考えられるものが3点(88—43～45)ある。この鉄片は全部で45点あり、鉢のついていた部分が全部で99ヶ所以上認められる。45点の長さを合計すると、125.22cmとなる。鞍の縁金具外縁だけの延長は前輪で約60cm、後輪の分を加えたら一個体の鞍が存在したことが予想される。(図版37—2参照)

**留金具** (89) 長方形の一端が丸く彎曲している形式である。幅2.1cm、長さ2.7cm、厚さ0.12cm、半円形断面の鉢が2個ついている。鉢の先端部は折曲げられている。鉄地金銅張製品である。

(註)、後藤守一「上古時代の杏葉に就て」日本古代文化研究 昭和17年

### ⑥ 装身具 (第30図)

**勾玉**、3点ある。90・91は緑色を呈す。碧玉製で一対のものである。いずれも片側穿孔だが、穿った側が異なる。90は長さ25.5mmで、孔径は1.5mm～3mmである。91は長さ24mm、孔径は1.5mm～3.2mmである。全体の形はC字形である。94は良質の瑪瑙製でヨの字形をしている。長さ3.8cm、孔径は2mm～3.5mmで片側穿孔である。

**切子玉**、2点ある。水晶製断面六角形で片側穿孔である。小口面は使用による損傷のため、細かく欠けている。92は長さ24mm、93は長さ27mm。

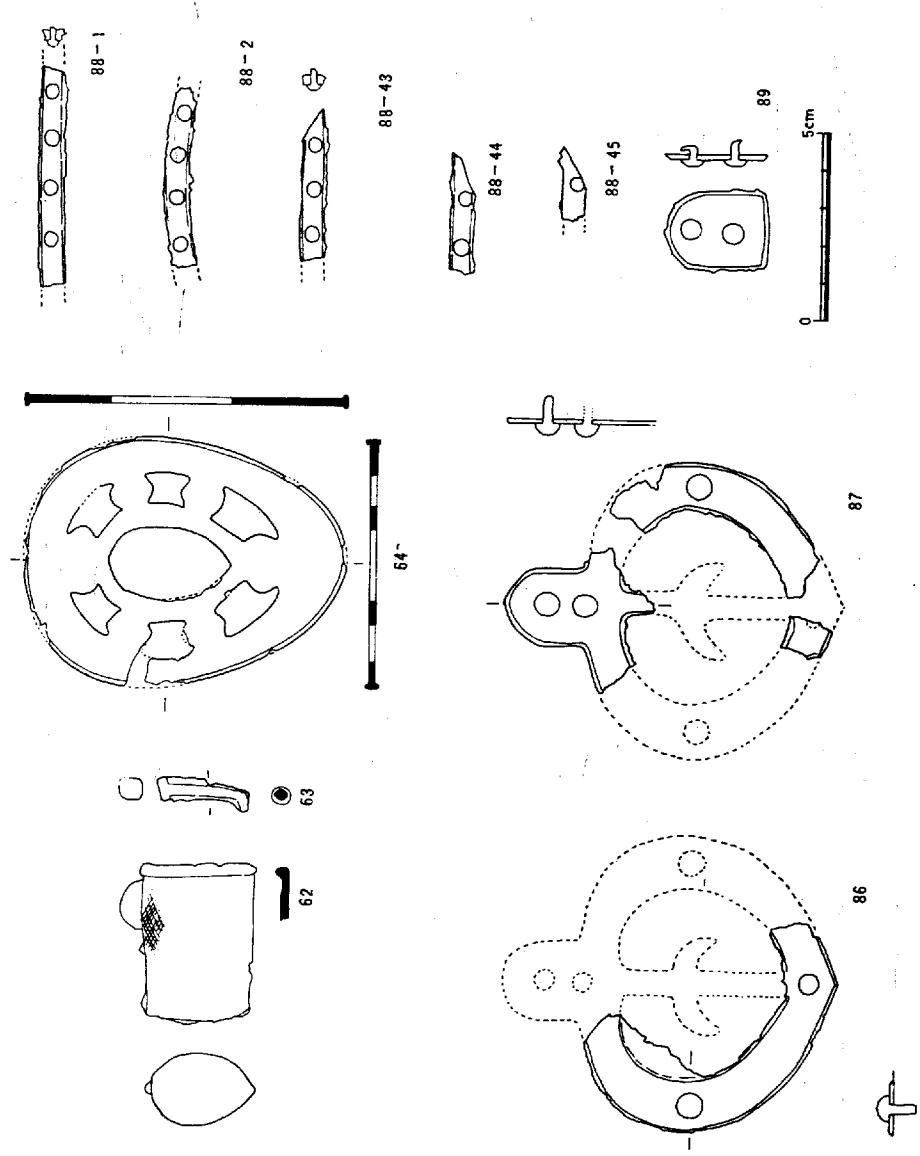
**土玉**、21点ある。直径6mm～8mmの棒状の粘土を、4～5mmの厚さで輪切りにし焼上げたもので、中央に約1mmの孔が穿ってある。表面は漆黒色を呈し、艶のあるものもある。胎土は非常にきめ細かな土で赤褐色に焼けている。水分が多いときは軟質であったが、乾燥したらやや硬質である。図化しなかった。

**ガラス玉**、21点あるが3種類に分類できた(図版38)図化しなかった。

A類、1点だけである。直径3.8mm、厚さ2.2mmで、0.9mmの孔がある。溥青緑色、硬質である。

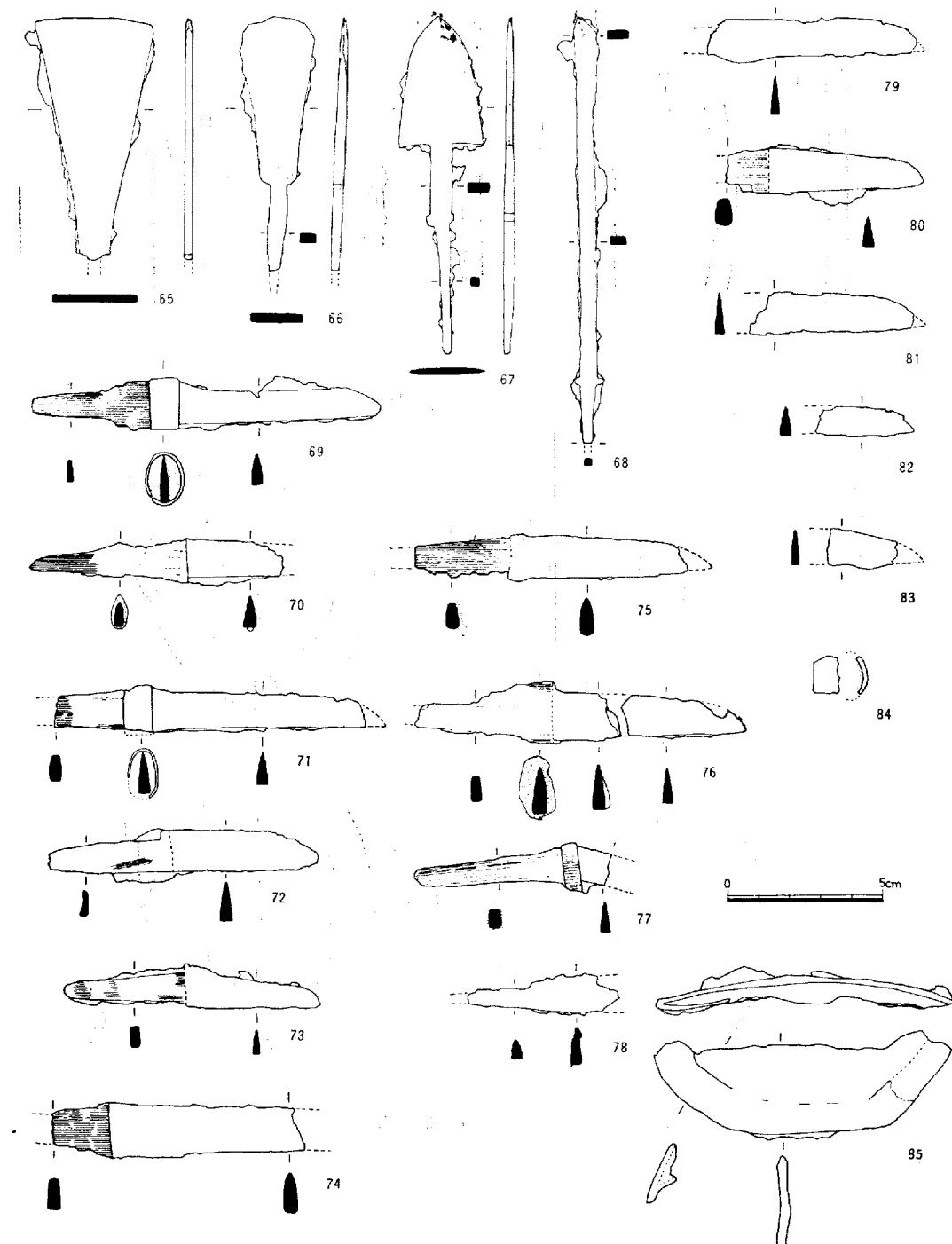
B類、4点ある。直径6.2mm～7mm、厚さ3.9mmで、1.5mmの孔がある。表面は濃緑色だが、割れ口は青色を呈す、非常に危弱ですべて割れてしまったが、3個だけは接合することができ

二宮大成遺跡



第28図 1区古墳出土武器・馬具 (1/2)

三宮大成遺跡



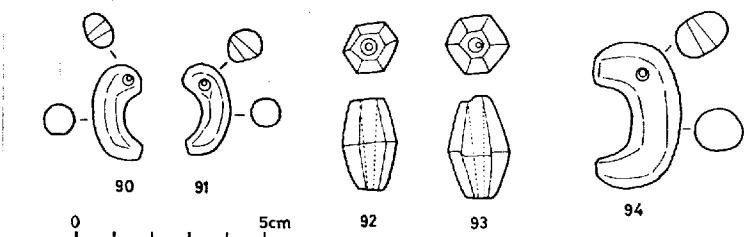
第29図 1区古墳出土武器・農工具 (1/2)

## 三宮大成遺跡

て写真撮影できた。

C類、16点ある。直径6.2mm～10.5mm、厚さ4.5mm～7.5mmで直径1.5mm～3mmの孔がある。大きさは不揃いである。紺色であるが、色の薄いものから濃いものまであり、表面にぶつぶつと小さい穴があり、なめらかでない。穿孔する両面は、平坦に研磨されている。

勾玉90・91、切子玉92・93、土玉21点、ガラス玉A・B類5点の合計30点は1号陶棺内。勾玉94、ガラス玉C類、合計17点は2号陶棺付近より出土した。



第30図 1区古墳出土装身具 (1)

### 4) 小結

1区弥生時代の遺構では中期末～後期末にかけての、住居址3・溝状遺構4を検出した。1号住居址は火災による廃棄、建て替えと複雑な状況を示し、発掘調査の精緻さを要求される遺構であった。さらに住居址内には貯蔵用ピット、中央ピットよりの小溝、ベッド状遺構など特異な遺構を伴なっていた。中央ピットより南に延びた小溝は、すでに報告された津山市押入西遺跡、野介代遺跡の住居址内の溝と同類であろう。

1・2号住居址の中間の南斜面上に検出した溝状遺構は前述の押入西遺跡等の例から、南側に付属する遺構を伴なったものと考えられる。しかし発掘調査範囲が限定されているため遺構相互の関連及び広がりを充分に把握できなかった。

本古墳は南に派生する丘陵尾根の稜線よりやや下った東斜面に、東南に開口した横穴式石室を内部主体にもつ。墳丘は直径22m～18mの楕円形で、構築にあたっては斜面の高い方を周溝状に掘り込み、墳丘盛土としている。石室は地山を掘り下げた土壤内に造られ、玄室中心点がほぼ墳丘の中心となる。石室土壤の掘削を行ない石室構築をしてから周溝部分を掘り、盛り土としているが、それらに先だって内側溝によって古墳の占地を決定するなど計画性がうかがえる。

周溝出土の甕は破碎されており完形をうかがうことができないが、葬送儀礼の一端をしめるものとして示唆的である。鉢は片口のついたものであり、古備前擂鉢を思わせるが、周溝より甕とともに出土しており、本古墳とかかわりをもつものとしてとらえたが、類例を知らず疑問が残る。

石室内に3個の陶棺が置かれていた。石室は最下段の一列だけを残すまで破壊されながらも1号陶棺付近の遺物などは原位置のまま出土した。2・3号陶棺は棺身部奥の半分だけは破損

## 二宮大成遺跡

| 坏  |      | 埋<br>葬       | 出<br>土<br>位<br>置 | 備<br>考 |  |
|----|------|--------------|------------------|--------|--|
| A類 | 1号陶棺 | A, D, E, (I) | 玉馬刀<br>類貝子       | 6世紀末葉～ |  |
|    | 2号陶棺 | G (I)        | 玉鍬刀<br>類先子       | 7世紀初頭  |  |
|    | ○    | B            | 鐵刀<br>鐵子         |        |  |
| B類 | ○    | C 古          | 刀 子              |        |  |
|    | 3号陶棺 | (C新, F, H)   |                  | 7世紀前半  |  |
|    | ○    | I            | 刀 子              |        |  |

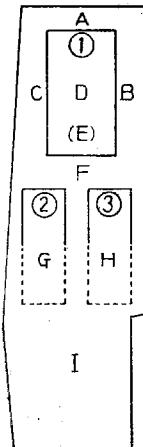


表2 石室内出土遺物分類関係

を受けながらもかろうじて原位置に置かれていた。石室内前半部は床面から最近の陶磁器類が検出される程までに攪乱されており、失なわれた遺物もある。2・3号陶棺破片は第7トレントの石の状況などから、この古墳の石材を目的としてかなり以前に攪乱を受けたと思える。(註)その後20年程前にこの地を耕作していた人がゴボウ掘りの折石材に当り一部掘ったという。

石室内遺物の出土位置はA～Iまでに分類した。以下被葬者との関連を考えながらのべていきたい。確実に1号陶棺の副葬品としてあげられるのはDとEである。Aは1号陶棺葬送儀礼のため置かれた特別なものと考えたい。Bにおいて坏身(16)とセットになる(6)が、3号陶棺の脚の横にあることから1号陶棺とは別の時点で置かれたと考えられる。Cでは7以外はすべて床面より高い位置で発見され台付長頸壺の新しいグループと、古いグループに分けられる。C新とFは、3号陶棺追葬時に動かされたもので、C・古は3号陶棺以前のものと解釈される。

2号陶棺追葬時にはGが副葬された遺物だが攪乱を受けているため、これがすべてではない。B及びCから出土した坏蓋(7)は、あるいは2号陶棺の時点の可能性もある。3号陶棺の追葬時に移動を受けた遺物(C新・F・H)はあるが副葬品とされるものは見当らない。

羨道部と考えられるIでは坏A類、B類に所属する土器類が出土している。提瓶(52)聴(55)は墓前祭の一端を示すものでなかろうか。刀子が一点出土していることから、羨道部追葬の可能性も考えられるが、攪乱がはげしく積極的に主張できない。

装身具は玉類が2組検出されただけであるが刀子の多いことは注目される。被葬者一人につき複数所持した例とすべきか、一棺多数埋葬か、にわかに決しがたい。

註 この丘陵は江戸時代前期、津山藩森家と松平家との交替期に大々的な開墾が行なわれたといふ。主として畠地(現在山畠といふ俗称がある)となっており、この丘陵一帯は石材を産出せず、古墳の石材は掘り出されて利用されたのだろう。そのためか現在この丘陵一帯で墳丘の確認できる古墳は、津山市浄水場北の三角点の円墳一基だけである。埴輪片が採集でき後期古墳である(第1図17狐塚古墳)。また、浄水場の配

### 三宮大成遺跡

水池を造るときに数基の古墳が存在したという話もある。今回の調査では2区で陶棺の小片が出土し、さらに2区の西方の丘陵上で以前陶棺が出土したといわれている。本古墳の立地する尾根つづきで、20m程西南の所からも古墳が発見されたといわれ石材が散布していた。かつてはこの丘陵一帯に古墳群が存在していたと考えられる。

二宮大成遺跡

表3 土 器 計 測 表

須恵器 壺蓋

| 土器番号 | 口 径  | 器 高 | 備 考            | 土器番号 | 口 径       | 器 高     | 備 考             |
|------|------|-----|----------------|------|-----------|---------|-----------------|
| 1    | 12.8 | 3.8 | 完 形            | 8    | 12.6      | 4.0     | 完 形             |
| 2    | 12.7 | 4.2 | 完 形            | 9    | 10.8      | 4.1     |                 |
| 3    | 12.8 | 4.2 | 口縁一部欠損<br>(完形) | 10   | 10.7      | 4.0     | 完 形             |
| 4    | 12.4 | 3.9 | 完 形            | 11   | 10.7~12.7 | 3.2~4.2 | 完 形(歪み大)        |
| 5    | 13.5 | 4.1 | 完 形            | 12   | 10.6      | 4.0     |                 |
| 6    | 12.6 | 3.8 | 完 形            | 13   | 10.3      | 3.8     | 口 縁 欠 損         |
| 7    | 11.9 | 4.3 | 2/3            | 14   | 10.4      | 3.4     | 口 縁一部欠損<br>(完形) |

壺 身

| 土器番号 | 口 径      | 最 大 径     | 器 高     | 備 考            |
|------|----------|-----------|---------|----------------|
| 15   | 10.7     | 13.2      | 3.4     | 完 形            |
| 16   | 11.0     | 13.0      | 3.4     | 完 形            |
| 17   | 11.1     | 13.1      | 4.3     | 完 形            |
| 18   | 10.8     | 13.3      | 4.1     | 完 形            |
| 19   | 11.2     | 13.5      | 4.3     | 完 形            |
| 20   | 11.0     | 13.0      | 3.8     | 完 形            |
| 21   | 11.4     | 13.5      | 3.9     | (2/3)          |
| 22   | 推定11.0   | 推定13.3    | —       | (1/5)          |
| 23   | 9.3      | 11.2      | 3.5     | 完              |
| 24   | 8.2~10.7 | 10.2~12.4 | 3.6~4.1 | 完 形(歪み大)       |
| 25   | 10.8     | 12.4      | 3.7     | 完 形            |
| 26   | 10.5     | 12.5      | 4.0     | 復 元            |
| 27   | 9.5      | 11.0      | 3.5     | (上下に歪み)<br>完 形 |
| 28   | 推定10.1   | 推定12.1    | 3.0前後   | (1/5)          |

二宮大成遺跡

高 坏

| 土器番号 | 口 径  | 脚 径  | 脚 高 | 器 高  | 備 考       |
|------|------|------|-----|------|-----------|
| 29   | 10.9 | 9.6  | 7.0 | 11.0 | (坏部歪み) 完形 |
| 30   | 10.7 | 10.1 | 7.6 | 12.0 | 完 形       |
| 31   | 11.7 | 10.7 | 9.0 | 13.3 | (坏部歪み) 復元 |
| 32   | 12.0 | 11.0 | 8.5 | 13.0 | (坏部歪み) 復元 |
| 33   | 13.0 | —    | —   | —    | 脚 部 欠 損   |
| 34   | 8.8  | 8.0  | 5.2 | 7.7  | 脚, 口縁一部欠損 |

短 頸 壺 蓋

| 土器番号 | 口 径  | 器 高 | 備 考 |
|------|------|-----|-----|
| 35   | 11.0 | 4.5 | 完 形 |
| 36   | 8.0  | 2.9 | 完 形 |
| 37   | 9.0  | 3.3 | 完 形 |

短 頸 壺

| 土器番号 | 口 径 | 胴 径  | 器 高 | 備 考 |
|------|-----|------|-----|-----|
| 38   | 5.9 | 12.0 | 8.7 | 完 形 |
| 39   | 3.0 | 5.8  | 4.3 | 完 形 |

長 頸 壺

| 土器番号 | 口 径 | 頸 径 | 頸 長  | 胴 径  | 器 高  | 備 考  |
|------|-----|-----|------|------|------|------|
| 40   | 8.0 | 5.7 | 10.0 | 18.7 | 24.1 | ほぼ完形 |

台付長頸壺

| 土器番号 | 口 径  | 頸 径 | 頸 長 | 胴 径  | 脚 高 | 脚 径  | 器 高  | 備 考 |
|------|------|-----|-----|------|-----|------|------|-----|
| 41   | 10.5 | 5.5 | 9.0 | 16.7 | 8.0 | 14.8 | 30.0 | 復 元 |

甕

| 土器番号 | 口 径    | 頸 径    | 頸 長    | 備 考  |
|------|--------|--------|--------|------|
| 42   | 推定14.5 | 11.5   | 4.4    | 口縁部片 |
| 43   | 推定31.0 | 推定19.0 | 推定12.0 | 々    |
| 44   | 推定16.0 | 推定17.0 | 10.0   | 々    |

三宮大成遺跡

平 瓶

| 土器番号 | 口 径    | 頸 径 | 頸 長 | 胴 径  | 胴 高  | 器 高  | 備 考    |
|------|--------|-----|-----|------|------|------|--------|
| 45   | 5.9    | 4.5 | 4.2 | 13.2 | 8.3  | 12.6 | 完 形    |
| 46   | 6.6    | 5.0 | 4.5 | 16.4 | 9.9  | 14.0 | 完 形    |
| 47   | 推定 5.6 | 4.2 | 4.4 | 13.7 | 8.6  | 13.3 | 口縁一部欠損 |
| 48   |        |     |     |      |      |      | 盜 難    |
| 49   | 5.6    | 3.9 | 4.8 | 14.8 | 10.3 | 15.2 | 復 元    |
| 50   | —      | 4.4 | —   | 13.1 | 9.1  | —    | 口縁欠損   |

提 瓶

| 土器番号 | 口 径    | 頸 径    | 頸 長 | 胴 長  | 胴 短    | 器 高  | 備 考 |
|------|--------|--------|-----|------|--------|------|-----|
| 51   | 4.5    | 4.2    | 3.9 | 10.5 | 9.3    | 14.4 | 完 形 |
| 52   | 推定15.5 | 推定11.0 | 4.0 | 38.6 | 推定31.5 | 42.6 | —   |

罐

| 土器番号 | 口 径  | 頸 径 | 頸 長 | 胴 径  | 器 高  | 備 考    |
|------|------|-----|-----|------|------|--------|
| 53   | 10.4 | 3.0 | 6.7 | 8.7  | 12.4 | 完 形    |
| 54   | 12.7 | 3.3 | 7.0 | 11.0 | 15.0 | 口縁一部欠損 |
| 55   | 12.1 | 3.1 | 7.9 | 9.7  | 14.9 | 復 元    |

鉢

| 土器番号 | 口 径    | 底 径  | 器 高  | 備 考   |
|------|--------|------|------|-------|
| 56   | 推定30.0 | 13.2 | 14.8 | 片口,復元 |

坏 蓋 (土師質)

| 土器番号 | 口 径  | 器 高 | 備 考 |
|------|------|-----|-----|
| 57   | 11.5 | 4.4 | —   |

坏 身 (土師質)

| 土器番号 | 口 径  | 最大径  | 器 高 | 備 考  |
|------|------|------|-----|------|
| 58   | 11.3 | 13.3 | 3.9 | 復 元  |
| 59   | 11.0 | 13.4 | 3.9 | ほぼ完形 |

埴 (土師器)

| 土器番号 | 口 径    | 器 高    | 備 考  |
|------|--------|--------|------|
| 60   | 推定10.8 | 推定 3.0 | 口縁欠損 |

短 頸 壺 蓋 (土師質)

| 土器番号 | 口 径 | 器 高 | 備 考 |
|------|-----|-----|-----|
| 61   | 9.5 | 3.1 | 完 形 |

## 二宮大成遺跡

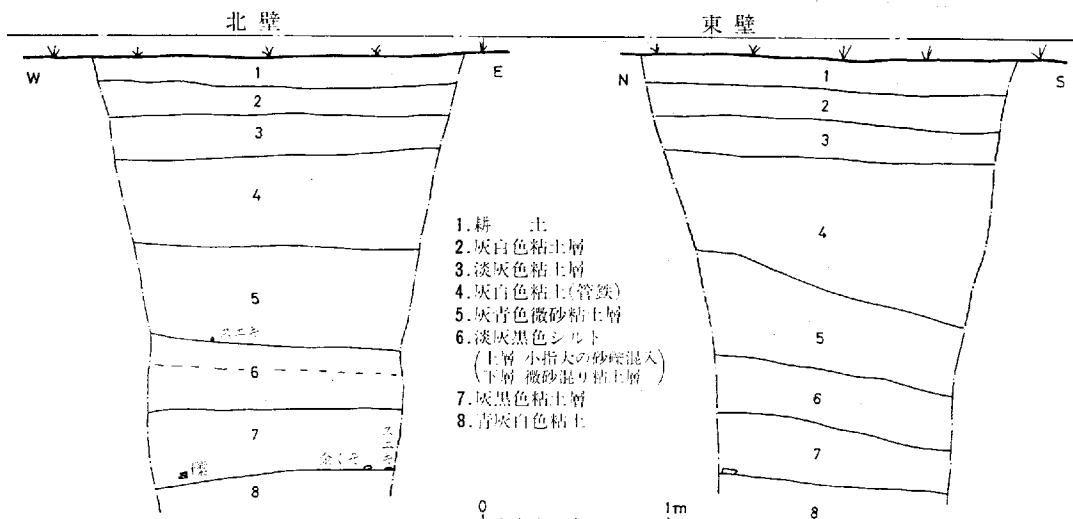
### 第2節 2区の概要

#### 1) 位置・層位

2区は1区に西隣する丘陵上にあり、両調査区間の直線距離は約200mを測る。調査地は尾根の東斜面に開拓された凹地部であり、海拔126m～128mを測る。丘陵南側平地部よりの比高は30m～35mである。調査経過は第2章で述べているので省略するが、2区の調査は諸種の条件により未調査部分が存し、極めて不充分なものであった事実は第33図の遺構配置図が物語っている。両丘陵の間には谷が存し、谷部は試掘坪掘No.25（第31図）を設定したのみで未調査である。

なお、両調査区と谷部の突き当り部、三角形に結ばれる北の地点（第2図）で10年ほど前に弥生式土器片、石斧等が採集され、現在津山市教育委員会が保管している。

調査は5mグリッドを設定し、約450m<sup>2</sup>を発掘した。結果、表4に示すごとく、弥生時代の石詰土壙3個、年代不明の炉5個、古墳時代後期住居址1個、平安時代末期～中世の石詰土壙1個、小掘立柱建物址？等を検出した。



第31図 2区坪掘No.25断面図 (1/40)

本地区の地形は第32図の如く傾斜面の凹地部であり包含層は数層に分離される。（第34図）下層の黒色粘土層中には弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺物が含まれている。

第34図 土層名、①耕土層②暗黄灰色砂質泥土③黄赤色砂質粘土層④淡茶褐色砂質粘土層⑤淡灰褐色粘土層⑥灰褐色粘土層⑦淡褐色砂質粘土層⑧灰褐色砂質粘土層⑨黒灰色粘土層（6～7世紀代）⑩黄黒色砂質粘土層⑪黒色粘土層（混小礫、炭）⑫黒色粘土層

## 2) 遺構

## (a) 石詰土壙 (第33図, 第35図, 図版42)

石詰土壙1内には径5cm～20数cmの河原石が60数個つめられている。上面は数十cm以上の削平が考えられる。河原石に混じて弥生中期土器が数片検出された。石詰土壙2中には径5cm～20cm大の河原石が30数個存在する。出土土器は第36図2～6の他、数点の破片があり、弥生中期中葉に属するものである。石詰土壙3の掘り方は一部しか確認できなかった。本土壙内にも30個前後の河原石がつめられていた。当初のトレンチ発掘の際、出土した土器片(第36図1)は本土壙に伴う可能性があると推定される。東西断面壁を削り出す際に直上で弥生後期土器片が出土した。(第36図9)

## (b) 溝1 (第33図)

溝1は地形の凹みに沿って掘られたものと推定される。出土土器は数点の小破片しか存在せず、溝が形成された時期を決定するのは危険であるが、弥生後期～古墳時代前期に属するものであろう。

## (c) 住居址及び炉 (第33図, 図版43)

発掘区北東部で検出された遺構で平面方形の住居址と推定される。北西コーナーの一部のみの検出であるが壁帶部が残存し、北辺部で周溝が確認されている。周溝部で第37図1に示した杯が出土した。6世紀末葉～7世紀初頭に比定される。本来は4本柱と推定される。作り付けカマドの痕跡は認められなかった。炉5とこの住居址との関連は不明である。同時期に属する住居址は上相遺跡(中継報告1参照)領家遺跡、天神原遺跡(報告予定)例で大半はカマドが付設されている。炉1～炉4に関しても年代は不明である。熱残留磁気による年代分析は行なっていない。

## (d) 石詰土壙4 (第33図, 第35図, 図版44)

本土壙上半部では遺物は最上面で出土した天禧通寶(1017年鑄造)1点だけで土器片は存在しない。下半部には約100個の河原石が土壙底面から整然たる状態で三重に積まれている。河原石に混じって数片の土器が出土した。「勝出焼」(後述)破片も認められ、本土壙の上限年代は平安時代末期に比定される。墓としての機能を証明する根拠は何ら存在せず、用途不明の土壙と言わざるをえない。

## (e) 掘立柱建物? (第33図, 図版40・41)

検出した柱穴は約190個存在する。いずれも平面径10cm～30cm前後の小柱穴である。建物としてのまとまりが考えられるのは2棟分である。若干の疑問点も残るが一応建物として扱っておきたい。建物Iは2間×2間(2間×4間の可能性もある)で南北4.2m, 東西3.0mを測る。柱穴中より備前焼摺鉢破片、青磁破片等が出土しており、上限年代は室町時代初期と推定される。建物IIは2間×3間(2間×4間の可能性もある)で東西4.5m, 南北3.9mを測る。柱穴中より灯明皿等が出土しており、所属年代は鎌倉時代～室町時代初期と推定される。

## 三宮大成遺跡

表4 2区遺構一覧表

| 遺構            | 規模(単位m)     |             |                       | 出土遺物             | 年代          | 備考   |
|---------------|-------------|-------------|-----------------------|------------------|-------------|--|
|               | 長さ          | 巾           | 深さ                    |                  |             |  |
| 石詰土壙1         | 2.1         | 1.4         | 0.1                   | 壺, カメ            | 弥生中期<br>中葉  | ピット内に60個位河原石が埋められており、土器は破片で少量出土したのみ            |
| 石詰土壙2         | 1.8         | 1.4         | 0.1                   | 壺, カメ, 高杯        | 同上          | 同上   |
| 溝1            | 8以上         | 0.6         | 0.3                   | 壺, カメ            | 弥生後期?       | 凹地の傾斜面裾部につくられている。出土土器は少ない。                     |
| か(5こ)         | 0.5         | 0.3         | 0.05                  | なし               | 弥生~7C?      | いずれもまっ赤な焼土                                     |
| 住居址           | 5           | ?           | 0.05                  | なし               | 7C?         | 北半分のみ残存しており柱は2本検出したが元来4本柱の方形住居と考えられる。          |
| 石詰土壙4         | 1.5         | 1.3         | 0.7                   | 土師器, 須恵質土器, 天祐通宝 | 平安末<br>~鎌倉  | 下半部に河原石が各100コ三段につまれている。用途不明                    |
| 建物I<br>(掘立柱)  | 4.2<br>(南北) | 3<br>(東西)   | 0.3<br>0.5<br>(径約0.3) | 備前焼摺鉢1片          | 鎌倉<br>~室町初期 | 柱穴数3こ, 2間×2間, 2間×4間の可能性もある                     |
| 建物II<br>(掘立柱) | 4.5<br>(東西) | 3.9<br>(南北) | 0.3<br>(径約0.3)        | 灯明皿 その他          | 同上          | 柱穴数12, 2間×3間, 南北の柱間は南北7尺, 北半6尺, 抜取穴中に若干の遺物がある。 |

### (1) その他の遺構(第33図)

溝2, 溝3に関しては明瞭なる出土品は存在しない。機能も不明である。溝2は切り合ひ関係から建物Ⅱよりも古い。またその他の柱穴中より「勝田焼」の出土(図版45-2)があり、建物の中には平安時代末期に属するものも存在したと考えられる。とすれば、溝2, 溝3は掘立柱建物に関連する遺構としての可能性もありうるものとも考えてよいのではなかろうか。

### 3) 遺 物

第2調査区で出土した遺物には弥生時代中期, 後期の土器, 石器, 古墳時代前期土師器, 古墳時代後期須恵器, 土師器, 奈良時代須恵器, 平安時代須恵器, 平安時代末期~室町時代初期に属する須恵質土器(勝田焼), 土師器, 青磁, 備前焼陶器等が存在する。95%以上の殆どが破片資料である。量的に多い順番は古墳時代後期土器, 中世土器, 弥生式土器であり, その他はごく少量である。

#### (a) 弥生式土器(第36図)

弥生時代中期に属するものとして第36図1~6等がみられる。壺形土器には頸部に三角突帯

### 三 宮 太 成 遺 跡

を貼付けたもの、口縁部内面に斜格子文を有するもの等が存在する。壺形土器3は口縁部の肥厚はほとんどみられない扁平なものである。第36図2～6の土器は石詰土壙2出土の一括資料であり、同時期と考えられる。弥生時代後期に属するものは土器番号7～9等がある。7は長頸壺である。壺形土器破片9にはS字状スタンプ文が施されている。後期後半に属するものであろう。8の高杯に関しては磨滅が激しいため、杯部なのか脚裾部なのか判然としない。

#### (b) 古式土師器

図面には示していないが包含層出土品中にごく少量、口縁部に擬似凹線文を有する壺形土器の破片等が存在する。

#### (c) 古墳時代後期須恵器・土師器(第37・38図)

須恵器1～13は古墳時代後期に属する遺物である。杯身1以外は全て包含層出土品である。1は住居址に共伴すると考えられる。2は口唇部の立ちあがり、口径からみて須恵器類の中では若干古相を示しており、6世紀後半代に比定しうるものと考えている。土師器は実測していないが、甕等の破片が若干量存在し、それらの中には把手等も含まれている。

#### (d) 歴史時代土器

奈良時代に属する遺物はごく少量ではあるが、付高台の杯底部破片等の存在によって伺うことができる。広口壺14もこの時期に属するものであろう。

平安時代前半期に属する遺物は不明である。平安時代末期以前の遺物は存在するかもしれないが識別が判然としない。平安時代末期に属する遺物には須恵質碗破片が存在し、大半は底部に糸切り痕を認める。平底のものと削り出し高台状のものとの2様が存在する。

図版45—2柱穴出土の土器は甕形土器であり、外面に格子目叩き痕を有する特徴をもつ遺物であり、全体は判然としないが、頸部から底部まで全体的に格子目叩き痕をもち、底部の一部にも同様の叩き目が認められる。この格子目凹みは一辺2～3mmの大きさである。胴中央部付近の接合部外面には幅約2cmで縦方向に約10cmの長さで格子目叩きの上に刷毛工具の幅とほぼ等間隔に間隔をおいて施されている。内面の成形は胴上半部を斜め方向を基本に全体的にくまなく荒刷毛の痕が認められ、胴下半部は横ナデ成形されている。この甕形土器と同様の格子目叩きを有する破片は後述する備前焼の破片量より多くの量が認められる。この土器は美作町間山周辺で窯跡が発見されており、「勝田焼」(註1)といわれているものと同一様相を示している。完形品は津山市黒沢山万福寺付近より出土した経筒外容器例(註2)によって伺うことができる。2区出土のこの格子目叩きを有する焼物は外面の色調は淡赤褐色または灰色を呈し、胎土は通常の須恵器に比しやや良質で焼成は極めて堅緻である。上限年代は平安時代末期におけるものと考えている。

第38図16の土師器器台は底面に糸切り痕を有する。同様の遺物は美作国府関連遺跡発見の井戸遺構でも多数出土しており、周防国府の発掘出土品(註3)にも同様例が認められ、平安時代末期～鎌倉時代に比定しうるものと考えている。第38図17の土器は外面の一部に煤が付着しており、土鍋または鉢と考えられる。備前焼の破片は10数点出土しているにすぎないが、摺鉢

## 二宮大成遺跡

および壺等の器種が認められる。摺鉢で口縁部の破片は数点認められ、口唇部の肥厚の状態からみて南北朝時代～室町時代前期に属するものと考えられる。

### (e) 瓦 (第38図18)

軒丸瓦が一点だけ単独出土している。小片であるが復元してみた。直径約16.3cm, 厚さ1.3cm～1.5cm, 素弁連華文軒丸瓦である。中房はないが推定径は4.5cm。弁は八弁あり薄く、弁端部が尖り点珠のようになる。弁端から中ほどまで低い稜線がある。間弁は中房まで達しておら

表5 2区出土遺物一覧表

| 土器番号        | 出 土 位 置 | 遺 構・土 層 | 器 種   | 口縁径(cm) | 備 考      |
|-------------|---------|---------|-------|---------|----------|
| 第36図1<br>1  | D — 2   | 石詰土壇3内? | 壺     | 不明      |          |
| 2           | C — 3   | 夕 2内    | 々     | 不明      |          |
| 3           | 々       | 々 々     | 甕     | 15.2    |          |
| 4           | 々       | 々 々     | 高 杯   | 23.4    |          |
| 5           | 々       | 々 々     | 台 付 鉢 | 35      |          |
| 6           | 々       | 々 々     | 器 台   | 不明      |          |
| 7           | D—4トレンチ | 第 11 層  | 壺     | 15      |          |
| 8           | Eトレンチ   | 々       | 高 杯   | 27      |          |
| 9           | D—3南西隅  | 石詰土壇3直上 | 壺     | 不明      | スタンプ文    |
| 第37図1<br>1  | E — 5   | 1号住居址内  | 杯 身   | 12.3    |          |
| 2           | E—2トレンチ | 古墳時代後期層 | 々     | 13.4    |          |
| 3           | E — 4   | 々       | 杯 蓋   | 13.4    |          |
| 4           |         | 々       | 々     | 12.8    |          |
| 5           | Fトレンチ   | 々       | 々     | 11.4    |          |
| 6           | 々       | 々       | 々     | 11.5    |          |
| 7           | E—2トレンチ | 々       | 蓋     | 17.6    |          |
| 8           | Fトレンチ   | 々       | 高 杯   | 11.2    |          |
| 9           | D — 3   | 々       | 々     | 13.2    |          |
| 10          | Eトレンチ   | 々       | 々     | 14.4    |          |
| 11          | 々       | 々       | 々     | 不明      |          |
| 第38図12<br>1 | E — 4   | 々       | 甕     | 22.5    |          |
| 13          | 々       | 包含層上層   | 台 付 壺 | 不明      |          |
| 14          | D — 4   | 包含層上層   | 広 口 壺 | 15.2    |          |
| 15          |         | 建物Ⅱ柱穴内  | 灯 明 盆 | 10      | 土 師 器    |
| 16          | Fトレンチ   | 中 世 層   | 器 台   | 7 以 上   | 土 師 器    |
| 17          | Dトレンチ   | 包含層中層   | 土 鍋   | 14.5    | 瓦質, スス付着 |
| 18          | 出土レベル   | 125.96m | 軒 丸 瓦 |         |          |

## 二宮大成遺跡

ず、単弁の弁端部分をつなぐように連続しており、三叉の交点が高い。連続する間弁の輪郭は八角形状になる。この外側に圈がめぐるが周縁の部分は欠損しており不明。胎土は淡灰褐色で軟質である。この瓦は岡山市賞田廃寺第Ⅱ様式瓦（註）と比べて一まわり小さいが、中房の大きさ、弁の形、圈がめぐるところなど文様が似ている。しかし、本遺跡の方の瓦当厚が溥いことからやや古い感じをうける。飛鳥時代終末～白鳳時代初頭頃としておこう。いずれにしても美作地方最古の瓦である。

（この項 栗野）

註：岡山市教育委員会「賞田廃寺」P30

### （f）その他の遺物

片岩製磨製石庖丁の半次品3点が出土している。いずれも弥生時代包含層には伴なわず、後代の土層中より混入出土したものであり、細かい所屬年代は不明である。

その他に青銅鏡（天禧通寶）1個の出土がある。鉄器類は釘状の小片等が数点出土したにすぎない。

註(1) 三上次男・植崎彰一編『日本の考古学』第Ⅵ巻、窯業(5)瀬戸内(ii)古代後期（西川宏） 1967年刊

註(2) 津山市教育委員会『津山市史』第1巻、原始・古代 P178, 1972年刊

註(3) 防府史談会『周防の国衙』 1967年刊

## 4) 小 結

### （a）弥生時代の問題について

2区で検出された遺構・遺物のうち、一番古いものは弥生時代中期中葉の石詰土壙および、土器である。この石詰土壙の用途は不明である。同時期に属する同種遺構として津山市総社所在、美作国府関連遺跡で検出した1例がある。美作国府関連遺跡例は台地傾斜面で検出された遺構で平面橢円形、長径3m弱の規模（本報告書参照）で、二宮大成遺跡2区例より一回り規模の大きいものである。美作国府関連遺跡例の土壙掘り方はU形で垂直的ではない。土壙内には河原石が30cm～40cmの厚さでぎっしり詰められており、それらに混じって土器片が出土した。土器はかなりの量存在するけれども、完形に復原しうるものは存在せず、いずれも破片である。このように2遺跡の石詰土壙の状況からみて用途は依然として不明である。しかし墓としての機能はまずありえないと考えている。中国縦貫自動車道落合インターチェンジ以東の25遺跡中、弥生時代中期中葉に属する遺構または遺物の出土がみられるのは西原遺跡、宮尾遺跡、二宮大成遺跡、美作国府関連遺跡、小中遺跡、狼谷遺跡、高木遺跡の7遺跡（報告書予定）が挙げられる。これらはいずれも台地上、低丘陵上に位置し、沖積平地に位置するものではない。しかしながら、この問題は調査対象遺跡の偶然性によるものであり、沖積平地にも当然、弥生時代中期中葉段階に遺跡が存在したものと推定される。

なお、二宮大成遺跡1区では弥生時代中期中葉段階に属する遺構・遺物は検出されていない。他の6遺跡例でも断片資料であり、美作地方の落合インターチェンジ以東の地域におけるこの段階の集落構造、規模等の解明はまだまだ今後の問題である。

1区では弥生時代終末期に属する住居址が検出されているが、2区ではこの段階の遺構は調

## 二宮大成遺跡

査面積にも原因するであろうが、不明である。ところで、2区に南隣する同一丘陵上で畑を耕作中、径4m～5mの範囲にわたって黒っぽい土があった部分が何ヶ所か存在したという地主の話がある。それは住居址であったとも推定され、また、1区と2区を底辺として、三角形に当る北の地区で弥生時代遺物が採集されており（第2図），それらを考慮するならば、二宮大成遺跡および付近における弥生時代遺跡の拡がりは、かなりの範囲をもつものと推定される。

### （b）古墳時代の問題について

古墳時代の遺構は略穴式住居址1例（半分のみ）の検出だけである。住居址は後代の削平による消滅、調査面積等により、1例しか発見されていないが、包含層中には古墳時代後期の遺物が多量に存在することから、かなりの住居址群が存在していたものと推定される。

遺物では古式土師器が少量出土し、大半は6世紀末葉～7世紀代に比定される須恵器、土師器が出土した。しかしながら5世紀代および6世紀代前半期に比定しうる遺物は認められなかつた。

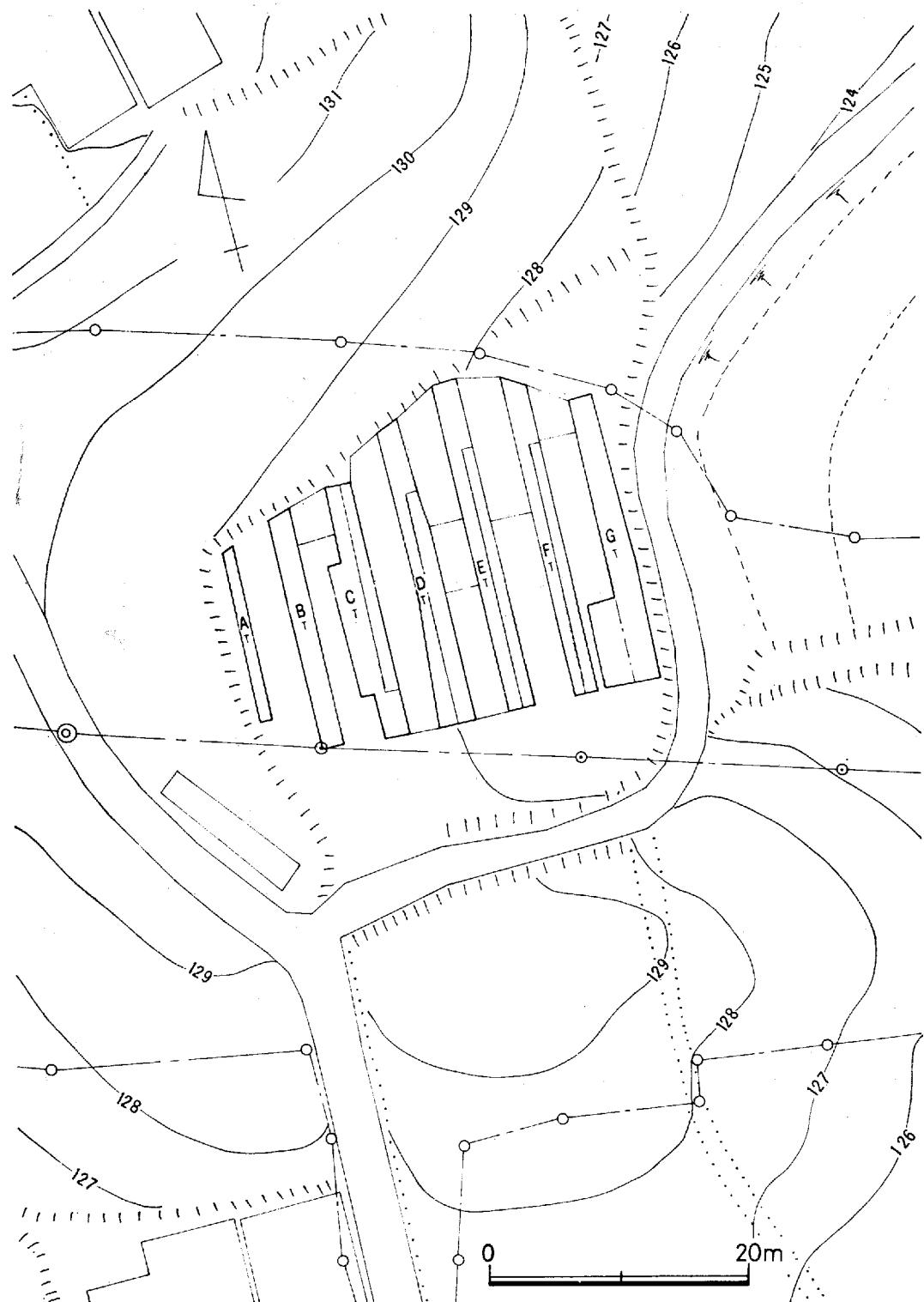
### （c）歴史時代の問題について

飛鳥様式の軒丸瓦破片1点の出土は注目に値するけれども、他の瓦片の出土もみられず、また関連する遺構も検出されていないので、何故に1破片だけ出土したのか疑問である。

奈良時代、平安時代前期、中期の遺構は不明であり、遺物もごく少量出土しただけである。これらの時期の遺構は調査地区周辺に残存しているものと考えられるが、密なるものではないであろう。掘立柱建物の機能については倉庫と考えられ、小屋的なものと推定される。

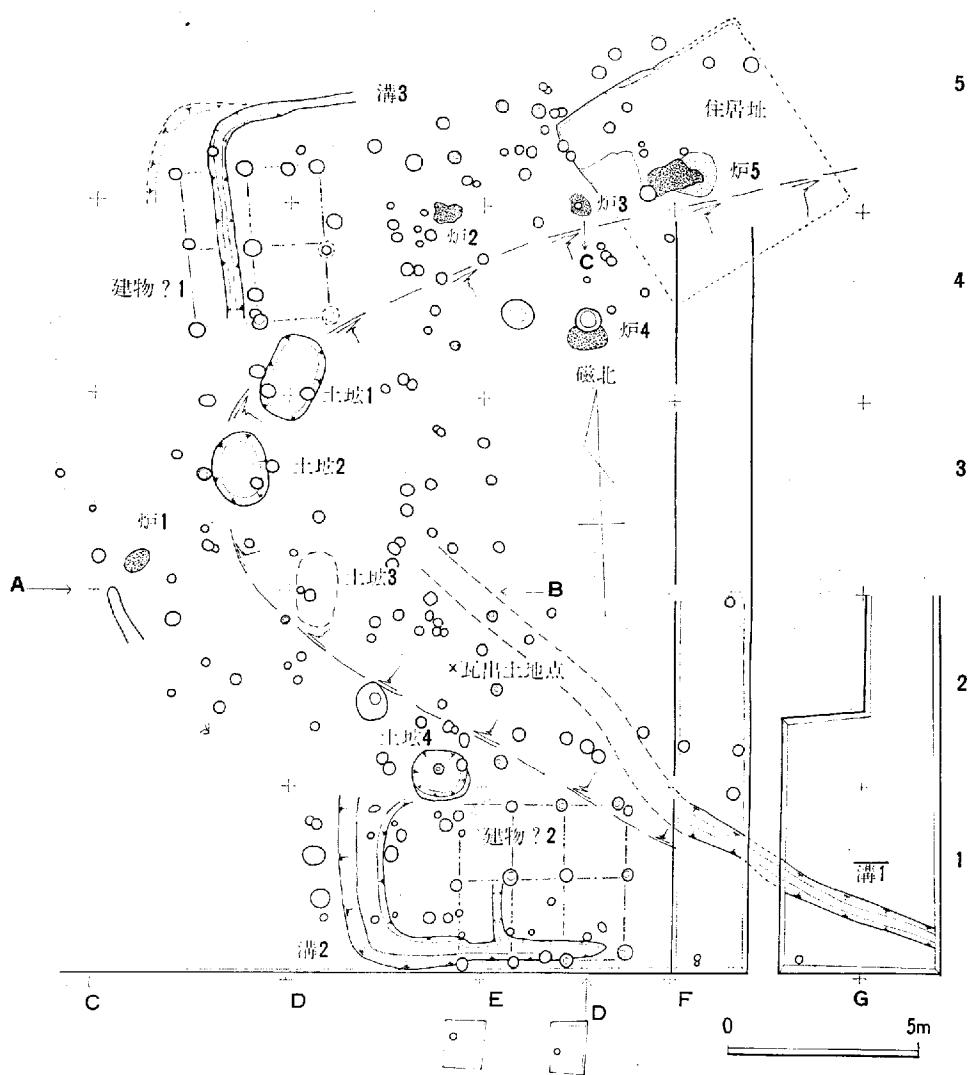
最後に「勝田式」土器について若干ふれておきたい。この焼物は外面に格子目叩き痕を有するのが特徴である。中国縦貫道落合インターチェンジ以東の25遺跡の調査において、数遺跡で少量ではあるが発見されている。二宮大成遺跡の周辺地域では久米廃寺、美作国府関連遺跡等で発見されている。この種の焼物を焼いた窯跡は美作東部地域、勝田郡、英田郡内で発見されており、研究史上「勝田式」なる名称が与えられているので、仮に『勝田焼』と呼称しておく。最近、美作町間山周辺で発見された窯跡の資料では外面格子目叩き痕を有する甕破片と共に底部に糸切り痕を有する須恵質碗が共伴している。従ってその所属年代は平安時代後期～鎌倉時代の中におさまりうるものと考えられる。美作東部地域以外にも窯跡が存在するのか否かは今後の研究課題の一つとなるであろう。なお、この焼物は岡山県南部地域における「亀山焼」の出現と相関連する歴史的産物であると考えられる。しかし焼成の面において「亀山焼」に比し『勝田焼』はより高温であると思われる。それらの相違点、共通点に関しては今後の解明をまちたいと思う。

三宮大成遺跡



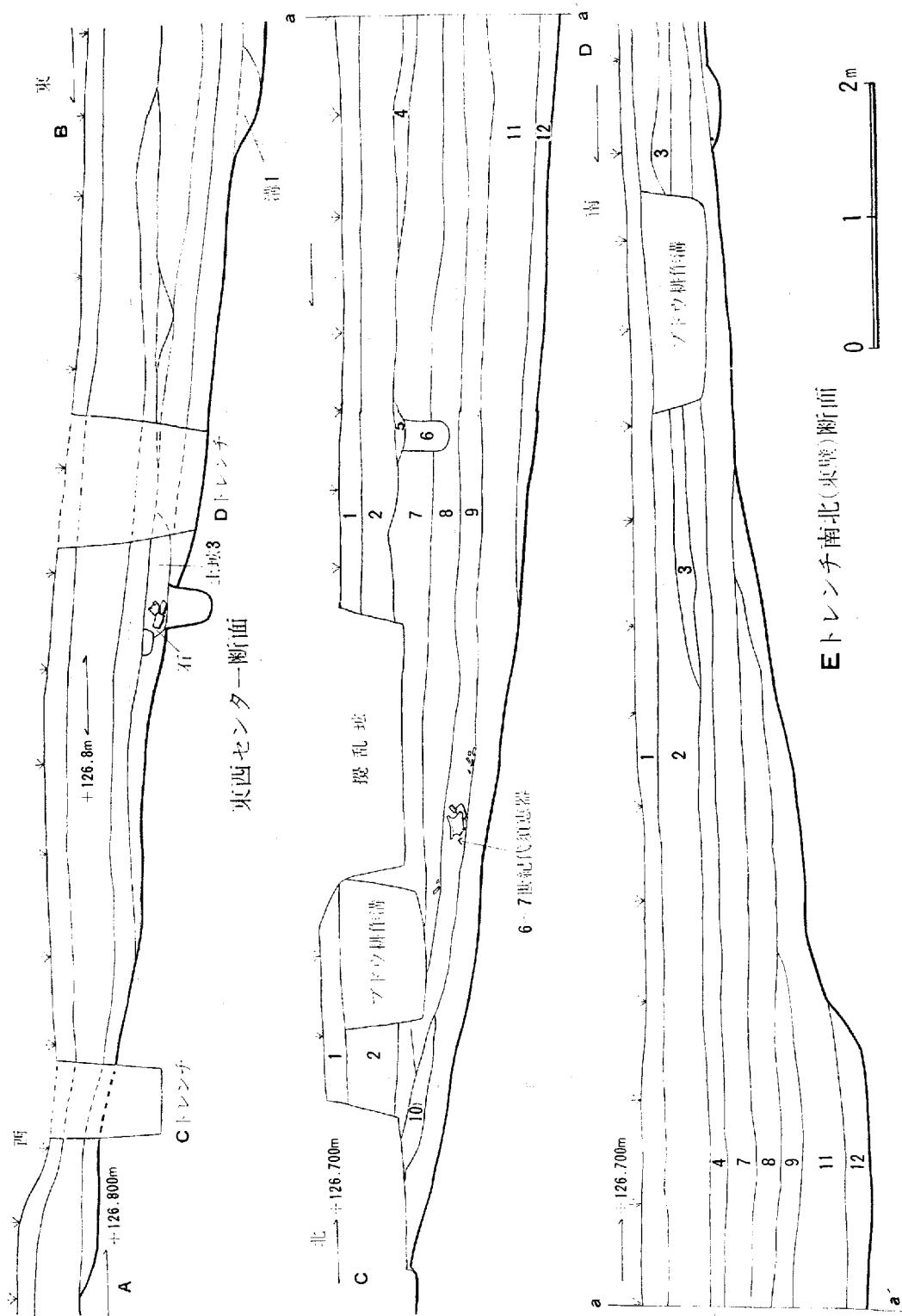
第32図 2区トレーニチ設定図 (1/500)

二宮大成遺跡



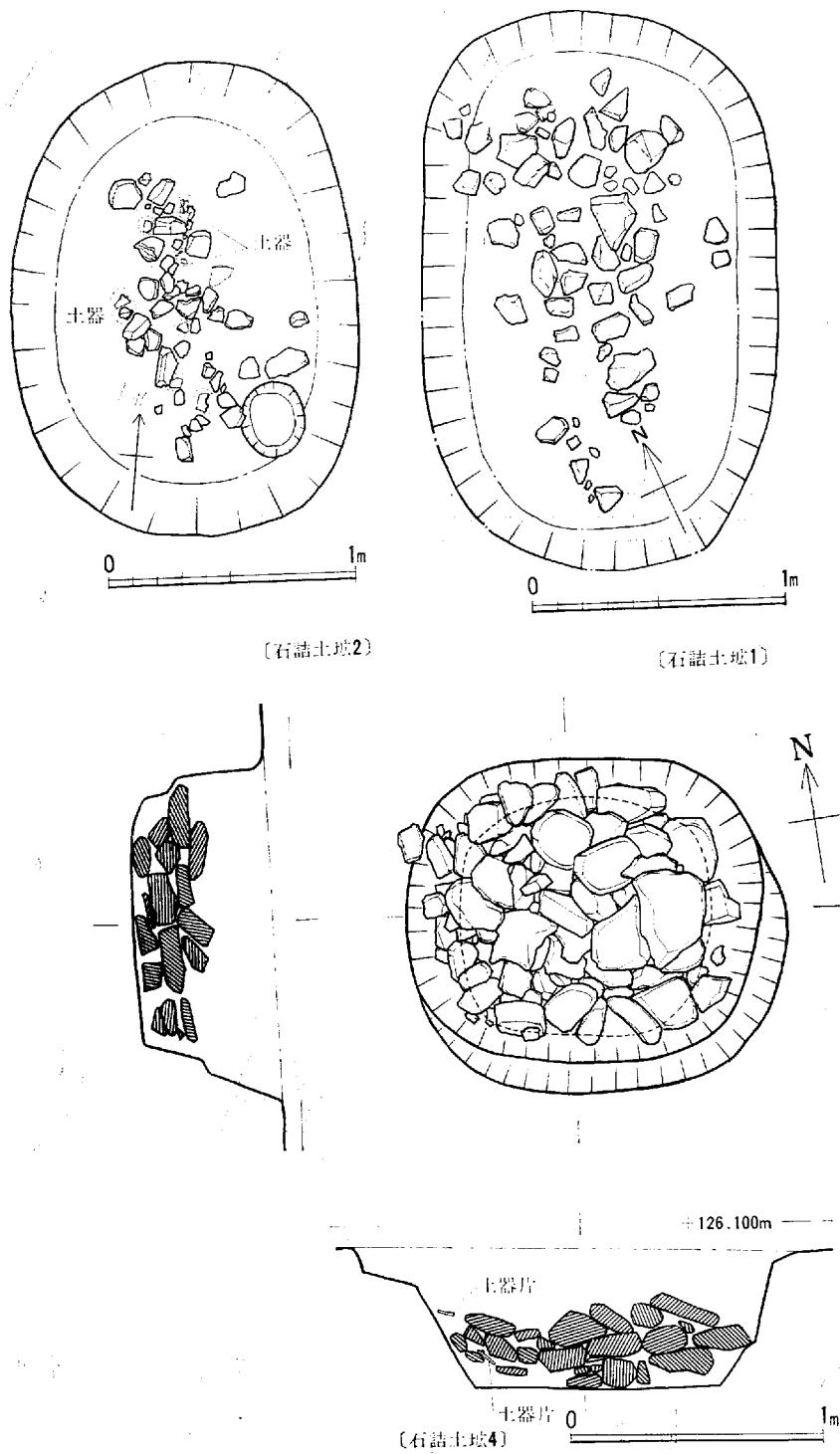
第33図 2 区 遺 構 配 置 図 (1/200)

14. 宮大成遺跡

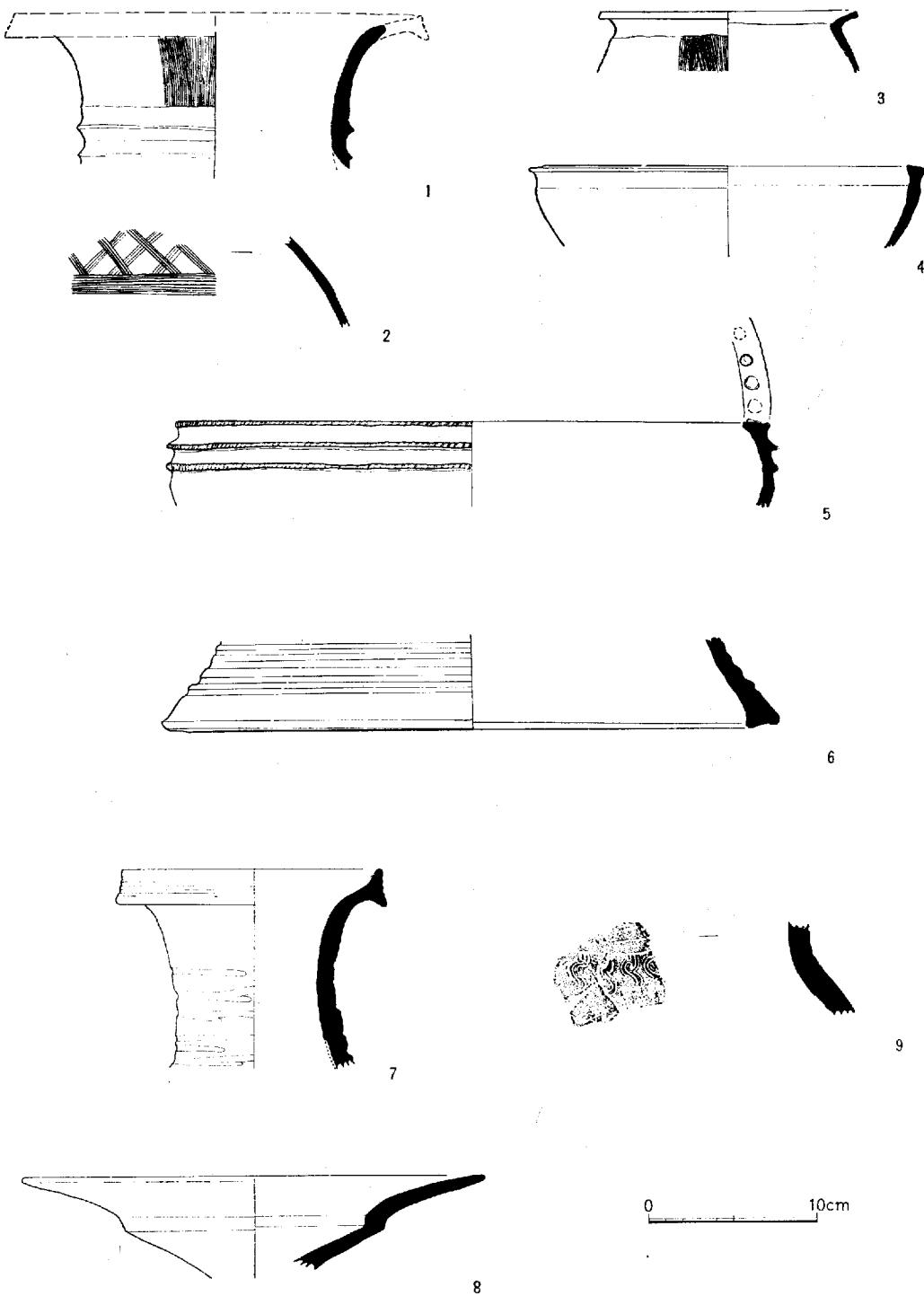


第34図 2 土層断面図 (1/50)

三宮大成遺跡

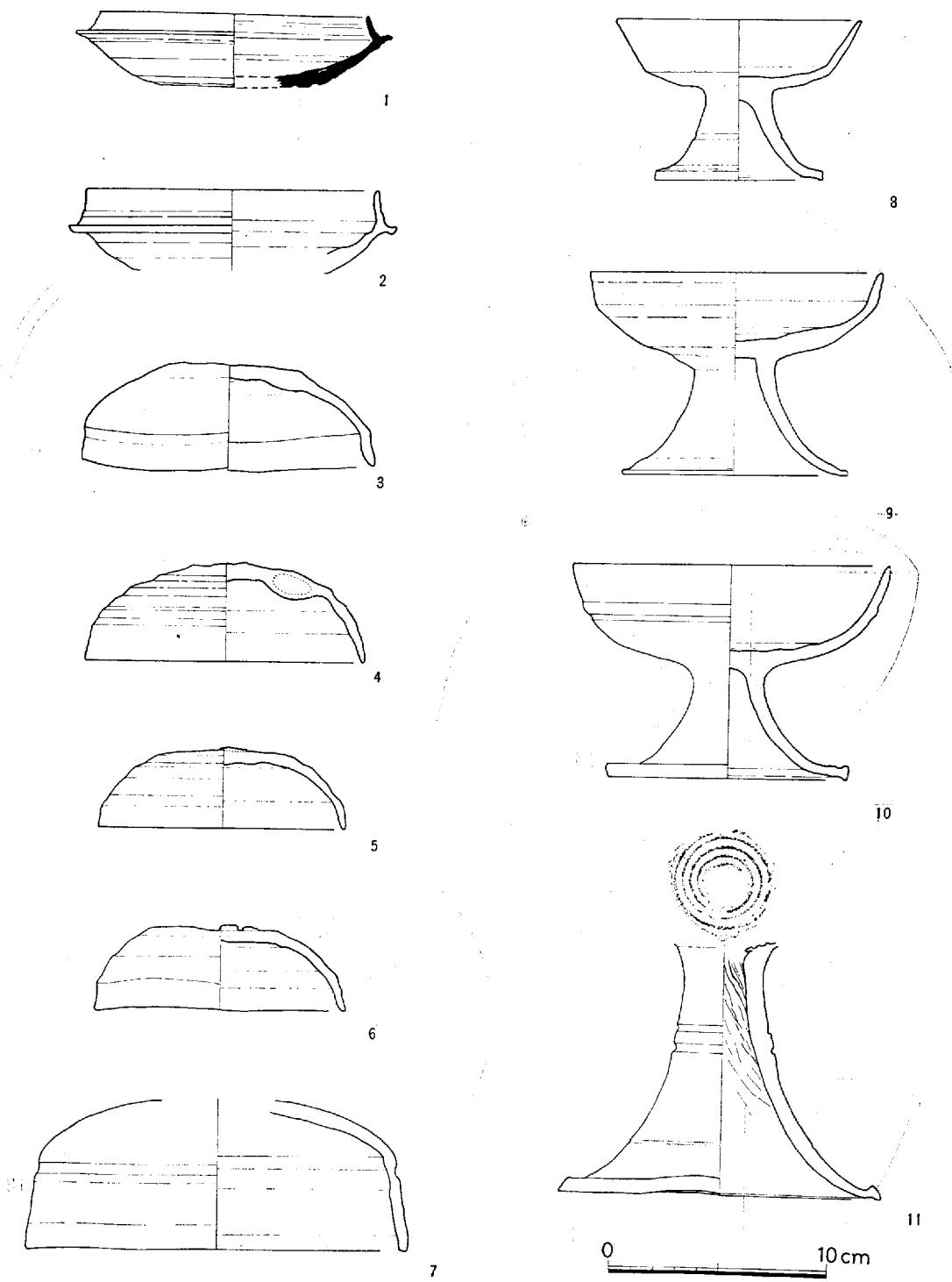


二宮大成遺跡



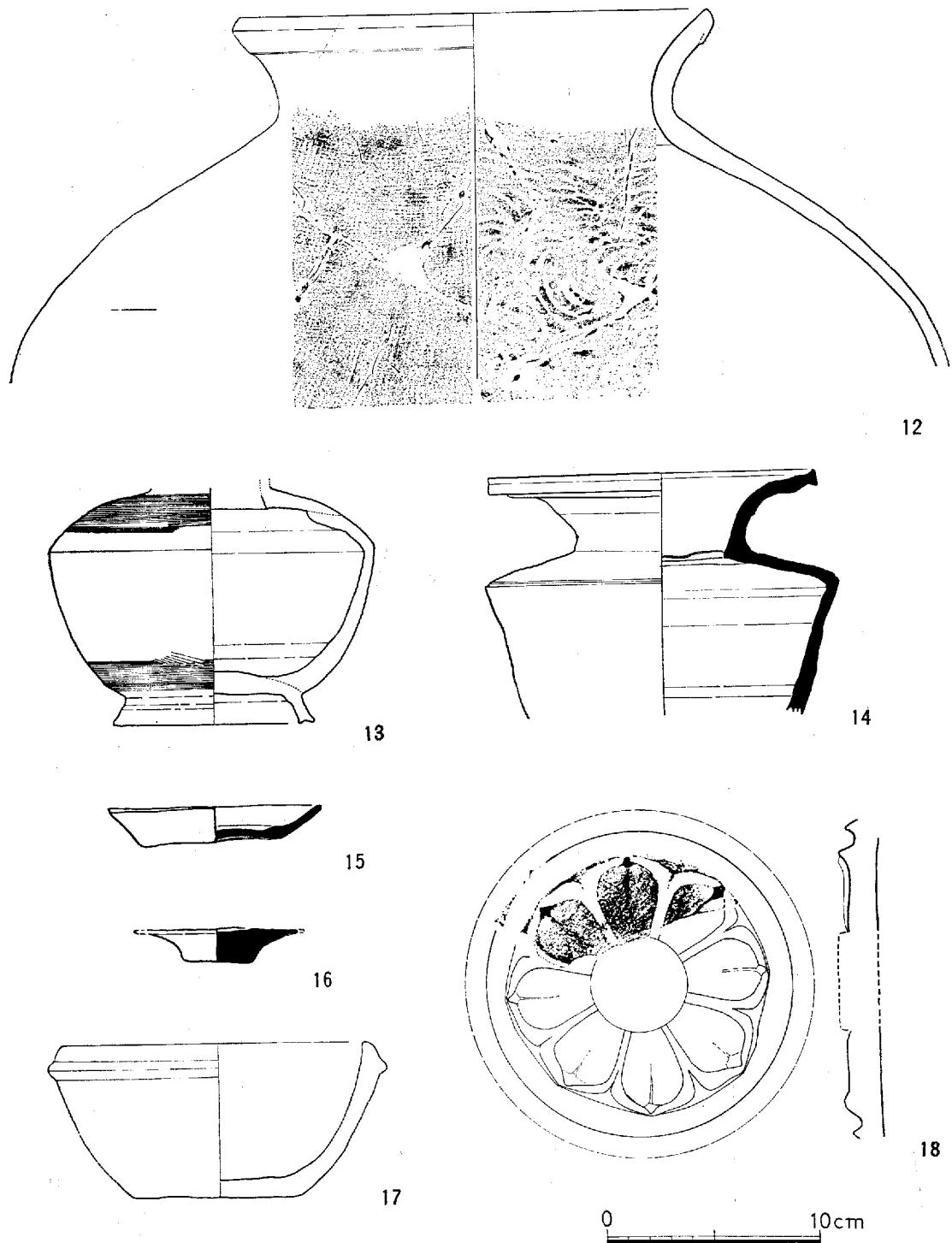
第36図 2区出土弥生式土器 (1/4)

三宮大成遺跡



第37図 2区出土須恵器 (1)

三宮大成遺跡



第38図 2区出土須恵器・その他 (上)

## 二宮大成遺跡

### あとがき

二宮大成遺跡の発掘調査は、他の遺跡の調査を兼ねて実施するなど調査体制が不備であった点、第二次発掘調査では未調査の部分を残すなど不充分のそしりはまぬかれないが、住居址4、建物2、溝状遺構、土壙、古墳などの遺構を検出することができた。

報告書作成は昭和49年4月～5月にかけて栗野、山磨の二名が津山収蔵庫で作業を行った。しかし、種々の事由により整理作業の人員と期間は十分とれなかった。そのため、本遺跡の調査結果で得られたものを十分述べられなかつた点もあり、発掘調査を担当したものとして遺憾に思う。

○本遺跡の発掘調査では、以下の方々のお世話をになりました。記して謝意を表わします。

|       |       |
|-------|-------|
| 安藤克実  | 小林清子  |
| 安藤待郎  | 高下弘代  |
| 池田毅   | 飛山照一  |
| 池田光枝  | 土居順子  |
| 池田竹夫  | 土居すみ江 |
| 池田登   | 野条志一  |
| 畠田みち子 | 真名子栄一 |
| 大上忠彦  | 真名子育世 |
| 大上武士  | 灰原輝代子 |
| 大上恵美子 | 広島海三  |
| 沖田功子  | 三船安江  |
| 神橋豊子  | 和田よしの |

(敬称略)

二宮大成遺跡遠景（南上り）



図版 2



1 I 区 I 号住居址 遺物出土状況（南西より）



2 I 区 I 号住居址 完掘状況（南西より）



1 1区1号住居址 土層断面（東より）



2 1区1号住居址 ピット3土層断面（南東より）

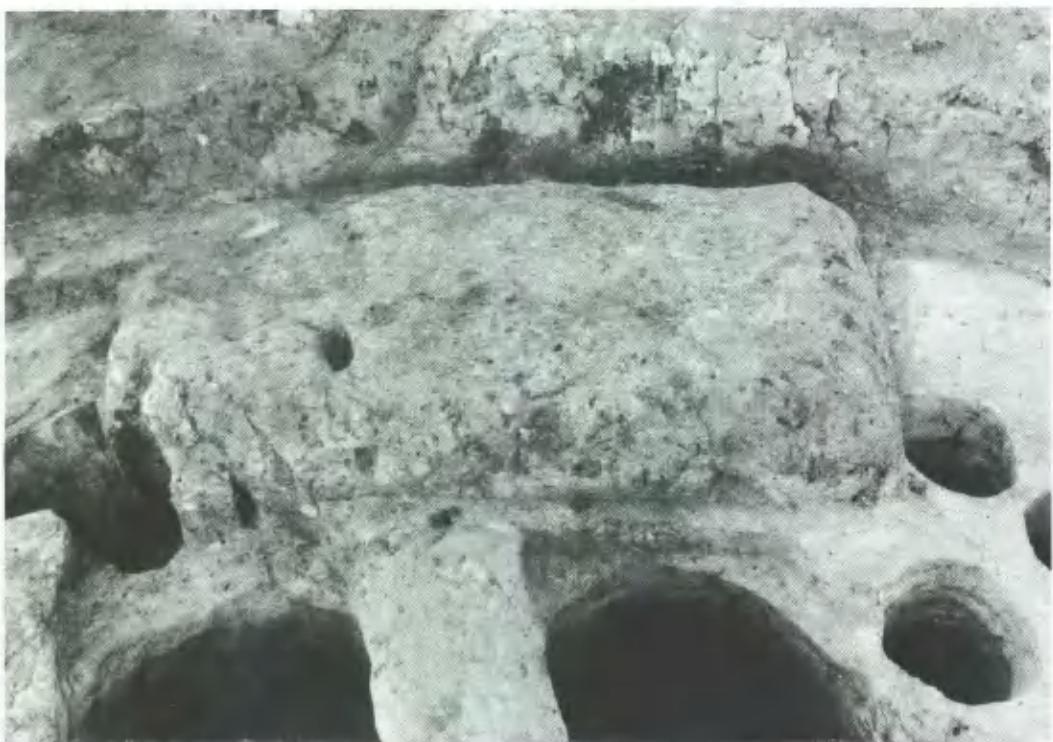
図版 4



1 1区1号住居址 遺物出土状況（東より）



2 1区1号住居址 鉢出土状況（北より）

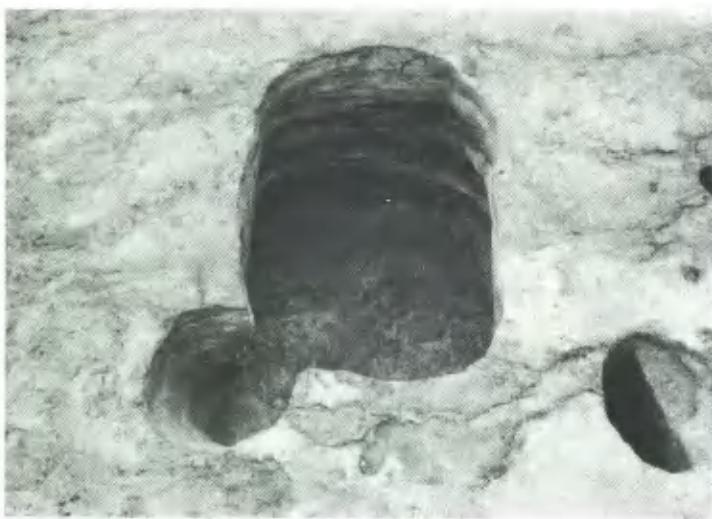


1 I-1区1号住居址 ベッド状遺構（東より）



2 I-1区1号住居址 ベッド状遺構切断状況（東より）

図版 6



1 1区1号住居址 ピット1（北より）



2 1区1号住居址 ピット4・5（西より）



3 1区1号住居址 中央ピット（南より）



1 1区1号住居址 ピット1 (南東より)

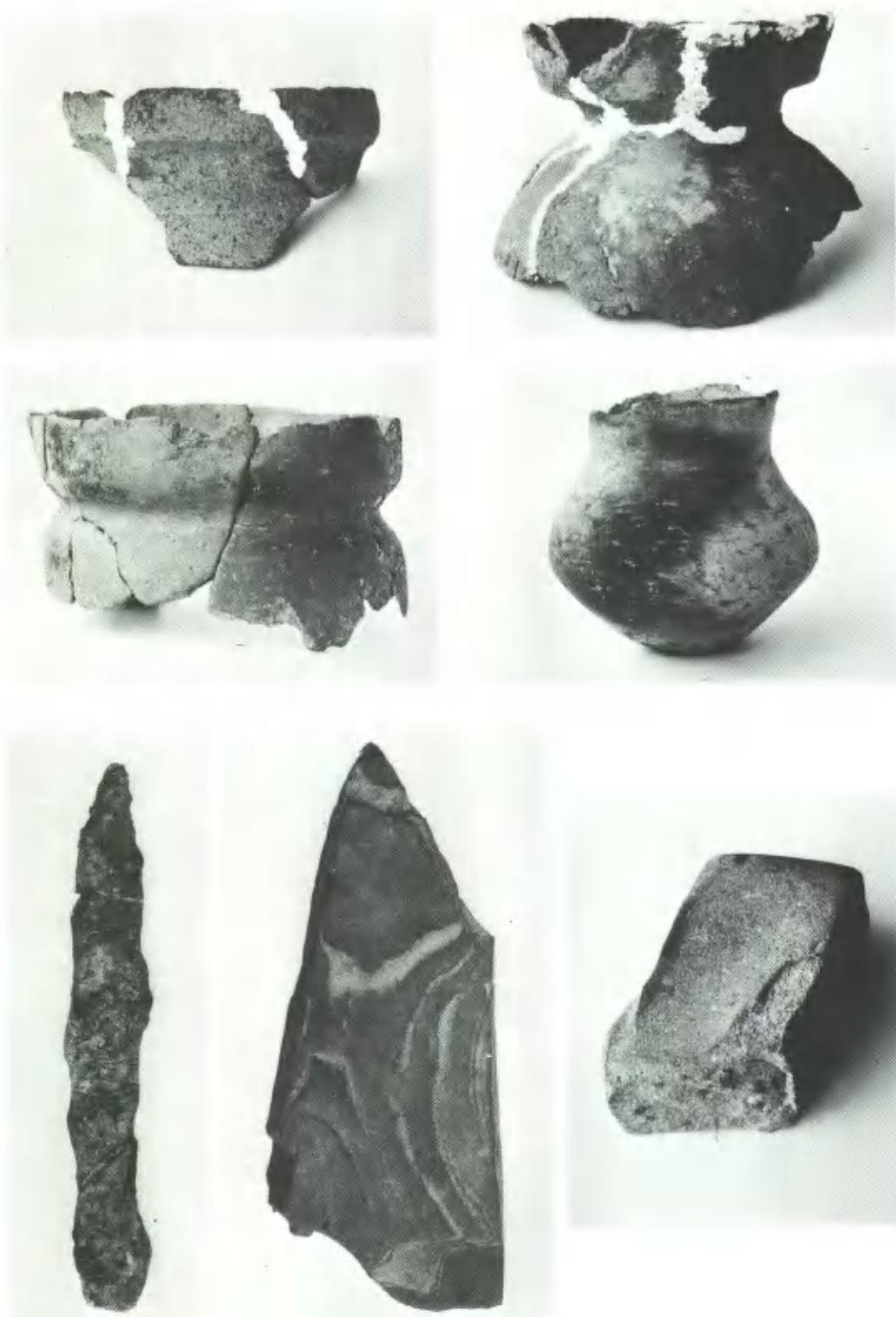


2 1区1号住居址 ピット2 (南より)



3 1区1号住居址 ピット3 (南西より)

図版 8



I 区 I 号住居址 出土遺物



1 I 区 2 号住居址 (北西より)



2 I 区 2 号住居址 (南より)

図版10



1 1区2号住居址（南より）



2 1区3号住居址（北より）



1 I区溝状遺構全景（北西より）



2 I区溝状遺構A（南東より）

図版12



1 1区溝状遺構B・C・D（南東より）



2 1区溝状遺構B・C・D（南東より）



1 1区古墳全景(西より)



2 1区古墳全景(東より)

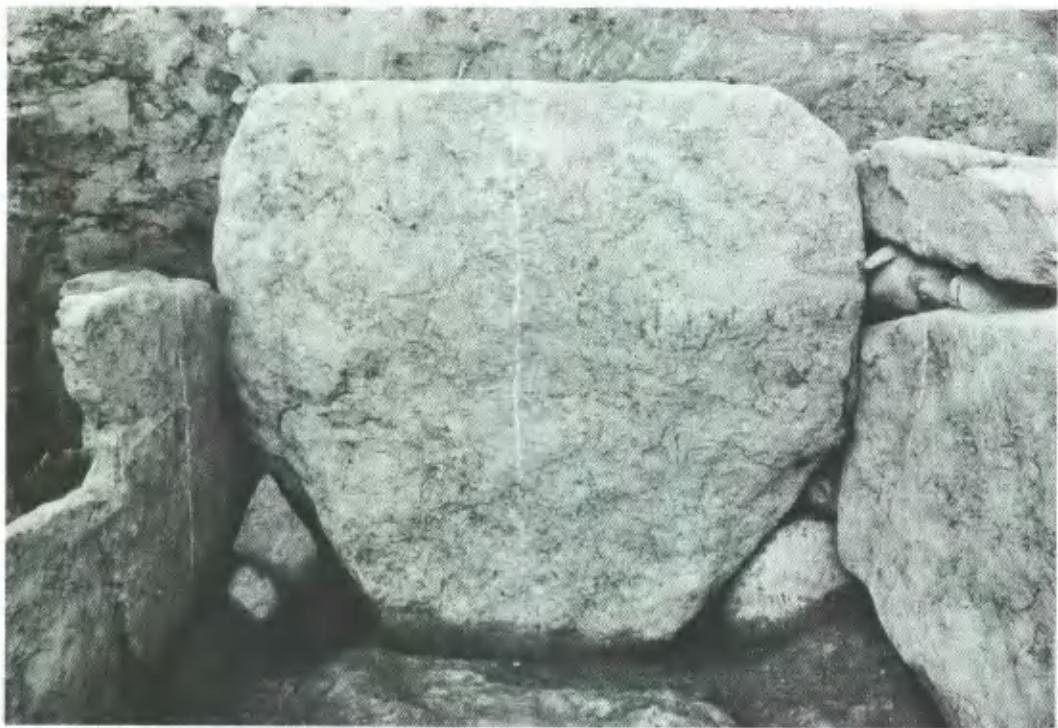
図版14



1 1区古墳 石室および掘方全景（北東より）



2 1区古墳 石室および掘方全景（東より）



1 1区古墳 奥壁（南東より）



2 1区古墳 棺台（南東より）

図版16



1 1区古墳 石室（南より）



2 1区古墳 石室内（北西より羨道部をのぞむ）



1 1区古墳 西南壁を奥からみる。



2 1区古墳 東北壁を奥からみる。



1 区古墳 3 トレンチ奥壁のうしろの断面 (EF 断面 F 側, 西南より)



2 1 区古墳 9 トレンチ石室掘方断面 (南東より)



1 I区古墳 10トレンチ石室掘方断面（南より）



2 I区古墳 5トレンチ石室掘方断面（南東より）

図版20



1 1区古墳 3 トレンチ周溝断面（南西より）



2 1区古墳 4 トレンチ周溝断面（東より）



1 I区古墳 9トレンチ周溝断面（南東より）



2 I区古墳 7トレンチ断面（北より）

図版22



1 I 区古墳 15トレンチ周溝部分（南より）



2 I 区古墳 5トレンチ周溝部分（東より）



1 I区古墳 遺物出土状況全景（北西より）



2 I区古墳 遺物出土状況全景（南東より）

図版24



1 1区古墳 陶棺出土状況（南東より）



2 1区古墳 1号陶棺と出土遺物（真上より）

1 I 区古墳  
1号陶棺  
北側  
遺物出土状況  
(北より)



2 I 区古墳  
1号陶棺西側  
遺物出土状況  
(北東より)



3 1号陶棺  
短頸壺(38)に  
刀子(71)出土状況  
(東南より)





1 1区古墳 1号陶棺、奥側半分の脚の状況（南東より）



2 1区古墳 2号陶棺、脚の間遺物出土状況（南東より）



1 I区古墳 3号陶棺、北側隅付近遺物出土状況（南より）



2 I区古墳 3号陶棺、北西角の脚と土器(41)（西より）

図版28



1 1区古墳 石室内東南部遺物出土状況（北東より）



2 1区古墳 石室内遺物出土状況（南東より）

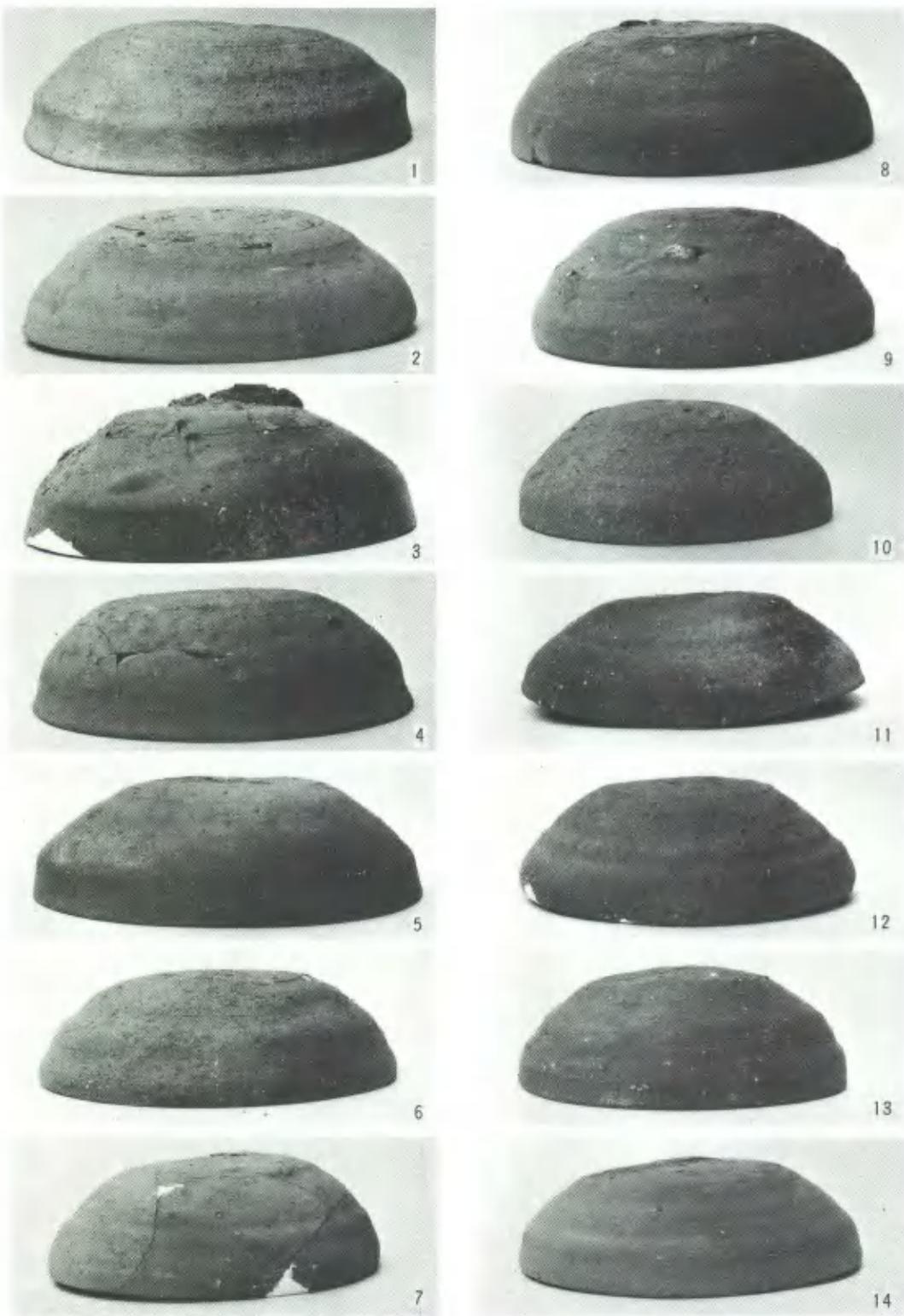


1 1区古墳 石室内東半部遺物出土状況（南より）

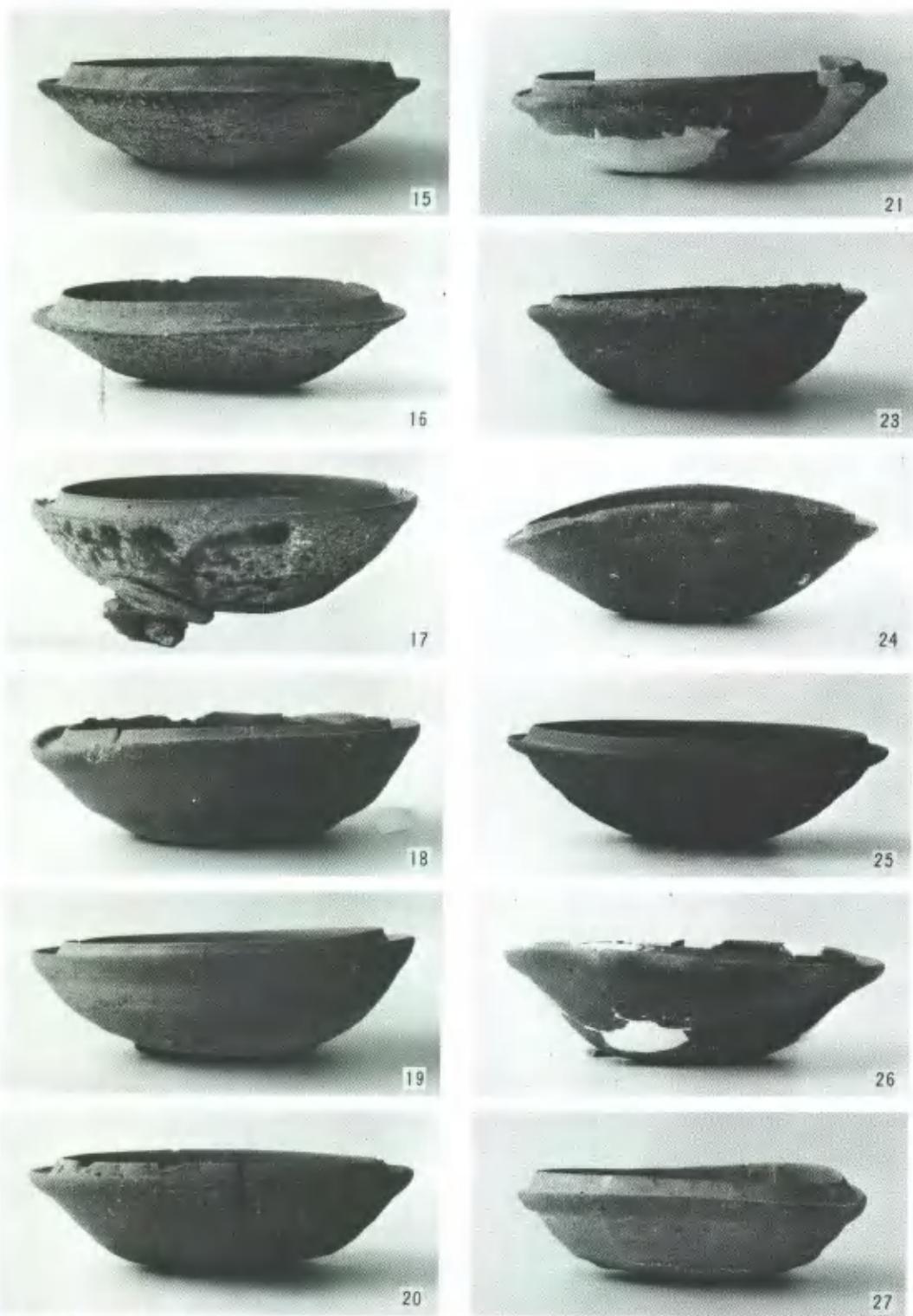


2 1区古墳 石室内入口右侧部分、堤瓶52、毬55出土状況（南より）

図版30



1区古墳 出土土器



I区古墳 出土土器 2

図版32

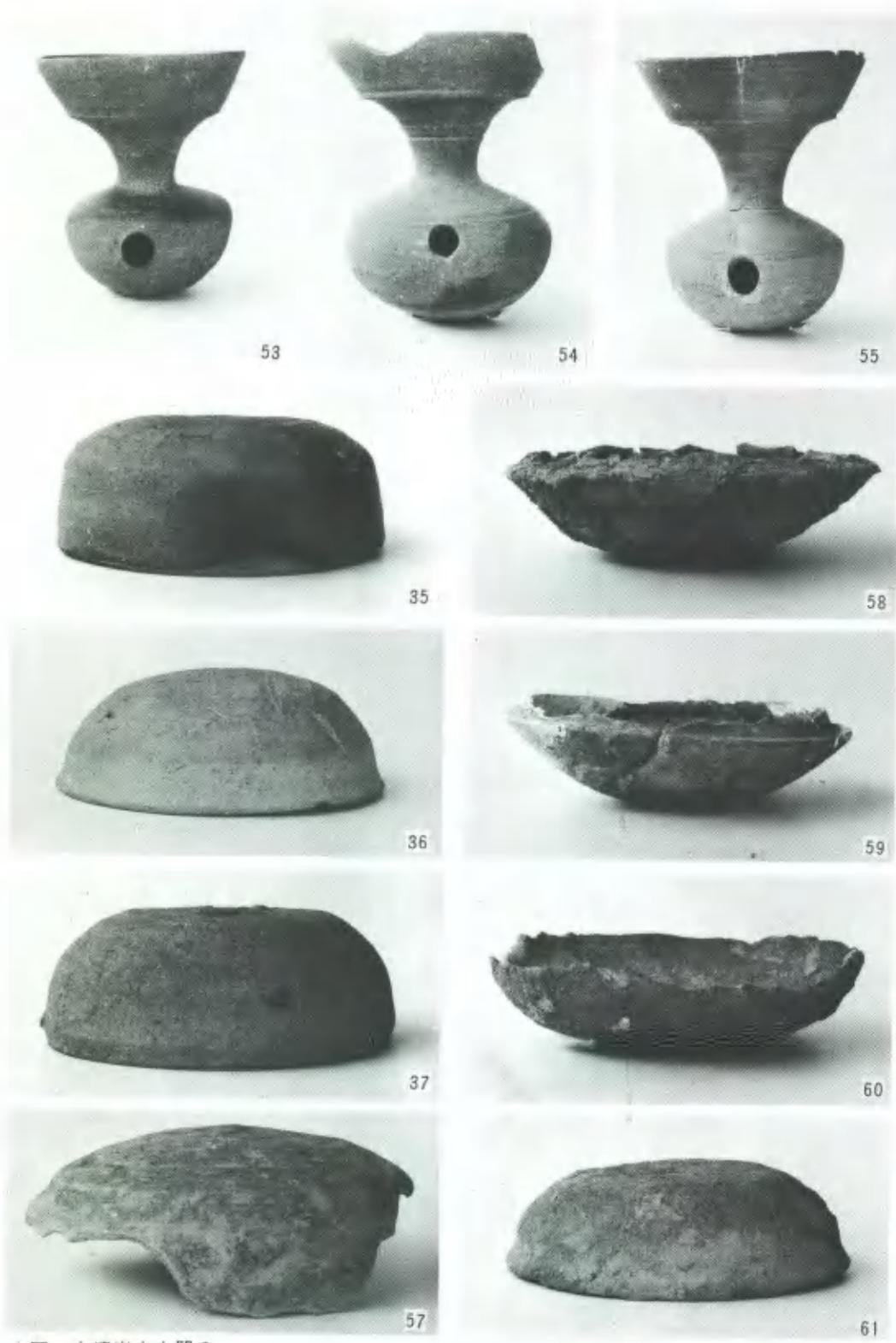


I区 古墳出土土器 3



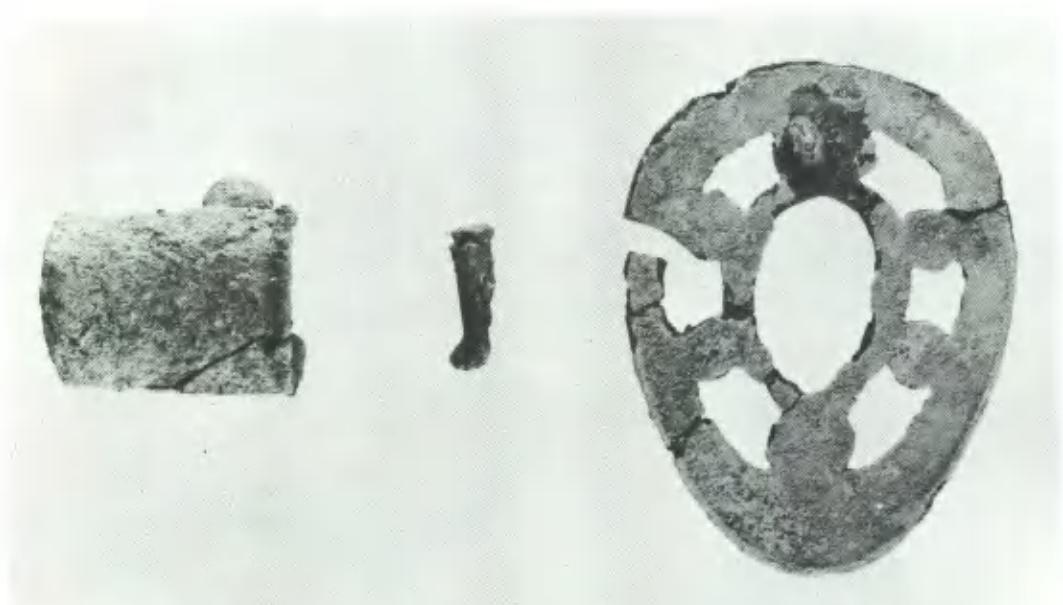
I区 古墳出土土器 4



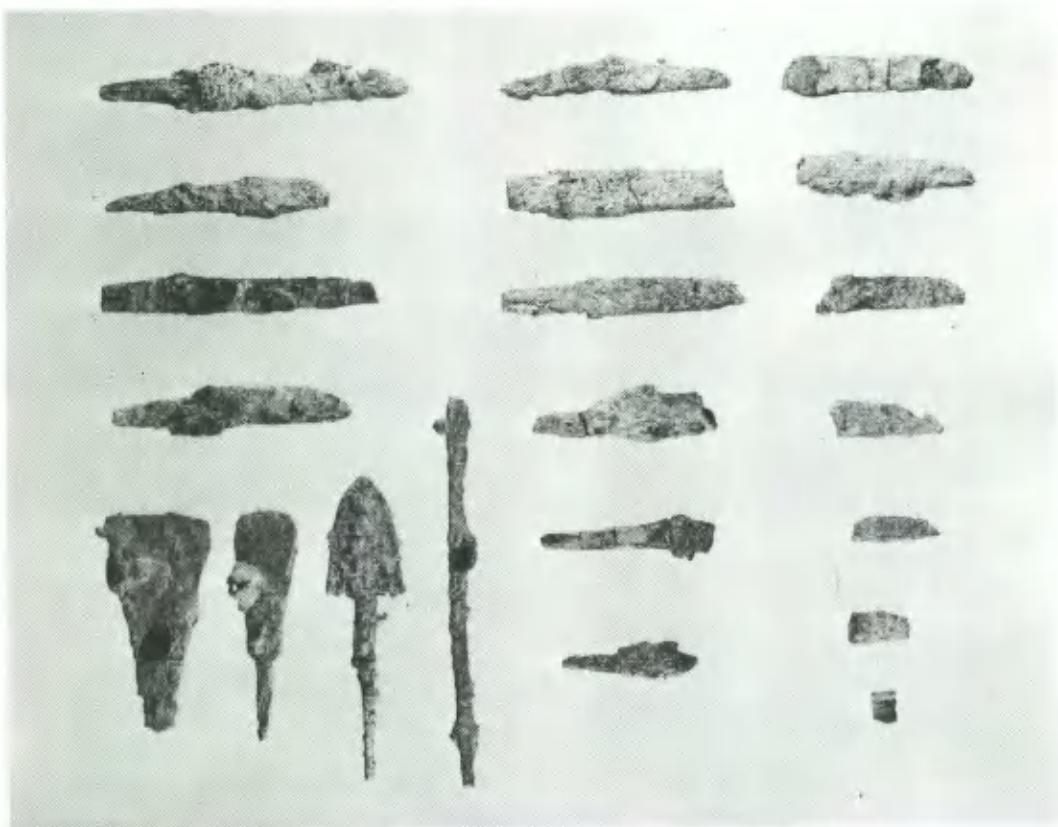


I区 古墳出土土器 6

図版36



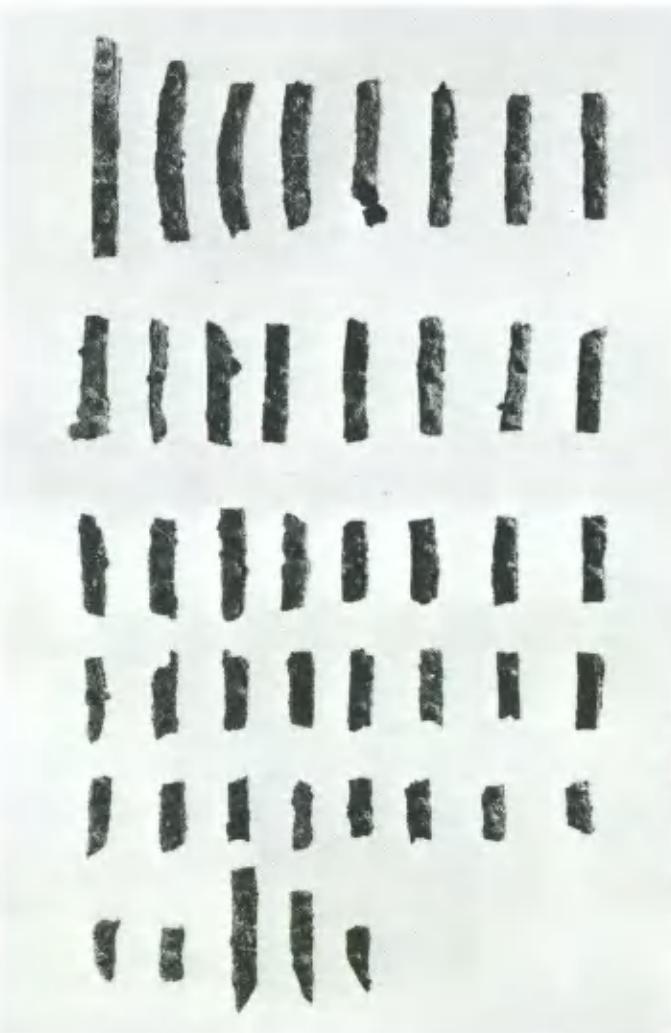
1 1区古墳出土柄頭（鞘尻）・釘・鈕



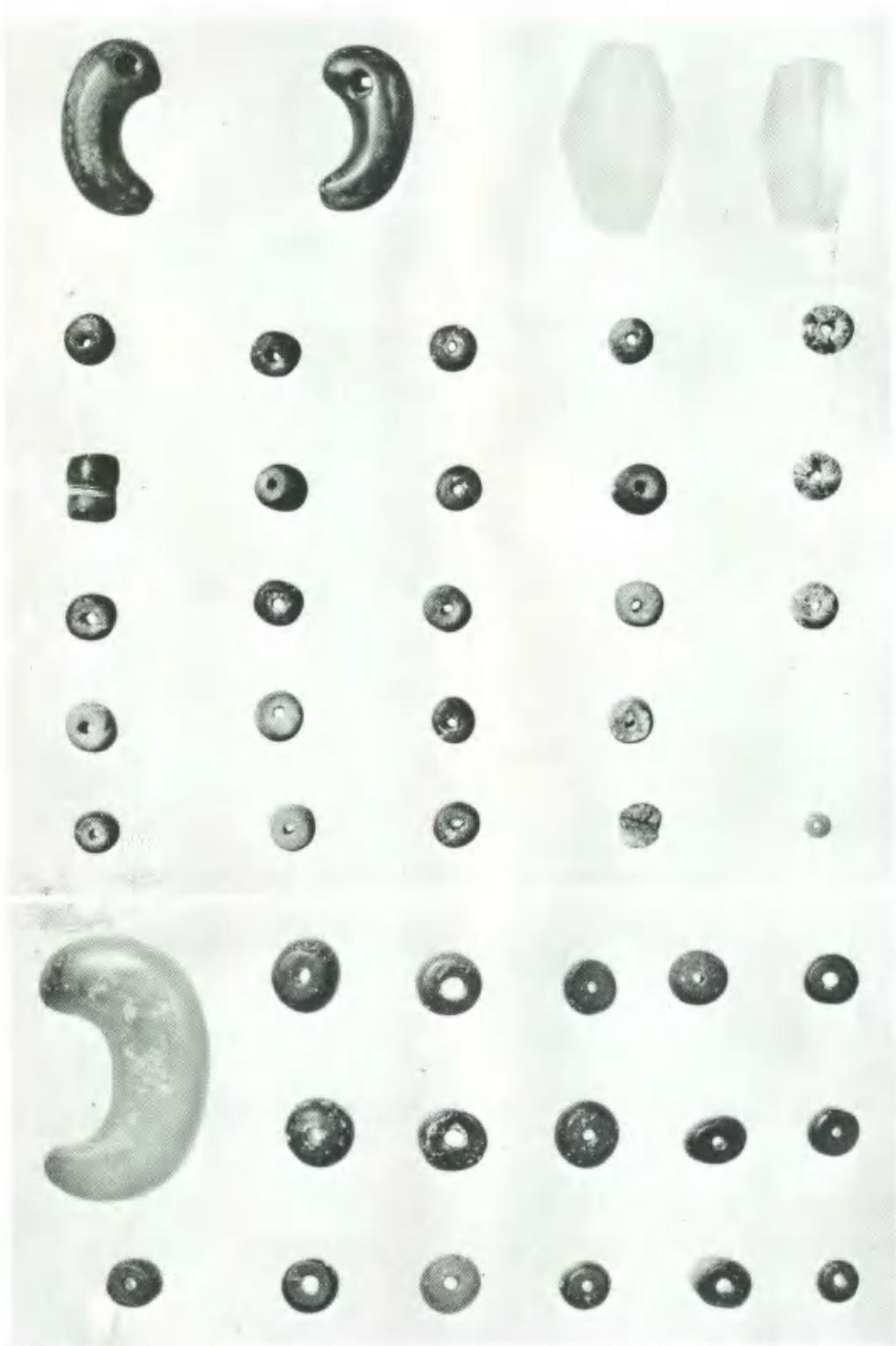
2 1区古墳出土 鉄鎌・刀子



1 1区古墳出土 杏葉・留金具・鍔（鉤先）



2 1区古墳出土 段・金具



1区古墳出土 装身具



1 2区全景（南東より）



2 2区東半発掘状況（西より）

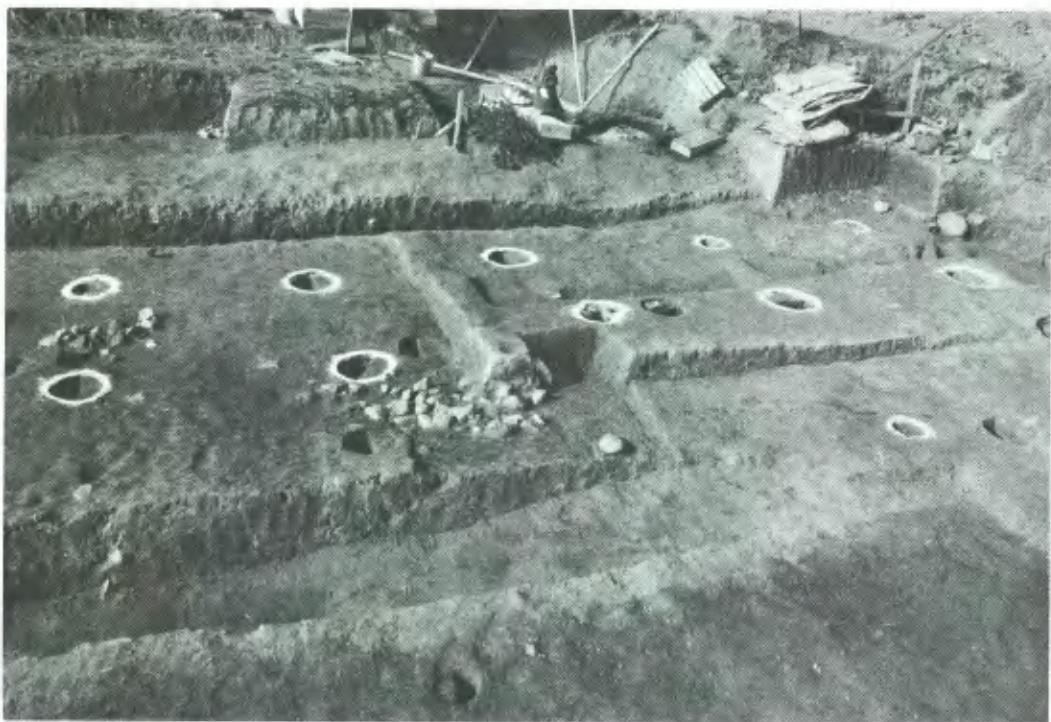
図版40



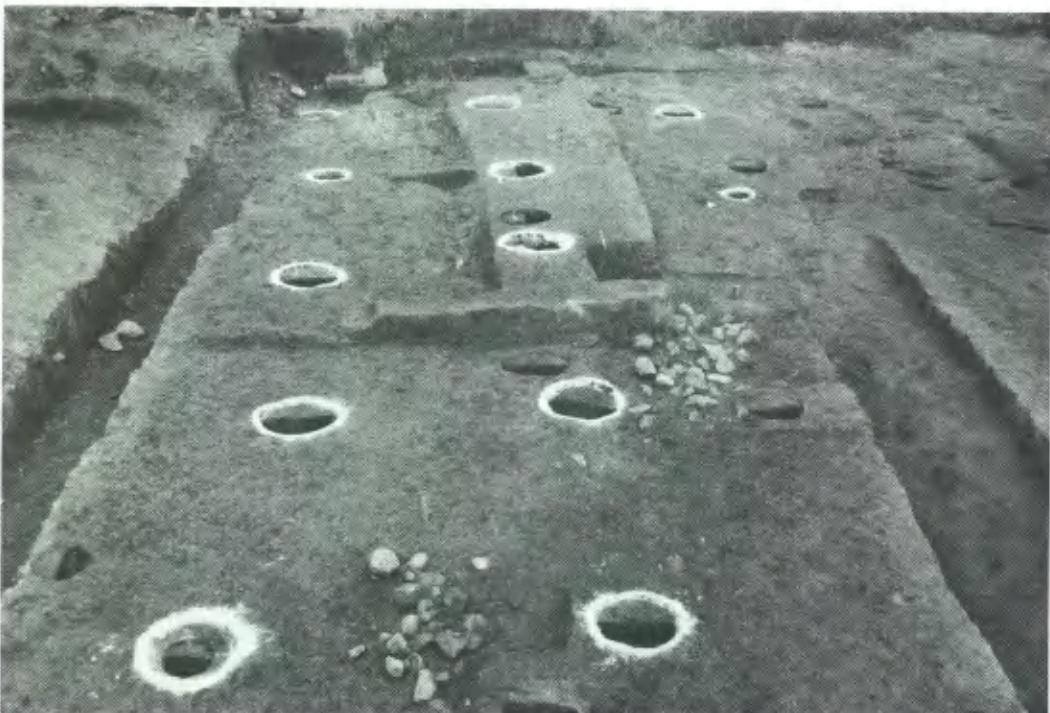
1 2区全景（北西より）



2 2区 建物2, 土塁4（北西より）



1 2区 建物1, 土塙1, 2 (東より)



2 2区建物1, 土塙1, 2 (南より)

図版42



1 2区土塚1（南東より）



2 2区土塚2（南東より）



1 2区1号住居址 炉3（北より）



2 2区1号住居址 炉3（南より）

図版44



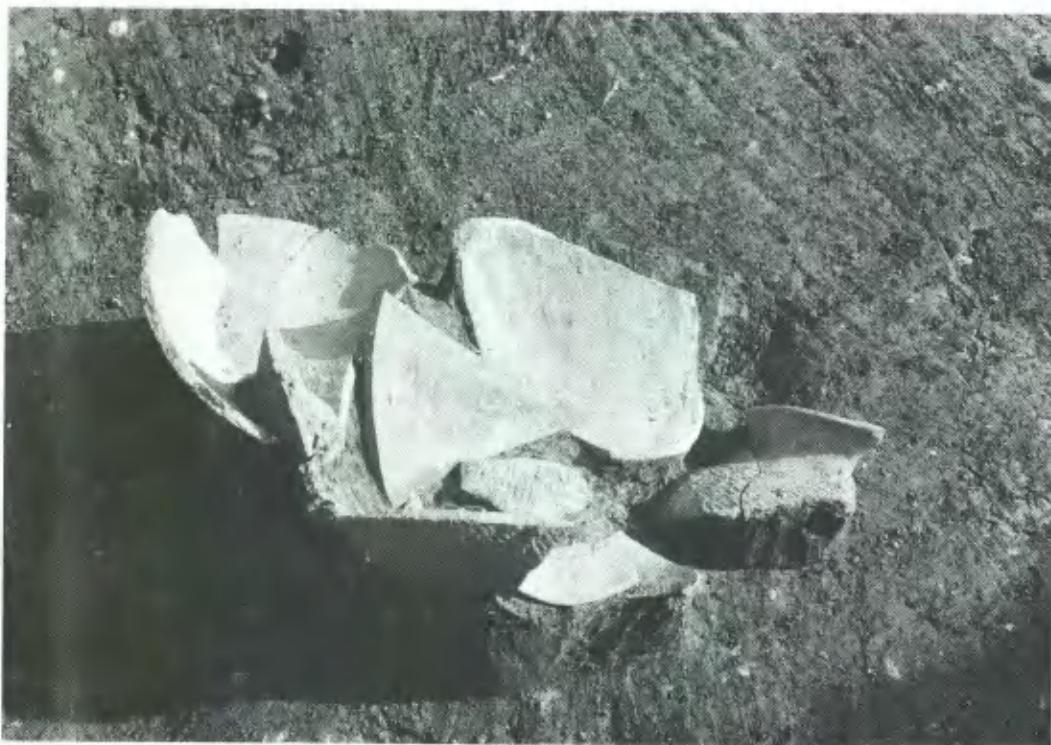
2 1区土塙4（西より）



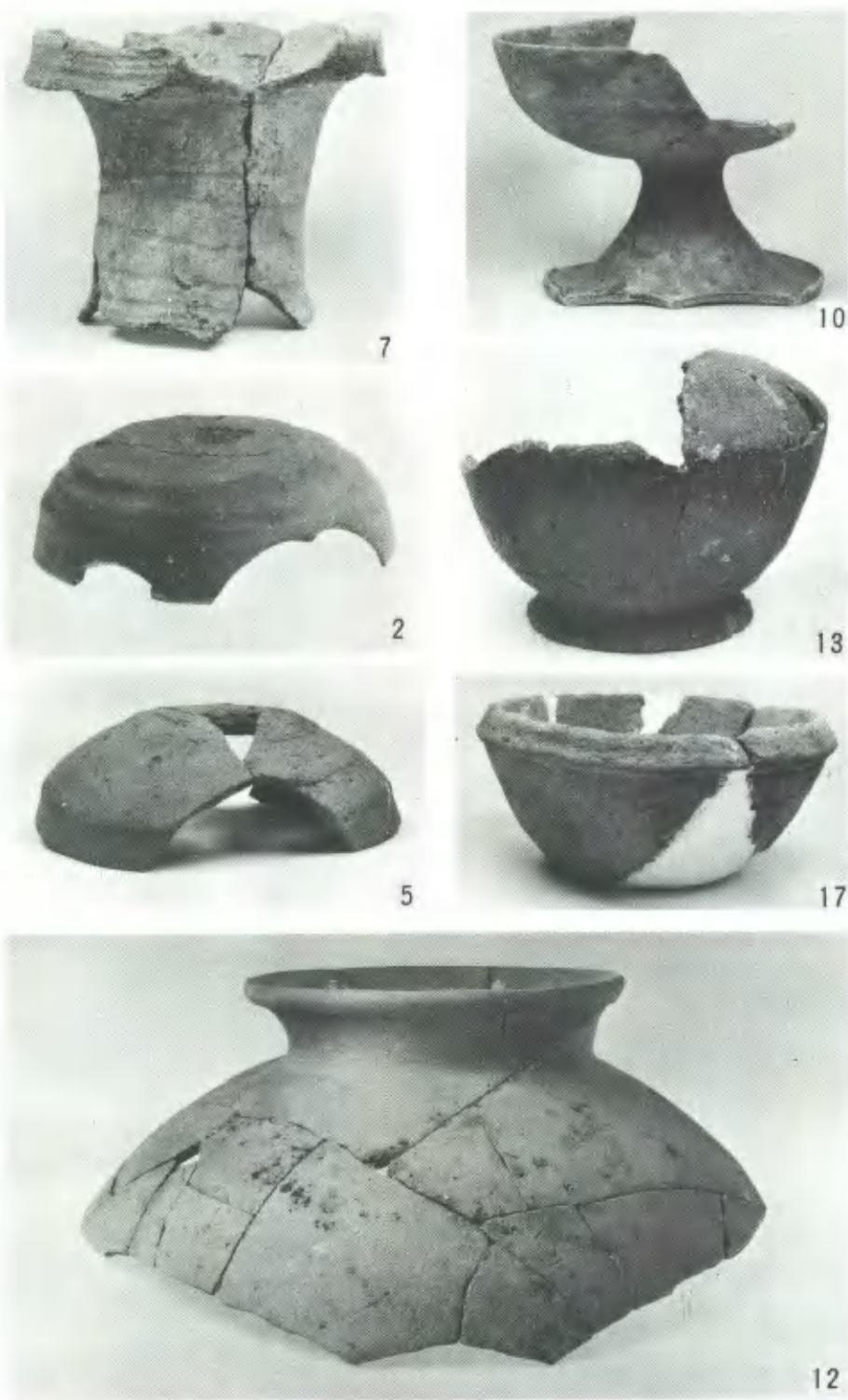
2 2区土塙4（東より）



1 2区Eトレンチ西側壁面出土土器（西より）



2 2区Fトレンチ柱穴上面出土土器（西より）



2区出土遺物

西原遺跡 (24)

# 西原遺跡

## 目 次

### 執筆担当

|                    |        |     |
|--------------------|--------|-----|
| 第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境 | (橋本惣司) | 139 |
| 第2章 調査の経過、日誌抄      | (栗野克己) | 143 |
| 1) 調査に至るまで         |        | 143 |
| 2) 第一次トレンチ調査       |        | 143 |
| 3) 第二次発掘調査         |        | 144 |
| 4) 遺物の整理、報告書作成     |        | 145 |
| 第3章 調査の概要          |        | 147 |
| 第1節 1区             |        | 147 |
| 1)はじめに             | (栗野)   | 147 |
| 2)2号住居址            | (栗野)   | 147 |
| 3)3号住居址            | (栗野)   | 150 |
| 4)6号住居址            | (栗野)   | 150 |
| 5)7号住居址            | (橋本)   | 151 |
| 6)8号住居址            | (橋本)   | 153 |
| 7)9号住居址            | (橋本)   | 153 |
| 8)10号住居址           | (橋本)   | 153 |
| 9)11号住居址           | (橋本)   | 154 |
| 10)A地点             | (栗野)   | 157 |
| 11)B地点             | (栗野)   | 158 |
| 12)C地点             | (橋本)   | 158 |
| 13)D地点             | (橋本)   | 158 |
| 14)E地点             | (橋本)   | 158 |
| 第2節 2区, 5区         |        | 162 |
| 1)はじめに             | (栗野)   | 162 |
| 2)12号住居址           | (栗野)   | 162 |
| 3)柱穴               | (栗野)   | 164 |
| 4)土壙               | (栗野)   | 166 |
| 5)井戸               | (栗野)   | 166 |
| 6)2区~5区の土層について     | (栗野)   | 166 |
| 第3節 6区, 7区         |        | 169 |
| 1)6区               | (栗野)   | 169 |
| 2)7区               | (橋本)   | 169 |
| 第4節 西原遺跡出土遺物について   | (栗野)   | 171 |

## 西原遺跡

|           |      |     |
|-----------|------|-----|
| 1) 繩文式土器  | （栗野） | 171 |
| 2) 石器について | （橋本） | 173 |
| 第4章 結語    |      | 174 |
| 遺跡の範囲について | （栗野） | 174 |

## 図目次

|      |  |      |
|------|--|------|
| 第1図  | 西原遺跡周辺の環境（作成、橋本）   | 139  |
| 第2図  | 西原遺跡付近地形図（製図、栗野）   | 142  |
| 第3図  | 西原遺跡地形図（製図、栗野）   | 折り込み |
| 第4図  | 西原遺跡調査区設定の概要（製作製図、栗野）  | 折り込み |
| 第5図  | 1区地形測量トレンチ、グリッド設定状況<br>（実測、河本、枝川、栗野、製図、栗野）                             | 148  |
| 第6図  | 1区トレンチ断面図①210区第3トレンチ東南壁（実測、枝川、製図、<br>栗野）②210区第1トレンチ西北壁（実測、神原、製図、栗野）    | 149  |
| 第7図  | ①1区、グリッドのセンター南北断面図（実測、橋本、製図、栗野）<br>②1区、グリッドのセンター東西断面図<br>（実測、河本、製図、栗野） | 折り込み |
| 第8図  | 1区遺構配置図（作製、製図、栗野）  | 折り込み |
| 第9図  | 6号住居址実測図（実測、新東、河本、製図、栗野）   | 150  |
| 第10図 | 7号住居址実測図（実測、河本、橋本、新東、製図、橋本）  | 151  |
| 第11図 | 8号、9号、10号住居址実測図<br>（実測、河本、橋本、栗野、伊藤、製図、橋本）                              | 152  |
| 第12図 | 10号住居址、中央穴実測図（実測、河本、製図、橋本）   | 154  |
| 第13図 | 11号住居址実測図（実測、中力、柳瀬、製図、橋本）  | 155  |
| 第14図 | 7号、8号、9号、10号住居址出土遺物<br>（実測、岡田、池畠、井上、橋本、製図、橋本）                          | 156  |
| 第15図 | 1区A地点土器だまり実測図（実測、河本、製図、栗野）   | 折り込み |
| 第16図 | 1区C地点平面図（実測、河本、中力、柳瀬、製図、橋本）  | 159  |
| 第17図 | 1区E地点平面図（実測、中力、柳瀬、製図、橋本）   | 160  |
| 第18図 | 土壤10実測図（実測、中力、柳瀬、製図、橋本）  | 161  |
| 第19図 | 2区地形測量図、トレンチ、グリッド設定状況<br>（実測、河本、枝川、栗野、製図、栗野）                           | 162  |
| 第20図 | 2区遺構配置図（実測、新東、松本、栗野、製図、栗野）   | 163  |
| 第21図 | 12号住居址実測図（実測、新東、松本、製図、栗野）  | 164  |
| 第22図 | 2区土壤実測図、（実測、新東、製図、栗野）  | 165  |

## 西 原 遺 跡

- 第23図 井戸実測図（実測，新東，製図，栗野） ..... 167  
 第24図 2区～5区断面図（実測，①栗野，②河本，橋本，栗野，  
                   ③，④栗野，製図，栗野） ..... 折り込み  
 第25図 6区坪掘No.2東南壁実測図（実測，製図，栗野） ..... 169  
 第26図 7区平面図と土層断面図（実測，伊藤，松本，柳瀬，橋本，  
                   製図，橋本） ..... 170  
 第27図 繩文式土器実測図および拓本（実測，製図，栗野） ..... 172

## 図 版 目 次

|        |  |              |
|--------|--|--------------|
| 図版 1   | 西原遺跡全景（西南の注連山中腹より）（撮影，栗野）                | しめやま ..... 1 |
| 図版 2   | 西原遺跡付近景観（西南の注連山中腹より）（撮影，栗野）              | 2            |
| 図版 3—1 | 1区A地点（北より）（撮影，栗野）                        | 3            |
| 図版 3—2 | 7号住居址検出状況（西南より）（撮影，河本）                   | 3            |
| 図版 4—1 | 7号住居址（南東より）（撮影，河本）                       | 4            |
| 図版 4—2 | 7号住居址掘り上げ状況（北東より）（撮影，河本）                 | 4            |
| 図版 5—1 | 7号住居址中央ピット（西南より）（撮影，河本）                  | 5            |
| 図版 5—2 | 7号住居址E F断面（北より）（撮影，河本）                   | 5            |
| 図版 5—3 | 7号住居址G H断面（南西より）（撮影，河本）                  | 5            |
| 図版 6—1 | 7号住居址柱穴3断面（南より）（撮影，河本）                   | 6            |
| 図版 6—2 | 7号住居址，鉈，出土状態（北より）（撮影，河本）                 | 6            |
| 図版 7   | 7号，8号住居址出土遺物（撮影，橋本）                      | 7            |
| 図版 8—1 | 6号住居址（南西より）（撮影，栗野）                       | 8            |
| 図版 8—2 | 6号住居址砥石出土状況（南より）（撮影，栗野）                  | 8            |
| 図版 9—1 | 1区A地点土器だまり全景（北東より）（撮影，河本）                | 9            |
| 図版 9—2 | 1区A地点土器だまり第1群（北東より）（撮影，河本）               | 9            |
| 図版10—1 | 1区A地点土器だまり第2群（北東より）（撮影，河本）               | 10           |
| 図版10—2 | 1区A地点土器だまり第3群（北東より）（撮影，河本）               | 10           |
| 図版11—1 | 1区A地点土器だまり第3群の北西，底部出土状況<br>（北東から）（撮影，河本） | 11           |
| 図版11—2 | 1区A地点，第4群土器出土状況（北東より）（撮影，河本）             | 11           |
| 図版12—1 | 1区C地点全景（南西より）（撮影，栗野）                     | 12           |
| 図版12—2 | 1区C地点全景（南より）（撮影，栗野）                      | 12           |
| 図版13—1 | 1区C地点，黄色土を覆土にもつ土壤（東南より）（撮影，河本）           | 13           |
| 図版13—2 | 1区C地点，黄色土を覆土にもつ土壤（北東より）（撮影，河本）           | 13           |
| 図版14—1 | 1区C地点，黄色土を覆土にもつ土壤（西北より）（撮影，河本）           | 14           |

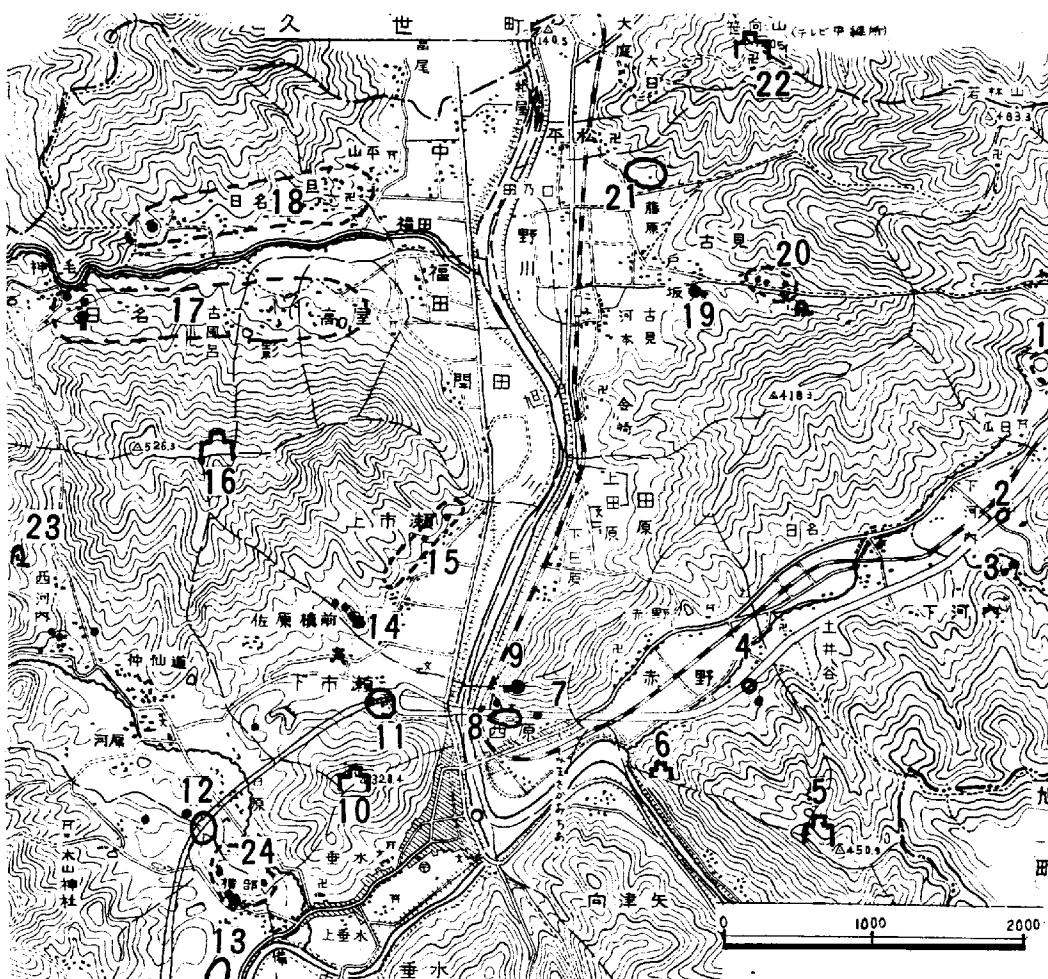
## 西原遺跡

- 図版14—2 1区C地点、黄色土を覆土にもつ土壤断面  
(西南より) (撮影、河本) ..... 14
- 図版15—1 10号住居址発掘状況(北より) (撮影、橋本) ..... 15
- 図版15—2 9号住居址覆土遺物出土状況(南西より) (撮影、栗野) ..... 15
- 図版16—1 左手前から8, 9, 10号住居址(北東より) (撮影、橋本) ..... 16
- 図版16—2 10号住居址炭化材検出状況(北東より) (撮影、橋本) ..... 16
- 図版17—1 10号住居址(南西より) (撮影、橋本) ..... 17
- 図版17—2 10号住居址、中央ピット検出状況(南南西より) (撮影、橋本) ..... 17
- 図版18—1 8号住居址、中央ピット検出状況(南より) (撮影、橋本) ..... 18
- 図版18—2 9号住居址中央ピット検出状況(西より) (撮影、橋本) ..... 18
- 図版19 9号住居址出土遺物(撮影、橋本) ..... 19
- 図版20 10号住居址出土遺物(撮影、橋本) ..... 20
- 図版21—1 1区E地点北半分遺構検出状況(南より) (撮影、柳瀬) ..... 21
- 図版21—2 1区E地点北半分遺物出土状況(南西より) (撮影、柳瀬) ..... 21
- 図版22—1 11号住居址検出状況(西北西より) (撮影、中力) ..... 22
- 図版22—2 11号住居址、土壤10全景(北東より) (撮影、中力) ..... 22
- 図版23—1 11号住居址出土遺物(撮影、橋本) ..... 23
- 図版23—2 A地点出土遺物(撮影、橋本) ..... 23
- 図版24—1 土壤10石出土状況(東より) (撮影、中力) ..... 24
- 図版24—2 土壤10掘りあげ状況(北東より) (撮影、中力) ..... 24
- 図版25—1 土壤10東西断面、南半分(南南西より) (撮影、河本) ..... 25
- 図版25—2 土壤10東西断面北半分(南南西より) (撮影、河本) ..... 25
- 図版26 D, E地点出土遺物(撮影、橋本) ..... 26
- 図版27—1 1区E地点東半分石だまり(南西より) (撮影、神原) ..... 27
- 図版27—2 1区B地点土器出土状況(撮影、栗野) ..... 27
- 図版28—1 2区全景(南より) (撮影、栗野) ..... 28
- 図版28—2 2区全景(北より) (撮影、栗野) ..... 28
- 図版29—1 12号住居址(東より) 撮影、栗野) ..... 29
- 図版29—2 2区近世井戸(東より) (撮影、栗野) ..... 29
- 図版30—1 2区変形土壤(南より) (撮影、栗野) ..... 30
- 図版30—2 2区変形土壤(南より) (撮影、栗野) ..... 30
- 図版31—1 2区変形土壤、B断面(東より) (撮影、栗野) ..... 31
- 図版31—2 2区変形土壤、袋状部分全景(撮影、栗野) ..... 31
- 図版32—1 5区坪掘り2上半分断面(東南より) (撮影、栗野) ..... 32
- 図版32—2 2区A, B断面(北北西より) (撮影、栗野) ..... 32

西 原 遺 跡

|        |                              |    |
|--------|------------------------------|----|
| 図版33—1 | 6区坪掘り2（北から）（撮影，栗野）           | 33 |
| 図版33—2 | 5区坪掘り2南東壁断面（北西より）（撮影，栗野）     | 33 |
| 図版34—1 | 7区全景（北より）（撮影，栗野）             | 34 |
| 図版34—2 | 7区南北トナンチ発掘状況（北より）（撮影，栗野）     | 34 |
| 図版35—1 | 7区南北トレンチ内土器だまり（西より）（撮影，栗野）   | 35 |
| 図版35—2 | 7区南北トレンチ内土器だまり（北北西より）（撮影，栗野） | 35 |
| 図版36   | 7区出土遺物（撮影，橋本）                | 36 |
| 図版37—1 | 繩文式土器（撮影，栗野）                 | 37 |
| 図版37—2 | 線刻石製品（撮影，栗野）                 | 37 |
| 図版38   | 1区出土遺物（撮影，橋本）                | 38 |
| 図版39   | 発掘調査スナップ                     | 39 |
| 図版40—1 | 作業員一同                        | 40 |
| 図版40—2 | 調査後                          | 40 |

## 第1章 遺跡周辺の地理的、歴史的環境



○ 集落址 ◎ 古墳、古墳群 □ 窯址 ▶ 山城址

- |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 赤田古墳群   | ② 下河内調査区  | 3 久保谷古墳   |
| ④ 赤野遺跡    | 5 土器尾城址   | 6 逆巻城址    |
| ⑦ 穴塚古墳    | ⑧ 西原遺跡    | 9 川東車塚    |
| 10 注連山城址  | ⑪ 下市瀬遺跡   | ⑫ 旦の原遺跡   |
| 13 井手井倉遺跡 | 14 横の前古墳群 | 15 上市瀬古墳群 |
| 16 宮山城址   | 17 日名B古墳群 | 18 日名A古墳群 |
| 19 天王塚    | 20 戸坂古墳群  | 21 藤原遺跡   |
| 22 篠向城址   | 23 西河内古窯址 | 24 横部古墳群  |

番号を○印でかこんだ遺跡は中国縦貫自動車道建設にともない岡山県教委が調査した。

第1図 西原遺跡周辺の環境 (1/50,000)

## 西原遺跡

**地理的環境** 行政的には真庭郡落合町西原に属する。ゆるやかに蛇行しながら南流する旭川は、中流域では最も広い沖積平野である。

この低地をとりまく山地はいずれも 450m 前後の定高性をもつ吉備準平原の遺物である。山頂部に平坦部をもち、急峻な斜面が開析されて小さな谷が入りこんでいる。山麓部には第三紀中新統の緩斜面や低丘陵が、戸坂・高屋・上市瀬・下市瀬・赤野・下河内などにみられる。

これらの中新統の前面に洪積統の河岸段丘が戸坂・上市瀬・下市瀬・西原・赤野に点在し、古代の集落と重なって集落や水田化している。下市瀬遺跡は注蓮山の北麓の洪積段丘上に位置し、旭川の旧河道が段丘のすぐ東に残っている。狭長な河内川の低地の左岸は急な斜面と山麓斜面をなす第三紀層と赤野遺跡がのる洪積段丘がせまっている。赤野遺跡はこの比高17mの舌状をなす洪積段丘上に位置している。また旭川が東へ流れを変える左岸の西原には差別侵食によって標高127.5～128.5mの段丘と130～132mの段丘の二段の洪積段丘があり、西原遺跡が立地している。段丘の縁辺の用水路が沖積地との境界をなしている。沖積地は水田となっていて、標高126mを測る。ルーズな砂利層や粘土層が互層をなしている。

旭川の低地の中央部、縁辺部の開田、田原下市瀬付近には河跡もみられ氾濫原の時期が長かったと思われる。

若林山地の南西に派生する山地と注蓮山との狭隘部をぬけて備中川を合流した旭川は東に向きをかえて、西流する河内川を合流して、吉備準平原を深く刻んで再び南流する。

真庭郡落合町は美作の西部に位置し、水陸交通の交差点として栄えてきた。旭川を往来する高瀬舟は国鉄姫新線の開通まで備前国との主要な交通機関であり、落合は物資の集散地であった。

### 歴史的環境

#### 繩文時代

昭和44年度、岡山県教委が調査した西原遺跡では、中期、晚期の土器片数個、黒曜石片と御物型石器（註1）が出土している。また赤野遺跡（註2）からは早期、晚期の土器片、黒曜石片が出土している。この付近においてはこれらの遺跡以外では明らかでない。

#### 弥生時代

藤原遺跡、下市瀬遺跡（註3）、西原遺跡、下河内調査区が確認されている。いずれも低地をのぞむ丘陵、または段丘上に位置し中～後期が主体の集落址である。また、分布調査では戸坂で石包丁、手づくね土器が採集されており、楕の前で石包丁が採集されている。且の原遺跡からも弥生時代中期の土器片や後期の集落が明らかになっている。（註4）十分な分布調査が実施されていないので明らかでないが、旭川の氾濫をさけて段丘上、丘陵縁辺と低地との接する緩斜面に集落が存在していたと考えられる。

#### 古墳時代以降

川東車塚は真庭郡最大の前方後円墳で全長約60mを測る。旭川の狭隘部の眺望にすぐれた山頂に位置し、前方部やや広がりをもつ後円部中央に盗掘孔があるが、主体部の構造は明らかでない。

## 西原遺跡

天王塚は旭川左岸の低地をのぞむ丘陵上に位置する全長25mの前方後円墳である。前方部は広がりをもたず、後円部中央の盗掘孔断面に礫床が観察できる。

墳の前古墳は、全長20mの小型の前方後円墳である。日名A古墳群、B古墳群は40数基より構成されている後期の群集墳である。その中で神の毛1号墳、ムスピ山古墳はともに全長約21mの小前方後円墳で、横穴式石室をもち、土器類、武具類、装身具などが出土している。6世紀後半の時期と考えられている。横部古墳群には全長約20mの前方後円墳がある。

これらの他、後期古墳の横穴式石室墳は多く、古見戸坂古墳群、上市瀬古墳群などは3～5基で構成され、戸坂1号墳は陶棺を内蔵しており、鉄鎌、大刀、刀子、鍔先などの他多くの須恵器、土師器と3対の耳環が出土している（註5）。

昭和45年調査をした穴塚古墳（報告書予定）は約12mの石室をもつ巨石墳である。

赤野、下河内、西河内にも横穴式石室が点在する。下市瀬遺跡で発見されたシガラミは古墳時代に低地の縁辺部が折かれて水田化がすんでいたことを示している。戸坂古墳群の近くに三基の古窯址がある。

### 奈良時代以降

美作の西部に位置する真庭郡は「倭名抄」によると旭川を境に左岸が大庭郡、右岸が真島郡となっており、田原、河内、垂水、大庭などその郷名が残っている。奈良、平安時代については下市瀬遺跡の建物址、瓦類、須恵器、井戸の他、西河内古窯址、旦の原遺跡からは奈良時代の須恵器が出土している。また井手井倉遺跡からは奈良時代～平安時代の土器片が採集されている。大字高屋に真島郡衙の存在を主張する説もある。平安時代には、神社や、寺院の建立や、真島庄、河内庄などの名もみられるが詳かでない。鎌倉時代以後、江戸時代初期については断片的な文献と点在する山城などから組みたてる他はない。

梶原景時が美作国の守護職となったことは東鑑十一に記載がある。14世紀中頃から山名氏と赤松氏の抗争が活発化する中で山城館、堡、構などが築かれはじめたと考えられている。しかし、それよりも早く正平15年（1360）山名氏の進攻により落城した篠向城などの山城も築かれている。その後尻子氏、浦上氏、毛利氏、宇喜多氏らの勢力争いの場となり、宮山城、注蓮山城、土器尾城逆巻城などが築かれた（註6）。これらの山城の外に小規模な居館がその山麓、低地に営まれていたと思われる。美作は天正12年以後は宇喜多氏の統治下にあったが、関ヶ原の敗線により、小早川氏統治下に入り更に慶長8年、森氏の統治下に入ることになる。

（橋本 惣司）

註1 「西原遺跡出土の石器」 河本 清、枝川 陽、栗野克己

『考古学雑誌』 第58卷第2号

註2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（3）1973

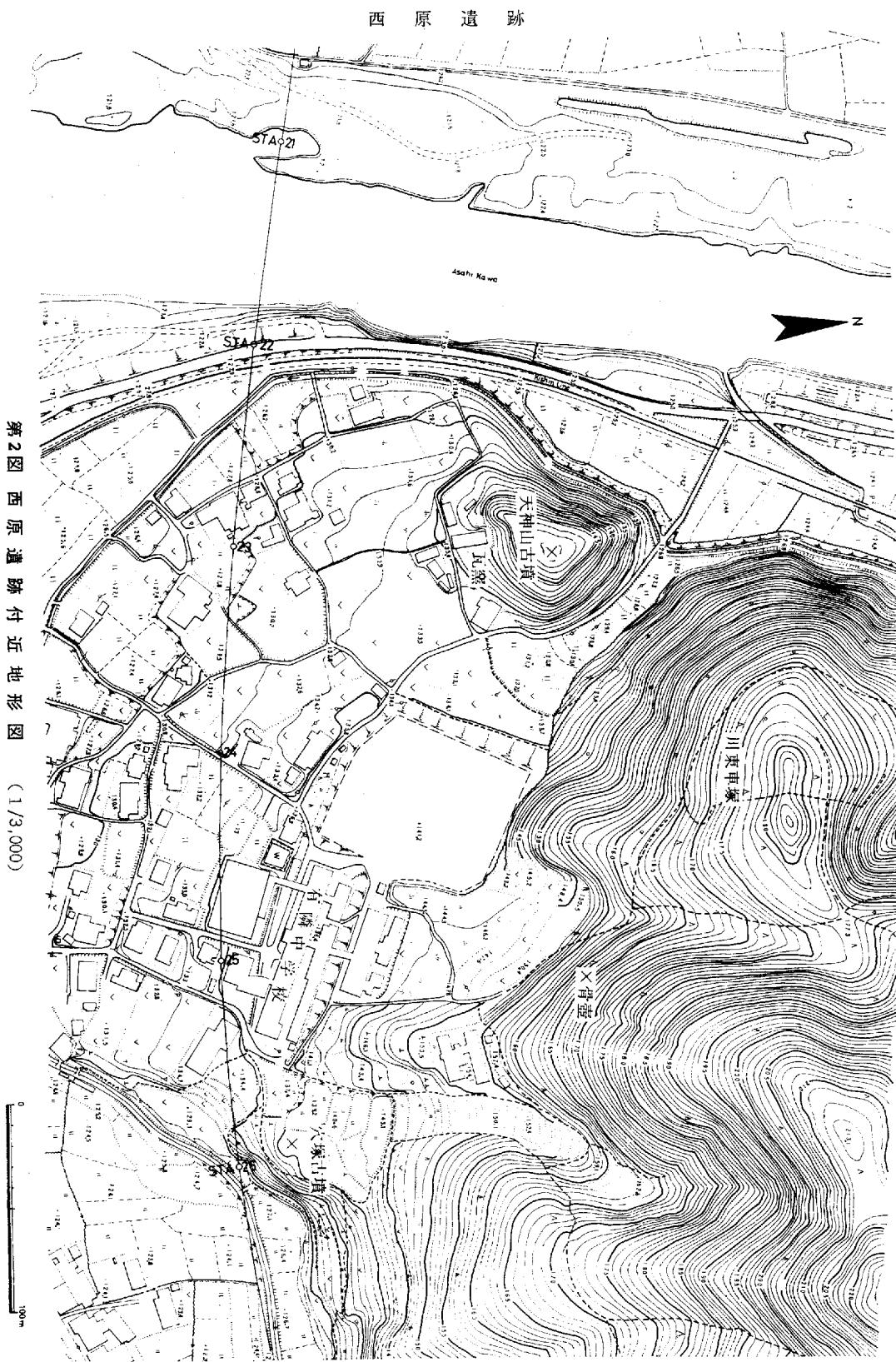
註3 同上

註4 昭和48年度 岡山県教委が発掘調査を実施した。

註5 岡山県埋蔵文化財報告3（1973）

「美作落合町古見戸坂1号墳」橋本惣司、新東晃一、山磨康平

註6 美作古城史（--）昭和28年 寺阪五夫



第2図 西原遺跡付近地形図 (1/3,000)

## 第2章 調査の経過・日誌抄

### 1 調査に至るまで

本遺跡は美作地方では珍らしく、多くの土器が表面採集できる遺跡として知られていた。本遺跡を訪れた研究者は多い（註1）。特に繩文式土器が採集されていることから遺構の存在が期待されていた。中国縦貫自動車道の路線が本遺跡の中心部を通過することになり、工事施行前の「記録保存」の調査を行った。

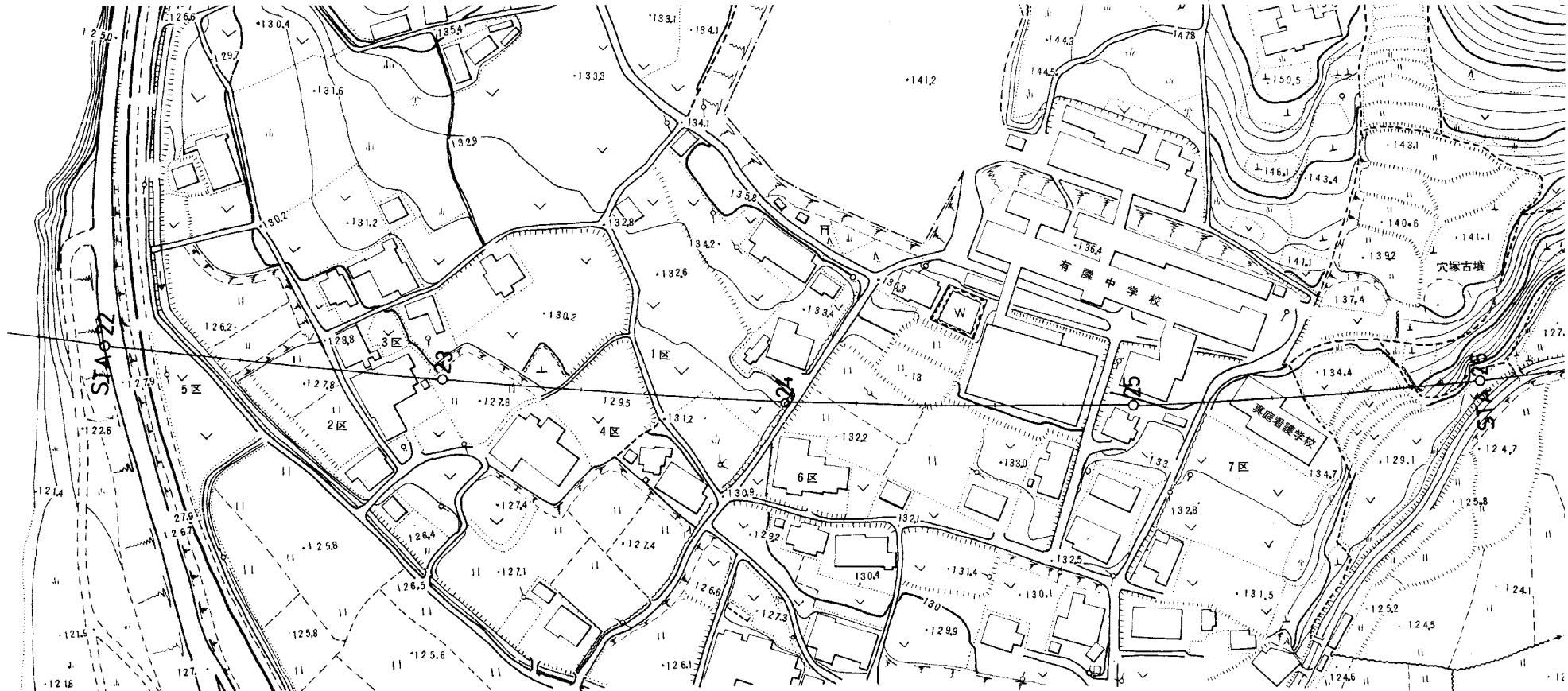
昭和44年度、中国縦貫自動車道に伴う発掘調査として三名の調査員によって「久米廃寺」の発掘調査が行われていた。ところが日本道路公団（以下公団と記す）では、岡山県内工事の着工を昭和44年度内にする方針を出した。橋梁工事は時間がかかることから真庭郡落合町の新落合橋（のちに新旭川橋と改名）から着手することになった。新落合橋の東に接して西原遺跡があり、落合町の道路事情などから工事用道路として西原遺跡の早期発掘調査を求めてきた。新たに調査員がおらず十分な調査体制を整えることができない状態であった。やむを得ず、久米廃寺の調査を担当していた河本清主事が10月1日付で指導主事となった神原英朗氏（註2）と共に第一次トレンチ調査を実施することになった。10月18日の対策委員会で了承を求め10月20日から発掘調査を開始、11月29日で終了した。

### 2 第一次トレンチ調査（第4図）

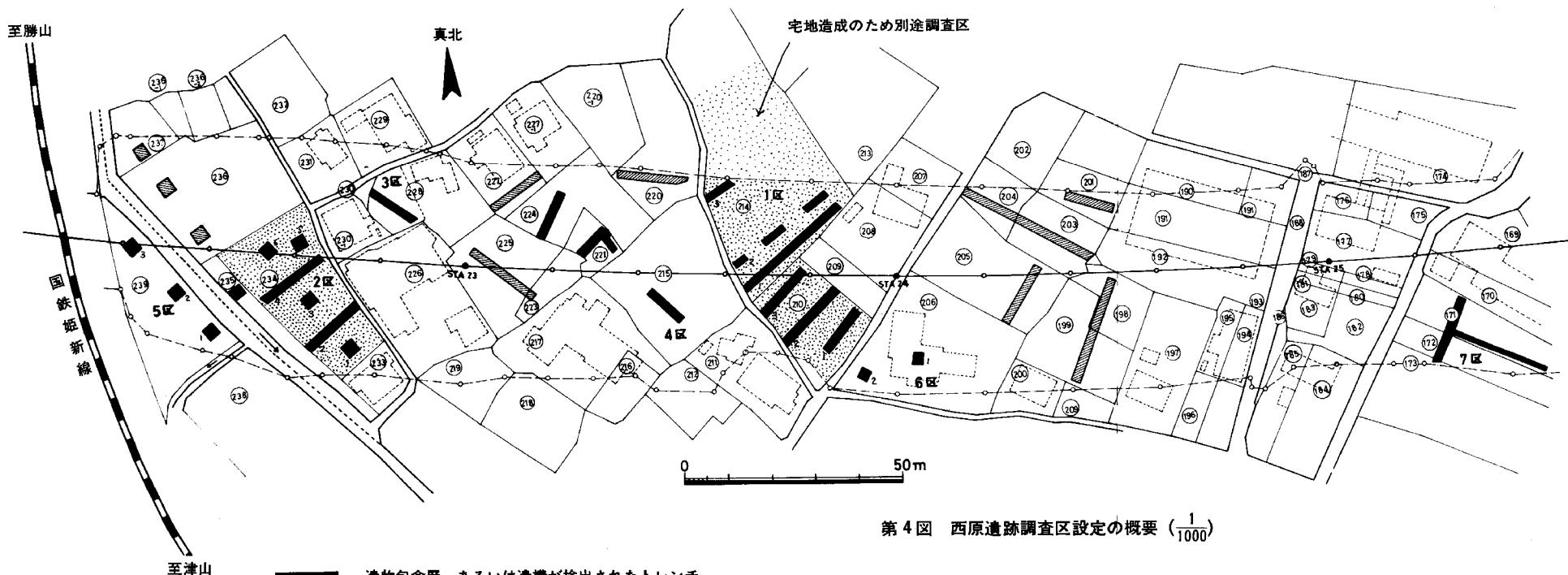
10月20日～23日、落合町教育委員会・縦貫道用地課（落合町）へ挨拶、作業員の雇用について西原地区区長道満一志氏へ依頼する。用地買収未了地区もあり地権者へ挨拶。発掘用器材の手配、10月27日鍵入式、落合町教育委員会福島豊正課長、西原地区区長道満一志氏はじめ作業員・岡山県教育委員会指導主事神原英朗・同文化課主事河本清、210区に第1～第3トレンチ設定、発掘開始。

10月28日～31日、第1トレンチ地山まで掘り下げる。礫の集積したものあり。第2トレンチは北は浅く南へ深くなる。第3トレンチを掘り始める。214区桑の木伐採作業および表面採集、弥生中期～後期土器片・須恵器・石包丁2点・石匙1点。

11月7日からは枝川陽主事が一人で実施した。宅地移転が済んでおらず作付などにより全域にわたるトレンチ調査が行えなかった。このため遺構の存在が予想されながら未調査のまま道路工事をした地点もあった。巾2mのトレンチを20本（延長295m）、3m×3mの坪掘りを11ヶ所（99m<sup>2</sup>）合計689m<sup>2</sup>実施した。トレンチの名称は、用地図に基づいて用地買収のため一筆毎につけた整理番号をそのまま区としてよび、区の中で第1トレンチ・第2トレンチと順番によぶことにした。この結果遺構や包含層の検出された地点について第二次調査ではあらためて1区～5区として調査区を設定した。221区・224区は面積も小さく削平されており柱穴も浅いのであえて第二次の調査区設定を行わなかった。また瓦焼き粘土採取のため50cm～2mに及ぶ



第3図 西原遺跡地形図 ( $\frac{1}{1000}$ )



第4図 西原遺跡調査区設定の概要 ( $\frac{1}{1000}$ )

- 一遺物包含層、あるいは遺構が検出されたトレンチ。
- ▨ 一瓦粘土採取などのため、掘下げられていた、遺構検出不可能なトレンチ。
- ▨ 一平面発掘調査地区。

○ 一 (用地買収の整理番号で、第一次トレンチ調査の地区分けに利用した。  
第二次発掘調査では別に、1区～7区の地区分けをした。)

\*トレンチ調査は用地買収状況、宅地建物の状況をみて実現できるところだけ設定した。点線で囲んであるものが建物である。

\*この図は用地買収のための 500分の1図をもとにトレンチの位置をオフセット測量したものである。

|           |                     |
|-----------|---------------------|
| 第一次調査トレンチ | 689m <sup>2</sup>   |
| 第二次調査 1区  | 1,200m <sup>2</sup> |
| 〃 2区      | 837m <sup>2</sup>   |
| 〃 トレンチ    | 87m <sup>2</sup>    |

## 西原遺跡

深さに掘られているためまったく遺構が破壊されてしまっている場所が多い(註3)。トレンチ調査の結果により約2,166m<sup>2</sup>にわたり全面発掘調査の必要がでてきた。公団の要望では久米廃寺の調査より西原遺跡の調査を早急に終了するようにとのことであった。雇用作業員との関係から久米廃寺の作業を中断することができないまま西原遺跡の第二次調査を引き続き実施した。

### 3 第二次発掘調査

12月から枝川・栗野2名の調査員で開始した。ところが栗野は作業中骨折し一ヶ月入院したため12月中は枝川主事一名で次の作業を行った。

トレンチ調査の結果では1区がもっとも包含層が厚く遺物の出土量も多い。また弥生式土器の包含層に至るまでの堆積土も多いのでとりあえず包含層上層までの土を除去する。

1月は河本・栗野2名の調査員が西原遺跡の調査を行い、枝川は2月から久米廃寺の調査を休止するための整備作業にあたった。調査は1区C地点とD地点の遺構検出をした。

C地点では特に柱穴が密集して検出された。D地点では包含層を掘り下げると同時に、トレンチ調査のとき214区第2トレンチの2とした部分の精査を行い住居址を検出した。これはのちに8・9・10号となった。グリッド設定は地形に合せて行ったため1区と2区ではそれぞれ方位が異なる。1区ではSTA23+80と、STA23+60の北側22mの巾杭をむすぶ線を基準にして4m×4mを一単位とするグリッドを設定、遺物の処理を行った。また5グリッド=20mおきに土層観察用の土手を残しながら包含層を掘り下げる方法をとった。遺構や土手の残った状態によりA地点～E地点の中地区設定をした。1区に接して別途調査を行ったF・G・H・I地点は整理の都合上、今回の報告書の整理段階で命名した。

2区ではSTA22+60を基準に地形に合せて4m×4mグリッドを設定した。土層観察用の土手はSTA22+60を中心に十字に残した。

1月23日、1区の北側の用地に接して宅地造成が行われる場所の調査を開始した。これは中國縦貫自動車道路によって住宅を移転するためであり、発掘調査をするか否かについて問題点を残しながら開始された(註4)。今回の報告書では割愛する。

2月 <1区>A地点包含層発掘遺構検出、2号住居址南半部検出、中期の土器だまり検出  
<2区>地形測量とグリッド設定のち表土はぎ、遺構検出開始。

3月 44年度事業として美作国府の第一次トレンチ調査を枝川が担当したために河本・栗野が調査を継続した。

<1区>A地点土器だまり検出、6号住居址調査、B地点包含層掘り下げ、3号住居址調査  
炭化材あり床面2枚あるので手間どる。C地点柱穴掘り下げ、D地点8・9・10号住居址確認  
包含層掘り下げ、<6区>1区の東南部宅地移転したので坪掘り。

4月 <1区> 橋本惣司主事が新たに加わり3名の調査員となった。3号住居址・7号住居址完了。2区～5区にかけてのトレンチ坪掘り調査断面観察終了、7区トレンチ設定発掘開始

## 西原遺跡

5月 中力・伊藤・新東・松本・柳瀬の5氏の応援があった。また有隣中学校生徒の手伝い。**<1区>**8・9・10号住居址の調査、C地点実測、E地点11号住居址の調査など。**<7区>**トレチ掘り下げ、土器溜り遺物取り上げ。5月17日(日)現地見学会5月18日、調査に入るまで工事によって壊されないよう「穴塚古墳」(註5)の周囲に杭を打ち有棘鉄線でとり巻き立入禁止の立札を立てた。

5月20~22日 器材梱包、小屋解体・トラックへ積み込む。5月23日関係者に挨拶、これで西原遺跡の発掘調査終了。

### 4 遺物の整理・報告書作成

調査終了後、本遺跡の遺物は津山市二宮にある岡山県蚕業部の空室に保管された。遺物は掘り出されたままで水洗いはしていなかった(註6)。そこで久米廃寺は多量の遺物があるところから天神原遺跡と美作国府の発掘調査各現場へ一部の土器を持って行き、水洗いが行われた。天神原遺跡では水洗い、乾燥のちまたポリ袋に納められた。美作国府ではそのまま整理箱に広げてあった。それをポリ袋に納めないまま移動したため、別々の遺構や包含層出土の遺物が一部混ってしまった(註7)。水洗いをする中で分銅形土製品・縄文時代中期・後期の土器片の発見があった。

昭和48年、津山市田邑へ収蔵庫が完成、出土遺物はここへ移動された。昭和49年4月、第3分冊として整理が開始された。しかし、整理担当者が少なく、整理期間も短いため、報告書作成のための作業がほとんどで、将来にわたり研究資料として利用・活用できる状態・あるいは保管・管理するには充分とはいえない。今後に残された課題である。

註1 「岡山県農地史」。「吉備考古」。「全国遺跡地図」(岡山県)1928番散布地。

津山郷土館資料 太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石鎌などが収蔵されている。

註2 元対策委員、当時久米郡旭町・旭第5小学校教諭、44年10月に西原遺跡の発掘調査の段取をしたあと44年11月から山陽町教育委員会へ出向し「岡山県営山陽新住宅市街地開発用地内埋蔵文化財発掘調査」を担当している。

註3 第1図STA23から北へ100mほどのところに瓦窯の残骸が存在する。最近まで操業していたという話である。

註4 1区の良好な包含層の続きであり 572m<sup>2</sup>にわたり遺構の存在が予想され周囲の土地状況からけずり下げられる予定だった。個人の宅地造成であることから原因者負担を主張できなかった。強いていえば縦貫道によって移転するので公団が原因者ともいえる。岡山県ではこの場合緊急調査費の予算をとらなかった。

註5 西原遺跡のある台地の東端部にあり、縦貫道用地にかかるため、昭和45年7月27日より9月25日まで、岡山県教育委員会(中力昭・伊藤晃が担当)によって調査された。直径20mの円墳で、全長12mの片袖式横穴式石室を有する。

註6 西原遺跡の土器は第一次トレチ調査の時は現地で水洗を試みたことがある。しかし、脆弱なため剥離がひどく、水洗するには慎重さが必要なので中止した。

註7 美作国府の終了段階は非常にいそがれ、調査員以外の事務担当者がこの遺物を津山市中央公民館に引越、保管する段取を行った。

西原遺跡

西原遺跡調査員一覧表

|         | 神原英朗 | 河本清         | 枝川陽   | 栗野克己 | 橋本惣司 | 備考                 |
|---------|------|-------------|-------|------|------|--------------------|
| 44年10月  | ○    | ○           | 久米廃寺  | 久米廃寺 |      |                    |
| 11月 山陽町 | ↓    | △<br>(久米廃寺) | ○     | 久米廃寺 |      |                    |
| 12月     | 久米廃寺 | ○           |       | ×    |      |                    |
| 45年1月   |      | ○           | 久米廃寺  | ○    |      |                    |
| 2月      |      | ○           | ○     | ○    |      | 渡辺健治応援             |
| 3月      |      | ○           | 山陽新幹線 | ○    |      |                    |
| 4月      |      | ○           | ↓     | ○    | ○    |                    |
| 5月      |      | ○           |       | ○    | ○    | 中力,伊藤,新東,松本,柳瀬主事応援 |
| 49年4月   |      |             |       | △    |      | 報告書作成              |
| 5月      |      |             |       | △    | ○    | 報告書作成              |
| 6月      |      |             |       | △    |      |                    |

○=調査, △=他の遺跡と半々, ×=調査せず, 他の遺跡の調査。

西原遺跡発掘調査協力者

落合町教育委員会教育長 杉 寿平・同課長 福島 豊正

美作考古学研究会会長 渡辺健治

青木茂子・青木裕之・池田 登・池本 学・石井幸子・石井 文男・石賀芳枝・今石和平

今石利子・江森亮次・岡本宮子・小林清子・瀬島旦子・田中 享子・道満一志・道満信次

道満 亮・鳥居民子・浪本米夫・野条敬義・野場庄蔵・菱川司歎子・広島海三・福本房子

牧 富市・三船公平・三船安枝・宮森文江・室木基壬子

県立落合高等学校地理・歴史部員

有隣中学校生徒多数・教諭

以上の方々に大変お世話になりました, 記して謝意を表します。

## 第3章 調査の概要

トレンチ調査の結果に基づき1区～5区を設定、その後、宅地移転の済んだ6区に坪掘、用地買収の済んだ7区にトレンチを入れ、それぞれ包含層を確認した。すべて全面発掘調査すべきであったが、調査工程とのかね合いから3区、4区、6区、7区は部分発掘だけで放棄せざるを得なかった。

今回の発掘調査によって検出された遺構は住居址9、土壙、土器だまり、溝状遺構、井戸その他である。以下、各調査区ごとに概要をのべる。

### 第1節 1区

#### 1) はじめに

西原遺跡の台地のほぼ中央部に位置し、分布調査・トレンチ調査の結果でも一番遺物が多く有望視されていたところである。(207)、(208)は宅地のため調査せず他は野菜畑・桑畑であった。トレンチ調査によれば(210)の東北部は瓦土採取のため掘下げられて遺構は存在しないので西南部を発掘、(214)は全域の発掘を行った。なお1区の北北西、(214)用地外については宅地移転に伴う事前調査を行い住居址5(そのうち2軒は縦貫道用地にもかかる。)土壙9、溝、柱穴など弥生時代の遺構や遺物を検出、西原遺跡の全貌をつかむ上では欠かすことのできない資料である。今回の報告では割愛した。(以上第4図参照)

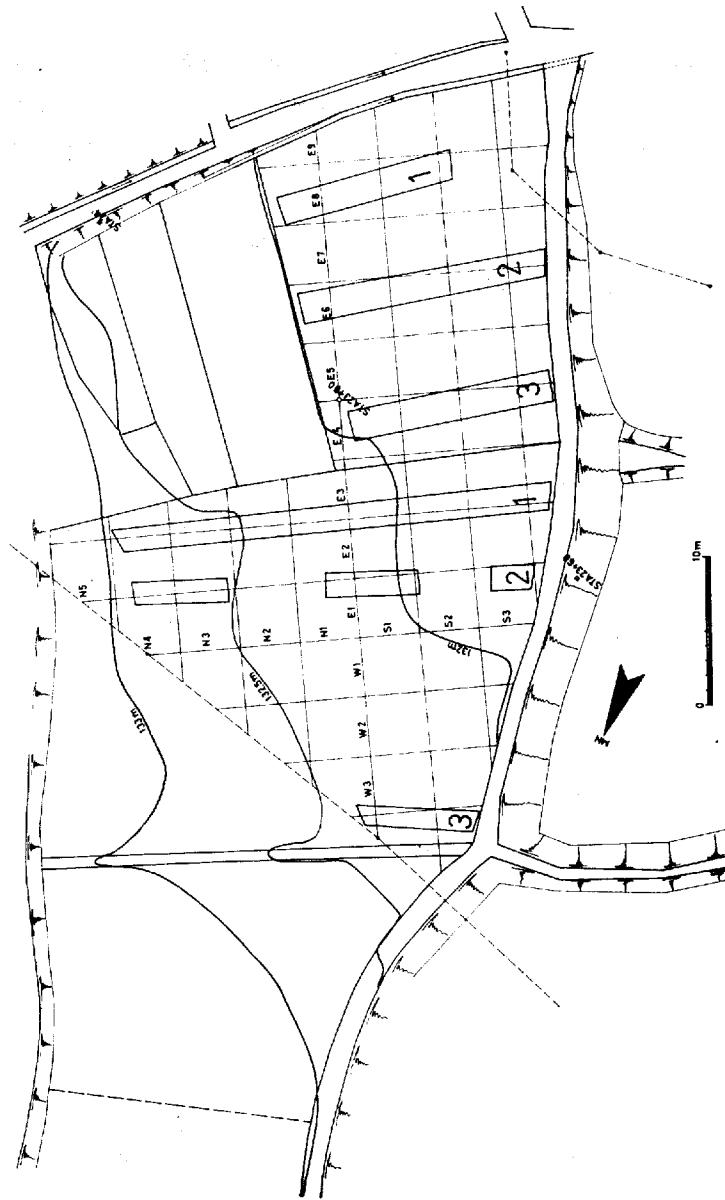
1区の地形は北東から西南へ向うゆるい傾斜面で、(第5図)現地表面の状況よりも発掘調査をした結果では西南部に向って傾斜がきつくなっている。そのため1区用地外・1区C地点・1区E地点では、地山黄色土で遺構を検出することもあったがその他の地点では、黒色土、黒褐色土層中に遺構が検出され、中にはトレンチ調査の時遺構を掘りすぎてしまい、調査の進行の上で困難をきわめた。

土層は第7図に示したように、A・B層の分離は比較的容易だったがC1層、C2層、C3層の分離はむづかしく断面観察ではC1層はわりに分離できたが、C2層～C3層にかけてはむづかしく、分層発掘をする場合には土層断面を見ながら見当をつけて掘下げた。

#### 2) 2号住居址(第8図)

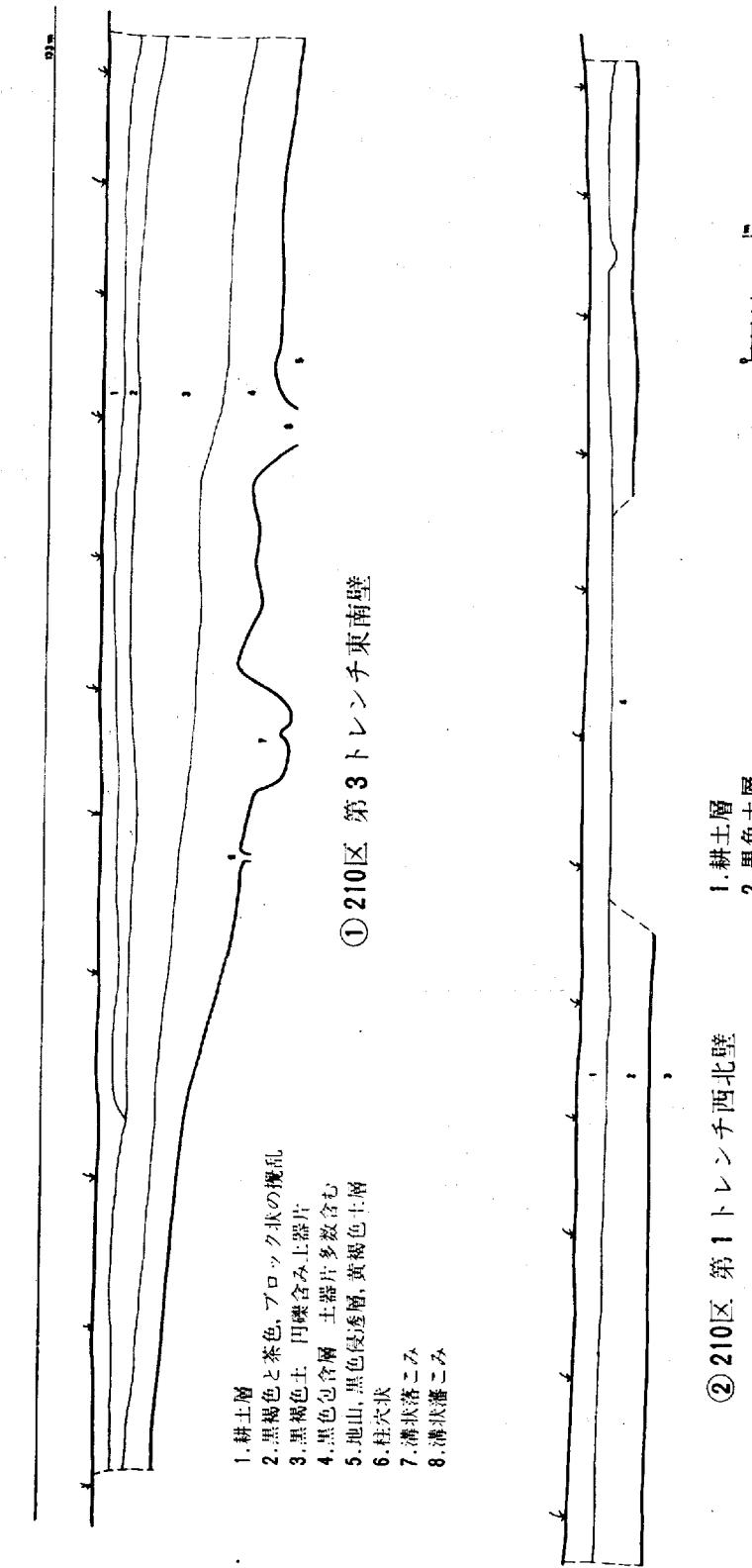
1区A地点北端部において壁溝の一部と、柱穴を検出した。また1区I地点で、中央ピット、壁溝、柱穴を検出したがこれは別途調査のため、図上合成をしただけである。壁溝が貼床によってかくれているものがあり三時期の建て替がある。弥生時代後期後半のものである。

西原遺跡



第5図 1区地形測量図、トレンチ・グリッド設定状況 (1/500)

西原遺跡



第6図 1区 トレンチ断面図 (1/50)

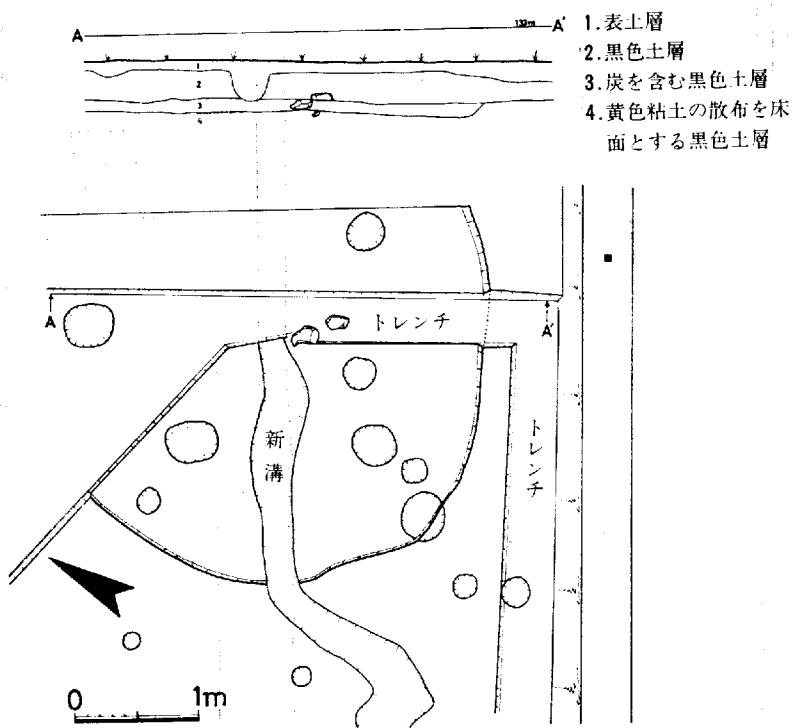
## 西原遺跡

### 3) 3号住居址(第8図)

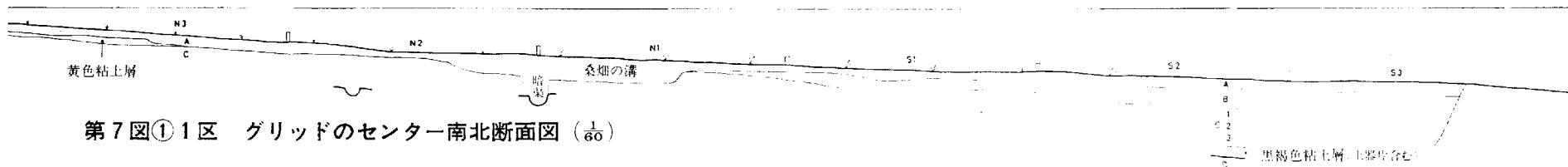
1区北西のはしに発見されたものでトレンチ調査のとき床面を掘り抜いて断面に床面が検出された。平面形は7mの円形を示し、壁溝が三本検出され住居址の建て替えが認められた。半分は用地外にまたがっており、住居址内には炭化した木材が散乱しており火災にあったと思われる。中央ピットがあり、壁溝は三時期の建替えがあるように貼床により埋められている。砥石、鉈、土器類など出土遺物が多い。弥生時代後期後半である。

### 4) 6号住居址(第9図、図版8)

1区A地点北東部において検出された住居址で、黒色土の上に黄色土混りの貼床をしている。このため遺構はわずか10cmの深さしか残っておらず、トレンチ断面によって住居址検出を行ったため、すでにとばしてしまった部分がある。直径約4m程。中央部は近世暗渠が縦断しており、壁構は存在せず、柱穴は直径30~40cmのものが不規則に存在するがこの住居址のものとして特定しがたい。住居址の中央部分から二つに割れた砥石が出土、土器片は少なく、弥生時代中期後半~後期の土器片が出土するが、後期後半のものであろう。

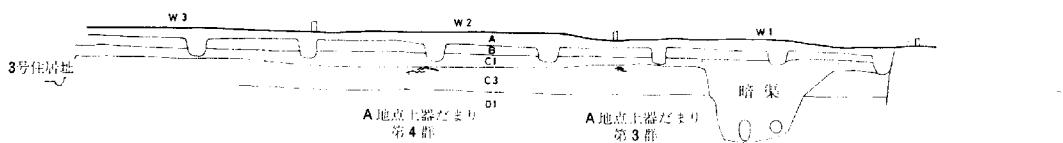


第9図 6号住居址実測図 (1/60)

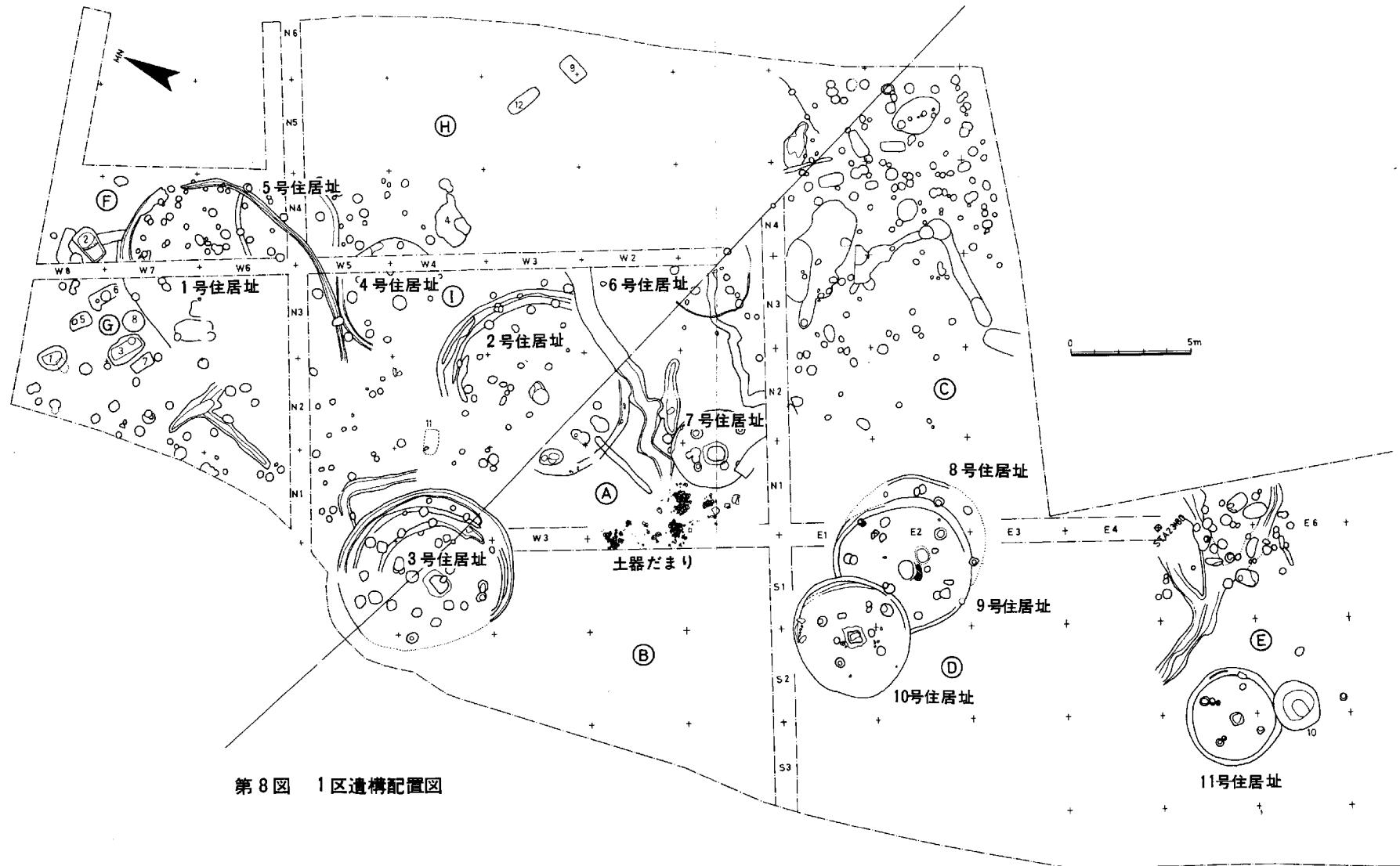


第7図① 1区 グリッドのセンター南北断面図 ( $\frac{1}{60}$ )

- A 樹作土
- B 粗砂混入褐色土
- C1 黒色土、須恵器包含層
- C2 黒色土、弥生式土器を含むやや褐色
- C3 黒色土、純粹な黒色
- D 地山黄色土
- (D1漸移層  
(D2黄色土)



第7図② 1区 グリッドのセンター東西断面図 ( $\frac{1}{60}$ )



第8図 1区遺構配置図

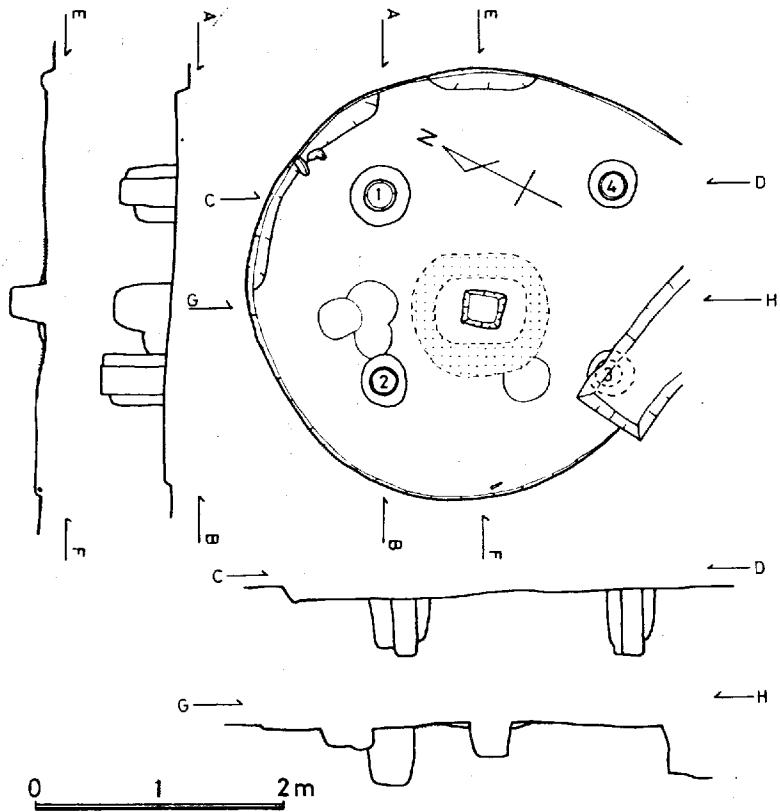
## 西原遺跡

### 5) 7号住居址(第10・14図、図版5・6・7)

長径約3.5m短  
径約3.3mの楕円  
形の小型の竪穴式  
住居である。住居  
址は黒褐色土に掘  
り込まれていたた  
めに検出がきわめ  
て困難であった。  
床面では黄色地山  
粘土と黒褐色土の  
混土で貼り床であ  
った。

4本の柱穴は直  
径17~22cm、深さ  
45~50cmでいづれ  
も直径約40cmの掘  
り方には黄色地山  
粘土が入れられ、  
住居址の規模に比

べて、しっかりと



第10図 7号住居址実測図 (1/60)

した柱が立てられていた。柱間は1—4が1.8m、1—2が1.5mを測る。中央穴は35cm×30cm、深さ30cmの方形を呈し、木炭、土器細片が出土した。中央穴の周囲には巾20cmの木炭層がめぐっていた。

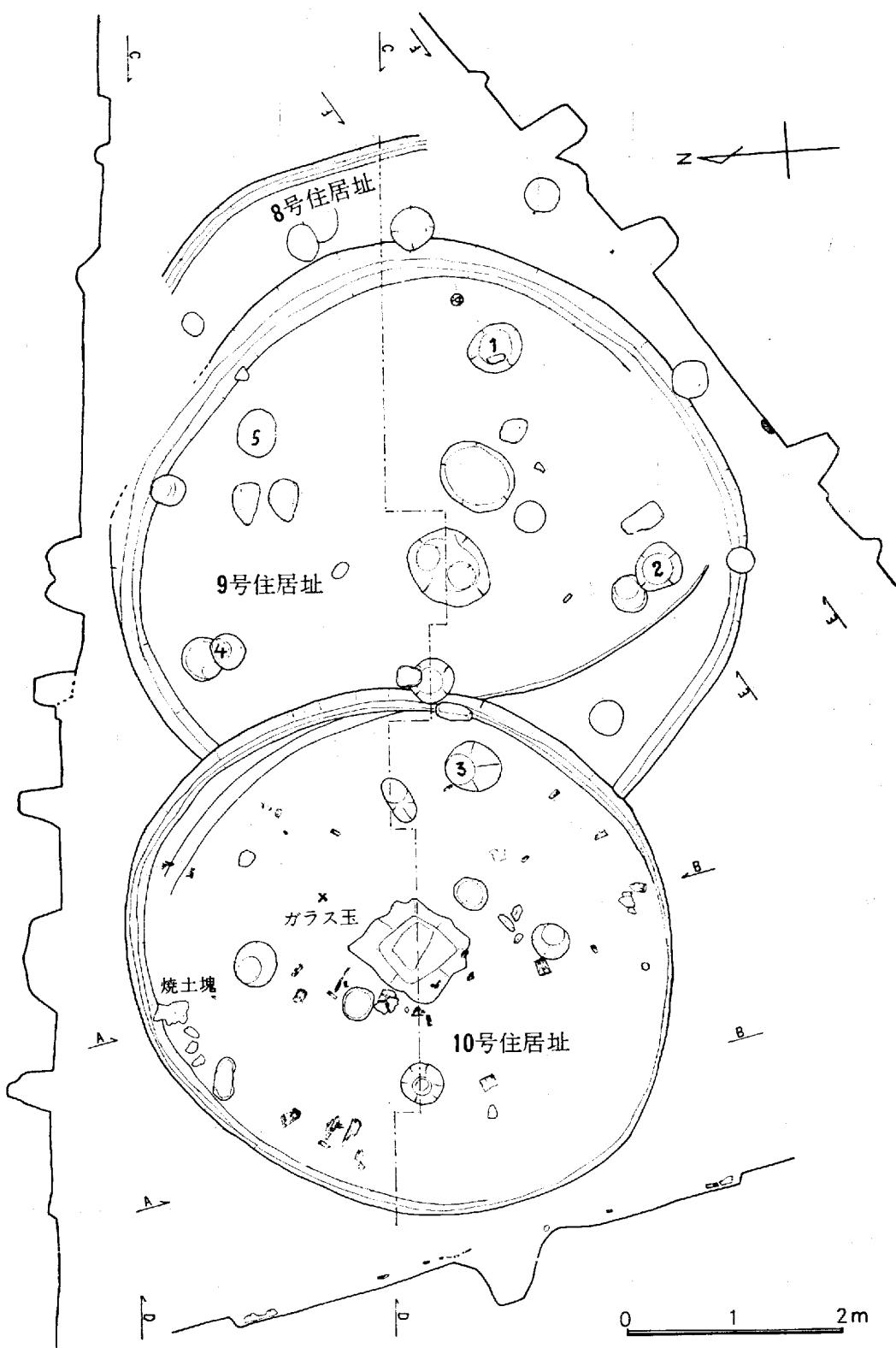
遺物はわずかしか出土していない。弥生式土器の甕形土器の口縁部、やりがんな1、石鎌1以外に少量の土器片が出土した。

甕形土器(第14図—①—1)は口縁部に三条の沈線をめぐらし、その上に円形浮文を4個単位に施している。口縁端部は上下に肥厚し、『く』の字状に屈曲する頸部内面はヘラ削りによって明瞭な稜をもっている。外面には櫛描波状文と二条の沈線が施こされ、灰色の堅緻な土器で弥生時代中期の特徴をもっている。

やりがんな(第14図—②—3)は残存長13cm、巾は柄部で1.6cm刃部で2cmで柄部には木質が残存している。

石鎌(第14図—②—5)はサヌカイト製で床面よりやや浮いた状態であった。

西原遺跡



第11図 8号, 9号, 10号, 住居址実測図 (1/60)

## 西原遺跡

### 6) 8号住居址(第11・14図、図版7・16・18)

確認できた壁溝の一部から推定して、 $5.2m$ の円形の住居址と考えられる。柱は5～6本で $0.7m \times 0.6m$ の浅い中央ピットを伴っている。床面から黒色片岩製の石包丁、中央穴からは弥生時代中期の土器片、サヌカイト片が出土した。

9号住居址に切られている。

### 7) 9号住居址(第11・14図、図版15・16・18・19)

1辺 $5.6m$ の方形を基調にした住居址で5本柱と考えられる。巾 $20cm$ 深さ $10cm$ の壁溝がめぐり、床には黄色粘土と黒色土の混土で約 $10cm$ の厚さに貼っている。ほぼ中央に $80 \times 60cm$ 深さ $40cm$ の中央ピットがある。柱間は1—2が $2.6m$ 、2—3が $2.6m$ 、3—4が $2.5m$ 、4—5が $2.4m$ 、5—1が $2.4m$ を測る。

貼床面からは砥石2、高坏脚3、甕形土器口縁部2が出土した。甕形土器(第14図—①—3)は口縁部の一部であり口唇部の立ちあがり器面は横なでにより調整されている。

高坏脚(第14図—②—2)は端部が上方に肥厚し、外面には数条の沈線が施こされている。これらはいづれも弥生時代中期の土器で混入と思われる。高坏脚(第14図—①—4)は円錐形の裾部に2孔1対で3ヶ所に円孔が穿たれ、裾端部は立ちあがっており内面はヘラ削りがなされている。弥生時代後期の土器である。

中央ピット出土の分銅形土製品は破片ではあるがくりこみ部が一部残っており、表面は凸面、裏面はやや凹面をなしている。厚さは頭部縁辺部で $0.5cm$ 、頸部で $1.1cm$ と厚さを増している。文様は頸部中央に2条の列点文が孤状に施こされ、裏面から頭部縁辺部の縁面に貫孔がみられる。全体に灰黄色を呈し、胎土には砂粒が含まれているが表裏面ともに風化が著しい。復元径は約 $12cm$ である。尚、美作における分銅形土製品の出土例は5例目である。

註 東潮、「分銅形土製品の研究(I)」『古代吉備』 第7集 1971

### 8) 10号住居址(第11・12・14図、図版15・16・17・20)

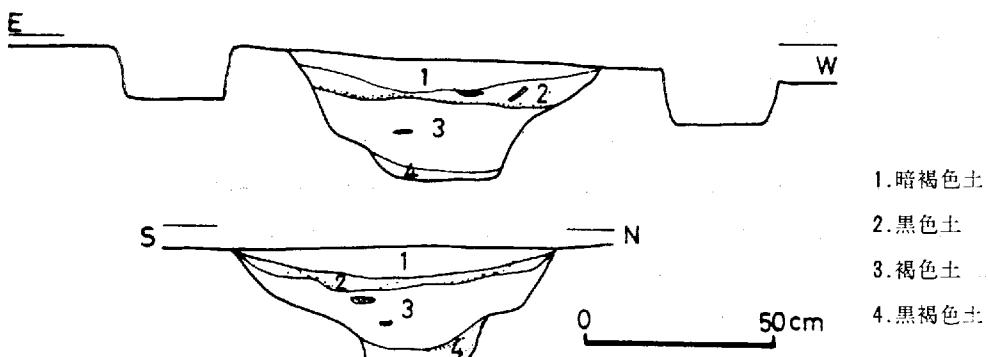
9号住居址を一部切って掘り込まれた住居址で、直径約 $5m$ の円形を呈する。基本的には4本柱で中央穴の東西に2本の柱穴が検出された。柱間は $1.9m \sim 2.2m$ で、深さは $25cm \sim 30cm$ を測る。中央ピットは $80cm \times 80cm$ の方形で深さ約 $30cm$ を測る。中央ピットは段をなし、中央最下層の黒褐色土が堆積する。 $30cm \times 30cm$ 部分が深く、褐色土を厚さ $15cm \sim 18cm$ 埋めて灰、木炭、土器片を含む黒色土が堆積している。この中央ピットをはさんで2本の柱穴が検出された。これらの柱穴は直径 $30cm$ 深さ $15cm$ で中央穴と密接なつながりがあると思われる。なお床面には火災による樅木などの炭化材が検出された。

壺形土器(第14図—①—7)は口縁部が上下に拡張し二重口縁へ移行している。口縁外面には、竹管文をほどこし、頸部は円錐状をなし、11条の深い沈線をめぐらしている。内面にしづり痕がみられ、厚さ $1.5cm$ の器壁の頸部から肩部の内面はヘラ削りで薄くなっている。胎土は精選され堅緻な土器である。内面に指頭痕がある。土器底部(第14図—①—6)は中央穴の付

## 西 原 遺 跡

近より出土した壺形土器の底部と思われる。薄手であるが胎土は精選されている。

ガラス玉（第14図—②—4）はコバルトブルーで直径0.6cm、高さ0.4cmで孔の直径は0.2cmである。床面より出土した。



第12図 10号住居址中央ピット実測図（レベルは131.3m）（1/20）

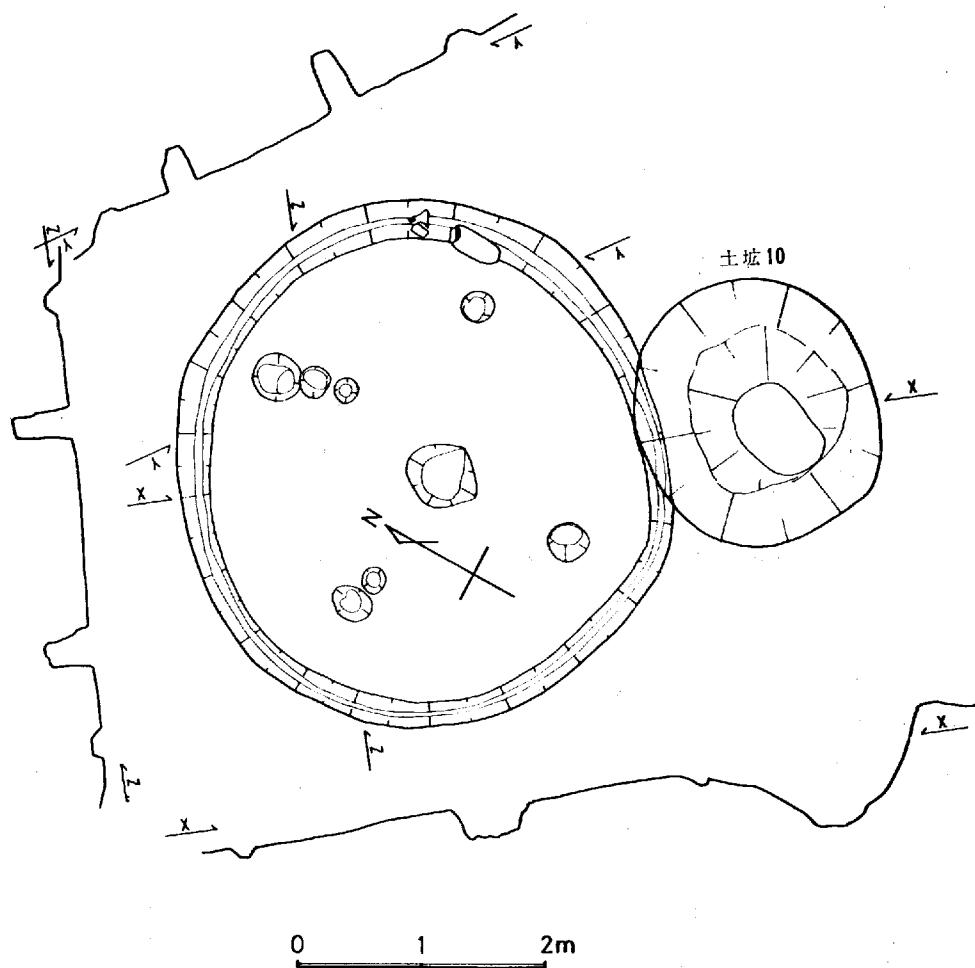
### 9) 11号住居址（第13図、図版22・23）

E地点で検出された直径約4mの円形住居址である。壁溝は巾25cm、深さ10cmでめぐり基本的には4本柱である。柱間は1.8m～2mで柱穴の深さは0.3cmである。

中央には不定形の中央穴があり、深さ0.2mである。住居址内からは少量の土器片の出土をみた。高壺脚部2、甕、壺の口縁部、砂岩製の砥石1などである。

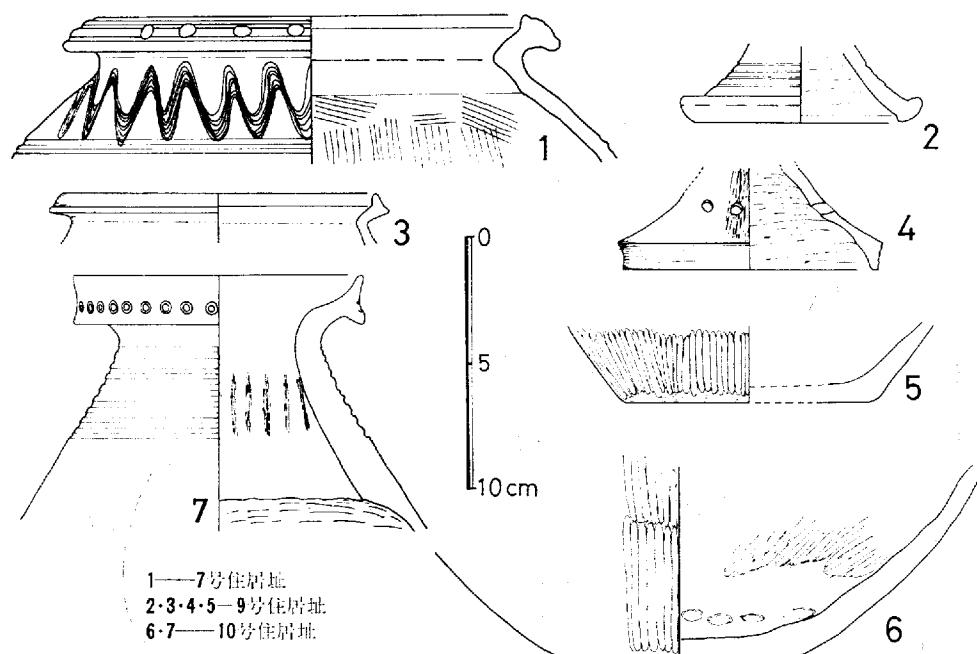
高壺は円筒形の脚に広がりが大きい裾部がつき、円孔がある。胎土は精選されきめのこまかに粘土で焼成もよい。甕の口縁部は口唇部が立ちあがり、内面へラ削りの手法がある。いづれも弥生時代の後期に比定できる。

西原遺跡

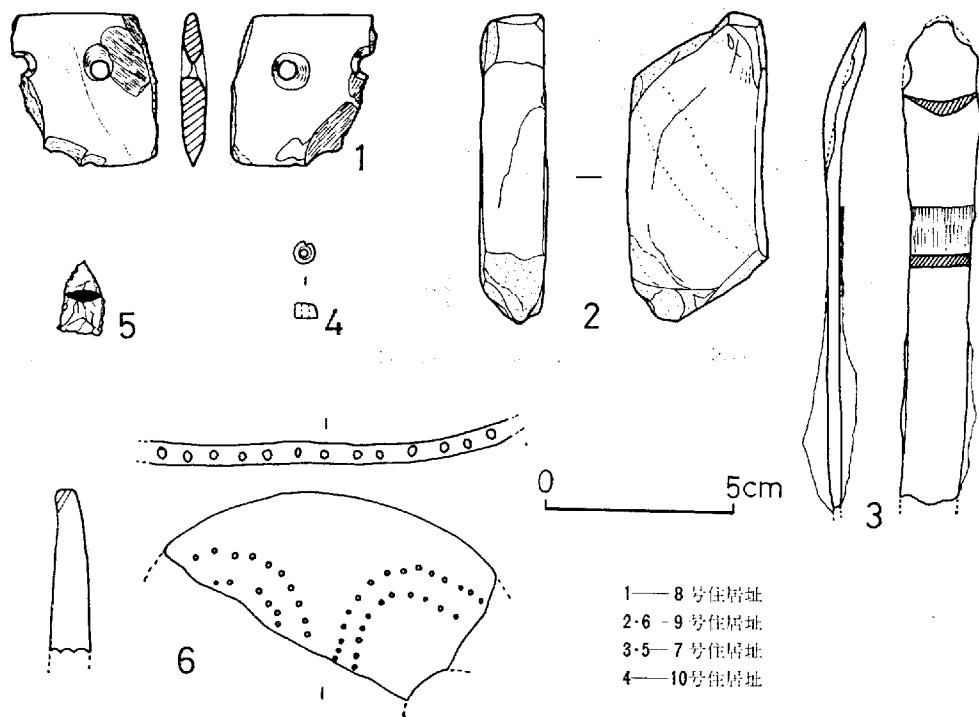


第13図 11号住居址実測図 (1/60)

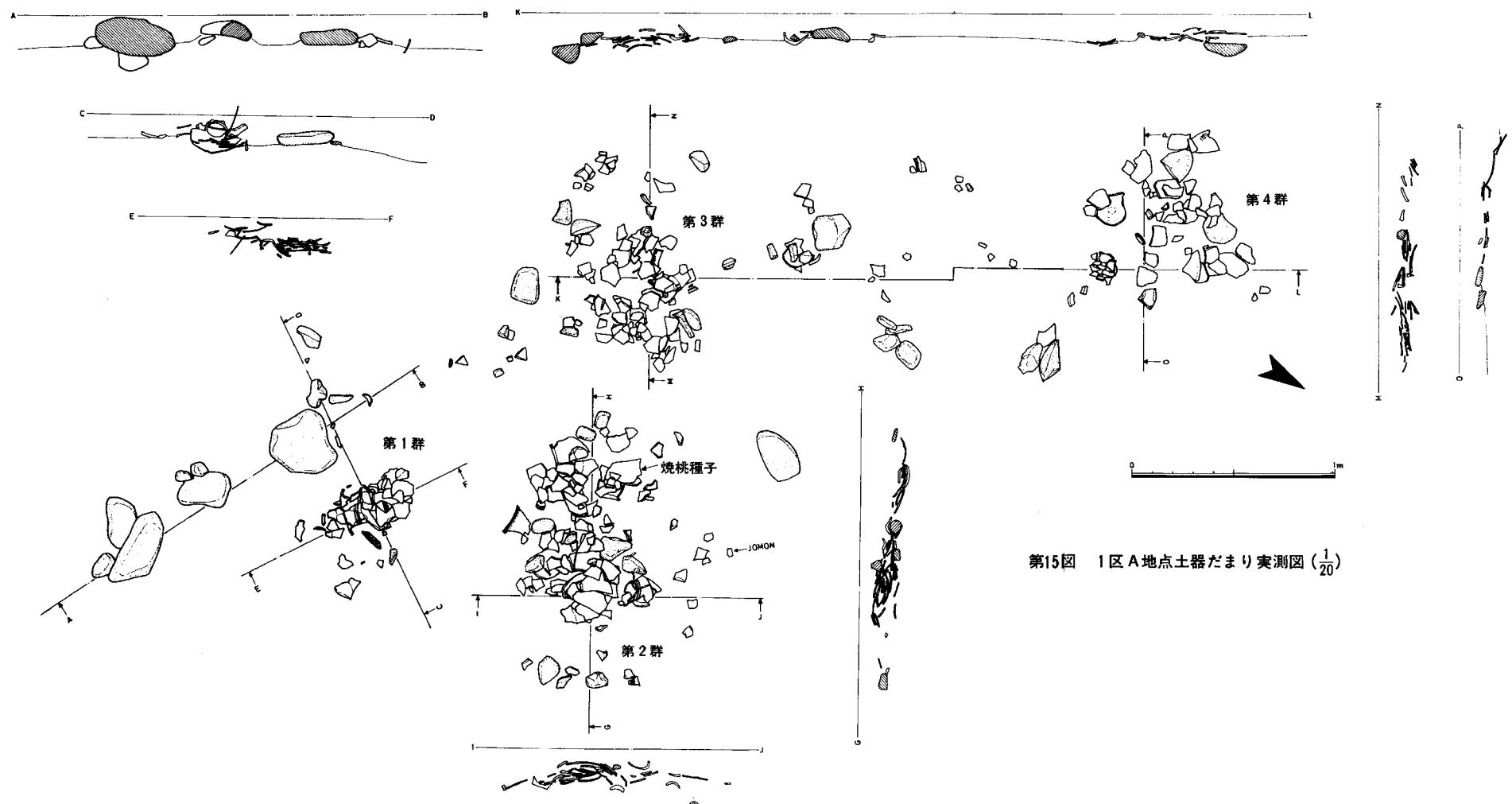
西原遺跡



第14図—① 7号, 8号, 9号, 10号住居址出土遺物 (1)



第14図—② 7号, 8号, 9号10号住居址出土遺物 (2)



第15図 1区A地点土器だまり実測図 ( $\frac{1}{20}$ )

## 10) A 地点

柔畠の耕作土によって上部が削平され、B層、C1層ともほとんどなかった。住居址の検出でも、わずか10cm程しか残っていなかった。

6号・7号住居址以外の遺構としては、土器だまり・柱穴・舟形土壙・溝などがある。

<土器だまり>（第15図、図版9～11）

1区A地点7号住居址とB地点の間で検出されたもので、4群に分れる土器群と、配石列がある。30cm～40cm大の石が三点、東西方向にはなれて並んでおり、さらに10cm～30cmの小石が散在している。扁平な石は水平に置かれているが、遺構の面は確認できなかつたし、土壙の存在も確認できなかつた。

第1群土器は、ほぼ完形の壺形土器一点が口縁部に土器片で蓋をしたようにして横むきに置かれていた。Eの方向が口縁である。

第2群土器は、壺1個体分と甕が3個体、高坏破片などが散在しており、壺形土器は、Jの方向に口縁部をむけて、土器片で口縁に蓋をしている。完形品を横むきに置き、そのままつぶれた状態である。断面ポイントHの方には甕が置かれている。さらにこの土器群には、10cm～20cm前後の石が散在しており一部は、土器の上に置いた状態である。また繩文式土器が近くから一点発見されており（第27図1）土器片の間から焼けた桃の種子が見つかっている。

第3群土器は大きくまとまる土器ではなく、ほとんど破片である。壺、甕、高坏があるが、高坏は2群土器の破片のものと接合する。ここにも石がみられる。

第4群土器はやや北西の方に2m程度離れており、高坏、甕、がある。石も散在している。

これらの土器群は、ほぼ同一平面上で発見されているが、黒色土層内における検出のためか、土壙状のものは検出できなかつた。この土器群は弥生時代中期後半のものであるが、直上まで弥生時代後期の包含層があり一部混在する。またこの土器群を中心にしてサヌカイトの剝片や石器が集中してみられたことは注意を引く。

<その他の>

柱穴は、住居址に所属する以外のものを建物その他の遺構としてまとめることができなかつた。2号住居址の西南端にある2本つながる柱穴は、底に礎板状の板石を置いている。

舟形土壙は二つある。7号住居址の北側に接しているものは、長さ3.2m、巾0.6m、深さ約0.3mである。2号住居址と切合っている細長いものは長さ3.2m、巾0.3m、深さ約0.2mである。いずれも弥生時代のものであるが、時期の検討をしていない。

溝は6号住居址の中央から南西へ向い、C地点の方へ折れ、さらに7号住居址の南部を切断するものと。2号住居址の東辺を切断して、南西へ向い7号住居址と接するもの二本がある。いずれも直線的ではなく、ジグザグに屈曲する。一番底の部分に穴があいており（第7図）、雨が降ったあとは水の通りが良い。暗渠なのだろう。溝の中からは近世陶器が出土する。この溝はさらにB地点へ向って深くなっている。土地の人々に聞いても覚えがないという。性格については不明である。

## 西原遺跡

### 11) B 地点

A層, B層, C1層, C2層C3層, D層と最も良く細分して発掘した地点であるが、特に遺構が集中していなかった。西北端部において3号住居址、西南部で中期中葉頃の土器を含む、巾40mm程の浅い溝が半円形にめぐるもののはかは、若干の柱穴が発見された程度である。特に柱穴については、黒色土層中に存在するもので、検出しにくかった点もあるが。この1区において一番遺構の密度が低かった地点といえよう。また1区H地点2号住居址、またA地点6号住居址などから連続する溝が、このB地点にも延長していた。W1のグリッドの断面(第7図)を見ると下の方に水の通る穴があいている。

### 12) C 地点 (第16図 図版12~14)

西原遺跡の中心に位置する地点で、柱穴が多数検出された。表土、包含層は薄く黄色の地山に堀り込まれた状態であった。表土、包含層からの遺物には、弥生時代の土器片、サヌカイト片などの他に、須恵器などがある。柱穴は建物としてのまとまりはないがC-1~C-8などの遺構について略記してみたい。

C-1は長径2m、短径約1.5mの橢円の変形を呈したすり鉢状のものである。時期不明。

C-2は長さ1m、巾0.4mの長方形の浅いピットである。C-3は長さ1.2m、巾0.45mで土壤墓状を呈する。C-4は変形の土壤で性格、時期ともに不明。C-5は巾20cmの浅い溝で須恵器片出土。C-6は長さ1m、巾0.5mの土壤墓状を呈する。C-7は黄色の地山粘土と黒色土が逆転した状態のピットが検出された。黄色地山粘土が盛りあがっており、裾部に黒色土がめぐる。遺物は皆無である。こうした事例は最近報告例もある。

C-8は1m×0.8mのピットで時期不明

これらの他に中央部にL字形の溝が検出された。巾0.4~0.5m、深さ0.2mで両端と屈折部がやや深い。弥生式土器少量出土。性格は不明

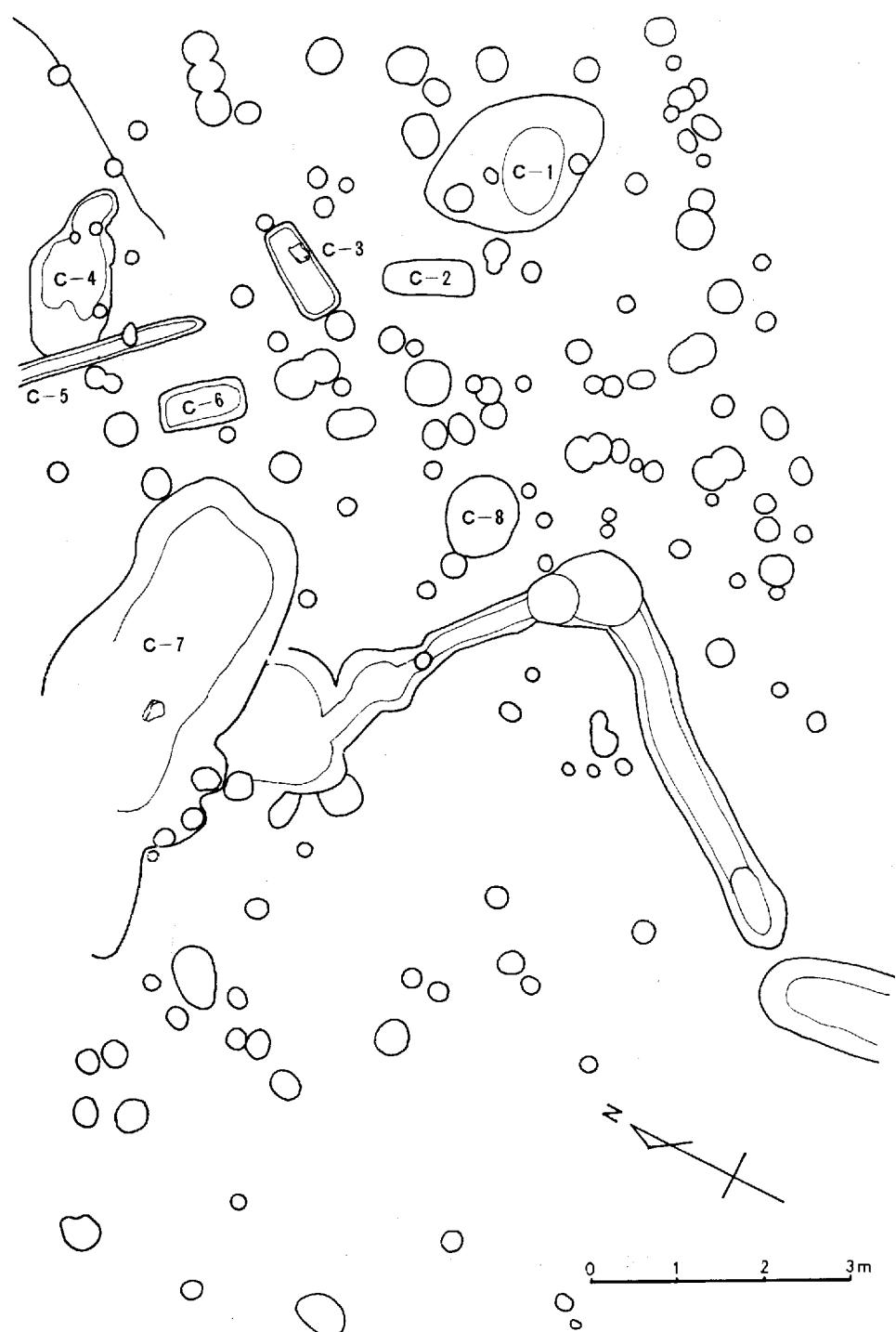
### 13) D 地点

C地点の東に位置し、しだいに南東方向に傾斜し、包含層も厚さを増している耕土層の下には須恵器を含む褐色土層、さらに弥生式土器を含む黒色土層が堆積しており、遺構の検出は困難であった。したがって、8号、9号、10号住居址以外には遺構が検出できなかったが、黒色土からは弥生式土器、サヌカイト製石鎌、剝片、打製石斧などが出土した。さらに完形の高壙型土器が単独で出土したことなどから他にも遺構の存在した可能性がある。

### 14) E 地点 (第17図、図版21)

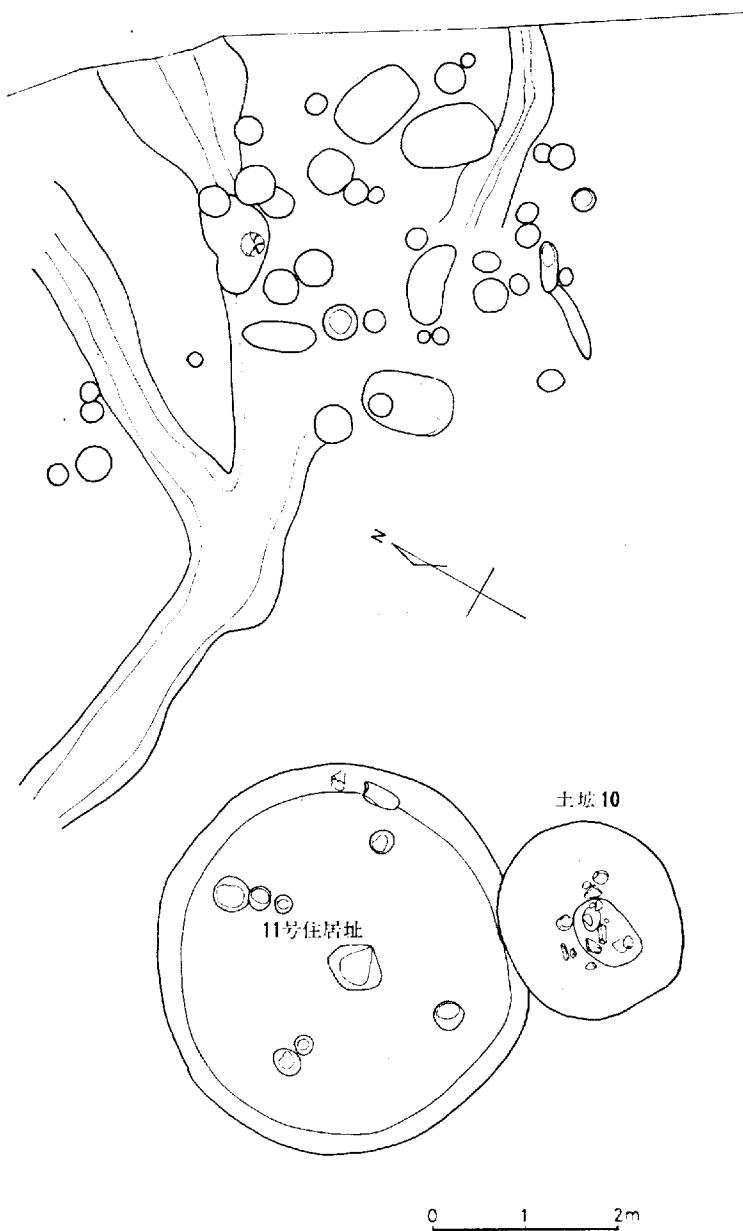
D地点の南に位置し、11号住居址、土壤、溝、柱穴などが検出された。全体的に西方に傾斜しており、検出された溝は支流を集めた状態を示している。溝からは須恵器片が出土している。土壤、柱穴が集中して検出された。土壤の中には弥生式土器を含むものも多い。柱穴はまとまりを確認するまでにいたっていない。石包丁・サヌカイトなどが出土した。

西原遺跡



第16図 C 地 点 (1/80)

西原遺跡

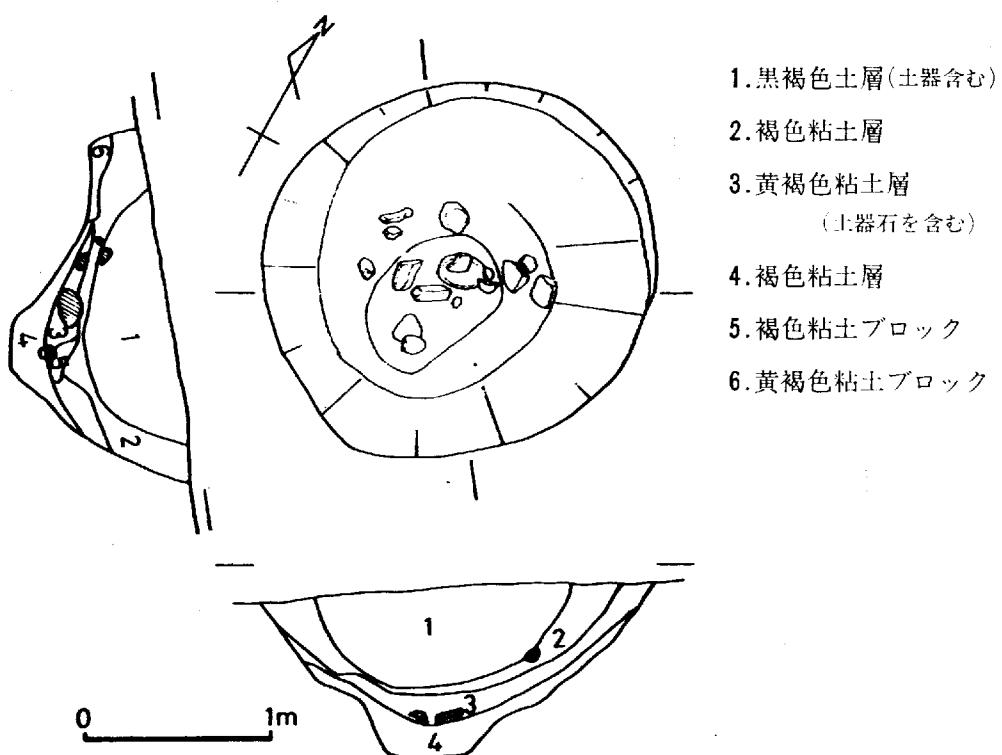


第17図 E 地点平面図 (1/80)

## 西原遺跡

### 土 壤 10 (第18図、図版24・25)

11号住居址を切って掘り込まれた土壤で平面形は直径約2mのほぼ円形を呈し、中央が長径0.8m、短径0.5mの橢円形に最も深く0.9mを測る。最下層に褐色粘土層が堆積している。第3層の黄褐色粘土層には児頭大の河原石と土器片が落ち込んでいた。第1層、第2層の堆積状態からこの土壤が削平によって浅くなつたことがわかる。土器は弥生時代後期の高坏脚などである。



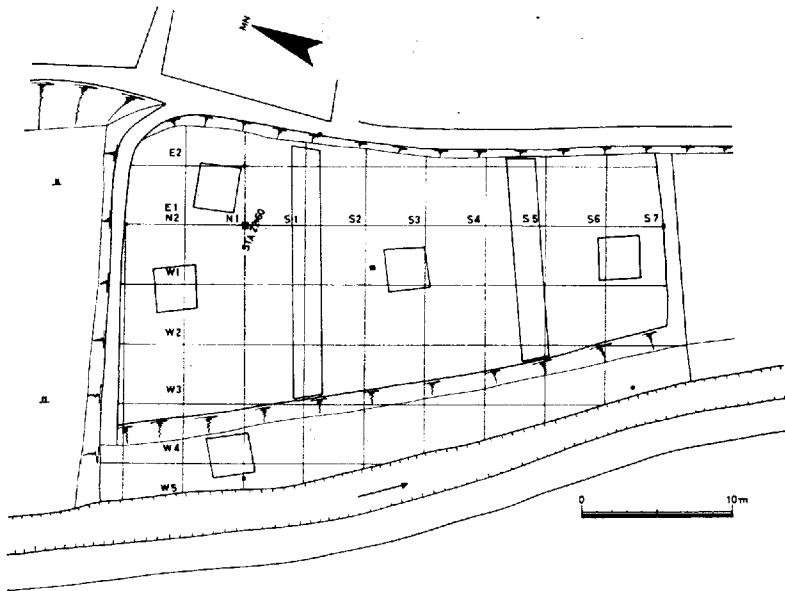
第18図 土 壤 10 実 測 図 (1/40)

## 西原遺跡

### 第2節 2区, 5区

#### 1)はじめに

2区は西原遺跡の西端部にあり洪積世河岸段丘の末端部に位置する。2区・5区とも調査前は水田であった。当初トレンチ調査の結果では、茶褐色の包含層は2区西端部の一部に発見され、柱穴なども若干みられたにすぎない。一方5区は2区より一段低い水田であり砂礫層に土器片が散在しているだけであった。特に2区の地山は黄色のクサリ礫を含んだ土層であり、柱穴も新しいもので、弥生時代の遺構は存在しないのではないかという意見も一部にはあった。しかし平面調査の結果、住居址も発見され遺跡の範囲（第4章結語）について重要な示唆を得た。2区の西南部に、8～9世紀の須恵器を含む包含層がみられた。しかし、1区、3区、4区においてみられたような黒色土層はみられなかった。旧地形では北東から南西に低くなるゆるい斜面である。しかし、水田耕作のため、水平に削平されており、S4E1では住居址のものと思われる中央ピットと柱穴が発見されている。

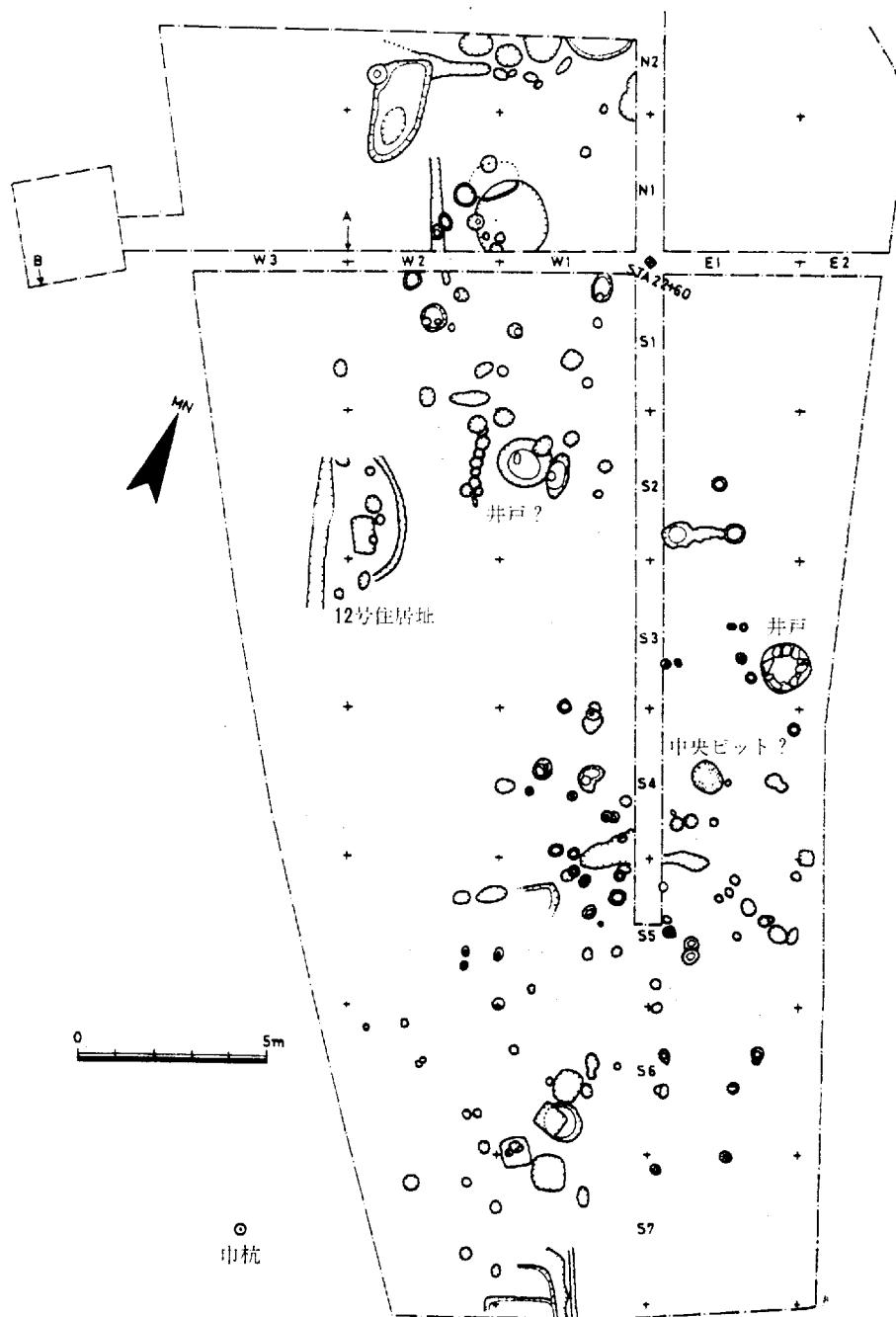


第19図 2区地形測量図、トレンチ・グリッド設定状況 (1/500)

#### 2) 12号住居址 (第21図、図版29)

2区の西南部に壁溝の一部と柱穴が発見され西南側は削平されている。推定直径は約4.2m程であり、やや隅円方形のものになるだろう。特にC断面、D断面の柱穴が他の柱穴よりも深く、本住居址に所属すると考えられ、4本柱と推定できる。壁溝は10cmの深さである。床面はA断面の3層にみられるように削平されている。またB断面にかかる長方形土壙は断面の上か

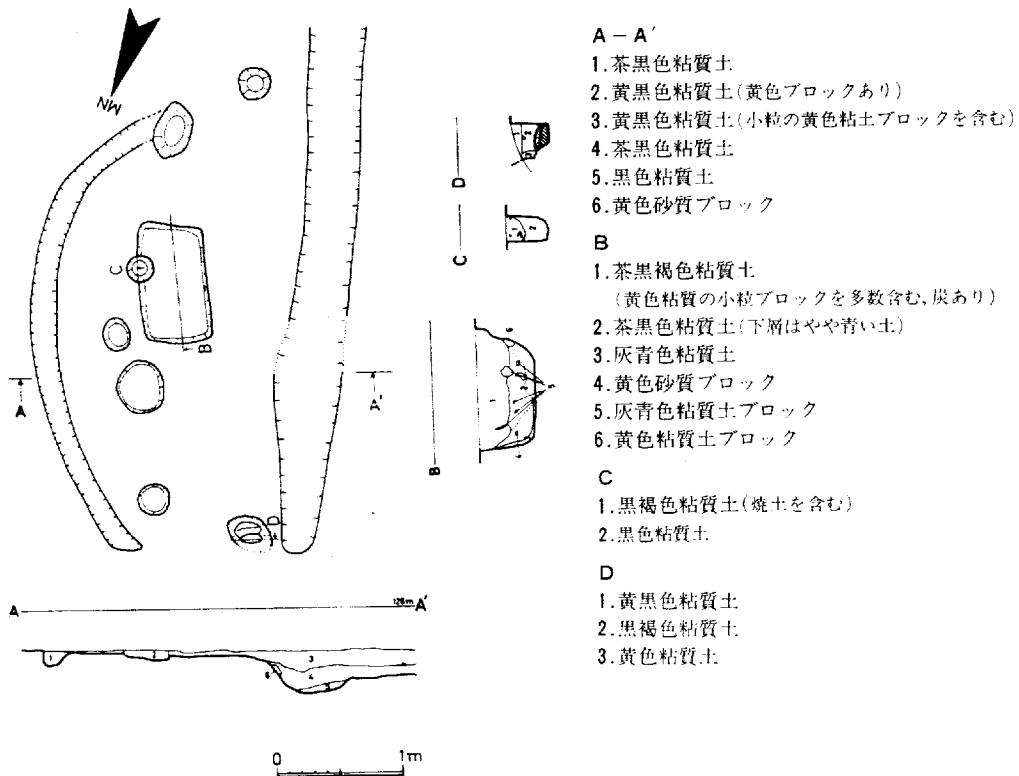
西原遺跡



第20図 2 区 遺 構 配 置 図 (1/200)

## 西原遺跡

らも本住居址に所属するものではない。いずれも弥生時代後期のものである。



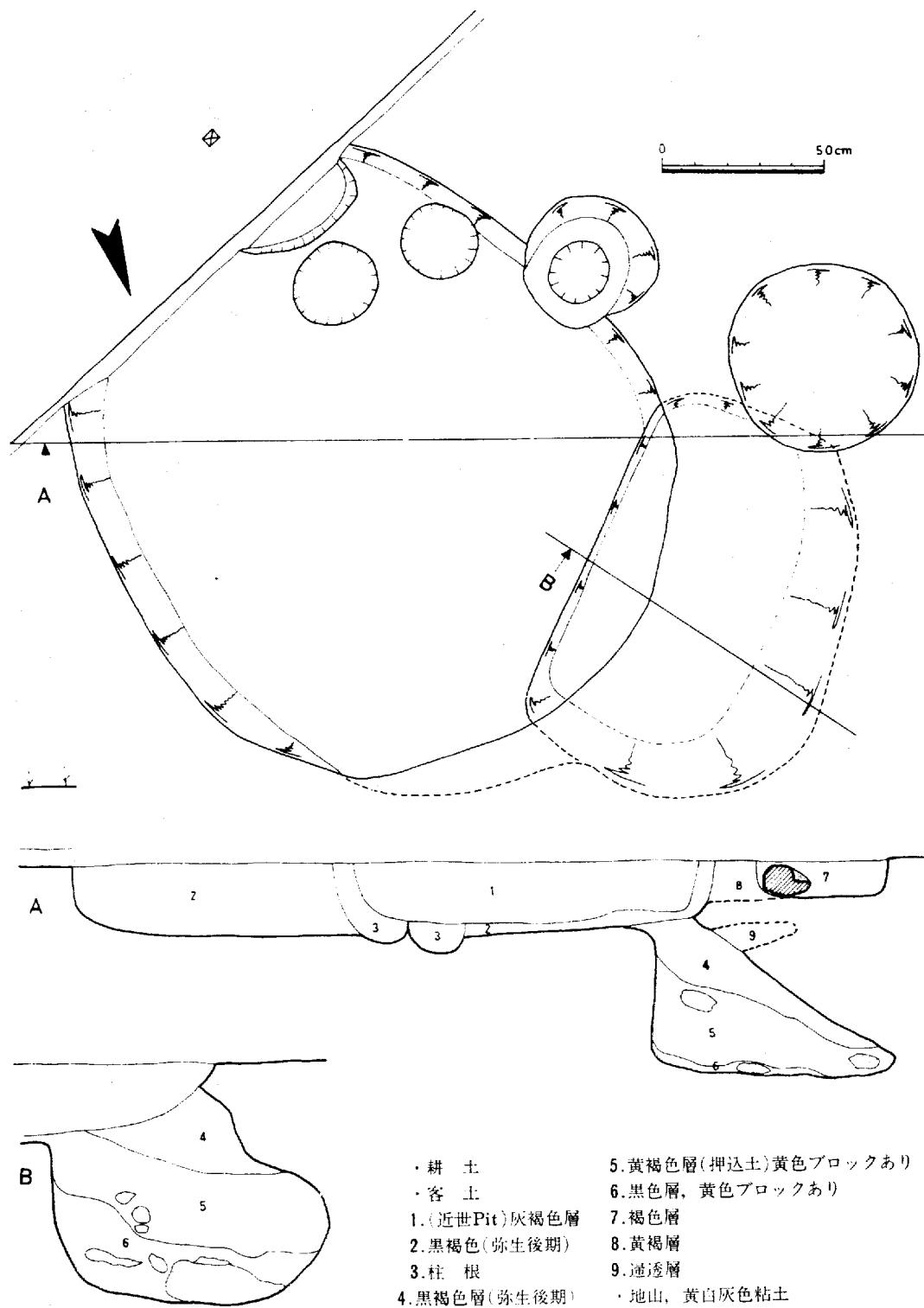
第21図 12号住居址実測図 (1/60)

### 3) 柱穴

E 1 S 4 のグリッドの中央よりやや西に直径50cmのやや隋円形のピットがある。深さは約20cm程で、炭を多く含む黒褐色土である。これは中央ピットの下部の残りと考えられ、ピットを中心にして3m程のところに1~2個づつたまつて柱穴がとりまくようになっている。直径7m程の住居址ではなかろうか。

その他の柱穴については、建物、住居址として具体的なまとまりをつかむことができなかつた。図上で検討しようと思ってもなかなか思うようにいかない。削平によりとばされたものもあり現地での追求にもっと時間をさくべきだと思う。

西原遺跡



第22図 土 壤 実 測 図 (N1W1・2) (1/20)

## 西原遺跡

### 4) 土 壤

W 1, S 6～S 7にかけて、方形と円形の土壙がある。深さは約10cm～30cm程しか残っておらず、上面は削平されたものと思われる。遺物はまったく発見されず、時期の推測はできないが灰褐色土が入っていること、周辺の柱穴よりも新しいことから井戸と同じく、近世のものと思われる。

W 1 S 2にある円形土壙は直径1.4m深さ約60cm程のもので、埋土も新しい感じをうけ井戸ではないかと考えられる。

2区北半部にある。径40cm～60cm程の土壙は、ほとんど近世のものである。W 1 N 1の土壙は別記するが、その北側にある浅い凹みは弥生時代後期の土器を含むところからその時期に比定されるだろう。

W 1 N 1の土壙は（第22図、図版30, 31）、1.7m×2mのやや楕円形で深さ約22cmの扁平な土壙部分があり、その北西部に1.22m×0.84mの長方形の土壙部分によって構成される複雑な形態を示す土壙である。後者の部分でB断面を観察していることによってB土壙と呼ぼう。A土壙では平面図に示していないが断面図にあるようにその中に円形の近世土壙が存在する。さらに南側に存在する柱穴はA土壙に所属するものとは思われない。A土壙がB土壙と接続する北端部において一部袋状の部分がありA土壙は本来は袋状ピットであったのかも知れない。A土壙における2層とB土壙における4層は、同じ黒褐色土であるが、分離しているのは何らかの差がありA土壙とB土壙の時期の違いを示したのだろうか、B土壙の下層には埋められた土がある（5, 6）し、B断面でもA土壙と分離して断面が書かれているので埋った時期の違いを示すのかも知れない。8, 9としている土層は純粹な地山でないことを示し、写真を見てもB土壙の上半部においかぶさった部分に黒色土が浸透しており、B土壙の西北壁は垂直になるものかも知れない。A Bいずれも、弥生時代後期後半の土器が出土しているが、今回は詳細な検討は行えなかった。

### 5) 井 戸（第23図、図版29—2）

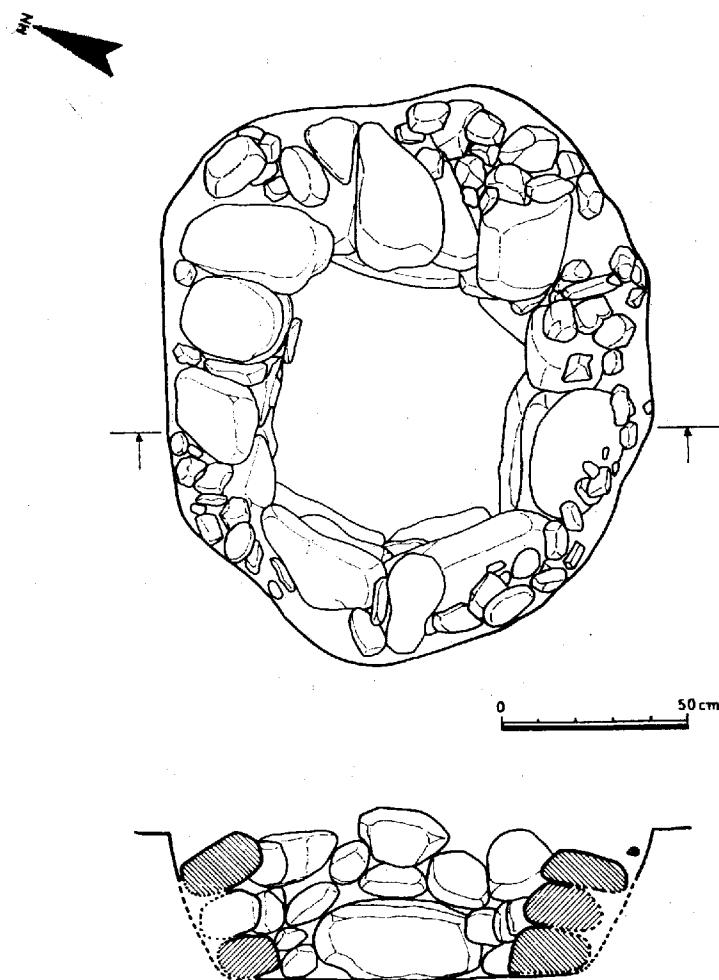
E 1 S 3で石組の井戸が発見された。近世陶器が出土する。1.3m×1.5mの土壙を掘り最下段には六面になるように横口積に石を置き、径60cm×70cmの空間を残している。現在深さ約50cmほどの石積を遺存するだけだが本来はもっと深かったのであろう。内側に面する石組のうしろには5cm～15cm程の石をつめこんでいる。W 1 S 2にある円形土壙も石組はないが、同種の規模であり井戸であると考えられる。

### 6) 2区～5区の土層について

西原遺跡の台地末端部、沖積部の状況をもっともよく示す断面である。

2区のグリッド割り東西中心線の断面（A）、W 4 N 1部分の坪掘りの南壁（B）、これを一連のものとして実測し、ほぼその延長上にある。5区坪掘りM 1（以下M 1とする）の北壁

西原遺跡



第23図 井戸実測図 (1/20)

を、反転実測したものを並べてみた。（第24図上段）。さらに5区坪掘りM2（以下M2とする）の南壁断面も参考にしてのべたい。

2区台地部分は洪積世の黄色砂礫層が地山であり、これを掘り込んだ遺構が存在した。弥生時代の純粹な包含層は存在せず、弥生時代の遺構の中に土器がみられるほかは、奈良時代以降の包含層～表土層中（AB—9）に散在していた。台地末端部分の落ち込み始めの部分でようやく黒色土層（AB—11層）がみられ、弥生時代後期の土器を包含している。

この黒色土層はM1では第7層に比定され末端部として消滅している。AB—12層は台地からの流れ込みであり、AB—14層・16層は洪水などの一時的堆積を示す砂利層である。

M1—3・4・5・6層、M2—3・4・5層からは、縄文式土器（第27図5）や磨滅した弥生式土器片、須恵器片が出土する。これらは後の洪水などにより動かされたものであろう。

M1—9層上面、M2—10層上面には共通して鉄分の集積して硬くなっている現象がみられ

## 西原遺跡

る。A B断面では16がこれに比定されるかも知れない。

M1—9・10層、M2—10層は大規模な洪水が予想されまったく遺物は発見されなかつた。この砂利層を境にして上層からは弥生時代後期の土器片が発見され、下層からは弥生時代中期の土器片が検出される。M2において顕著なように、10層によって11層～13層が切られている。M2—17は先端部を尖らした割木による杭で、13層と10層の境の線が、ちょうどこの杭の上で折れることから、あるいは護岸のためかとも考えられる。

またこの砂利層以下の土層は粗砂、粘土層とさほど急激でない堆積を示しているとともにM2ではスコップを押し込めば下へもぐるような含水量の多いブヨブヨした軟質の土層であることを感じた。

M1—20層には黒灰色粘土があり、現地表下3.2mを測る。それでも現在の旭川水面より1.5m程高い位置にある。

以上のことから次の事柄が考えられる。弥生時代中期頃までの旭川はかなり安定していた。その後数回にわたる大規模な洪水があり約1mの砂礫を堆積した。それに対応するように旭川下流の津島遺跡では、弥生時代前期の水田が想定される低湿地が中期後半には埋没している。

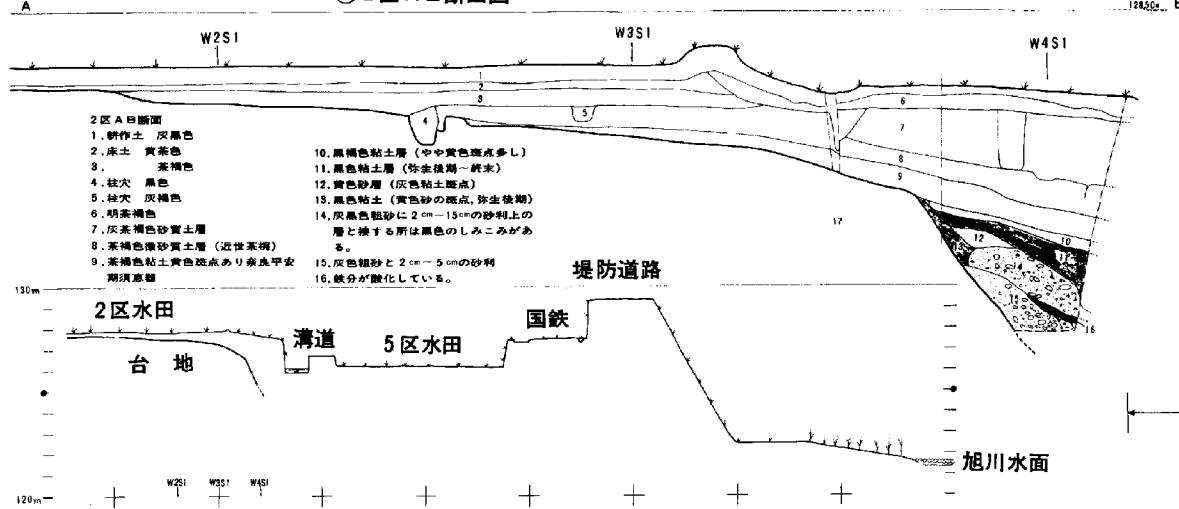
(「岡山県津島遺跡調査概報」昭和45年3月岡山県教育委員会) 旭川水系の他の遺跡との詳細な検討を加えた上でなければ確実な結論を導き出すわけにはいかないだろうが、沖積地の形成に興味ある問題をなげかけている。

この洪水堆積物の上は、弥生後期となり冠水状態はあっても砂礫を堆積させるような大規模な洪水はない。

5区は弥生時代には低湿地であり、西原遺跡付近で水田址を追求できる唯一の調査区であった。土壤分析・花粉分析・種子分析などを行っていないので確かなことはいえないが砂利堆積層よりも上の層ではマンガンが多くみられ、水田の可能性を示すが、砂利層以下の土層ではM1—20層が地表面であったろうことを示す他は具体的に観察できなかった。

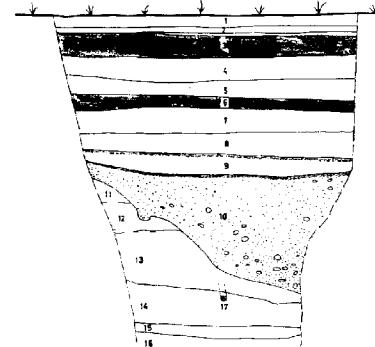
西原遺跡を集落として生活した人々の生産の場としては、台地末端に広がる現水田、あるいは現家屋の広がる平野部が考えられる。将来この平野部について調査する機会があれば追求できるかも知れない。

① 2区 A-B断面図

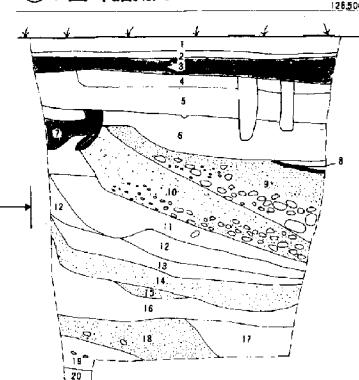


④ 2区～5区～旭川断面模式図

③ 5区 坪掘 A-C 126.50m



② 5区 坪掘 A-C 126.50m



第24図 2区～5区断面図 (①～③)  
60

- |                  |                                 |
|------------------|---------------------------------|
| 5区 坪掘 A-C        | 11. 黒褐色粘土、上部は特に黒い<br>土器片多し、滋生中期 |
| 1. 耕作土           | 12. 灰色粗砂                        |
| 2. 茶褐色粘土・鉄分濃積    | 13. 灰色細砂                        |
| 3. 黒褐色粘土 マンガン    | 14. 茶褐色粗砂・褐色鉄                   |
| 4. 灰色細砂 マンガン     | 15. 茶褐色細砂                       |
| 5. 茶褐色粗砂 マンガン    | 16. やや墨みがかった灰色、質あり              |
| 6. 茶褐色細砂 マンガン    | 17. 灰色細砂                        |
| 7. 黒褐色粘土         | 18. 灰色粗砂                        |
| 8. 灰色細砂 下に鉄分濃積あり | 19. 灰色細砂                        |
| 9. 茶褐色砂利層        | 20. 有機質、黒灰色粘土層                  |
| 10. 黄褐色砂利層       |                                 |

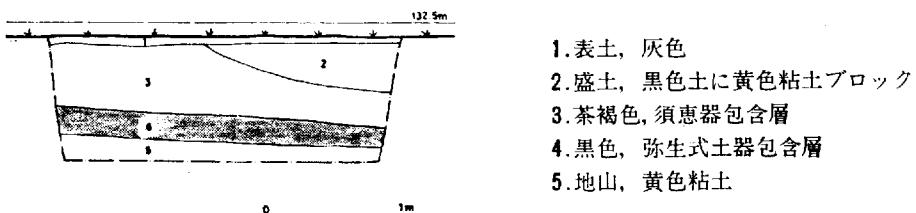
## 西原遺跡

### 第3節 6区, 7区

#### 1) 6区 (第25図, 図版33-1)

家屋移転が済んでおらず第一次発掘調査では調査できなかった。第2次発掘調査の折、坪掘りをすることができただけである。

6区の地形は北東から西南に低くなるゆるい斜面で、坪掘りでは住居址などの遺構にあたらなかったものの、柱穴があった。弥生式土器の包含層（4層）の上に茶褐色土層があり基本的層序は、1区とかわらない。

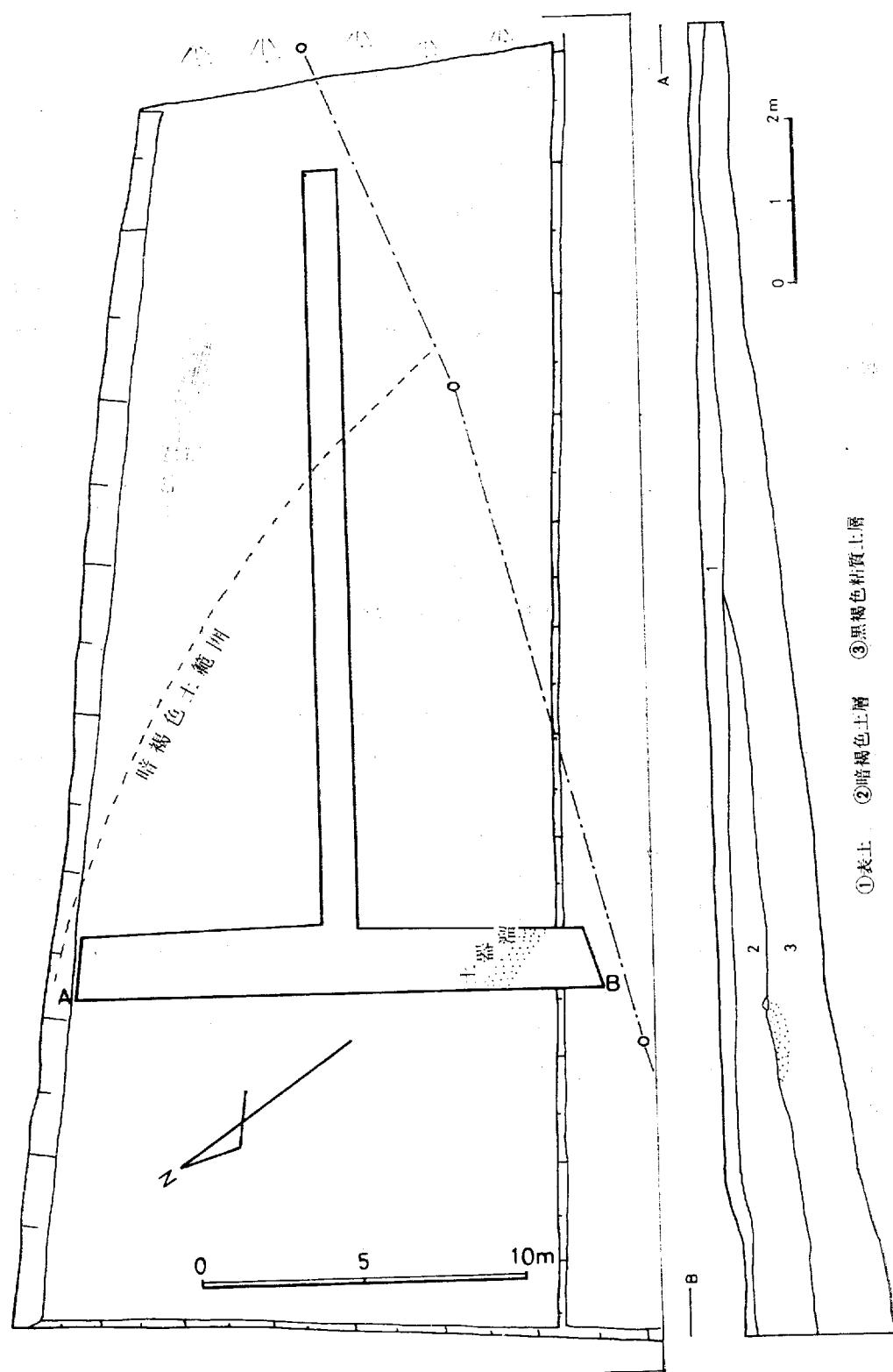


第25図 6区坪掘No.2 東南壁実測図 (1/60)

#### 2) 7区 (第26図, 図版34~36)

西原遺跡の東端に位置し、東西23m巾1m, 南北16m巾2mのトレンチをT字形に設定した。東西トレンチの東半は表土除去するだけで地山に達し遺構は検出できなかった。地山は西へ傾斜し、南北トレンチでは南へ傾斜し、浅い谷が埋積した状態を呈している。埋積土は暗褐色粘土層と黒褐色土層であり、暗褐色土層は弥生式土器、須恵器を含み、黒褐色土層は純粹な弥生式土器の包含層である。遺構は確認できなかったが多量の土器が出土した。壺・甕・高坏などが石とともに破棄されたような状態であった。土器はいづれも弥生時代後期に属するものである。石器も少量出土しており变成岩製石斧、サヌカイト剝片、剝離面が風化した古いタイプの石器も混在している。これらの土器で完形に復元可能なものはなく、すべて破片のまま放棄されたものである。この土器群は巾約1mで南北方向にのびているがその範囲も性格も確認することもできず終了しなければならなかった。これは工事工程が切迫していたことが原因であった。

西原遺跡



第26図 7区平面図と土層断面図 (1/80)

## 第4節 西原遺跡出土遺物について

今回の報告書では遺構の報告を第一とした。遺物そのものについては破壊されることなく、保存されるからである。しかし掘出された遺物が一体どのような状況下に存在したのか、遺跡における状況の検討が加えられていない点は、遺構一つ一つの意義・性格について論求をすすめる上において、また記録保存という観点から決して充分とはいえない。発掘調査＝破壊につながる面もある。

一応ここでは目にふれた遺物を、時代別に列記しておく。

A、縄文時代早期・中期・晩期の土器片、線刻石製品（註）などがある。黒曜石片、チャートは縄文時代に相当するものかも知れない。サヌカイト製石錐のうち一点は、長脚の三角形であり、縄文時代のものといえる。

B、弥生時代中期後半～後期の土器、特に後期中葉頃の土器・遺構が多い。大型蛤刃石斧・石錐・石錐・石匙・砥石・鉢・分銅形土製品・土玉・ガラス玉

C、奈良・平安時代以降、須恵器・土師器・円面硯・管状土錐・紡錘状土製品・近世陶器・鉄器片・鉱滓

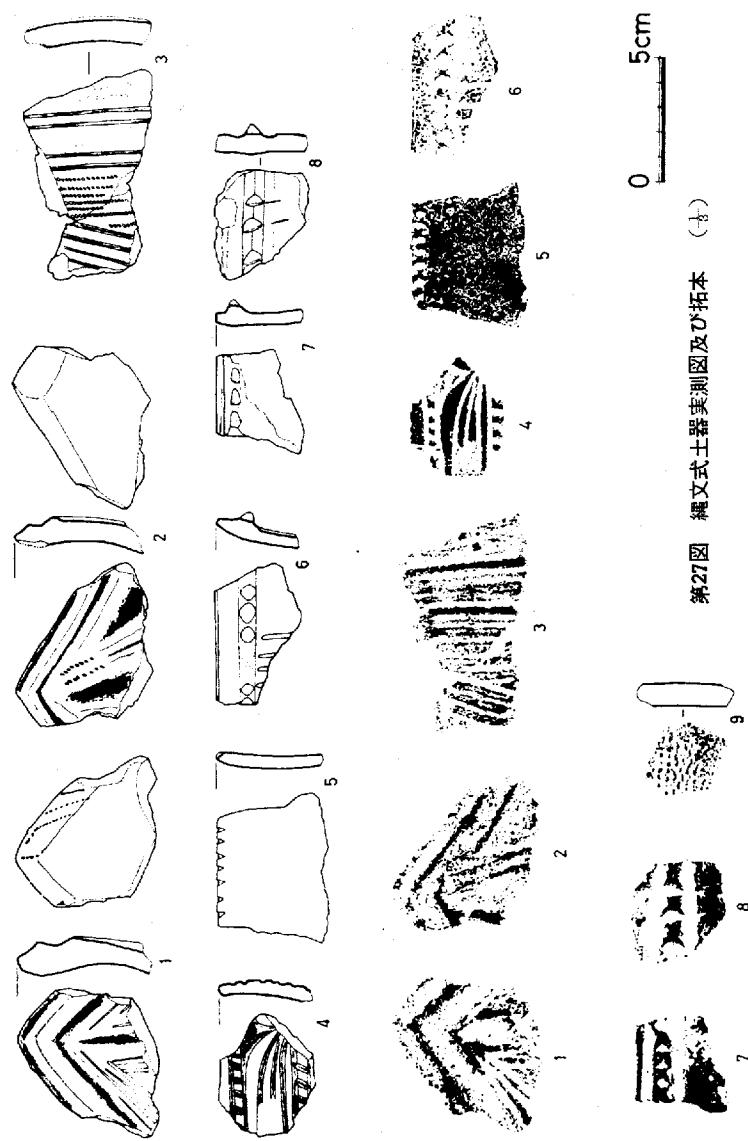
註 「西原遺跡出土の線刻石製品」河本清・枝川陽・栗野克己、（考古学雑誌58巻2号、昭和47年9月）

### 1) 縄文式土器（第27図、図版37—1）

全部で9点発見された。9は押型文土器である。文様があまりはっきりせず稍円文と思われるが山形文のようにも見えるが途切れしており疑問が残る。早期である。1・2・3は中期、里木Ⅱ式の波状口縁になるもので、断面が低い三角形の凸帯と凹部によって構成されている。それにヘラにより線を引いており、2では凸帯のはがれた部分に縄文がみえるので、先に縄文を施文したことがわかる。口縁部内側は巾1cmほど斜めになっており、その部分にだけ縄文が施文されている（1は明瞭だが2は表面が悪く観察できない）。3は、波状口縁が三角形に尖った部分から下へ来る胴部の破片で、あるいは1と同一個体かも知れない。向って右側には半円形の凸帯が縦に2本ありその両側にヘラ描き沈線があり、周囲には縦位に縄文が施文されている。5は外反する口縁部の口唇部に刻目を施したもので後期末になるのか晩期になるのか決し難い。6・7は口唇部よりやや下ったところに刻目隆帶文があり、6は凸帯文の下にヘラによる縦位の線が4本ほどみえる。8は口唇部はないが、断面三角形の隆帶にするといへて刻目をつけている。4は晩期、樋原式といってよいだろう。浅鉢の口縁部から下へ4cm程の文様帶の部分である。ヘラにより施文されており表面は黒褐色に研磨された良質の土器である。

縄文式土器の出土層位は、すべて弥生時代以降の包含層に混在しており、いわば表採に近い状態である。最も多くの弥生式土器包含層のあった1区から8点のほかは5区から一点だけ採取した。

西原遺跡



第27図 繩文式土器実測図及び拓本 (1/8)

西原遺跡

縄文式土器一覧表

| 出土地点                   | 胎 土                        | 備 考        |
|------------------------|----------------------------|------------|
| 1 1区 W2S3, C1層         | 明茶色～黄褐色、白・黒・茶色の砂粒混在する      | 中期 里木Ⅱ     |
| 2 1区 E1S1, C1層         | 〃 〃 〃                      | 中期 里木Ⅱ     |
| 3 1区 W2S3, C1層         | 〃 〃 〃                      | 中期 里木Ⅱ     |
| 4 1区 W1S3, B3層         | 黒褐色、硬質、白色砂粒0.2mm～5mm       | 晩期 櫻原      |
| 5 5区 坪掘2, 上層,<br>排水中   | 黄褐色、白色砂粒少い0.2mm～3mm        | 後期または晩期原下層 |
| 6 1区 W2N1, C2層         | 茶褐色、硬質、白色砂粒1mm             | 晩期 黒土B2    |
| 7 1区 W3N1, C1層         | 淡茶色～灰黒色、軟質、白色砂粒<br>1mm～5mm | 晩期 黒土B2    |
| 8 1区 W3N5, C1層         | 赤褐色(レンガ色)黄褐色砂粒0.5～5mm      | 晩期 黒土B2    |
| 9 1区 W4N3,<br>2号住居址、周溝 | 淡黄褐色、軟質、白色砂粒0.5～4mm        | 早期         |

2) 石器について

石器類は多種類にわたって出土した。しかしその大部分は包含層より出土した。本報告に実測図とともに掲載できなかつたがその概要をのべておきたい。

全体的にサヌカイト製石鎌が多い。そのほとんどが1区より出土したもので、剝片も非常に多い。形態は二等辺三角形をなすもの、底辺にややえぐりがみられるものが多く、弥生時代のものと考えられる。縄文時代のものと考えられる石鎌が1点出土した。

さらにサヌカイト製の打製石器がある。扁平な断面を呈し、両端が刃部をなしている。石鎌、石包丁の形態に似るものもある。今後の出土例を待ちたい。

本遺跡では变成岩製の石器が多い。变成岩は付近に分布がみられるが緑色片岩、黒色片岩、蛇紋岩など軟質のものもある。

石包丁の出土数もかなり多いがそのほとんどが破損している。また、打製石器も注目すべきで、石斧状のもの、石包丁状のもの、石鍬状のものでいづれも粗製である。石斧状のものの中には擦痕を観察できるものもある。石鍬状のものは大型で刃部が巾広い。穴掘具、農耕具として使用された可能性が強いが今後の出土例を待ちたい。

これらのほかに黒曜石片が5点出土した。うち4点は黒色を呈すが、1点は灰色で薄い部分は半透明のものである。黒曜石は赤野遺跡でも出土している。また、チャート製のドリルが2点出土している。

本遺跡出土の石器については弥生時代に多量に使用されたサヌカイトはすべて美作以外の地方からもたらされたか否か、变成岩製の打製石器は農耕具であるか否かなど問題をのこしている。

## 第4章 結語

## 遺跡の範囲について

西原遺跡は旭川（註1）の中流域にあり旭川などによって形成された河岸段丘上に位置する。遺物の散布密度の高い1区は最も注目された地点であった。これは1区の中に近世の暗渠状の溝が数本走っており、あるいは畑のうねがありこれによって掘り起された土器片が散布しているという。後世の人為的な理由によるものであって、遺物の散布状態だけから遺構の保存状態を論ずることはむづかしい。たとえ一片しか発見されなくともかえって遺構の保存状態が良いこともある。縄文式土器片はかって有隣中学校校庭の北側で採集されたという（植月壯介氏の話）。今回の調査では少量ではあるが、遺跡の西方に片寄って発見されてはいるが特定の場所に集中していない（註2）。線刻石製品の発見状態からは、柱穴を縄文時代のものとすることは無理である。しかし1区C地点で発見された黄色土のかたまりがあって黒色土が下へ入り込んだ土壤について最近の知見をもとにすると、縄文時代の遺構である可能性もある（註3）。

弥生式土器は西方の畑にも散布しており7区にも土器溜りがあった。有隣中学校校庭拡張の折には多量の土器が出土して現在でも有隣中学校で保管しているもの、あるいは個人で所蔵されているものなどがある。また穴塚古墳発掘調査の折にも封土の中から弥生後期の土器片が発見されており、弥生時代後期の遺跡の範囲はこの河岸段丘全体に広がっていると考えられる。また5区の坪掘りでは旭川の氾濫源の砂利層が発見されており、ここから南東へ広い平野部を形成している。この平野部が弥生時代の水田地帯である可能性が強い。

西原遺跡の北東部丘陵上に川東車塚（前方後円墳全長57m）がある（註4）。この古墳の北西斜面が桧の苗畑となっており酒津式土器併行期のものと思われる土器片が採集できた。これは一応西原遺跡とは別個の遺跡と考えられるが、性格としては酒津式土器併行期の土壙墓群の可能性がある。この時期になって山の上に土壙墓が作られることになったのであろう。そういう意味では西原遺跡との関連は密である。

奈良・平安時代の遺物は包含層があったが、明確な遺構を検出するまでには至らなかった。川東車塚から東へ連なる丘陵の鞍部に上水道の配水池が建設されている。有隣中学校から、そこに至る途中の道で奈良時代の骨壺の破片を採集した。この地点は中国縦貫道の土取場に指定され現在では宅地造成されている。

西原遺跡全体としては、東西350m南北220m約70,000m<sup>2</sup>が遺跡地であったと考えられるが現在では縦貫道でとられ宅地化、瓦・粘土のため掘られた部分などにより遺構の保存されている地点は少ない。残された部分を保存することは今後に残された重要な課題である。

註1 岡山県内では東から吉井川・旭川・高梁川の三大河川が南北に並んでおり、大正年間鉄道開通までの古代から近世に至るまで交通・経済の重要な役割をになった。落合町は高瀬舟による交通の拠点として栄えた場所でもある。

## 西 原 遺 跡

註2 繩文式土器のなかで1・2・3・の土器片は「里木貝塚」（倉敷考古館研究集報7, 昭和46年）における間壁氏の分類に対比すれば、舟元ⅢA類ということになる。しかし山内清男氏が「里木Ⅱ式」を設定した折に（繩文土器型式の細別と大別「先史考古学」第1巻, 昭和12年）『特殊な縄文を使用したもので、山内氏にもその燃り方は解明できなかった』といわれる縄文原体が施文されており、これは里木Ⅱ式のなかの一つの特徴であって、このことは「京都大学文学部博物館考古学資料目録第1部」（昭和35年）に収録されている里木貝塚の里木Ⅱ式の資料に示されており、間壁氏が報告書の中で、舟元ⅢA類としたものの中にも里木Ⅱ式が含まれていたり、その分類は混乱しているとの話である。（縄文式土器については鎌木義昌氏・高橋護氏の御教示を得た。）

註3 中国縦貫道関係の遺跡では、天神原遺跡（河本・橋本・下沢・柳瀬氏の教示による。）小中遺跡（栗野・高畠の調査による）狼谷遺跡（二宮治夫氏の教示による）などでつぎつぎと発見され、昭和49年3月、備中平遺跡では縄文時代早期の土器が伴出したという（岡田博氏の教示による）。この種の遺構は南関東を中心に岩手県から秋田県まで続々と発見されているという。縄文時代早期・前期・中期・後朝の土器片を伴っている。人為的な遺構であるのかどうか議論されている。（十菱駿武「ロームを覆土にもつ土壤」、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅲ、東方第7遺跡P67, 昭和47年3月）私は埋土の状態から人為的なものであることを支持したい。

註4 この古墳は前方部が低く、やや広がっているが古式の様相を示している。後円部墳頂に大盜掘孔があるが、遺物が出土したという話はない。

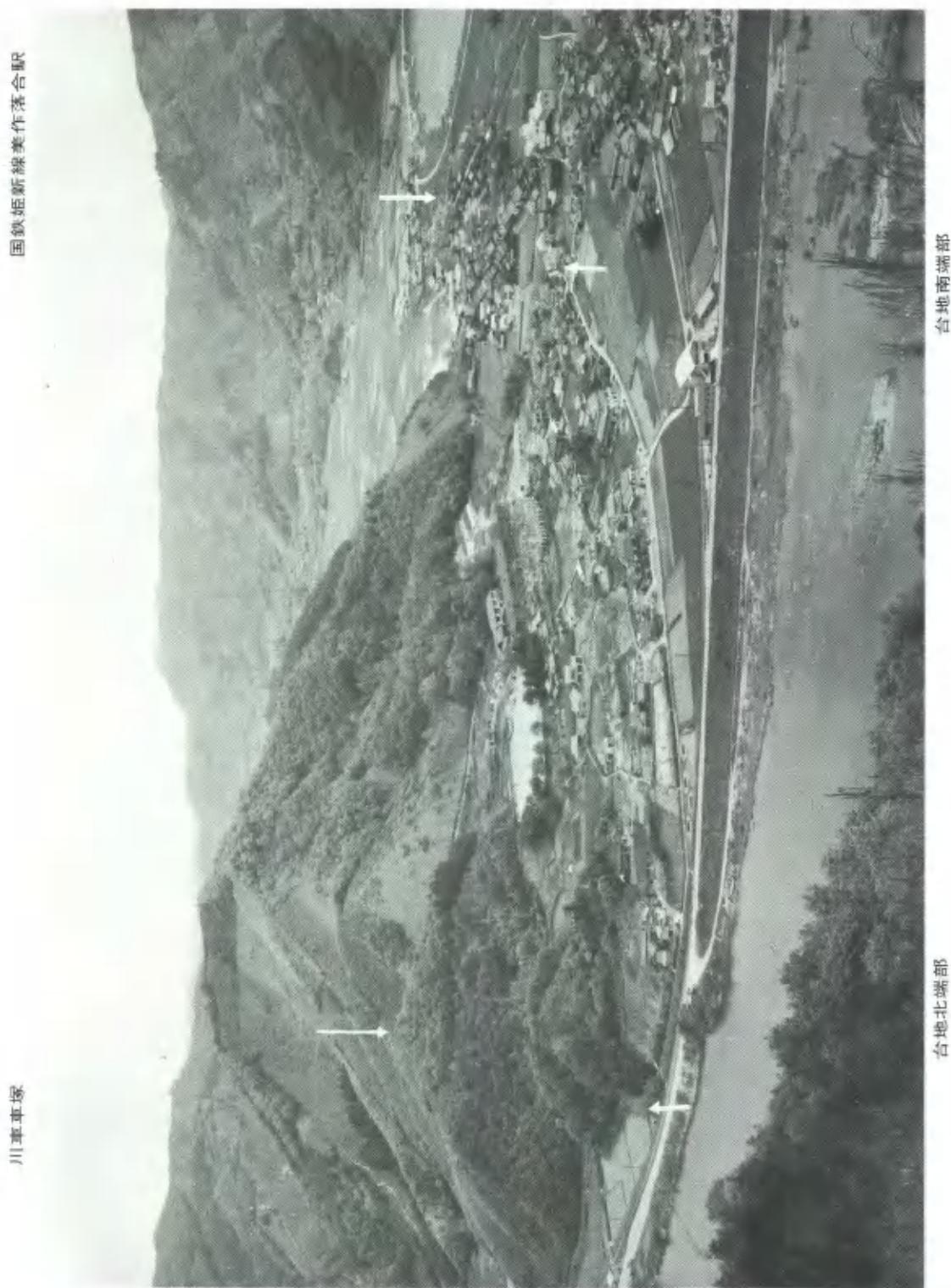
## 西原遺跡

### <おわりに>

西原遺跡の発掘調査は昭和44年から昭和45年にかけて実施された。四年後の今、当時の調査員は分散してしまった。西原遺跡について語り合う機会も少なくなった。全調査員の共同討議をもとにして「まとめ」を書くべきだがそのもととなる調査資料が未整理のまま収蔵庫に納めてある。発掘調査された資料が将来にわたって活用されるだけのことをするのが記録保存の意義であるだろう。

発掘調査は厳寒期の小雪のチラつく中でも行われ、肉体的にも精神的にも疲労したこともあった。冷え込みのため地面は凍りつき半日は遺構検出が行えなかった。作業能率の悪い冬期は発掘調査を中止して室内で整理作業をすべきであったが、工事工程の影響から以後の調査も同じことのくり返しであった。このような中で多大の資料を得ることができた。西原遺跡の出土遺物は40cm×70cm×15cmの整理箱に約120箱ある。整理期間・人員の関係から土器洗いは済んでいるが、その後の整理はほとんど行えなかった。1区用地外の宅地造成地の遺構の報告を合せて、将来報告できる機会ができるよう期待したい。

図版 1



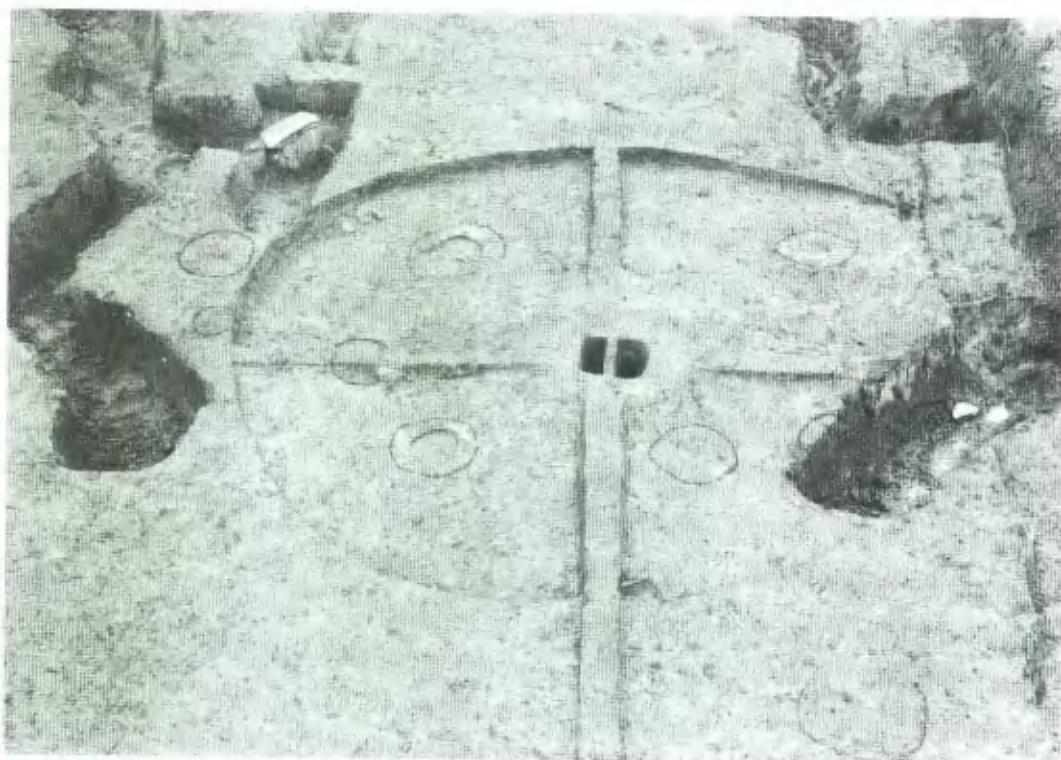


久世方面

西原遺跡  
（西南の注連山中腹より）



1 1区A地点（北より）



2 7号居住址検出状況（西南より）

図版 4



1 7号住居址（東南より）



2 7号住居址堀上げ状況（北東より）

図版 5



図版 6



1 7号住居址柱穴 3断面（南より）



2 7号住居址飾出土状態（北より）



8号住居址

7号・8号住居址出土遺物

図版 8



1 6号住居址（南西より）



2 6号住居址・砾石出土状況（南より）



1 1区A地点土器だまり全景（北東より）



2 1区A地点土器だまり第1群（北東より）

図版10



1 Ⅰ区A地点土器だまり第2群（北東より）



2 Ⅰ区A地点土器だまり第3群（北東より）

図版11



1 I区A地点土器だまり第3群の北西・底部出土状況（北東から）



2 I区A地点第4群土器出土状況（北東より）

図版12



1 I-1区C地点全景（南西より）



2 I-1区C地点全景（南より）



1 I区C地点黄色土を覆土にもつ土塙（東南より）

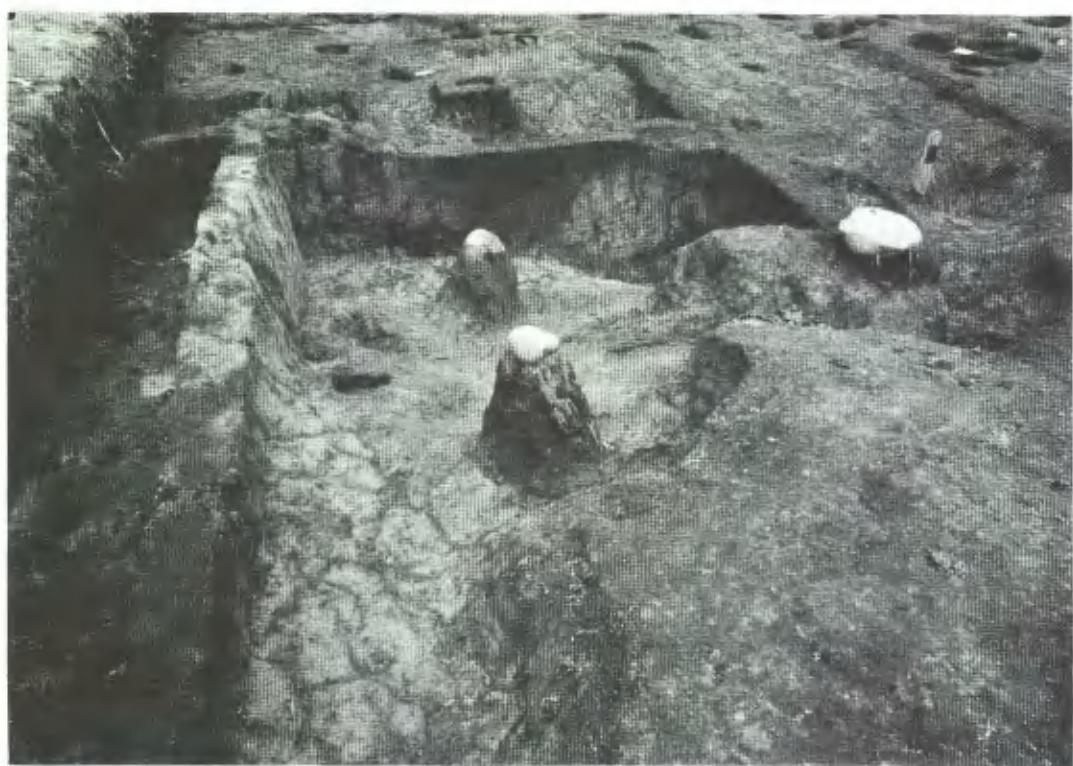


2 I区C地点黄色土を覆土にもつ土塙（北東より）

図版14



1 I 区 C 地点黃色土を覆土にもつ土塙（西北より）



2 I 区 C 地点黃色土を覆土にもつ土塙断面（西南より）



1 10号住居址発堀状況（北より）



2 9号住居址覆土遺物出土状況（南西より）

図版16



1 左手前から 8・9・10号住居址（北東より）



2 10号住居址炭化材検出状況（北東より）



1 10号住居址（南西より）



2 10号住居址中央ピット検出状況（南々西より）

図版18



1 8号住居址中央ピット検出状況（南より）

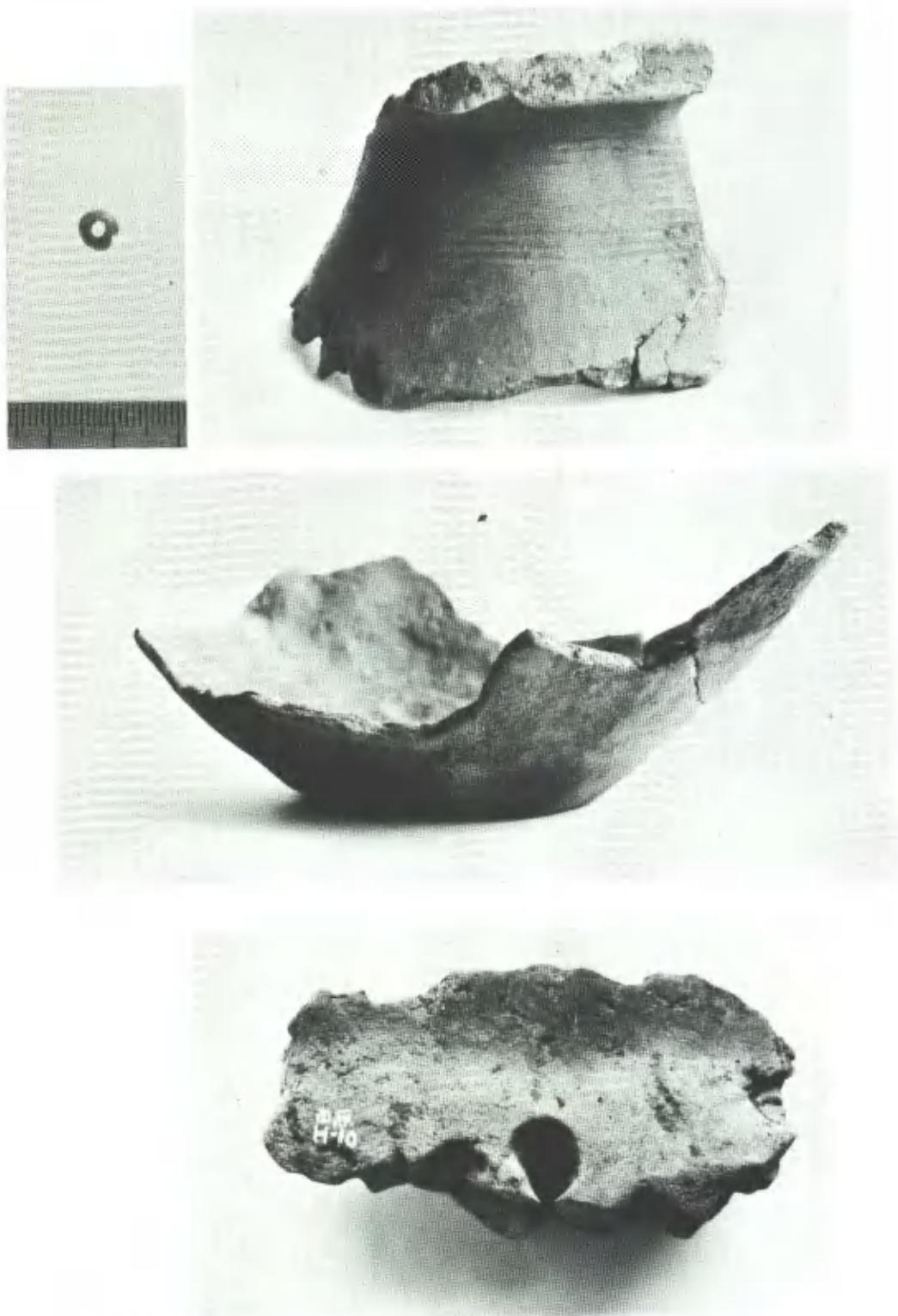


2 9号住居址中央ピット検出状況（西より）



9号住居址出土遺物

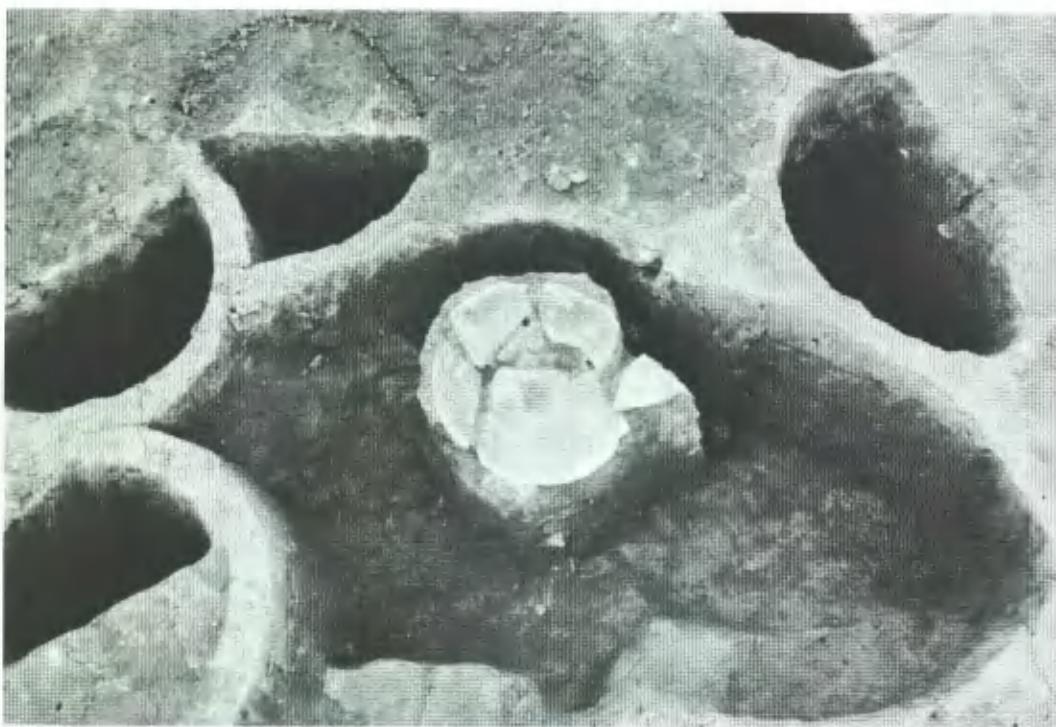
图版20



10号住居址出土遗物



1 I 区 E 地点北半部遺構検出状況（南より）



2 I 区 E 地点北半部遺物出土状況（南西より）

図版22



1 11号住居址検出状況（西北西より）



2 11号住居址・土塙10全景（北東より）



11号住居址出土遺物



A地点出土遺物

図版24



1 土塙10 石出土状況（東より）



2 土塙10 堀りあげ状況（北東より）



1 土塙10 東西断面南半部（南南西より）

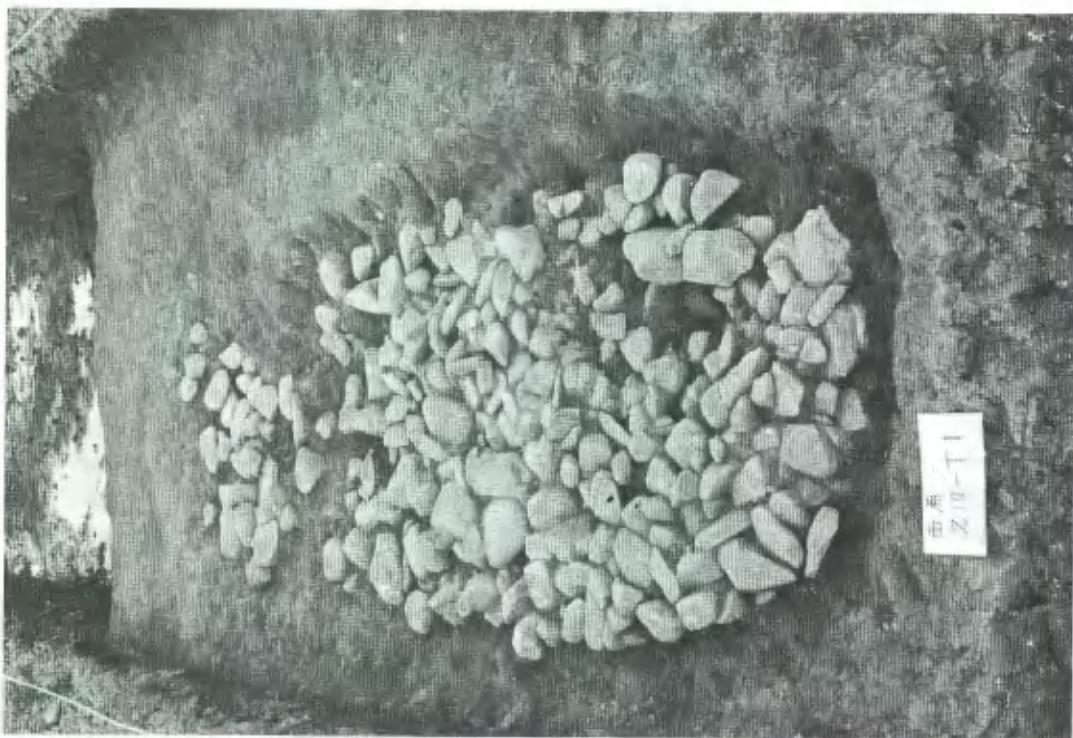


2 土塙10 東西断面北半部（南南西より）

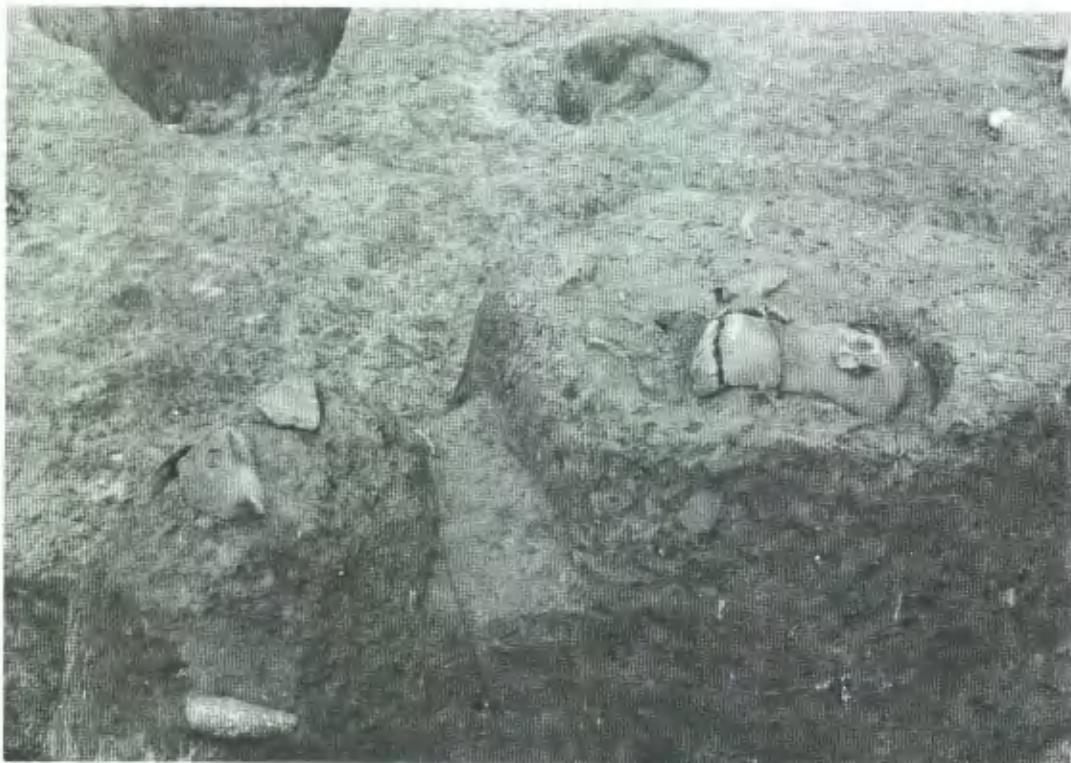
図版26



D・E 地点出土遺物



I区E地点 東半部、石だまり（南西より）



I区B地点 土器出土状況

図版28



1 2区全景（南より）



2 2区全景（北より）



1 12号住居址（東より）

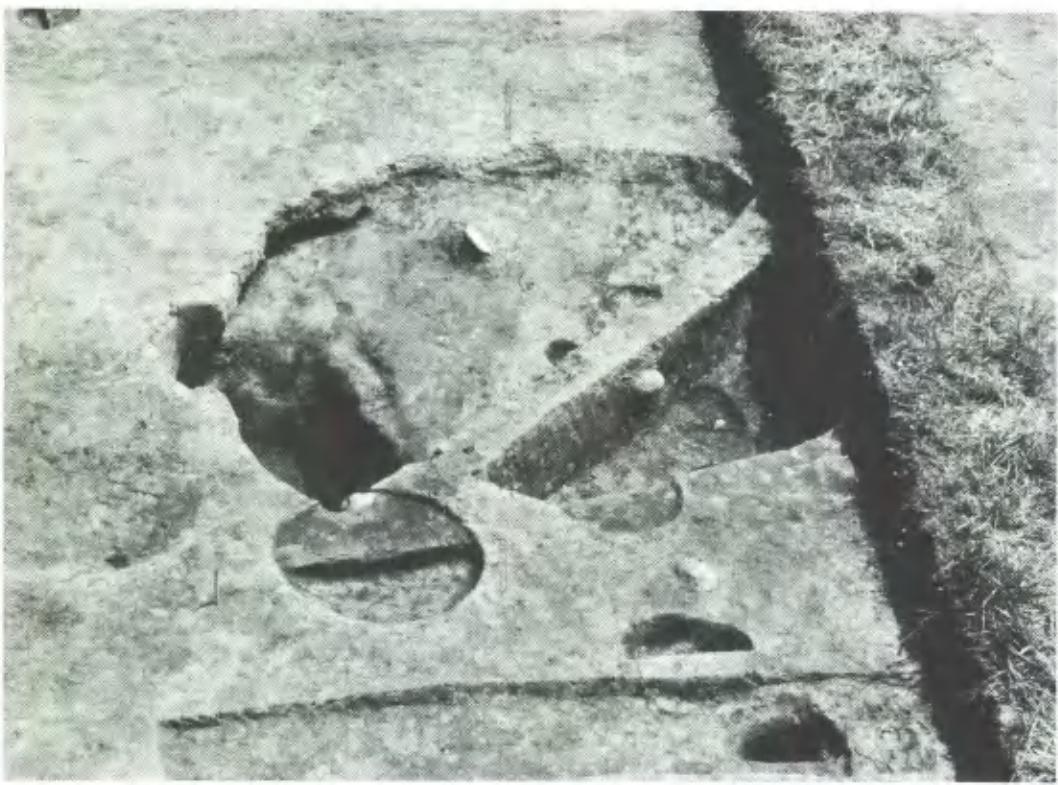


2 2区近世井戸（東より）

図版30



1 2区変形土塙（南より）



2 2区変形土塙（西より）



1 2区変形土塙B断面（東より）



2 2区変形土塙袋状部分全景

図版32



1 5区坪堀り2上半部断面（東南より）



2 2区A・B断面（北北西より）



1 6区坪堀2（北から）



2 5区坪堀2南東壁断面（北西より）

図版34



1 7区全景（北より）



2 7区南北トレンチ発掘状況（北より）



1 7区 南北トレンチ内土器だまり（西より）

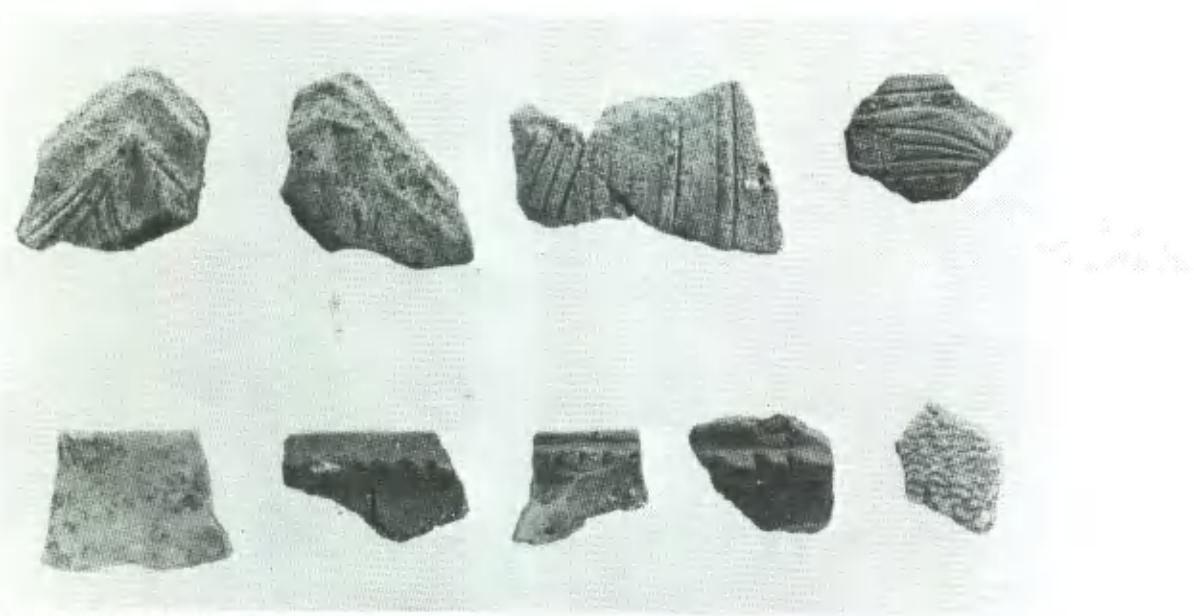


2 7区 南北トレンチ内土器だまり（北北西より）

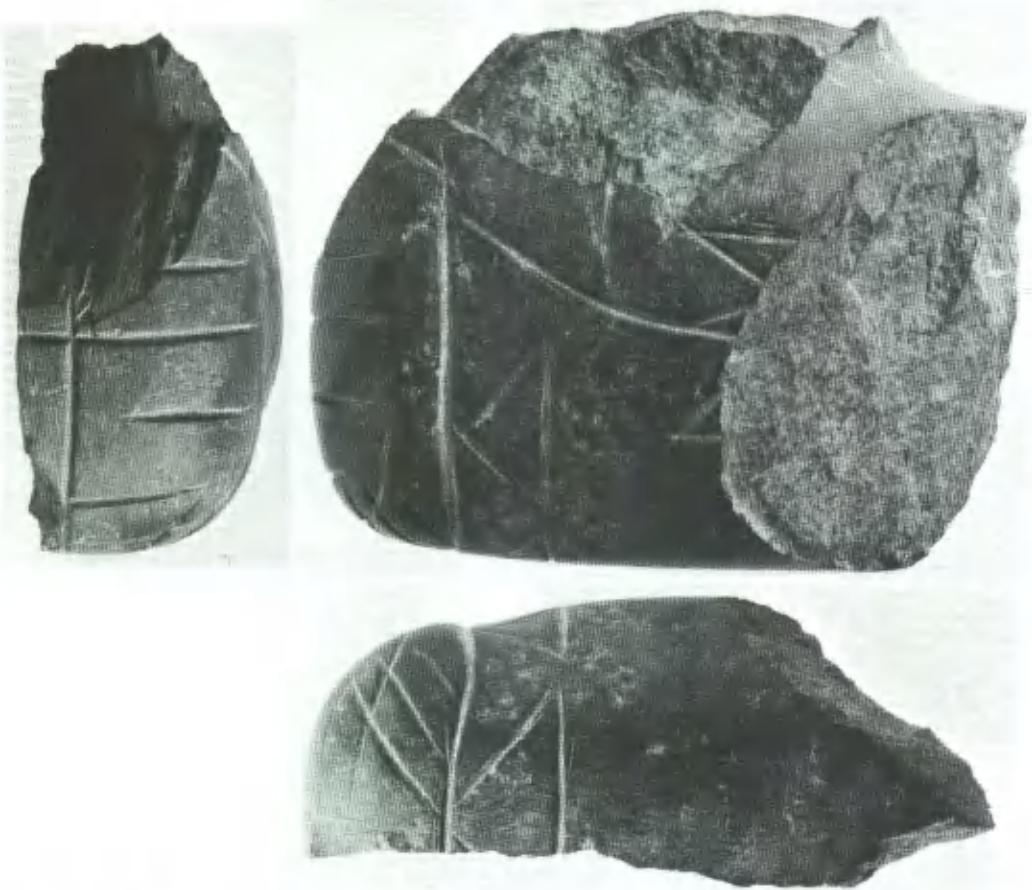
図版36



7区出土遺物

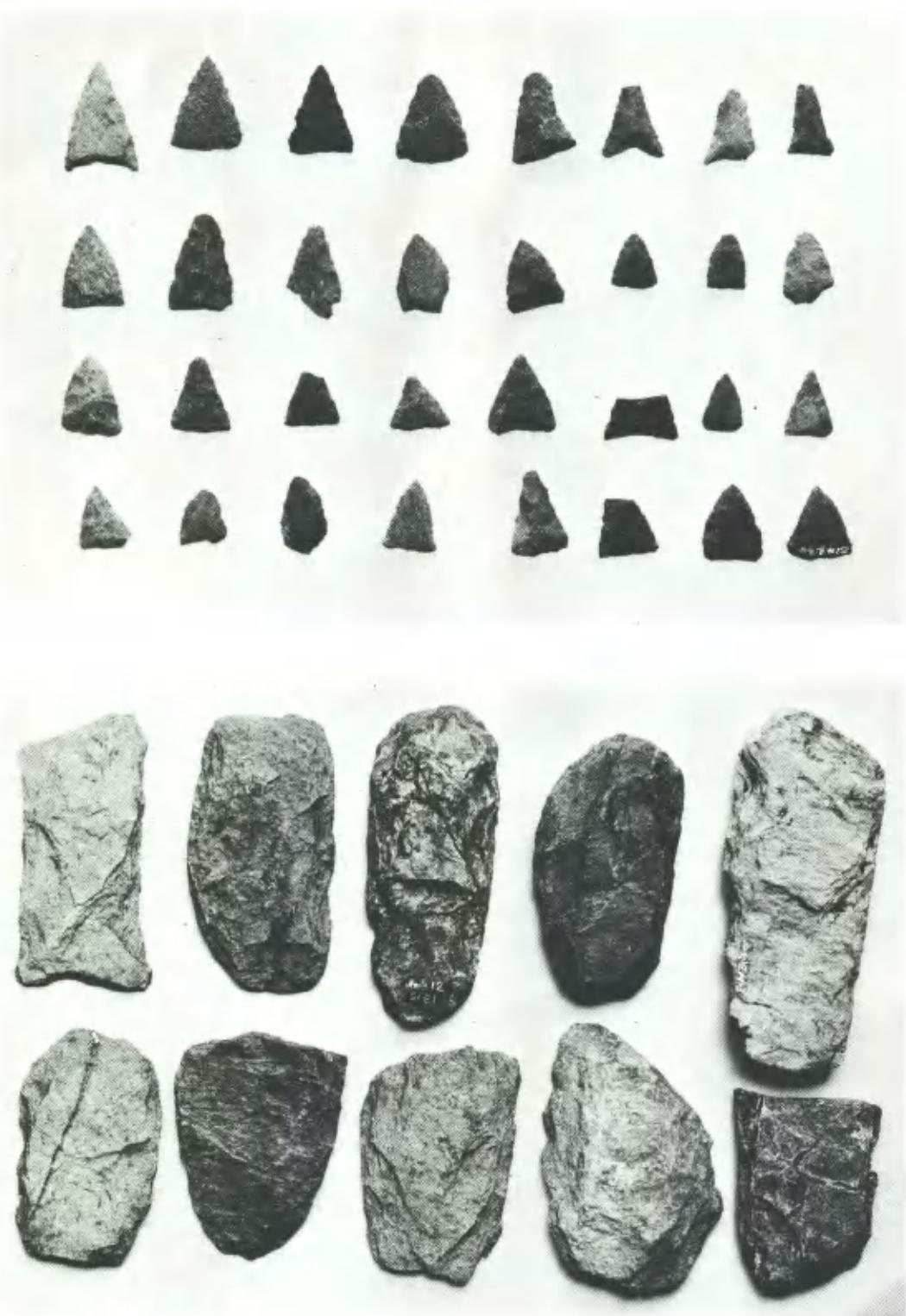


1 繩文式土器



2 線刻石製品

図版38



I区出土遺物



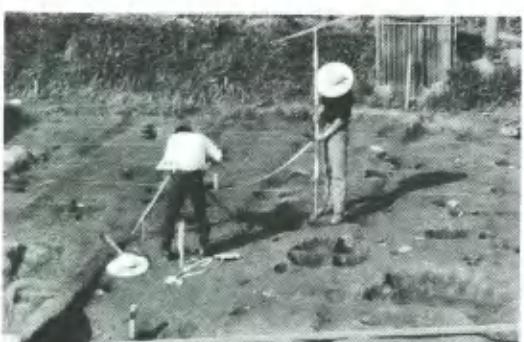
44年10月 鍼入式



遺跡の説明



2区 雪の中で作業



I区 C地点平板測量



I区 G地点調査風景



土塙Iの遺物取上げ



I区 D・E地点有隣中学校生徒の応援

図版40



1 作業員一同



2 調査 後

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (6)

中國縦貫自動車道 3  
建設に伴う発掘調査

昭和49年3月10日 印刷

昭和49年3月31日 発行

発行 岡山県教育委員会  
印刷 岡山県出納局用度課